
リリカルなのは ~信頼と真実、その行く末~

イクス・スタンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは ～信頼と真実、その行く末～

【Nコード】

N1225K

【作者名】

イクス・スタンス

【あらすじ】

管理局にモルモットにされた少年、失ったものは取り戻せない知っている彼にはどうしたらいいのかわからない。彼に憑いている人格は自分で決めろという。そして恩人の彼等に絶望を受けながらもこれからのことを伝える。彼にとって、それは正しいのか、・・・そして真実の先に何があるのか？

第1章：絶望、そして決意（前書き）

この小説は一部グロテスクや禁句の部分が、使用されていますの1
5歳未満の方、グロイのが苦手な方は控えてください。

第1章：絶望、そして決意

ここは、とある“組織”の研究室。

崩壊し、火の海と化したそこには、多くの屍がそこに散らばっていた。

あるものは手を失い、あるものは足を失い、そこには、原型を留めていない者もいる。

その研究室に一人の少年がいた。

シリアルナンバー：S-72。

彼は右の手首から腕が皮の皮が剥がれたようなやけどを負っており、顔も右半分の額から頬にかけて同じようなやけどを負っていた。両手を血まみれにし、膝をつき、友を抱きかかえ、床に埋もれている家族を見つめながら泣き崩れていた。

「……どうしてこんなことに……みんなには、……手を
出さないって言ったから……協力したのに……信じてたのに……
」

彼は絶望していた……家族を、友を守るために自分の身を投げ売ったのだ。

しかし、その研究室では、道具のように、モルモットのようにしか見ていなかった。

研究員やその上司、その“組織”の者は彼や他の何百という人や生物を“ごみを燃やす紙屑”にしか見ていなかったのだ。

そう、奴らが見ていたのは、あくまで“力”だけであり、良心や情けといった感情はこのモルモットどもには無縁といっても過言ではなかったのだ。

そして彼は、友や家族が目の前で“殺され”、死んだ瞬間、暴走

した。

異様な変容をとげた右腕、そして右手で、漆黒の“ドク口の模様が刻まれ、鎖のついた大鎌”を操り、その場にいた研究員を叩きのめし、両手を、体中を血塗れにし、施設を破壊した。

だが・・・“そこに居た人は殺さず”・・・正気に戻った矢先、

『・・・誠一・・・』

彼の内に潜めし人格が彼を名を呼んだ、

「ドル・・・、アルファ・・・、私は・・・これからどうしたら・・・この力をどう使えばいいんだよ・・・信頼ってなんだよ・・・教えてくれ。」

『《・・・我らは、その問いに答えられない。己自身で見つけるしかないんだ。お前にとって正しい想う選択をしる》』

彼は眼の焦点が合っていないまま涙を拭き、ポケットに入れていたICチップ取り出し、悔みながらも決断した。

「・・・わかった。・・・とにかく生きてる人達を別の場所に転送しよう。それとこの“データ”を・・・」

「鏡夜君！」

その時、彼の前に三大提督の一人、ミゼット・クローベルと、フアーン・コラード三佐が現れた。

「これは？・・・何があったの？、それにあなた、肩のそのナンバーはいつたい？」

コラード三佐が誠一に聞いた。

「・・・」

しかし誠一は沈黙していた。

そう、彼には答えられないのだ。

彼ら二人、いや、他の三大提督や、ギム・グレアム提督、この人々には誠一にとって恩のある方たちだ。

誠一が管理局に呼ばれ、この研究室に来ることを拒んできたことの善き理解者であり、彼のことを考え、管理局に関わらせないように色々と手を貸してくれた恩人であり、とても信頼を持った人たちなのだ。

そして、答えられない最大の理由は、彼等はこの研究室で何が行われていたのか“全く知らなかった”のだ。

この研究室の上たる“組織の管理局”である彼等上司でさえ・・・だから誠一は彼等には伝えなかった。

彼等にとって、ここに居ても、知ったとしてもほかの上司や幹部どもに何をされるかわからないためである。

そして誠一は彼等にあること伝えた。

『この世の中には、『正しいようで正しくはなく、正しくないようで正しい』という傲慢な欲をもった方が居ます。その人たちにこの世界で起きていることの隠された真実を伝えてやってください。支配という名の『力』を手にし、支配という名の『平和』がこれ以上続かないように・・・』

「えっ？」

二人は誠一の言っていることがよくわからなかった。だが誠一は

話を続けた。

「多分もう、・・・組織としての機能が地位と欲だけでしか成り立っていません。・・・それはもう・・・“悲劇と絶望”、そして・・・戦争への狼煙”になっていくことでしょう。そうなる前に、私は真相を探します。・・・たとえばそれが“すべての歴史を覆し”、“すべての敵に”なったとしても・・・」

「鏡夜君！！、あなた・・・いったい何を？！！・・・」

ミゼット提督は誠一に聞こうとしたが彼はそれ以上答えず、変わりにコピーした“もうひとつの”ICチップが投げ渡された。そして彼はこう言った。

「そのデータはコピーですが、ここでの資料が残っています。ですが、・・・あまり見ることをお勧めしません。ほかの人にも見せないほうが賢明ですよ。・・・世の中、“奇麗事”だけではありませんから・・・政府の大統領は大丈夫かと想いますが・・・気を付けてください。」

「ちょっと待って！、あなた、本当に何が！！・・・」

彼等にはもう訳解らず、聞こうとしたのだが、施設の壁が崩れ始め、聞ける状況ではなくなってきた。

「もう余り時間がないようなので私は行きます。」

誠一はそう告げた跡、黒衣の服とズボン、コートを羽織った。そして血塗れとなった両手に黒の皮手袋を嵌めて。

「行く？、どこにです？・・・あなたは・・・これからどうするの？」

彼の・・・これから何かをすることを悟ったミゼット達は、せめてこれからどうするのか聞いた。

彼が困ったときに力になるうと決心したからだ。

誠一は、ミゼット提督の考えを理解した上で、こう言った。

「・・・闇の書を探します。」

「「えっ？」」

その言葉に二人は固まった。

なぜ彼が闇の書のことを知っているのか、そして、なぜ彼がそれを探さなければならぬのか、理由がわからなかったのだ。

しかし誠一は淡々の告げた。

「今の“闇の書”は本来の姿ではありません。・・・そして、闇の書と、主と、その囚われている騎士達や管理者人格を救い出します。恐らくそこには、“奴等が”裏に隠した真実がある筈です。私はそれを見つけて告げます。それが私の本来の目的であり、・・・“約束”したことです。」

「約束？、誰と？」

「・・・」

誠一は沈黙し、その事は答えなかった。

「つつ！・・・鏡夜君、・・・あなた・・・」

そのとき彼等二人は、彼の目を見て何かに気づいた。

彼の目には、光は薄れ、絶望に耐えている黒く染まった瞳であった。

そしてもう、彼等の知っている誠一ではないことを・・・知ってしまった。

「今までありがとうございます。・・・迷惑ごとですが、ここに居る人たちを頼みます。まだ生きていますから。それと亡くなった方々を埋葬してあげて下さい。ここに居ては報われないので、・・・それから、此処から連れ出す際は気づかれないうようにしてください。知られたら命はないと想いますから。・・・ごめんなさい・・・」

「どうということ？」

それでもコラードは誠一に聞いた、だが、誠一は・・・

「・・・貴方たちは多分、知らなかった方が良かったのかもしれないね。・・・今起きている事を、・・・いや、“今まで”・・・ですかね、・・・」

彼は下を向き、今にも泣き出しそうな顔をしながら、それ以上何も言わなかった。

・・・壊れかけた人形のように・・・

それを見てミゼットをもう何を言っても無駄だと理解した。

そして彼女は最後にあることを伝えた。

「・・・わかったわ・・・でも、このことは忘れないでね・・・」

「・・・???.」

「あなたは一人ではなく、あなたの傍にも、遠く離れていても信頼

できる人が居ること忘れないでね。いいですね。」

それを聞いたとき誠一はもう一度泣いた。そして、

「……はい……あり……ありがとう……ごぞい……ます。」

そのとき、誠一の周囲で空間が渦まいた。まるで呼んでいるかのよう……

「!……」

「鏡夜君!!」

ミゼットとコラードは何が起きているのかわからず叫んだ。だが、誠一は何かに気づいたかのようで、

「どうやら……時間切れのようです。」

「えっ?」

「どういじつとです?」

「向こうが私を呼んでいるようです……これから長い旅になりますが……また会える日は、“こんなこと”がないことを祈っています。」

「かが……みやくん……」

「……本気……なのね?……」

「……ええ、……かん……り……き……よ……くのほう……おね……がい……しま……す。あ……な……た……がたに……もくろ……

うを・・・かけ・て・・・し・・・ま・う・かも・・・しれま・・・せん
が・・・きをつ・・・け・・・て・・・」

そして誠一は闇のあなたに消えた。

彼、鏡夜 誠一は、何処へと消えてしまったのか・・・そして彼の
の知った真実とは何か、全ては闇の中へ・・・

第1章：絶望、そして決意（後書き）

まだ、未熟な上、小説があまりまり立たない部分が多いこと思いますので、こうしたらよいではないかなどの感想やリクエストがありましたら、是非お願いいたします。

第2章：驚愕！、飲み込まれる誠一、そして・・・（前書き）

投稿が遅れましてすみません。最近、考えることが多くなってきたのでなかなかこちらの方にこれませんでした。

さて、ここからは空間内、外部で何が起こっているのか堪能してください。

では・・・

第2章：驚愕！、飲み込まれる誠一、そして・・・

誠一は血まみれだった。

【あの惨劇】のあと、暗闇の空間に引き釣り込まれた誠一は、【あの時】外していた自分の顔と右腕に、“傷”を隠すようにして、“それぞれの”拘束具をつけ、その後、“それ”とは別の、彼オリジナルの拘束具を創り、全身に装着し、“消えた後”、自分の端末で今あるデータと、管理局のデータベースにハッキングして、【裏の】情報を集め、整理しようとしていたのだが・・・。

・・・数時間前（とはいってもこの空間には時間の概念がない、つまり、“時間そのものが存在しない”場所、そして、老いることのない空間である）・・・

『・・・誠一・・・』

突然、彼の頭に声が響いた・・・

そう、彼の内に潜めし人格が呼んだのだ。

「この声、『ドルか？』」

『・・・ああ・・・』

・・・誠一は、ある特殊な【存在_下】だった・・・

突然【ある】力に目覚めた誠一は、ある不安を抱いていた。

それは・・・自分の中に「複数」の人格が表れたのだ。

多重人格とは少し異なるようだが・・・。

その人格のひとつが、今、彼と話している『ドル』と呼ばれているこいつである。

『……誠一……いくつか聞きたいことがある……』

「？、どうしたんですか？、改まって？」

『……この【空間】について何も聞いてこなかった事についてだ・
』

「……」

『貴様、”いつから”気づいていたのだ？』

「最初からです。……そしてこの【空間】は、“今のあなたの力をもつてしても”ここから出るのは無理だということも……」

『……そうか……ならば……次の質問だ……』

「……何ですか？……」

『……貴様は闇の書を探し、“彼らを救うと”言った、……そして真実をと……今まで僅かながら拒んでいた貴様がどういうことだ？……』

ドルがそういうのも無理はない、あの【惨事】のあと、「ドル」
ずっと気になっていたのだ。

確かに“彼等は”「自分が正しいと想うことを選択しろ」と告げ
た。

だが、あの時、誠一は自分を見失っていたのではないのか？、彼はふと思いついただけで、彼は本当に“彼ら”を救えるのか、その力で、復讐をしてしまうのではないのかと疑問を抱いていたのだ。

すると誠一は瞳を曇らせ、悲しみに満ちた目で「ドル」に告げた。

「……理由は二つ……ひとつは、あなたと約束したこと、……そして、)……)……)だからです。少し身勝手かもしれないかもしれませんが、……このままではいけないと想うんですよ。心がそう叫んでいます。」

『……その言葉に偽りは?……』

「ありません。それとあのとき、“この力”を使うときに、あなたと“あの約束”をしたのを忘れたんですか!。それとも、あなたはもう一度【あの惨劇】を引き起こせと、……俺や“彼ら”に血に染まらせ、破壊の限りを尽くせと、そう言っているんですか?……」

誠一は怒りに震え、涙を流していた。

『……そうは言っていない。……ただ、……』

「ただ?」

『……今のきさまの本心が聞きたかったのだ……迷いがあり、心が折れた貴様にその覚悟を、重荷を背負えるかどうかを……』

「……ドル……」

『救うといっても救うとは何なのか、そして、真実とは、何が本当であり、偽りなのか、その意味を理解しているのかと想っただけだ……』

《……そこ至っては我も同意見だ……》

「……アルファ？…あなたもですか？」

「アルファ」、彼もまた、誠一の中に潜む人格のひとつである。

《……ドルよ、あ奴のいうことに疑いはあつたか？……》

「……いや、誠一は嘘は言っておらず、本心だった。……そして私の告げた意味を理解しているようだ。……貴様はどう見るのだ？……」

《……信頼を抱けると判断した……》

「……そうか、……では、始めるとするか……」

《……ああ……》

「？…？…？…、あの、あなた方いたい……これから何を？……」

誠一は彼等の言っていることがよくわからなかった。彼は早く“データ”をまとめておきたいのだが……

(始める？、何を？) 誠一は何か悪寒を感じ、不安気味だった。そして、その悪寒は災厄というほどの中した。

「……決まっているであろう……、」

《……“我等のような力”を使う以上、貴様にはその不安定な心、精神を正す必要である……故に……》

それから恐らく、外の世界から一年は経過した。

『・・・なかなか・・・、まあ“最低”、これぐらいは出来なければな・・・』

《・・・確かに、力の基礎、扱い方、状況判断、ちと“上げてほしい”ところだが、“今の我等”ではここが限界か・・・》

「あなた方ねえ・・・まあ、でも、おかげで覚悟はつきました。・
・そして、背負うというのがどういうことなのかもね。」

『・・・そうか・・・ならばそれでいい・・・その覚悟と信念、それに伴う代償を忘れるなよ・・・』

「・・・ああ、それとあなた方・・・」

『・・・なんだ？・・・』

誠一は先ほどから気になっていたことを彼等に告げた。

「なぜ最初に“これを”創らせたのか、それは置いておくとします。
・・・それより、“外”で闇の書の気配がします。とても嫌な予感がするのですが・・・」

『《・・・なに！・・・》』

流石の彼等は驚愕した。

自分等にも感知できなかったのを、何故か誠一は感知出来たのだ。そして誠一は焦りながら彼等に告げる、予感が確信に変わったかのよう。

「ドル、アルファ、この空間から出ます。協力していただけますね？」

『待て誠一！、ここから出ると言ったがどうやってだ？、今まで出られなかったのではないのか！』

ドルはほとんど怒りながら誠一に言った。

そう、彼は今までこの空間から出ようと何度も試みてやってきたのだ。

だがことごとくこの空間に弾かれ、外に出れないでいた。

だが誠一は意外なことを告げる。

「何故か解りませんが、感じるんですよ。この空間の歪みが、そして聞こえるんです。闇の書の悲鳴が、急がないと間に合わなくなります。」

《……どういうことだ？……》

今度はアルファが聞いてきた。彼は気になっていたのだ。今のあ奴には“ ”が起きているのではないのかと、

しかし誠一は……

「今は説明してる暇がないんです！とにかく、あなた方の“それぞれの力”使います。今ならここから出て、闇の書の近くに行けるはずです。」

『《なに！！》』

さすがの“彼等”も驚愕した。そしてアルファが誠一に……

《解っているのか、“あの時は”うまく使えたが、今はどうなるのか解らないのだぞ!、“契約”もせずに使用し、失敗すれば、貴様
は死ぬ。》

彼等は焦っていた。そう、誠一は、一歩間違えば自分が死ぬかもしれないことを一度やっているんだ。あの時は成功したが、今度はうまくいくとは限らないのだ。それでも誠一は・・・

「・・・私は今ある力、あなた方を信じてます。それにこれは、“飲み込ませるため”ではなく、“救うため、守るため”に使います。こんなことで根を曲げていたら何も変わらないんです。だから、手を貸してください、私を信じてください・・・」

『・・・いいだろう・・・』

《ドル!、貴様!》

『アルファよ・・・貴様の言いたいこともわかるが、・・・誠一は本気なのだ。“あの時”同様に救いたいのだよ・・・わかってやれ、』

《しかし!・・・》

『“我等が”選んだ者なのだ、少しは信じてやるのも悪くないと思うが・・・それに、貴様も見ていただろう・・・今まで奴が“どんな人間”であったのかを・・・』

《・・・、良からう、だが誠一、無茶はするな、あれは力任せで使えるほど、“やさしい”ものではないぞ・・・》

「わかってます。それより、ありがとう、信じてくれて・・・」

《・・・何を今更、それより、準備は出来ているのか?・・・》

「ええ、いつでも。ドル、アルファ、いきますよ。」

『《ああ、・・・/ではいくか・・・》』

誠一は“異なる二つの魔法陣”を展開した。

それはベル方式でもミッド式でもなかった。そして彼は詠唱をぜ
ず、発動させた。 と、 の力を・・・

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

気付けば誠一は、全身血だらけ、ボロボロの状態で、暗闇の空間
から出ていた。

無理もない。“あの力”を“今の状態”で使用したのだ。

“意識がある”というよりも、“生きている”のが不思議なくら
いだ。

そして、その空間から出てきたのはいいのだが・・・

「じじは・・・宇宙空間?」

そう、誠一は暗闇の空間からは出たのだが、今度は宇宙に居たの
だ。

見渡せば、身に覚えのあるものが見えた。

『・・・誠一、あの船は、確か管理局の・・・』

「なっ！……嘘でしょう……」

ドルが言ってきた事に誠一は愕然とした。
管理局の船が軽くだが4、いや5隻いたのだ。

……だが、少し様子がおかしかった……

《……誠一、先頭のあの船だが、闇の書に侵食されているぞ……》

アルファがその異変に気づき誠一に告げる。

「……わかってる！」

誠一もその異変に気づいた。

そして、侵食されているの船に“アルカンシエル”を撃とうとしているのも……誠一は急いで侵食されている船に取り残されている人が居ないすぐさまリサーチしようとした矢先、

「だれか……彼を……まだ……とり……のこ……されて……い……る」

「『《！！》』」

誰かの声が聞こえた……しかしドルはこの声が誰なのかすぐわかった。そう、“ ” の声だった。

『……』の声……あいつ……か……』

「ドル？、どうした？、それに、今の声は……」

第2章：驚愕！、飲み込まれる誠一、そして・・・（後書き）

この内容後、しばらく誠一という名を変えます。修行の件、拘束具の件に関してもまたしばらくして投稿します。いろいろ設定があるので、もし何かリクエストがありましたら、どうぞ入れてください、参考にさせていただきます。また、感想のある方もどうぞお書きください。お待ちしております。

第3章：混乱、失いと出会い（前書き）

小説の投稿遅れましてすみません。内容が少し変化していますが前回のつなげるのに必要なことなので、ご了承ください。では、どうぞ。

第3章：混乱、失いと出会い

“彼”は戸惑っていた。・・・

林の茂みに気絶した彼は、気付いたときには何処かの“居間”、いや、“部屋”に居た。

居間を思わせるようなの雰囲気ではあったが、あたりを見まわすと床は、机、今自分の寝ているベット、あと、壁の端は木べらの床で、それ以外は畳であった。

なぜ自分は此処にいるのかと・・・そう思った矢先、

・・・トン、トン、トン・・・

誰かがノックしてきた。

「っ、どっ、どうぞ」

思わず反応して返事をした。

「・・・ふっ、気が付いたようだな?・・・」

入ってきた彼は、少し微笑し、“彼”に言った。

入ってきた彼（多分此処の持ち主）は、背は180?といったところ。

外見は30前いや、20代後半、腰より少し上ぐらいほどの髪の毛の長さで色は、灰色、後ろで束ねポニーテールのようにしている。

肌の色は白。顔つきは清んだような感じで、瞳色は青。武士道といった人である。

「いやあー、さすがに驚いたな。家の道場の茂みに倒れてたから焦

った、焦った。それに御前、この二日、全く目が覚めなかったからな。」

少し半目で睨みながら“彼”に言った。

彼の外見は背は、178?ぐらいで、髪型は前を少し斜め上に上げていて少し長め(額からおおよそ110~120。ぐらいである)。

髪の色は少し薄い紺色。肌は少し日に焼けている。こちらも瞳の色は青。

表情は暗く沈んでいて感情が余り無いような雰囲気である。

「……、あの、此処はどこです?。それに貴方は?」

若干表情が暗いながらも、少し沈黙し彼は聞いた。

「ん?、ああ、自己紹介がまだだったな。俺は“東誠流寺”。この家の主だ。それと此処は海鳴市の山の付近にあるところだ。御前は?」

「ん、私は……っ、あれ?」

“彼”は自己紹介しようとしたのだが、沈黙。

額に手を当て思いだそうとするが、わからなかった。

「……おい、御前。もしかして……」

そう、彼は記憶を失っていた。……

二日前、

“彼”を見つけた東誠は、少しばかり焦っていた。

なぜ彼が此処で倒れているのかと………とりあえず彼を車に乗せ、海鳴大学に搬送した。

「えーと、極度疲労、貧血の上寝不足、おまけに脳神経に若干の乱れがあるわね。………いったい何があったの？」

「いや、俺に言われても………。そもそもあいつには会ったことがない。それにいきなり家の道場の茂みに倒れてたからな。いったい何が何なのかさっぱりわからん。」

先生が診断結果を告げ、東誠に聞いた。

だが東誠もこちらが聞きたいといった状況である。

「………」

二人しばし沈黙し、

「そういえば俺、まだあいつの名前知らないんだが。」

話題を変えた。

「？、「ラルク」君のこと？」

「ラルク？」

「“ラルク・コライド”、“ドイツ”から留学してきた子よ。」

「・・・連絡先は？」

「残念だけど、両親そろって故郷にいるわ。それに彼、京都から海鳴に越して来たのよ。しかも来たのは二日前で、まだ荷物届いてないはずだけど。」

つまり彼の両親は今ドイツに居り、連絡する手段がない。
・・・ん、しかしここで疑問を抱く東誠。

「ちょっと待て、京都にいた奴を何故先生が知っている？」

「出張であったから。それに此処に越してくることもついでに聞いたの。」

「・・・あいつ今いくつだ？」

「確か16のはずよ。」

(・・・16、よくそんな歳でこっちに来られたもんだ。・・・)

「・・・わかった。先生、あいつの面倒。俺が見ていいか？」

「?!、どうしたの急に？」

「このまま放っておくのは性に合わんな。それとあいつが越してくるところの住所は何処かわかるなら、教えてくれんか？」

「・・・余り至らぬことをしないでよ。」

半目でジイーと睨むと。

「しないよ。で、何処なんだ？」

東誠はスルーした。

先生は少し悩んだが、“東誠なら大丈夫だろう”とほかの先生“達”と話あった結果、住所を教え、ラルクの荷物を東誠の自宅に届けるよう頼んだ。

すると先生は何かを思い出したかのように。

「あ、東誠君。」

「？」

「彼の通う学校の連絡はこちらでしとくから。それと、彼の脳神経の乱れ。もしかしたら記憶が飛んでるかもしれないから。そのときは連絡してね。」

「わかった。で、ラルクは今日はどうする？」

「今日はもう連れて帰って大丈夫よ。まあ、気をつけてね。」

「はい、ありがとうございました。」

現在、

はつきり言っと、東誠は困り果てていた。

先生から聞いた“ラルク”という名の青年。彼は自分のことがわからないと言っていた。

とりあえず病院に連絡したところ、“明日の朝に来てくれ”と告げられた。

そのこと告げられ、肩をガツクリと落とす。

まあ、無理もない。この時の時刻は既に夜中の8時過ぎであり、打つ手なし。

東誠は、彼の名がラルクであることを言った後、彼がどれくらい自分や周りのことを覚えているのか聞いてみた。

「……んー。どうしたものか……」

実際のところ、日常生活における知識には支障はなく、自分や家族、知り合いといったことは全て忘れていた。

生年月日については病院等で確認済みだが………（………先生になんて言ったらいいのやら………）

ラルクに軽く食事を食べさせ、風呂（ふろ）に、入らせた。

その後、ついでにラルクが学校に通うことで、彼の学力を試したところ。

「………、御前、本当に“16”か？」

「？、どういう意味ですか？」

目が死んでいるかのような暗い表情でラルクは東誠を見た。

まあ実際、東誠が疑うのは無理なかった。

ラルクは、高3の知識どころか、大学で習うことも頭に入っていないのだ。

「なあ、ラルク。将来、何か目指してることあるか？」

「……………、今のところは……特にありませんが……」

「まあっ、今言ってもしょうがないか。」

「あの、先ほどから気になっていたのですが……」

「どうした？」

「何故私は此処に居て、貴方はそんなに優しくして下さいるんですか？」

「……そのことも覚えてないか。……ハア！。要点を並べると、御前は家の道場の茂みに倒れていた。で、病院に運んだまでは良いが、いろいろ不安になることもあると思って、俺が保証人になった訳だ。まあ、手っ取り早く言うと、俺も何かと御人好しっていうことだ。」

「……………でも、本当にいいんですか？」

「別に構わんよ。元々一人暮らしだしな。此処は御前の家と思っても構わねえし、元々此処は部屋が結構あるからな。」

「あまり不自由なさらないんですね。」

「まあな。あと、剣術……いや、槍が主かな。日々鍛錬している。今度見てみるか？」

そのことを言った東誠だが、ラルクを見ると一瞬、“右目の色が赤と周りは黒に変わり光った気がしたが……”

(気のせいか・・・)

「・・・少し興味があるので、お願いします。」

本当にに言つてよかつたのか少し戸惑つたが。

「・・・わかつた。とりあえず今日はもう休め。明日の朝、病院に連れて行くからな。その後“いろいろ”案内するよ。」

「すみません。いろいろご迷惑をおかけして。」

「気にするな。ああ、御前の荷物、隣の部屋に置いてるから明日整理しろよ。後さつき俺の部屋は案内したと思うがわかるよな?。」

「あ、はい。大丈夫です。」

「そういうことだから、じゃ、お休み」

「お休みなさい」

(優しい人だな。・・・明日からどうなるんだろう)

そしてラルクすぐに寝てしまった。

そして東誠は部屋を出て廊下の窓を眺めながら。

「さて、明日からどうしたものか・・・。

なあ、“スペル”。さっきのあいつの感じ、まさかと思うが・・・」

『恐らく、“彼”とみて間違いないかもしれんぞ。新たなのとみてな。』

東誠は何か独り言をつぶやいていたかのようだが、彼はいつたい？

第3章：混乱、失いと出会い（後書き）

主人公こと、鏡夜 誠一についてはこの先の隠し玉なので、しばらく名前は出てこないと思いますが、ご了承ください。

なお、前回の新キャラにつきましては男性は私が決めた“東誠流寺”という名でとうしていきます。女性につきましては前回道理引き続き募集いたします。もし何か気になることがあれば、感想、コメントの方、よろしく願います。

第4章：戸惑い、その先にある出会い（前書き）

投稿遅れて申し訳ありません。言い訳しても何も意味がないので、
本当にすみませんでした。

では、続きの方どうぞ。

第4章：戸惑い、その先にある出会い

……待合室にて……

「ん〜、他に覚えてることって何かあるかな？」

“先生”はラルクの精密検査が終わったあと、結果が出るまでに時間があるので、ラルク本人に聞いたのだが……。

「いえ、まったく。」

無表情かつ虚無と化したラルクはただ淡々と答えた。

“先生”は、ラルクを正面からみることがあまりにも怖かったのか東誠に視線を向けた。

「残念だが、昨日からこの状態なんだ。まあ、さっき話したとおり、何も覚えてなくてな。“今朝のことも”よく覚えてないってよ。しかも、“萌子先生”、あんたのことも忘れてるぞ。」

「すみません。」

ラルクは申し訳なさそうに頭を下げた。

「あつ、いいの。気にしなくて。そのうち思い出すはずよ。」

そう、ラルクが病院に搬送され、受け持ちとなり、かつラルクと以前会っていた萌子こと、大宮寺 萌子先生はやや困惑気味で苦笑いしながらもラルクに言った。

……先生の自己紹介が遅れてすみません。……

「はぁ……、いつになるなら……」

東誠が余計ないことを言い、萌子先生が東誠を睨んだ。

「よ・け・い・な・こ・とは言わないの！」

東誠に告げると同時に、何処から取り出しか不明なハリセンで引っ叩こうとしたが。

……ガシっ！

「……えっ？」

ラルクが瞬時に先生の腕を掴み、そのまま背負い投げをしようとしたが、……止めた。

「ここでだけが人、いや、警察呼ばれるようなことするなよ。」

何のことはない。

東誠が投げ技に入ろうとしたラルクを止めたのだ。

「……はい。」

そのまま先生を開放した。

「ええつと、ラルク君？」

「……はい。」

「私が東誠君に、ハリセンで叩こうとしたのを止めたのは分かるけど。……」

「……」

「なんでその勢いで背負い投げになるのかな？」

先生はやや戸惑い、不機嫌にラルクに聞いた。

「すみません。私にもよく分からないんです。なんかこう、反射みたいな感じで。」

「反射!？」

突然のラルクの言葉で、先生は驚愕。

(・・・反射・・・いったい貴方、なにがあったの?)

「そのことについては俺が説明する。」

まるで先生の疑問を見透かしたように東誠が名乗り出た。事の起こり、いや、東誠が知ったのも、朝方だった。

早朝

いつも朝方の4時に起床する東誠は、“いつも”やっている“鍛錬?”を終えた後。

シャワーを浴び、6時半過ぎに朝食を作ろうとしたのだが……

．．台所にて．．

「あっ、おはようございます。」

ラルクが居た。

「ん、．．．ああ、おはよう。」

まさかもう起きていたとは思わなかったのか、東誠は少し驚いたが、驚いたのは“それだけ”ではなかった。

「ん？、御前、それ？」

東誠は、テーブルやガスコンロに置かれている鍋を指差しながら言った。

テーブルの上には二人分の料理が並べてあり、品は、「秋刀魚の焼き魚」、「味噌汁」、「ほうれん草と人参のごま和え」、「納豆」、「だし巻き卵」．．．以上。

「えっ、ああ、勝手ながら食事の準備をさせて頂きましたが、ご迷惑でしたか？」

ラルクは少し戸惑いながら東誠に聞いた。

「いや、まさかしてるとは思わなかったのな。と言うより御前、いつから起きてた？」

「5時過ぎには起きていましたが？」

「……………そうか。」

（……………規則正しいのは良いことだが、ここまでとは……………）

東誠は少しばかりラルクを遠目で見ていた。

「あの……………東誠さん？」

「ん、ああ、すまん。ボウーとしてた。で、なんだ？」

「もうできましたので食べますか？」

「ああ、頂こう。」

とりあえず洗面所に行き手を洗い、戻り、席についた。

……………いただきます……………

東誠はとりあえず味噌汁を啜ってみると、

「っ!」

「?、あの、どうかしましたか?。お口に合いませんでしたか？」

何やら驚いていたので少し不安気味にラルクは聞いた。

「いや、なんでもない。うまいよ。」

（……………負けた……………なんでこんなにうまいんだよ……………ちいくしよう!!!!!!!!……………）

東誠も料理は上手い方（主に和食）だが、ラルクの料理は東誠の腕を超えていた。

どこからか来る敗北感を味わいながら東誠は黙々と料理を食べていた。

その後、食器類を洗い終えたあと掃除をしようとしたのだが、

「……………どうということだ?……………」

庭の物干しを見ると洗濯は干してあり、風呂、廊下、襖、部屋、玄関に至るまで掃除が“全て”終わっていた。(……………これはいつたい?……………)

「ん?、ああ、すみません。朝食を作る前に済ませましたが……………」

「……………」

(家政“婦”ならぬ、家政“夫”か?、こいつは……………)

内心突っ込みを入れるが、こいつ、一時間半あまりで全部こなすとはどういうことだ?。

「……………ラルク、“動きやすい”格好で道場に来い……………」

「?????」

「昨日言った“鍛錬”見せてやるよ。」

「あつ、はい。」

「ついでに“興味ある”とかも言ってたから、稽古つけてやる。」

「……………わかりました……………お手柔らかにお願いします。」

黒いオーラを放ち、後ろから炎が出ている東誠に対し、東誠の威圧に押され若干距離をとりながら後退するラルクであった。

- - 道場 - -

そこには二人の青年が居た。

いや、東誠という名の狼と、ラルクと言う名の子兎と言ったほうがいいのかもしれない。

それほど東誠は道場内に静かに威圧みじきをかけていた。

(・・・なっ、なんでそんなに威圧をかけてるんですか・・・)

口で言うとは危ないと判断したラルクは心の中で叫ぶしかなかった。

「・・・まず、“基本”の姿勢からだ・・・」

そういうと東誠は木刀一刀の持ち方、構え方を教え、畳一枚分距離を開けた後。

「・・・いくぞ。」

「えっ？」

いきなり言うとも木の槍でラルク目掛けて音を立てず、気配を消した状態で、突撃の構えで突きを射れた。おまけに目で見えない動きで。

ラ「・・・」

だが、ラルクはその動き反応。低くかがみ、咄嗟に木刀を右手に、刀身の先が小指の下の方になるように持ち替えた。

そして東誠の槍を木刀で低い大勢のまま受け流し、接近、腹目掛けて一太刀入れようとしたが。

東誠は咄嗟に床を蹴り、槍を軸に高く飛び、かわした。

(・・・あの攻撃に対応した?・・・)

だがラルクはそのまま半回転し、勢いを殺すことなく飛びつき、槍を木刀で払い、左手を軸にして回し蹴りを入れてきた。

「っ！」

だが東誠はその上を行き、空中で無防備なはずが、体をひねり、空中一回転。その攻撃を避けただけでは飽き足らず、槍を片手に持ち替え、その勢いのままラルク目掛けて振った。

しかしそのラルクはその槍を“見ないまま”素手で掴み、無理やり引き寄せ、もう一度一太刀入れようとした。

東誠は目を細め、槍を離し、体をひねってかわし、着地したと同時に零距离で腹部目掛けて懇親の一撃(右ストレート)を叩き込もうとしたが、

「……………」

ラルクは目を細め、木刀を捨て、ぎりぎり左に避け、右手で東誠の攻撃をはらいながらそのまま手首を掴み、左の拳で叩き込もうとしたが、東誠がそれと左手で受け止め、互いの動きが止まった。

そして、1時間後……………

「朝はここまでにするか。病院の件もあるからな。」

「……はい。」

東誠の提案にラルクも同意し、朝の稽古は終わった。

「で、ラルク。」

「……はい」

東誠は先ほどから気になっていることを聞いた。

「御前、何か記憶戻っているんじゃないのか？。あの動き、尋常なことではないのだが……」

東誠は疑問に思っていた。

（あの動き、反射というレベルじゃない。直感、いや、むしろあいつは反射に対し、思考が追いついている。そうとしか言いようがない。しかも、目で追ってやがるしな。それにあれはあいつはいい……。）

「……いえ、まだ……なにも……」

少し暗くなりながらも答えたが、そのとき。

……シユン……

（こんな をして、……あなた方は、何をだと思ってるんですか！！）

（ふ、まだ分からのかね、この があれば、我々

慌てて駆け寄ったがラルクは返事がなく、病院に連絡して急いでラルクを搬送した。

現在

「と、いうわけなんだが。ん？、どうした？」

東誠は朝にあったことを話していたが、萌子先生に冷たい視線で睨まれていた。

まあ、普通はそうなりますか。

「東誠君？」

萌子先生は万弁の笑みで東誠に言ってきた。
ダークオーラを放ちながら。

「あなた、患者に対してして良いことと悪いことの区別はついてるわよね？」

「……」

「後半の部分は逆恨みではないの？」

「まあ、確かにな。」

東誠は先生の威圧をあつさりスルーした。

「そこはすまないと思ってる。」

() ……だが、道場のあの動き。体が覚えているにしては……

・なあ“スペル”、後でラルクの“記憶”を見よつと思つんだが・
（）

『・・・別に構わんが、気付かれるようなへマはするなよ。・・・
そんなことになれば、“我らは”ここには居られなくなる。
お主も素性は知られたくあるまい?。』

(・・・分かつてる・・・。)

東誠はまた“誰かと”話しているようだが?・・・いつたい?

「東誠君!、分かっているならこんなことがないようにして下さい
よ。いいですね!。」

萌子先生は、後押しするように東誠に言った。
するとその張本人は、

「はい、はい。今後は気をつけますよ。」

スルーしながら言った。

(・・・いつもこんな感じなんですかね?・・・)
と、ラルクはふと思った。

しばらくして検査結果が出たが、脳波は少し乱れがありながらも
回復傾向。

その他、打撲等なし・・・脳以外は全く正常だった。

「まあ、検査は大きな問題は特にないけど、週一回は診断を受けて
下さいね。」

萌子先生は検査結果を告げた後、

「はい、ありがとうございます。」

ラルク、東誠は診察室を後にした。

何故か先生も付き添って来た。

何でも、今日の当番は終わりなので帰宅準備とか……。
と、通路を歩いてたとき、

「あ、東誠はんに、萌子先生、おはようさん。」

ある男性が声をかけてきた。

「ん、ああ、おはよう。そっちも今日は早いな？。いつもの定期検査か？」

東誠はその男性の隣に居る妊娠中の女性に視線を移しながら言った。

何やら知っている模様。

「そうなんよ。で、どうしたんどすか？あんた方、こないなとこで？」

今度は女性の方が聞いてきた。

「うーん、まあ、知り合いの検査の付き添い。」

東誠は適当に返したのだが、

「まあ、正確には、この人の原因で起こった検査だけだね」

萌子先生はここぞとばかり釘を打った。

「うっ、……ハァー」

東誠はやり返すことができず、ため息。

「で、そっちの人は誰なん？」

女性は彼等二人の後ろに居る人物指した。

「ん、ああ、こいつは……」

「どうも、ラルク・コライドです。……先日から東誠さんの自宅
でお世話になっています。」

「まあ、そついうことだ。」

いろいろ話すことがあるが、とりあえず今は、スルーすることに
した。

「あの、東誠さん？」

「どうした？」

「この人たちは？」

ラルクは東誠に尋ねるが、代わりに萌子先生が答えた。

「彼等はね。……八神

さんと、

さん。この近くに

住んでいる夫婦よ。」

そう、その二人は、八神はやてのご両親だった。……

第4章：戸惑い、その先にある出会い（後書き）

新キャラ募集につきましては夫婦の件、友人の件、このまま継続いたしますのでどうぞ宜しくお願いいたします。

第5章：狂乱、再開と再び（前書き）

投稿遅れまして申し訳ありませんでした。新キャラにつきましては自力で何とかしていこうと思えますのでご迷惑をかけます。

そして、すみませんでした！。多分、皆様方のイメージが壊れるかもしれませんが、その分のご理解の方お願いいたします。

あと八神家夫婦は、夫：「真和^{まなかず}」さん、妻：「幸恵^{さちえ}」さんにしましたのでお伝え申し上げます。

それでは続きをどうぞ。

第5章：狂乱、再開と再び

……病院から出てしばらく。……八神家。

八神 真和さんとその妻、幸恵さん側では。

真

「いやあ、ラルクはんだっけか？東誠はんと一緒に住んでる言い張ったけど、何か気になるな」

ラ

「……いや、……その、……ええと、」

幸

「和はん、あまりちよつかいかけんのはやめとき。」

何やら悪巧みを考えている真和、“一応”止めている幸恵だが、彼女の手には……

ラ

「……あの、幸恵さん？」

怯えながら彼女達と距離を置くラルク。

幸

「ん？、何や？」

ラ

「その“カメラ”はなんですか？」

幸 「フフフ、……気になる?」

ラ 「……………」

(誰か……助けて!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

とっいうか、東誠さん、萌子先生。こんな
ること知っていましたね……。)

ラルクはもう全力で逃げたかった。
しかし……………」

真

「…………どこに行こうとしてはるんや?、ラルクはん……………」

真和に止められた。

一方の東誠は……………」

東

「それで、前に知り合いに頼まれて代理師範をしたらさ、……………」
「(っことになってな。」「

萌

「えっ、本当に?最近の子はすごいね。」

近くの喫茶店で萌子先生と話していた。

……………なぜ、こうなったかと言つと……………」

二時間前……………」

ラ
「ファッションデザイナーにカメラマン、と言っていましたよね？」

幸
「ええ、もう人気なんよ。今出版している雑誌。」

真
「良かったら今度見せはりまひよか？。いや、ラルクはんそれとな。」

何やら賑やかになってきているが、真和はラルクを見ながら満遍の笑みで……

東
「おい、“そいつ”にまで面倒ごとを押し付けるなよ。」

言おうとしたが、東誠が割って出た。
それに続き……

萌
「……そうよ。“あたし”も“あの時の”雑誌のせいで外に出るの恥ずかしかったからね。病院でも大変だったわよ！」

何やら冷たい視線で睨みつけている二人である。
何か心当たりがある様子。

ラ
「……あの、何かあったのですか？」

あまりにもふたりの威圧が、いや、ダークオーラが吹き上げていたため、聞いてみたが……。

東

「ラルク、御前はしらなくていい。しらなくていいんだ。……し・ら・な・く・て・い・い・ん・だ！」

ラ

「……はい……」

その以上の追求はできなさようだ。

ね？)

(東誠さんに萌子先生、何があっただんですか

幸

「あ、そうや。今から家へ来まへんか？。いろいろ“お話”したいし。」

真

「それもそうやな。わいらも検診の方は終わりましたし、そちらはんも今から帰宅やる？」

なにやら企んでないのかと思う微妙な笑い。

まるでそれを読んだかのように、東誠と萌子は、

東

「確かにそうだが、俺、このあと用事がな……。」

萌

(誰かに似ている?、いや、

この“二人”って)

幸

「察しがええな。ラルクはん」

そう、その雑誌に載っている人物。

パーカーやジャケット、Tシャツにジーパンなど、数種類のパターンで着ている“武士道”的な男性。

そして……

カーディガンやスカーフ、手さげカバンを持っている、ブラウスにロングスカートなど同じく数種類のパターンで着ている“白衣が似合う”女性(二人)。

その二人はラルクは知っていた。

幸

「東誠はんと萌子先生や。あ、もう一人はなあ、石田先生なちなみにそこに載っている服、うちがデザインしたものや。」

ラ

「……そういうことですか。」

ラルクは東誠たちが警戒していた理由をようやく知った。

こんな事になっていたのだから、あの二人も警戒せずにいられるはずがない。

おまけに、一冊だけではなかった。

ざつと数えて8、いや、12冊か。(生き地獄か!)

救いなのがこれがファッション雑誌で、カジュアル系だけであることぐらいか。

しかし、ここで疑問?。

石田先生？。確か神経内科の先生のはず。おまけに医者がそんなことをして良いのか？

そんな疑惑な目線を気付かない間に八神家夫婦を見ていた。

真

「ん、ああ、心配いらへんよ。その雑誌“は”5年前のだしな。」

まるでこちらの心を読んだかのように真和はラルクに行った。果たしてそれですむは状況か？

ラ

「……一応聞いておきますけど、よくあの人たちがモデルを引き受けましたね？」

真、幸

「フッフ、……誰でも弱みはあるもので。」

犯罪なのではないのか？、これは、……。ほかの人がいれば誰もがそう思うだろう。まさか、これに載っている人たちって。

ラ

「まさかと思いますが、ほかに載っている人って……」
再び疑惑の目で見るラルク。

しかし……

真

「いややな、”そんなこと”してへんちゅうに。それに載ってい

るのはわいらの友人やら、希望者やで。」

そう言っている真和だが、ラルクは信用0、冷たい視線を送っている。

ちなみに余談だが、そこに載っている人の中に桃子さん、恭也さん、美由希さん、がいたりする。(2、3年前のだが)

見境なしだ。

だが、ほかにも知っている人が居たが伏せておこう。

幸

「もう、ラルクはん、“そんなこと”してへんのやからもうええやん。」

ラ

「……その言葉信じていいんですね？」

疑い続けるラルクであったが、これ以上は言っても無意味と判断。ここで追求はしないことにした。

何か悪寒がしたからだ。

気付けば、ドアや窓から遠くおり、おまけに2階に居たのだ。

ラ

「……あの、一応再確認ですが、その“カメラ”と“服”はもしかして……」

手持ちは逆でも、腕の狂いなし。

真和には服が、幸恵にはカメラが握られていた。

そして……

真

「フッフ、覚悟せいやく、ラルク・ク・は・ん」

幸

「特に、うちに無理させようとするなら訴えるぞ。」

ラ

「……………自覚があるのなら、その行動自体をしないください。」

反論しつつも、既に部屋の隅に追い込まれてしまった。

強行突破しようにも、幸恵さんがいるため却下。

真和さんを潰そうにも幸恵さんが割って入るのが必然。

つまり、もう、退路がなかった。

あきらめるしか……………
ない。

ラルクは涙を流しながら、

ラ

「……………もう、好きにしてください。」

……………

……………

哀れな。

真

「ほんなら、はじめまひょうか？」

幸

「ああ、それとな。」

撮影がようやく終わりその後辺りを見ますと。

ラ

「あれは？」

一冊の“鎖”で繋がれた“十字”の本が棚の上の立てかけてあった。

幸

「ん？、ああ、それなあ。気付いたらそこにあったんよ。確か一週間前にな。」

視線に気付いた幸恵が説明しているが、そのとき。

「……………フ、ようやく見つけた。“闇の書”を、“彼等”を、……………」

ラ

「えっ？、誰です？」

幸

「ん？。どないしたん？」

急にうわ言を言い出したラルクに幸恵が聞いてきたが。

ラ

「今、何か聞こえませんでしたか？」

幸

「いいや、聞こえへんけど。和はん、何か聞こえた？」

真

「いや、わいも聞こえへんけど」

ラ

「そうですか……。」

(確かに聞こえたんですが……。いったい?)

そのとき、ラルクの頭の中に

『だれか……だれでもいい……わたし……
は……どう……なっ……てもいい……だ……か……ら……
……きし……た……ち……を』

ラ

「うう、」

うめき声をあげ、倒れた。

幸

「えっ、ちよっ、ラルクはん。どないしたん。」

その声を聞いたのを最後にラルクは気を失った。

第5章：狂乱、再開と再び（後書き）

大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません。本編の基につきましてはもう少しかかりますのでご理解の方お願いいたします。

第6章・直前、対面と新たな（不幸）な始まり（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。今回はすぐに思いついたので投稿しました。

ただ一言。．．．．．すみません。また話しが露天してくるのでご理解の方お願いします。

それでは、どうぞ。

第6章：直前、対面と新たな（不幸）な始まり

少年は夢を見ていた。

そこは暗闇の世界。

何も無い。

ただ、何かが渦まいてるとしかいえない世界だった。

.....ここはどこだ？

.....“俺”は？。

.....なぜ、ここに居る？

.....“あいつ”はまだ.....“俺”
に気付けていないはず。
なのに.....。

夢の中に映像が流れた。

これは、“あいつ”の記憶か。

ここは、“道場”か？、“槍使い”.....のをつ
かさどるとののか。

.....長い間、“託すこと”なく.....
.....“背負い続けるか”.....

.....の言ったとおり、義理堅く、“武士道”ぎみ
た人だな.....

．．．．． “名を変えて”、今は、
．．．．． “東誠”か、

．．．．． あの方は、こちらの“正体”に気付いた
のかな？。

．．．．． 一瞬“漏れちまったし。”

．．．．． しかしまあ、“あいつ”、“あの状態で”よ
く“動けるな”。

．．．．． あの“鍛錬”は．．．．． 無駄ではないと言うことか。

彼は、映像の中の“紺色髪の青年”と“武士道ぎみた成年”を見
ながら“彼”は何かを言っている。

．．．．． まるで、“今まで何もかも観てきた、傍観者”のように

．．．．． そして、新たな映像が映し出された。

．．．．． そこは病院。

そこには、“ハリセン”を持った“先生”、東誠や、“あいつ”
と親しげに話してる。

．．．．． “あの先生？”、

．．．．． もしかして？

．．．．．いや、．．．．．だが、．．．．．“間違
いなさそうだな”．．．．．

球つちに戻れたようだな。．．．．．どうやら、“あの事件”以降、無事に地こ

．．．．．しかしまあ、．．．．．“あの惨事”の後で、
．．．．．医者をするとは、．．．．．

か。．．．．．相当、．．．．．覚悟を持っているの

．．．．．それとも、．．．．．己と向き合ったためか．．．．．

そして、先生を眺めながら、

．．．．．あの人も、“俺”のことに気付いているか？

．．．．．それはまずないか。．．．．．でも、．．．．．

くれ。．．．．．“あいつ”を．．．．．支えてあげて

．．．．．“萌子さん”。

そして、映像はここで終わった。

彼は、

．．．．．もう少し、様子を見てみるか。．．．．．

．．．．．“アルファ”、もう少ししたら、．．．．．
御前、．．．．．

．．．．．多分、“目覚める”と思うから、“あいつ”のこと頼む。

．．．．．ア：『いいのか、．．．．．それで』．．．

．．．．．ああ、かまわねえさ。．．．．．

．．．．．それに、多分、．．．．．“あの力”が、．．．
．．．．．目覚めるかもしれないからな。

．．．．．“俺本来”の、．．．．．“あの力”が、．．．．．
．．．．．いじしえ“禁断の古の力と”、“あの人がな”

．．．．．ア：『確かに、それはまずいな』

アルファたちは、何かを話している。

そう、今はもう、触れてはならない、“存在しない”、“禁断の力”を

．．．．．ア：『だが、．．．．．』

．．．．．ん、どうした？

ア：『貴様は、出てこなくて良いのか。』

無理だな。

それは．．．どういうことだ？』

、でてきたのか。

．．．あ、だが、この“無意識領域だけ”だがな。それで、何故無理なのだ。』

．．．“知ってる”だろ、．．．今の“俺”は“あの惨事”の記憶しかない存在。

．．．そして、“自ら封印するのを選んだ存在”。それ以上の“過去も”、“未来も”、“今も”ない存在なんだ。

．．．『御前』

．．．それに、例え“あいつ”が記憶を取り戻したとしても、“封印されている俺の記憶”は、まず、戻らないと思う。元々、緊急時に戻るようにしているんだからな。それは終わったら、“また消える（封印される）”。“それだけ”だ。

．．．ア：『自分を犠牲にし過ぎてるぞ。貴様は。』

．．．そうは言っても、後には引けないんだ。解除キーは、“あの人”にやったからな。あとは“あの人”次第さ。

．．．『相変わらずか。それともう一つ。』

．．．．．なんですか？

．．．．．『あいつ”が着てるぞ。ここに。』

．．．．．マジ？って、居るな。近くに。

．．．．．あの、ここは．．．．．あなた方はいつ
たい？

．．．．．聞くが、今までの話、全部聞いていたのか？

．．．．．えっ？、いえ、ノイズが入っていて、聞こえなかつ
たですが。

そう、”彼”の言う”あいつ”は”最初から”ここに居た。
元々、”あいつ”の世界なのだから。

．．．．．そうか、ならいいか。

．．．．．えっ？、それは、．．．．．
．．．．．どういふことですか？

不穏な気配を感じながらも、
は彼に聞いた。

．．．．．気にしないでいいよ。少なくとも、”今のあなた”
が”知らなくていい”ことだ。

．．．．．ちよっ、ちよっと待ってください。ここ、”私の夢”
の中”なんですよね？、何故”あなたたち”が、ここで話をしてい

るんですか？。あなたたちはいつたい？

．．．．．さつきも言ったが、“知らなくていい”。それに、御前は“闇の書”を見つけたんだからな。“いずれ分かる”よ。

．．．．．：“闇の書”？、それって、八神さんの家にあつた“あの本”ことですか？。それに何か関係があるんですか。あなたたちが？

．．．．．今はいつて言ってるんだ。“記憶が戻ってから”考えてくれ。多分、御前には、無理を押し付けるかもしれないな。本当なら“俺の方が”やらないといけなんだがな。

．．．．．何を言っているんですか？、これじゃ分からないじゃないですか！って、あれ？。急に辺りが白く．．．．．

そう、
の言っているとおり、暗闇ゆめの世界が白く、辺りを塗り潰していく。
これはいつたい？

．．．．．時間切れか。御前が目を覚ますということだ。夢の世界だからな。ああ、それと、ここでのことは、“今は知らなくていい”から“消しておく”な。

．．．．．：“消す”って、あなた、いつたい？．．．

．．．．．いずれ分かるさ。元々、“俺”と“御前”は．．．
．．．いや、今はいいか。じゃあな、“ラルクと呼ばれている”青

「ん、ん〜。頭痛がする。」

病院から退院して3ヶ月たち、ラルクは激しい頭痛の中、目が覚めた。

時間は、午前4時。

ラ

「……………準備しますか……………」

そう言ってラルクはTシャツとジャージに着替え、洗面所に、その後、スポーツ用の腕時計を着け、玄関へ……………

ラ

「……………おはようございます。」

東

「おはよう、ラルク。来たか。」

ここ数週間、彼の日課である。

そう、“東誠”が組み上げた“地獄メニュー”。

まずは、早朝ランニング、……………だが、その距離……………80キロ。

しかも、1時間以内に走りきれという難問。

東誠から見れば“優しく”、他人から見れば“100%拷問”というだろう。

しかし、何故かラルクは、“30分”で走り切っている。

さらに付け加えるなら、息が上がっていない。（化け物？か）

ちなみに、東誠も一緒に走っているが……………彼も化け物と言うしか言いようがない。

タイムは22分弱 ちなみに“月平均より一分上らしい”。

よく近所迷惑にならないものだ。

本人曰く、「いつもことだが 」。 。

近所の方はもう慣れたのか？。

東

「近頃、タイム伸び続けだな。おまえ。」

ラ

「何故か もう慣れました。」

そう、最初は唾然し、実際に走ると“二時間”がかつた。だが、二週間足らず、毎日、“早朝”と“夕方”やっているうちにこなしている。

. 続いては、道場にて、腹筋、背筋、うんてい、各“200×3セット”。

その後“バランス練習”、と言っても、大きな釘の針の上に、もうひとつの針先を乗せ、“その上に片足で立ち1時間保つというもの。最初は5秒も持たなかったが、徐々に保持時間が延び、今では1時間保つのは当たり前である。

たまに東誠がちよっかいだしに来るので、それを乗り切るのに専念している。

そして。

東

「よし、今日の朝練終わり！」

ラ
「……………はい。シャワー浴びてきます。」

ラルクは、シャワーを浴びに、東誠は道場の後片付け。

その後、ラルクは“制服に着替え”、6時40分、朝食。準備したのはラルク（普段は当番せいである。）。

相変わらず、東誠を満足（泣かせて）させている。

……………余談だが、今日はあまり得意でない
洋食だった。

だが、周りから見ればどこが得意？とツツコミがくるほど実は近
所で評判だったりする。……………

その後、掃除を“軽く”（ほぼ全部）済ませ、

ラ
「では、東誠さん、行ってきます。」

東

「ああ、気をつけてな。俺も夕方ぐらいまで家空けると思っから、
何かあったら携帯にかけてくれ。」

ラ
「はい。」

“登校”した。

そう、登校である。

補足だが、二話で告げたが、ラルクは“16歳”である。

そして高校の編入はもう済ませている。

その学校は、私立聖祥大附属の高校。

．．．．．そして、八神夫婦の拠点であったりする。
喜ぶ者（哀れな者）結構いるという話だ。

ちなみに東誠も、ここで非常勤講師、剣道の代理師範をしている。
容赦はないが．．．．．

またそれは別の話で。

さて、楽しい（逃げたい）学園生活、始動する。

第6章：直前、対面と新たな（不幸）な始まり（後書き）

さて、いやな狂乱を始めさせようと思いますが、露天しすぎないよう努力していますので応援の方、宜しく願います。

さて、八神家夫婦の拠点に設定したのでこれからどう書いていくか………頑張ります。では。

第7章：始動、冬の中の学園（パラダイス）生活（戦場）（前書き）

遅れまして大変申し訳ありません。

そろそろ大本に入ろうと思いますが、もうしばらくお待ちください。

そして、新たな新キャラ河海^{かわみ} 川^{かわ}さん。藍川^{あいかわ} 志津恵^{しずえ}さんを組み

ました。ご堪能ください。

第7章：始動、冬の中の学園（パラダイス）生活（戦場）

さて・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうしたものか・・・・・・・・・・

ここは屋上。

ラルクは困り果てていた。

入学してまもなく、彼を困らせていた者“達”。

それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

河海

「ラルク君、すごい人気ね。」

苦笑いしながら、彼女はラルクに話しかけていた。

そして、そのラルクは。

ラルク

「ええ、・・・・・・・・・・・・・・・・・・確かに。

河海^{かわみ}さん、あなたがいなくなったら、まず、死人が出ましたよ。」

無関心、虚無的な表情でありながらも、さすがに、疲労が溜まっているのか。声に元気がない。

ここは、学校なのか？。

冬の一月。

新学期始まりと同時に、ラルクは私立聖祥大附属の高校の入学した。

だが！、それから1カ月がたち、乱闘騒ぎが発生。

ある者は追跡者、ある者は逃亡者、ある者は傍観者となり、学園^{せん}生活と化している。

何故こうなったか！。
それは彼が入学した日に始まる。

1月9日：始業式

先生

「はい、では皆さん、改めて、おはよう。冬休み楽しく満喫されましたか？」

一同

『いえ、全くノ宿題多すぎ！ノ初詣で最高！』

さまざまが意見が飛び交う中、

先生

「そう、楽しくて何よりね。」

先生………全くのスルー。

………流石。

先生

「はい。では、皆さんに転校生を紹介したいと思います。」

ラルク

「………ラルク・コライドです。宜しくお願いします。」

教卓の前で一礼をし、自己紹介をするが、無表情であった。

先生

「……えっと、最初に言っておきますが、ラルク君は、記憶喪失のため、家族関連などについて全く覚えていないので、その件の質問はしないように。」

一同

『はい。』

先生が念押しして注意しておくことは言ったが、

河海^{かわみ}

「あれ、ラルク君って、“先週の雑誌”に載っていたよね？」

一人の生徒が声を上げるや否や、

一同

『あぁーーーーーーー!!』

生徒一同その言葉に反応!

続々に恒例の質問時間が開始した。

A

「ねえねえ、どうしてあの雑誌に載ってたの？」

ラルク

「病院で八神家夫婦に挨拶するや否や、その時には……
・目を付けられました。」

その質問が出てきたとき、突如、周りの空気が重たくなった。まるで、それ以上聞かないでくれと。

とっついうわけで、

B

「今どこに住んでるの？」

別の質問に切り替えしたが、

ラルク

「山付近の東誠 流寺さんの自宅に住んでいます。」

一同

『・・・・・・・・・・』

その言葉を聞いた瞬間、沈黙した。

ラルク

「？、どうしましたか？。皆さん？」

一同

『・・・・・・・・・・いや、なんでもない／ありません。』

その場の空気が重くなったことに疑問を抱いたが、聞けそうになさそうだ。

余談だが、東誠はこの学校の非常勤の教師（資格あり）。

担当は古典、日本史が主だが、生徒に一切容赦ない。

課題（プリントなら5〜10枚が当然）、レポート（5枚前後が当たり前）、テスト等徹底しており、期限も厳守。

忘れた日には、個別面談じくべんがついてくる。

さらには、彼は剣道部も顧問しており、忘れた生徒がその部員なら・・・・・・・・・・そこはあえて触れないで置こう。

地獄に変わらないため。

C

「そういえば、ラルク、趣味とかはある？」

生徒の一人が現状打破しようと質問を再開した（させた）。

ラルク

「特にありませんが、読書……ですかね。歴史か心理系が主ですかね。家事面では、料理も少々（そんなはずはない！）、主に和食や和菓子が主ですね。」

河海^{かわみ}

「普段家で何してるの？」

ラルク

「……あまり聞かないほうがいいですよ。」

相変わらず無表情ながらも、クラスのためを思ったためか、止めに
入るが。

河海^{かわみ}

「余計に気になるから教えて。」

好奇心大性なのか、本人の気持ちを知らず、答えを求める。
ふと周りを見るが、ほかの生徒も目がキラキラを輝いていた。

ただ一人、担任教師の“藍川”先生を除いて。

ラルク

「ハア……。。一応最終確認ですが、本当に良いんですね？」

“本当”の確認をとるが、生徒は首を縦に振り、肯定した。

藍川 先生

「ラルク君、無理しなくていいのよ。」

先生はラルクを止めに入るのだが、

ラルク

「いいですよ先生。もう何を言っても無駄でしょうし。」

諦めたのか、ラルクは生活の全容を話し始めた。

ラルク

「……早朝から80キロのランニングを30分、その後、2千回前後の筋力トレーニング、バランス感覚で保たせる訓練で1時間半。それから……」

一同

『もついい!!!!!!!!!!!!!!』

流石に皆ドン引き。

まさか、そんなことになっているとは思わなかったのである。

しかもそれについてこれるラルクはいったい？と考える生徒が多くいたが触れないようにした。

流石の彼等もこう思ったのだろう。

(……………死にたくない……………)

ラルク

「だから言ったんですかね。一応聞きますが、他に何か質問はありませんか？」

入学以降、ラルクの人気は耐えることなかった。

先週の調理実習の際でも、クラスの皆から歓声が上がリ、一部にはシヨックを与えたが、勉強アドバイス、日直の仕事、それ以外にも歓声の声は耐えることなく、完全にクラスの人気者と化していた。

河海

「そういえばラルク君、もう時期、あの“イベント”が始まるけど。あなた知ってたっけ？」

ラルク

「？、“イベント”？。何のです？」

河海

「やっぱり。」

ラルク

「いや、ですからなんですか？その“イベント”って？」

河海

「2月14日は何の日分かる？」

ラルク

「2月14日？。確か、バレンタインデーですよね。」

河海

「そう、そしてこの日は授業が無くなって女子が好きな男子にチョコを上げるバレンタインイベントがあるの。毎年恒例のね。」

ラルク

夕食の際、ラルクは東誠に学校の状況についていろいろ話した。調理実習のこと、勉強のアドバイスのことその他のことを。すると東誠は、あることを言った。

東誠

「ラルク、2月の14日の日は気をつけるよ。俺はその日学校には行かないからな。」

ラルク

「え、？。どういうことですか？東誠さん」

東誠

「今はそれしか言えないんだ。時期に分かるさ。さて、食器でも洗うか。」

そう言い残し、台所を後にした。

.....

ラルク

「とっというわけですが。」

河海

「なるほどね。その警戒、以外に当たりだね。」

ラルク

「.....そういうことですか。」

今のでおおまかな事情を察ししたラルク。

そして。

ラルク

「その日、私も休んで良いですか？」

逃げの手を打とうとしたが、

河海

「まずそれは、無理ね。全員参加で拒否権無しだから。」

ラルク

「……………校長に抗議しに行きましょうか。」

河海

「よしなさい。返り討ちになるだけよ。それどころか、余計に悪化してしまうわ。」

ラルク

「仕方ありませんね……………」

どんだん地の底に落ちていくラルク。

河海

「どっつするの?」

ラルク

「全力で逃げに移ります。」

河海

「やっぱりそうなる?。」

ラルク

「ええ。他の皆さんが私に好意を寄せていることも十分分かってます。でも……」

河海

「でも？」

ラルク

「後からの嫉妬の戦場は見たくありませんから」

河海

「やっぱり気付いてた？」

ラルク

「いや顔でも気付きますよ。“入学した日”からすぐにね。」

河海

「そう。……じゃあ、私も協力するわ。」

あまりの言葉にラルクは驚くが、

ラルク

「いいんですか？。それにあなたも……」

ラルクは何か言おうとしたが、

河海

「別に良いわよ。私はその日暇だし。」

河海が割り込みその続きが言えなかった。

ラルク

「では、お願いします。」

河海

「うん。こちらこそ。」

（ラルク君、“相変わらず”ね。“昔”から全然変わってないわね。）

現在 午前9時25分

校長室からのアナウンスが始まる。

校長

『皆さん、おはようございます。』

今日の外は見事な雪景色、中々良い雰囲気になってきています。

さて、今日は皆さんが楽しみにしているイベント、バレンタインを開始したいと思います。

開始時間は午前9時30分～午後1時まで、その後は告白した人と食事など何をして構いません。

当然ですが、犯罪行為はしないように。

した場合、もしくは起こそうとした場合は、後日東誠君に、ありがたい“半日面談を一人ずつ”行いますのでそのつもりで。

尚、ターゲットからは半径2メートルは絶対に離れてください。

破った場合は、藍川先生による“面談”及び“チョコ没収”とさせていただきます。

では、あと、3分、開始の合図が出るまで各自自由にしててください。』

校長のアナウンスが終了したが、教室、廊下、体育館、さまざまではあるが、あたり構わず胸を張る生徒、隠れる生徒、チーム作る生徒、殺気というか、威圧というか、あふれ出ている。

さて、その中のラルクと河海というと、

ラルク

「藍川先生、すみません。無理を言って」

藍川先生

「いいのよ、そんなこと気にしなくて。それにしても、河海さんとすっかり仲良くなったわね。」

河海

「ええ。私もかなりお世話なっているけど。」

ラルク

「ええ。それにしても“ここ”は大丈夫なんですか？」

藍川先生

「ええ、多分……10分ぐらいは持つと思うわよ。」

ラルク

「何故に10分しか？」

藍川先生

「それはね、校長は今回あなたの現場位置を放送で伝達するようになっているのよ。しかもその伝達が係が各クラスの委員長、副院長、

生徒会なのよ。ここ“職員室”といえどまず持たないわね。」

ラルク

「・・・・・・・・・・そうですか。と、いうよりも何故校長が私を？」

河海

「ごめん。ここの校長、私の祖母でこの行事は毎回こうするの。多分、入学早々のラルク君に早くこういうイベントに早くなれて欲しいと思ったからだと思っけど。」

ラルク

「・・・・・・・・・・多分違うと思いますよ。イタズラ好きか、何かに共犯しています。」

藍川先生

「えっ？、ラルク君、それ、どういうこと？」

いきなり思考探りの会話を仕出したラルク。

藍川先生、河海には何がなんだかわからなかった。

ラルク

「先ほどのアナウンスの最中、“カメラ”か“ビデオ”が分かりませんが精密器具の音が聞こえました。」

藍川先生、河海

『・・・・・・・・・・』

さらにラルクは淡々と。

ラルク

「さらに付け加えるなら、・・・・・・・・教室の窓から、“八神家夫婦”が来る所を見ました。」

藍川先生、河海

『・・・・・・・・』

聞きたくないことをラルクは告げた。
そしてラルクは。

ラルク

「ですのでまずは、カメラ及びビデオ破壊活動を実行します。これ以上の面倒ごとは嫌いですので」

さりげなく、ラルクの背中から炎があふれ出ている気がしたが、あえて見なかったことにしよう。
そして、

校長&八神家夫婦

『それでは！、バレンタインイベント開始—————！』

災厄のゴングが鳴らされた。

第7章：始動、冬の中の学園（パラダイス）生活（戦場）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。後2〜5話ぐらいでなのはさん達の方に移ろうと思います。大変ご迷惑をおかけいたしますが今後とも宜しくお願いいたします。

第8章：修羅場、血の気の多いバレンタイン（前編）（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

今回は前編、後編という風にならないうことと思います。投稿に時間がかかりまして申し訳ございません。では、続きをどうぞ

第8章：修羅場、血の気の多いバレンタイン（前編）

「…………さて、…………そろそろ“あいつが目覚めるか”」

“彼”は“山奥”から私立聖祥大附属の高校を眺めながら呟いた。まるで、これ起こることを知っているかのように……………。

さて、今現在、その私立聖祥大附属の高校では……………。

副会長

「“奴”は居たか！」

秘書

「各班、いまだ発見できず、捜索中です。」

生徒会長

「各班！、全力で今回の標的^{ターゲット}、“2年B組 ラルク・コライド”を捜索、発見しだい報告と同時に捕獲せよ！そして、協力できる生徒をラルク捕獲に向かわせる！」

各班

『サー・イエッサー！』

と、言うように……………バレンタイン行事とは場違いなほどに進行していた。

その一方で……………

真和

「いや、しかしまあ、毎年この行事は、すごく賑やかやかな。」

校長

「ええ、全く。今回の獲物ターゲットは人気者ラルクをチョイスしましたからね。」

などと楽しみながら、隠しカメラの中継場である校長室に真和と、
校長こと川海かわみ 紀久恵きくえは、映像を見ながら、堪能していた。

さらに……………

女子集団側

a

「もー！、ラルク君どこー……………」

ある一人の女子生徒が2階の廊下を見渡しながら叫んだ。

b

「1階と4階はしらみつぶしに探して、他も探してるのにー！」

続いて他の子も叫んでいる。

c

「とにかく、ほかの女子達こよりも速くラルク君を見つけろよ！」
他etc……………

……………

シャ・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・ “砂の残骸”にした。

隣に付き添っていた川しおは、

川

「・・・・・・・・ラルク君・・・・・・・・」

恐る恐る声をかけるが・・・・・・・・

ラルク

「職員室に4つ、調理室に4つ、2階の各教室(6)に6つ。そして、ここに5つ・・・・・・・・。次はどこにしようか・・・・・・・・。それとも、校長と真和さんを・・・・・・・・。」

話を聞いておらず、周辺を凍りつかせるほど、寒く、重くしていた。

『・・・・・・・・なにやら騒がしいな・・・・・・・・ “あ奴は”。だが、そろそろ、動いても良いのかもしれないな。』

ラルク

「ん？」

ようやく我に返ったラルクだが、いきなり声が聞こえてきた。
・・・・・・・・(・・・・・・・・気のせいか・・・・・・・・)
何もなかったと無視した。

川

「あの・・・・・・・・、ラルク君。」

ラルク

「ん、どうかしましたか？」

ようやくこの空気が軽くなったので、川は、もう一度声をかけた。それ声に“いつもどおり”の口調で答えたラルクにホッと、一呼吸を入れ、

川

「さつきから怖すぎるよう……。」

彼女がそういうのも無理は無い。

開始早々にラルクは、“最初”に居た職員室で、隠しカメラを発見。そして、当然のごとくそれを破壊。

気になって調べていたらドッコイ！、まだいくつも仕込まれていた。とりあえずラルクは、それらも全て粉々にし、慌てて職員室を出て行ったのだ。

(……迂闊だった。)

そう、ラルクが聞いた限りの情報は、校長はラルクの居る場所を“捜索隊(生徒会、各クラス委員長・副委員長)を通じて”放送するとまでは聞いたが、“隠しカメラや盗聴器を使う”などは聞いていない。

おそらく、他の教員、生徒には誰にも言っていないはず。

盛り上げるどころか、絶対！に校長の楽しみか、新手的いじめです。ね。校長さん……。

その後、ラルクが非難するところにカメラがあり、ラルクはともかく、当初の最優先目的であるカメラ破壊を実行したのだ。

だが、行く場行く場にカメラだらけ。

流石のラルクもこれを見続けられれば、堪忍袋の尾が切れる。

その結果、シャッター・オフ・サイダー 冷徹の殺戮者が降臨したのである。

それでも尚ふらつきながらも避けるが、次第に擦り傷、切り傷、刺し傷が目立ってきた……そして、

「いい加減死ね（クタバレ）！！！！！！」

その台詞と同時にもろに頭にバットが直撃し、血が流れ出ている。不良どもはさらに殴りつけようとしたのだが、

ラルク

「……………そろそろ……………できたか……………」

「ああ？」

ラルクの一声に、動きを止める不良ども。しかし、その判断は命取りだった。

ラルク

「……………“死ぬ覚悟”は……………できたかと……………聞いているがな……………」

「っ！！！！！！！」

ラルクは、殺気は出していないのだが……………その場にいるだけで周囲の空気を重くするほどの……………威圧を放っていた。

そして、

グシャ！

「っ！！！！！！！」

ったのだ。

しばらく呻き声を上げるやからが多くいたが……。

そして、商店街や病院でラルクのアダ名が2つ生まれた。

一つは、「エルフ面倒見の助舟」

二つ目は、「シャドール・オプエノ・サイダー冷徹の殺戮者」

これを期に荒らしによる騒ぎは減ったのだという。

- - -
- - -
- - -

ラルク

「……………」

川

「……………」

ラルク

「…………すみません。ご迷惑をかけたようで」

ようやく自分の状況に気付いたのか、重苦しい表情で謝るラルクであつた。

川

「いいのよ。でも……………」

ラルク

「ん？」

川

「もうこういつのはやめてね。もう“見たくない”から」

ラルク

「わかりました。でも、絶対とは言い切れませんよ。」

川

「どうして？」

上目となり涙目で見つめてくる。

ラルクはやや視線を下に向けながら。

ラルク

「これがもう起きないとは限らないから……ですかね。感情を押しえ込みすぎるところなってもおかしくないですから。出来る限りは努力しますが……。」

川

「じゃあ、そんな無表情な顔はやめて感情的になってよ。」

涙目で言ってくる川ではあるが、ラルクは……

ラルク

「性格上で、多分無理です。どうすればいいのか……自然な表情が出来ないんですよ。まるで……。」

……感情が欠落したようにと、言わないばかりに……

川

「ラルク君……。」

川は哀れるかのような同情な眼差しだった。
そして……

川

「ラルク君、あのね……」

何故か顔を真っ赤にして、ラルクに声をかけ。

ラルク

「……ん？……、（あの、この場ですか？）」

川が何を言おうとしているのか、気付き始めているラルク。

川

「私……」

いきなり危ない展開に入ろうとし始めたが。
しかし……

女子グループA

『見つけたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

突如乱入してきた女子集団。

しかも、1グループだけでなかった。

ラルク

「……ひい、ふう。みい、……だいたい4グループ
つていうところですか。……」

川

川 「ちよつ、ちよつと、ラルク君！何でそんなに冷静なの！？」

ラルク

「流石にこの状況で、どうリアクションをとればいいのか、わかりませんよ。」

あまりも拍子抜けな反応に違う意味で焦りが出始める川。
相変わらずの無表情では、何を考えているのか、こちらがわからない。

だが、周りの集団からでる殺気は、相変わらず学食堂を埋め尽くしている。

しかも、お約束行動で、じりじりと詰め寄ってくる。

そして、これもまたお約束で、壁に到達してしまった。

川

「……ラルク君、……どうする？」

小声でラルクに聞いてきた。

そしてラルクは。

ラルク

「……選択肢は“5つ”ありますが、どれにしましょうか？」

助けの問いかけに対してラルクは現状打破を“5つ”挙げていた。
だが……

川

「一応聞くけど、その手段は？」

猛烈が悪寒が走り、川はラルクに聞いてきた。
そして、

ラルク

「先ほど言ったとおり、その選択肢は……
1：“壁”を“突き破って”逃走
2：“窓”から“飛び降りて”逃走
3：潔く“諦める”
4：“床”を“破壊”し、逃走
5：“何も危害”を加えずに逃走。
さて、川さん、あなたはどれになさいますか？」

川

「………本当に……それしかないの？………」

ラルク

「残念ながら。」

川は唯一の希望を込めてラルク聞いたが、即答。
どれをとっても、何も変わらない気が……。

「………フ、迷っているのなら………
“我”が答えを導いてやるのか？………その“二人組み”よ。」

川・ラルク

「えっ？」

いま、何かが聞こえた。
しかし、互いに“知らない”声だった。

そう、目の前にいる女子集団の者ではない。
では、・・・いったい？

川

「ねえ、ラルク君、今の声って、」

ラルク

「わかりません。少なくとも私達の知っている声ではないはず。」

川

「えっ、それって・・・」

猛烈に嫌な予感がしてきた川だが、ラルクは。

ラルク

「とにかく今は、その事は忘れましょう。この現状打破しなくては
いけませんし。」

そのことは後回しにした。

それに構っている余裕が無いためである。

それは、川にもわかっているらしく、首を縦に振り肯定した。

a

「さあ、ラルク君、覚悟はいい？」

女子の一人が言ってくる否や、既に辺りは突撃体制。

ラルク

「川さん、どうしますか？。あなたが決めてください。」

川
「えっ、ええええー！。ちよっ、ちよっとラルク君！いくらな
んでも無理！。そんなの絶対無理！」

いきなり自分にこの世の生き別れを聞いてくるの無いでしょう！
でもラルクは、その思いを知るか知らずか、

ラルク

「別に構いませんが、あとで“どうなってもいい”でしたらこちら
でやりますが。」

川
「うう、ううー！ー！。」

涙目になりながら、川（じお）を考えた。

このままでは、ラルク君が本当に破壊活動に移りかねない。
でも、このまま捕まるのも……………。
そして、

川
「私は……………」

第8章：修羅場、血の気の多いバレンタイン（前編）（後書き）

中途半端だと思いますがここで一部中断します。

ここで出てしまった選択肢。まだ考え中のため申し訳ありません。もしよろしければ、今挙げた選択肢でご希望がありましたらどれでも好きなのを言ってみても構いません。参考にさせていただきます。

大変ご迷惑をおかけしますが、これからも宜しく願います。そろそろなのはさんたち、おもにフェイトさんになると思いますが宜しく願います。

第9章：修羅場、血の気の多いバレンタイン（後編）（前書き）

今回はいつもより長く書きました。

実際、難しいですね。

何とか原作キャラ二名登場させました。サブキャラですが……
では、続きをどうぞ。

第9章：修羅場、血の気の多いバレンタイン（後編）

さて、…………どうしたものか…………。

ここは1階の家庭科室。

ラルク達は、また災難の嵐にあっていた。

それは…………。

K

「ラルクウウ…………！」

L

「やっつと！見つけた！」

J

「大人しくお縄をちょうだいせえええやああああ…………！」

I

「てついうかてめえええ…………、何故に“天井”から出てきてんだ…………！」

2-4委員長

「とつ、とにかく！、確保…………！」

ラルク

「ハァー、またですか…………。」

ラルクは、ため息をつきながら、呆れていた。

まあ、平たく言うと…………、また見つかってしまったのだ。

しかも、男子の捜索隊メンバーに…………。

何故こうなってしまったかというと、“ほんの少し前”

川

「私は……4番で……」

「……壁に追い詰められたラルクと川、ラルクは脱出法を“5つ”用意していた。

していたが!!

どれもロクなものはない。

何故なら、“一部を除いて”、すべてが“破壊”による現状打破し
かなかったのだ。

そして、ラルクは何故か川に選択肢をさせた。
それにより決定したのが、

ラルク

「……川さん……意外と派手好きですね……」

4番の“床”を“破壊”し、逃走になった。
ラルクは川を見つめながら、

川

「……い、いや、そ、そういうことじゃ、……ないの……
ほ、ほかに、おもいつかなかったの……そ、それと、なんで……
・見つめてるの?」

川は明らかに動揺しながら聞いてくるが、少し顔が赤い。
……恥ずかしいのだろう……。

ラルク

「いえ、別に。それと、私としては、………“2番”か、“5番”辺りを考えていましたから………」

川

「………」

それを聞いた川は、きっかりと3秒後………

川

「えっ、ええええええ!!!!!!」

ラルク

「………そこまで、お約束の反応をしなくても………」

ラルクは川の反応に対して、何故そこまでいくのか理解できずにいた。

そして、川はというと………

川

「そんなこと言っても、普通はそうなるの!。………それよりもなんで、………自分で決めてたなら………なんで私に………聞いてきたの?………」

叫ぶないなや、涙ながらに小声に言ってくる川。

………ラルクよ………もう少し………考えてから言ったほうがいいぞ。

ラルク

「……………あなたの“本心”が聞きたかったから……………ですかね。」

川

「えっ？」

川には、何を言っているのかわからなかった。しかし、ラルクは続ける。

ラルク

「いえ、あなた、中々自分の気持ち言いませんからね。普段から“押さえ込み”すぎていませんか？」

川

「いや、……………その……………」

(……………見透かされてる……………)

ラルク

「無理にとはいいません。ですが、たまには素直になられるのもいいのではないですか？押さえ込みすぎると、倒れますよ。」

川

「う、うん。……………ありがとう……………」

自分でも気づいていた。

……………でも、中々言えなかった。

……………怖かったから。

……………“あの時”のこと、気にしていないのかと思ったから。

だから……………。

- - - - - ボン！

ラルク

「ん？」

何か、音がした。

そう、温泉が吹き出たような音だった……。

そして、肩の方に何かかかったような感触。

気になったラルクはその方向に目をやると……。

ラルク

「……………あの……川^{りお}さん？……………もしもし……………」

川^{りお}は、顔を赤くして、気を失っていた。

頬に軽く手を当て続けるが、目を覚まさない。

ラルク

「……………地雷を踏んでしまいましたか……………さて、」

自分のやってしまったことに自覚しつつも、後回しにした。

何故なら

ラルク

「皆さん、待っていただけとは思いませんでしたが、何故です？。」

「

ラルクが目やった先、そこには殺気の増した女子集団が……

……。

ラルク

「それから、先ほどの質問ですが、あなた方の想像にお任せします。後一つ忠告ですが、隠しカメラが結構ありましたよ。50近くは破壊しましたが、まだあると思うので、頑張ってください。」

集団

『っ！！！！！！！！！！』

さらに動揺している女子集団。

そして、

ラルク

「そろそろ、．．．．．失礼させていただきます。」

そう言うと、ラルクはいきなり。

床を目で見えないほどのスピードで踏みつけた。

そして、

撃！

グシャ！、バコーン！

．．．．．床に大穴が開いた。

集団

『．．．．．嘘．．．．．』

流石に唾然せざるおえなかった。

そして皆はこう思っただろう。

．．．．．怒らしたら．．．．．殺される．．．．．と。

ラルク

ことを言ってしまったようで。」

川

「う、うん、き、気にしなくて、いいから。っ、あれ？」

謝罪してくるラルクに対し、それを止める川。

だが、何かがおかしい。

そう、視界が。

気になり周囲を見ると………

………ボン！

自分に状況に気づき、顔を真っ赤にし、下にうつむいてしまった。

ラルク

「あの？、川さん、大丈夫ですか？」

川

「う、うん！だっだいじょうぶ………それより………おろして………」

ラルク

「は、はい。」

ラルクは素直に川を降ろした。

そして、周囲を見渡すと。

ラルク

「家庭科室ですか。後で説教ですかね？、これは。」

ラルクはため息をつきながら自分のやった行動に呆れてしまった。
面倒ごとが増えたと……。

一方の川は、隅におり、体育座り。
何やらぶつぶつ言っている。

気になったラルクは耳を済ませると。

川

「なんで、ラルク君に抱っこされているの？何で、なんで、なんで、
なんで、なんで、なんで、なんで、」

ラルク

「……川さん……」

あまりも恐ろしかったためか、声をかけるが、

川

「なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、
なんで、なんで、なんで、なんで、」

聞いていなかった。

仕方ない……。

そう思うとラルクは、冷蔵庫から氷を取り出し、袋に入れた。

そして、

ラルク

「川さん、そろそろ起きてください。」

と、言いながら、川の頬に氷袋を当てた。
そして、

川
「ひゃっ！、なっなに？」

ラルク
「ようやく正気に戻りましたか？」

川
「ら、ラルク君、う、うん。大丈夫。」

ようやく正気に戻った川（りお）に何故こうなったのか説明していった。
内容で少し驚愕していたが……。。
まあ、それは置いておくでしょう。

ラルク
「さて、落ち着きましたか？……ん？」

状況を確認しようとしていると、ふと気になったのか、窓を見た。

川
「どづしたの？」

川（りお）も気になっのかラルクの視線を追うと。

「「ニャー？」」

窓の外には首をかしげる“猫”が“2匹”いた。

川
「あの猫がどうかしたの？」

聞いてくる川^{じゅあ}。

そして、ラルクは、

ラルク

「いえ、あの“猫”、…………この町で見かけない猫だなあと、思いました。」

そう言われ、川^{じゅあ}も少し考えるが、確かに見覚えがない。だが、そこまで気にすることなのか？

川

「猫、好きなの？」

一応気になりそうな理由を聞いてみると。

ラルク

「ん？、うーん…………嫌いではないですね。でも…………あの“猫”、“何処かで見えた覚え”が…………」

腕を組み、考え込むラルク。

ラルク

「まあ、今はいいですか…………“お客さん”がお見えになられたようですし…………」

何やら、物騒な発言をするラルク。

そして、川^{じゅあ}は。

川

「えっ？、それって、もしかして……………」

何やら心当たりがある様子。

いや、“二人”には“ありすぎた。”

そして“来てしまった”

2・4委員長

「何ですか！、今の音は！」

M

「つて、……おまえら、そこで何してんだ？」

捜索隊に遭遇した。

ラルク

「……先ほどの答えですが、女子集団から逃げる際、2階の学食堂の“床を破壊”し、こっちに降りてきた。それだけです……何か……」

集団

『……床を破壊した？……』

ラルク

「ええ。」

集団

『……』

ラルク

「……………後の説教は覚悟しています……………ですが……………
あなた方の“手に持っている物”はなんですか？」

話しながら(?) 集団の手元を見るラルクと、川^{りお}。

何故か手には“ロープ”、“鎖”、“ガムテープ”、“催涙弾”、
“金属バット”、“ネット”、“手錠”、“麻酔弾入りエアマシ
ンガン”、“スタンガン”、他 e t c……………。
とにかく、武器(凶器)を淡々所持していた。
それ見るなり……………。

カシャ！ カシャ！ カシャ！ カシャ！

胸ポケットから携帯を取り出すなり、写真撮影をするラルクと川^{りお}。

I

「っ！、お、おまえら？、何してるんだ？」

一部の生徒が冷や汗を流しながら、ラルクたちに聞いてきた。

ラルク

「……………わざわざ聞き返す必要があるんですか？……………
……………」

川

「……………私もね……………これは見過ごせないかな？」

絶対零度の眼差しで見るめるラルクと、苦笑いの川^{りお}。
そして……………。

ラルク

「ロープやネットの所持までは分かりますが、それ以外は、
・ “わかってますよね？”」

搜索隊

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

搜索隊は、慌てて、ドア付近まで後退。
ラルクとの距離、4メートルほど開いている。

川

「・・・・・・・・ねえ、ラルク君・・・・・・・・どうする？」

ラルク

「・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・。うーん・・・・・・・・。まあ、とりあえず
は、東誠さんに報告、それは確定ですね。その後は・・・・・・・・。
校長先生たちを・・・・・・・・いや、そこは後で考えましょう。まあ、
このまま済ますつもりはありませんが・・・・・・・・。とりあえず・・
・・・・・・・・」

言っている最中、ラルクは、“4メートル離れた集団”の目の前
にいた。

搜索隊

『つ!!!!!!!!!!』

あり得ない。

だってまだ、離れいたはず。

“目で追えない”なんて・・・・・・・・あり得ない。

そんな恐怖を抱く搜索隊を無視して、ラルクは一言。

ラルク

「……眠ってもらいます。」

そう言つとラルクは手刀でその場にいた搜索隊、9人全員を気絶させた。

その様子を見ていた川（かわ）は一言。

川

「……見えなかった。東誠先生、いったいラルク君に何をしたの？……」

そのことが、ラルクに聞こえているかどうかは分からない。だが、……当然。

ラルク・川

「ん？／えっ？」

急に何かが、通つたような感触。

辺りを見ると、“壁や物”の“色の変色”、そして、

川

「“みんな”が“いない”。」

そう、ラルクが気絶させたはずの生徒が全員消えていた。

ラルク

「これは……いつたい？……」

ラルクも唾然していた。何が起こっているのか分からなかった。

川
「ねえ……ラルク君。みんな……どこに行ったの？……
ねえ……」

怯えて涙目になる川。
そして、ラルクは。

ラルク

「落ち着いてください。……とにかく……ここから出まじよ
う。みんなを探します。」

(……だが、どういうことだ。

みんなが一瞬でいなくなることに、まずあり得ない。
それに、静か過ぎる。まさか……)

川

「ラルク君……」

ラルク

「ん？、どうかしました？。」

川

「……外……」

ラルク

「外？」

川が外の方に指を刺していた。
ラルクもその視線を追うと……

ラルク

「……真っ暗？、いや、何かが渦巻いてる？」

そう、学校の周りは、真っ暗で何も見えない。
町がなかった。

これは……

『……知りたければ……屋上に来い……すべてを……話してやる』

突然、どこからか分からないが声がした。

ラルク

「えっ？、だれですか！」

慌てて周囲を見渡すが、

……誰も居ない。

『……同じことを言わすな。……でないと……貴様はともかく……“その女”はどうなっても知らんぞ……』

ラルク

「……分かりました。屋上ですね。」

川

「あの、ラルク君、さっきから何を言ってるの？」

ラルク

「聞こえて……ないんですか？」

川

「えっ、聞こえるって、何が？」

何のことを言っているのか分からない川。^{じゅあ}
しかしラルクは。

ラルク

「いえ、いいんです。それより、屋上に行きますよ。」

川

「屋上？なんで？」

ラルク

「私にもよくわからないのですが、……解決方法は、そこにあると思ったからです。あなたはどうします？」

川

「……行く」

ラルク

「分かりました。」

さて、どうなることやら……

異常な事態となりながらも、閉じ込められた学校を見渡す――人
”？が居た。

「ん〜なん〜か、おかしなことになったねえ〜」

「 、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。とにかく、
“ 父さま ” に連絡して。 」

「 いや、それが、通信が繋がらないんだよ。多分、この “ 結界 ” の
せいだと思う。 」

「 となると、あたし達だけでこの現状を打破するしか・・・ないね。
」

「 だね。じゃあ、ちや、ちや、と片付けましょう。 」

何やら動いている様子。

果たして、彼等は……………。

ラルク達は屋上に着いた。

そこに居たのは……………

川

「 ここに来たのはいいけど、いったいどうするの? 」

ラルク

「“すぐ”に分かると思います。“彼”が“嘘を言っていないければ”の話ですが……………」

川

「ねえ、ラルク君。何か知ってるの？」

さつきから、ラルクは誰かと話しているようだったので川はじゅ気になり始めていた。

しかし、

ラルク

「いえ、ここに来るように“言われた”だけなので。はっきりとはいえませんが。」

彼自身、よく分からないようだ。

川

「え？、言われたって？だれに？」

ラルク

「さあ？、分かりませんね。多分、ここに居ると思いますが……………」

何か、曖昧な会話が続く中、

『……………ワシなら……………ここにおるぞ……………』

ラルク

「ん？」

後ろから声だし、振り返ると、そこには、マントにフードを被った銀の仮面をつけた者がいた。そして、何やら特徴的な“黒い大剣”を手にしていた。

川

「ら、ラルク君、あの人、だれ？」

ラルクにしがみ付き、怯える川。^{りお}

しかし、ラルクは、その無表情な顔を崩さず、彼を見つめていた。

ラルク

「あなたが、“これ”を？」

ラルクは一瞬、周りの方に目をやった。彼もそれに気づいたのか、

『ああ、……………そうだ。』

ラルク

「“なぜ”、こんなことを？」

ラルクの目には、悲しみに染まっていた。

まるで、“前にも同じこと”があったかのように

『“確かめたいこと”が……………あるからだ。』

ラルク

「それはつまり、“私にだけ”、用があるということですか？」

ラルクは何か確信にいたる質問をした。
何かに気づいているかのよつに。

『そうだ。・・・他の者は・・・この“結界”を解けば、戻ってくる。』

その言葉に目を細め。

ラルク

「川^{りお}さんは、何故残したんですか？。私に用があるのなら、彼女を残す必要はなかったはず。何故です？」

『・・・長い時間、ここに居たくあるまい。・・・』

ラルク

「“人質”・・・ですか・・・。それとも、“保険”？」

川^{りお}にいたっては、足がガクガクして、立っているのがやっと。

『・・・そこは自由に判断するがよい。・・・じゃが、ワシの力は、その女にとって危険な物だな。あと、40分で発動する。・・・そうなれば、その女は・・・死ぬ。』

川

「ひい！」

それを聞いた瞬間、川^{りお}は腰を抜かし始めた。
そして、ラルクは。

ラルク

「打開する方法は？」

『……さきと言っておくが、……わしを“倒せばよい”というわけでは……ないぞ。』

大抵のお約束、倒せば、終わり。

だが、彼にはそれは適用しない。

何故なら、

ラルク

「ええ、“そうでしょうね”。あなたの目的は、『確かめる』ではない。そしてそれは、“私に関係”している。それは、“倒す力”でない。」

『……』

彼は、驚いた。

“自分たち”が求めていることに気が付き始めていたのだ。

まだ、“目覚めていない”目の前の彼を見て。

そしては、川（りゅう）の方を見た。

『……少し、……眠れ……』

川

「えっ？、」

川は彼と目が合つと同時に倒れた。

ラルク

「あ、ちよつ、川さん！」

ラルクは川に駆け寄った。

『……安心しろ……眠らせただけだ……結界を解けば目を覚ます……』

「ふうん、なるほど……。」

「この結界の原因はあなたと、いうことね」

話の途中、誰かの声があった。

外見、仕事のOLのようだが……何故に“猫耳”？、そして、“尻尾”？

ラルク

「……あの、あなた方は？」

あまりにも唾然してしまい、その言葉を見つけるだけで神経使ってしまった。

ロツテ

「ん？、あゝあ、ごめんごめん、あたし達、時空管理局の者なんだけど。」

ラルク

「……時空管理局？……」

（……聞いたことありませんね。）

警戒心あらわにするラルク。

そんな中、もう一人方が

アリア

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。私達はあなたの“味方”だから。私の名前は、“リーゼ・アリア”。それから……」

ロツテ

「あたしが双子の“リーゼ・ロツテ”。よろしく。」

ラルク

「はぁ……」

よく分らず話が進んでいくと。

……すうつと……

“彼”は手を払うかのように上げた。

ラルク

「！」

……ドーン！、グシャ！……

リーゼ姉妹

「えっ？」

『……何故防いだ？……』

驚いていたのは彼も同じだった。

そう、彼は、リーゼ姉妹を吹き飛ばそうとしたのだが。

ラルクはそれに気づき、割って出た。

その結果、ラルクは吹き飛んで、フェンスにめり込んだ。

しかも、後頭部は、フェンスとフェンスの間の柱のぶつけた。

そのまま、気を失った。

ロツテ

「って、あんた！いきなりなにしてんのさ！」

アリア

「あなたには、次元干渉及びこの件のこと聞かせていただきます。
武装の解除を」

『……済まぬが、貴様らに用はない……それに……
“管理局”に干渉されると“迷惑なのだが……それはあや
つも同じこと”』

ロツテ

「え？、どういづことさ？」

『……“いづれ分かる”……まだ教えるつもりはないがな。』

リーゼ姉妹と彼はなにやら口論の模様。

一方では……

(……そろそろ……潮時か……まあ、仕方ないか。
このまま、傍観者で居るわけにはいかないか……)

……“何か”が動き出そうとしていた。

アリア

「そろそろいかせてもらおうわよ。ステインガー・スナイプ！・オー
バーレイン！」

アリアの攻撃が、上空から時間差で降り注ぐ。
だが、

『……………下らん……………』

彼は“真上に向けて”大剣を振るう。

そして、その振るった先のものを“すべて”、“消し飛ばした”。
さらに、上空に居るアリアも吹っ飛んだ。

アリア

「くっ！、バインド！」

アリアは後退しながら彼にバインドをかける。
そしてその背後から

ロツテ

「ブレイク・ナックル！」

ロツテが、ソニックブームを使いながら、殴りかかるようにしたが、

『……………下らんと言うのが分からんか……………小娘……………』

彼はバインドをあっさりと解き、逆に大剣を振るい、吹き飛ばす。
そして、壁に激突し、めり込んだ。

アリア
「ロツテ！」

一瞬、彼から目を離し、ロツテの方へ。
だが、それが命取りだった。

-. -. -. -. -. すうううー

アリア
「っ！」

彼はその気を逃がさず、アリアの背後に居た。
そして、

『. そろそろ. . . 終わりにするか.』

そう言うの間髪居れずにロツテに大剣を振るった。
振るったが.

-. -. -. -. -. ガシ！-. -. -. -. -.

“誰か”に大剣をつかまれた

アリア
「えっ？」

『. ん？.』

そう、それは、気絶していたはずの彼。
ラルクだった。

ラルク(?)

「やれやれ、ここまで派手にやることない“だろっ”……“ヒュ
プノス”いや、“ハデス”か……」

すると、ラルクは手を離すな否や、

――――撃――――

『ん!』

蹴りをかまし、見事に彼の腹部に直撃!
10メートルほど後退した。

彼は、ラルクを見つめ。

『……貴様……』

ラルク(?)

「まさか、“あなた”がここに居たとは……で、“俺”に用があるなら、俺とあなたが別の空間に飛ぶというのもあった筈だが……」

さきほどのラルクの口調と全く違う。

これはいったい?

アリア

「あの……あなたいったい?……怪我の方、大丈夫なの?」

ラルク(?)

「ん?、あ、アリアさんですか・・・となると、ロッセさんも居ますね。これはまた・・・、「久しぶり」ですね。」

アリア

「えっ!?、ちょっと待って、「久しぶり」って?、私達、会ったことないよ。」

アリアが混乱している間にラルクは彼女に接近し、

ラルク(?)

「・・・すみません。」

ラルクは“右手”をアリアの頭に当て。

アリア

「え、・・・あなた、た、いつ・・・たい・・・な・・・にを・・・して・・・」

眠らせた。

『・・・貴様・・・』

ラルク(?)

「安心していいよ。眠らせたただけだ。だが、ここでの“記憶は消したかな”。」

『・・・“目覚めていたのか”・・・だが、さっきまでは何も感じなかったのだが・・・』

ラルク(?)

「当たり前だ、と、言いたいが、“俺”は“緊急時しか起動しない”。つまり、さっきまで話していた“あいつ”とは別人格だ。“あいつ”は、“今”や“昔”のことは覚えていないし、記憶が戻らないと“覚醒しない”。」

静けさが満ちていた。

今こやつはなんと言った？

『……………どういふことか説明できるか?……………』

ラルク(?)

「ああ、だが、“全部”は話せない。あいつに何か、影響が出てこられても困るからな。それに……………」

『……………なんだ?……………』

ラルク(?)

「“管理局が動き出した”以上……………あまり、時間の猶予が無さそうだ。」

ラルクは倒れているリーゼ姉妹を見つめながら言った。

悲しそうに……………絶望しそうに……………。

『……………この二人か?……………』

ラルク(?)

「正確にはこの二人も“含めてな”。それから、さっき、人格のこ
と聞いてきたな?」

『……ああ、そうだ。』

ラルク(?)

「さっきも言ったとおり、全部は話せないが、昔、ちょっと遭っ
た。その時、俺自身、“暴走”仕掛けることがあったんだ。その
際、奴らの(???)干渉に遭わないよう、“自分の記憶とキース
ペルの一部”を封印したんだ。」

『……お前……』

気にかけるハデス。

しかし、ラルクは淡々と告げる。

ラルク(?)

「だが、その後、“面倒ごと”にあつてな。今度は“今までの記憶
”まで失った。“夜天の書の中”にな。」

『……何?……“夜天の書”がこの世界に来ているのか
?……』

その事実には彼は驚く。

何かに関係しているのか?

ラルク(?)

「ああ。だが、“俺”はさっきも言ったとおり“緊急時用”だ。あ
いつの中から“傍観”はできても“干渉”できない。“なるべく急
がない”といけないんだ。」

ラルクは下を向きながら何やら悔やんでいる。

『……………何があつたのだ？……………』

何かに“後悔”しているのか、“焦つて”いるのか、声がかなり感情的だ。

ラルク（？）

「助け出したい者たち”がいる。だけど、そのためには“闇の書”を“元の夜天の書”に戻さないといけない。ハデス、“手を貸して”くれないか？」

『……………それは貴様次第だ……………貴様がこの“力”を望む理由、聞かせてもらおうか……………』

ラルク（？）

「ひとつは、約束を果たしたい。それは、“ ”と、“彼と”。二つ目は真実を探したい。それは、自分を苦しめ、歴史を覆すことになつたとしても。最後に守りたい……………」

『……………守りたい？……………何をだ？、そして、それは何のためだ。』

ラルク（？）

「自分が守りたいと思うもの”すべてですよ。傲慢ですが……………でも、そのためになら、自分の“地位や名誉”なんかいいません。理由は、“守りたいから守る”。それだけですよ。付け加えるなら、“失う悲しみや絶望を知りすぎた”から。」

最後の一言を言っているラルク（？）は、とても悲しそうな目をしていた。

ハデスもそれもそれに気づいていた。

『……貴様、分かっているのか？、この“力”は……』

ラルク（？）

「わかってる。では、こちらが聞こうか？ “それで”？」

『……何？』

ラルク（？）

「たとえばその力が“忌み嫌われよう”が、“孤独”であろうが、何か問題があるのか？ 違うだろ！ お前らはその“力”がどんな風に“使われてきたか”、“恐ろしさだけ”を言っているだけだろ！ その力の“意味”を、“あなた方の意思”を“理解”し、“分かり合おうとしない”からそうなったのではないのか！ 俺は、“本心”が知りたいんだ。“分かり合いたいんだ”。それが“罪”というなら、俺は背負っていく。誰がなんと言おうがな。」

こやつ……そこまでして……

そこまでラルクの言う意思にハデスも折れた。

『……いいだろう……その心意気、貴様の本心、確かに聞いた。……だが、忘れるな。この力を甘く見るなよ。もしそんなこと考えるようなら……』

ラルク（？）

「そのときは、“お前ら”が俺を止めてくれ。……これ以上の被害が出ないうちにな。」

『……よかろう……では、“久しぶり”に“元に戻るか”……
……それと、貴様、まさかと思うが、……』

ラルク(?)

「ええ、“この力を元に戻そう”と思う」

『……気をつけるよ……“食われないようにな”……』

ラルク(?)

「ああ、」

そして、ハデスは、ラルクの体内に入ってしまった。
いや、“持っている力と融合”した。

ラルク(?)

「フウー、さて、取りあえずリーゼさんたちを転送するか……
だが、“グレラムさん”が動いているとなると、急がないとな。
“彼”にも会わせないと……さて、転送。」

リーゼたちの転送は無事終了。

そして、学食堂と家庭科室の修復。

もう一度屋上に戻り。

川を見つめながら、

ラルク(?)

「……生きていたか、よかったよ。“無事に生きてて”、
だから、“あのこと”は“自分に押し付けるなよ”。“堀河”……
……さて、そろそろ“時間切れ”か？ハァー。まあ、久しぶりに
外に出られて”よかったよ……あとはがんばれよ。“もう一
人の俺”」

そして、ラルクは川のそばで寄り添うように寝ていた。途中、気づいた川が、ラルクに膝枕をしていたが。

ラルクが気づいたときには少しパニックになったが。

だが、おかしなことにラルクは、“誰かと話していたこと”、“屋上に行った後のこと”について、“何も覚えていなかった”。

その後まもなく、時間の終了。

結局ラルクは、川からチヨコを貰い告白された。

快くOKしたのはいいが、その後、嫉妬の嵐に2週間、悩ませられたのだという。

そして、それから、……10年のときが、経過した。

- - - - -

おまけ

終了して、校長室では

校長・真和

「あ、あの、君達……どうしたのかな？」

東誠・藍川・川・ラルク

『……で？、自分らがしたこと分かってる？……』

校長・真和

「……」

ここでは、2対4の地獄面談中だった。

なぜか？、理由は簡単。隠しカメラと捜索隊の持っていた武器関連だ。

ちなみに捜索隊は後日、ありがたい地獄めんだんと、拷問かだいが用意されている。

東誠

「黙ってたら何もわかないんだがな？」

藍川

「さあ、まだ時間はたっぷりあるから、安心してね。」

川

「おばあちゃん、そろそろ、分をわきまえてほしいな」

ラルク

「真和さん、幸恵さんには萌子先生が行ってもらってますから、家の心配は無用です。」

校長・真和

「い、ごめんなさああいいいい！！！！！！！！！！」

こうして、彼ら二人が解放されたのは、6時間後だったという。

第9章・修羅場、血の気の多いバレンタイン（後編）（後書き）

ようやく、過去編終わりました。長い間どうもありがとうございました。
ます。

次回から、原作年代に移りますのでどうぞよろしくお願いします。

第二部：始動の章 それぞれの悲しき始まり（前書き）

投稿遅れて申しわけありません。

今回、もしかしたら、何か起こるかもしれないませんが、続きをどうぞ

第二部：始動の章 それぞれの悲しき始まり

？

「ええ、はい、そうですね、・・・・・・・・やはり、教授
”は。”」

ここはある研究室。

通信を取っているのは、この“当時の研究メンバー”の一人。

彼は研究室に戻るや否や、違和感を覚えた。

そこにはそこにあつたものが無くなっていたのだ。

“緑の溶液の入ったカプセル”が。

それから3年後・・・・・・・・

5月の連休明け

S i d e なのは

なのは

「おはよ〜」

すずか

「なのはちゃん」

アリサ

「なのはっ！、おはよ〜！」

聖小学校、元気な挨拶から始まった。

アリサ

「そういえばさあ、最近なのは、疲れてない？」

なのは

「ふえ？」

当然の発言に一瞬と惑ってしまふのは、
そして、さらに、

さすが

「そうだね。なのはちゃん、この頃顔色悪いよ。今日体育あるけど大丈夫？」

なのは

「う、うん！全然平気！いつも元気だよ。」

なのはは思う。

「……………なのでわかるかなあ？……………」
と、

アリサ

「なら、いいんだね。あ、今度うちに遊びに来なさいよ。ユーノにも会いたし。」

なのは

「う、うん！、ていうか……………アリサちゃん……………」

アリサ

「なによ」

先ほどのアリサの発言に少し疑惑を抱いたなのはとすずか。
二人はアリサを見つめながら……

なのは・すずか

『ユーノ君が本音？』

アリサ

「……………」

二人に言われながらもポーカーフェイスを崩さないアリサ。
しかし、背中から冷や汗が流れ出ている。

だが二人の視線はこう語っている……………」

……………」逃がさないよ……………」と。

そして、すずかの口から……………」

すずか

「放課後、……………」“ゆつくり話そう”か？」

アリサ

「うっ、」

アリサは回れ右をするや否やダッシュで逃げようとしたが……………」

……………」ガシッ！……………」

肩を誰かにつかまれた。

悪寒が走りながらも、後ろを振り向くと……………」

なのは

「……どこに行くの？……」

“運動が苦手”なはずなのはが笑顔のままにアリサの肩をつかんでいた。

つかんでいる手に力が入りすぎている。

アリサ

「な、なのは？」

なのは

「アリサちゃん……」

アリサの声に笑顔のまま答えるが、その笑顔が怖かった。

そして……

なのは

「……放課後……忘れないでね？」

アリサ

「……はい。」

死刑宣告が出されたアリサであった。

そして……放課後。

なのは

「ねえ、アリサちゃん？、今朝の答えを覚えてくれるかな？」

アリサ

「うっ、……」

笑顔のまままで告げていくのは。
背中に何かが見えてきそうだと。
さらに……

すずか

「……アリサちゃん……」

アリサ

「……(すずかまで)……」

逃げようと考えているアリサだが、二人はいまだに逃がすつもりは無い状況。

そのまま、小一時間この状況が続いたのは余談である。

そして、

アリサ

「……ごめん。」

すずか

「……私たちの気持ち分かったよね?……」

笑顔で聞いてくるすずか。

しかし、……目が笑っていない。

アリサ

「……」

もう、言葉はせず、反射的に首を縦に振っている。

なのは

「それじゃあ、今度からは素直に言ってきてくれる?」

アリサ

「.....」

なのはの問いかけにも、反射的に首を縦に振っている。

もう、アリサには、逃げたいという感情でいっぱいだった。

すずか

「それじゃあ、仲直りと言うことで。帰ろうか?」

なのは

「うん!。あつ、鮫島さん来てるみたいだね。アリサちゃん、一緒に行こう?」

いつも通りの二人に戻ったのが、アリサの暗い表情は中々消えなかった。

正門前で居た鮫島は驚いて事情を聞いたそうだが、何も無かったという事で終わった。

Side 翠屋

桃子

「いらっしやいませ」

夕方、翠屋は混んでいた。

学校帰りの学生が多く立ち寄り、仕事で手の離せない状況でした。

ラルク

「恭也さん、配膳お願いします。」

恭也

「ああ、分かった。しかしラルクもすまないな。こんな時間に手伝ってもらって。」

士朗

「全くだよ。仕事の方は大丈夫なのかい？」

ラルク

「ええ、まあ。“久しぶり”に戻って来たので、休んでいた職に復帰できるとは思いませんでしたが。」

ラルクはいま、週2回ほど翠屋でバイトをしており、本職は保育士（高校の間に表情もだいぶ豊かになってきているので今では人気者である。）。

何故か、バイトの許可が出ており、不思議であるが。他に、調理師、介護士、医師免許を持っている（どうやって手に入れたのか？）

桃子

「でも……幸恵が死んで、もう7年も経つのね……」

厨房の中で、ラルクはその一言を聞いた瞬間、

ラルク

「……」

沈黙した。

そう、桃子は、はやての母親、幸恵の高校の先輩であり、いつも仲がよかったのだ。

桃子

「今、はやてちゃんは元気？」

ラルク

「2年ほど留守にしましたが、あまり……、萌子先生や川さん、藍川先生がよくみてくれますが……。」

桃子

「……そう。……。」

重い、……余りにも重すぎる空気。

そんな中、うつむいているラルク。

それに気づいた桃子は、

桃子

「あ、ごんなさい。こんなこと言って」

ラルク

「いえ、大丈夫です。あ、そろそろ時間ですので、私はこれで失礼します。」

時計を見て、バイトの終了時間になったので挨拶をし、バイトを後にした。

そんな、後ろ姿を見る翠屋定員。

士朗

「やっぱり、相当思い悩んでいるようだね、あれは」

桃子

「ええ、話すべきでは、なかった……よね。」

恭也

「母さん……」

そんな話が進む中、ラルクは、

ラルク

「……はやてさん……やっぱり、“夜天の書”が、原因なんですかね？……」

ラルクは、何かに気づいていた。

だが、魔法を知らないラルクが何故そのことを……

そしてラルクは、ここ最近のことに疑問を抱いていた。

ラルク

「こここのところ、物忘れが激しくなってきたような……でも、病院の検査では異常は無いようですし……」

そう、ラルクは海鳴に戻って、4月辺りから数時間の記憶が無いことがたびたび起きている。

気になって、病院に診断させてもらったのだが、異常は無いとのこと。

しかし、ことの始まりはそう、“ジュエルシードが発動した”ときから記憶が無いのであった。

だが、ラルクはそのことに気づいていない。

そして、その時、

『プレシア……、フェイト……アルフ』

ラルク

「!!」

突然、頭の中に声がした。

しかし、確認するも近くに人影らしきものも無い。
すると突然。

『…… “借りるぞ、ラルク……”』

声がるや否や、ラルクは意識を失った。

そして、そこに居たのは、

『……場所は、“アルトセイム”か……』

“銀髪”で、髪を下ろしている青年だった。

しかも、普段は“黒”を基調としていているラルクの服ではなく……

・ “白と、茶色”をベースにしていた。

そして青年は、“金色の魔方陣”を展開し転送した。

青年が転送した場所、“アルトセイム”。

そこはいい景色だった。

花が咲き乱れ、きれいな草原、そして、辺りには、森が立ち並んでいた。

彼は周りを見ながら、

『……しかし、“あやつ”も無茶やことを言うものだ……いく
ら“自分が出られない”とはいえ、“私に”頼むとはな……』

彼は、そうぶつぶつ言いながら、声のした者を探していた。

『……何故あやつは私に頼んだのだ？。こういつが場合、“
ラルク”のほうに向いていると思うのだが……』

何やら愚痴を言っているようだが、それを言っても“誰”も答え
はしない。

『……フエイト……』

『ん？……あそこか？』

突然声がし、その方向に目をやると、“山猫”が倒れていた。
今にも死に掛けていた。

『・・・・・・・・』

彼はそれを見ると、“彼女”の治療を行った。
彼はそれを見ながら

『・・・・・・・・こやつ、“守護獣”、いや、ミッドでは、“使い魔”か・
・しかし、何故ここに？・・・・・・・・“契約は切れていない”ようだが、
』

彼は考え込みが、答えは見つけられず、とりあえず、治療を続けた。

「う、」

『ん？、気が付いたか？』

「あ、あなたは？」

『・・・・・・・・私はただの旅人だ。名は・・・・・・・・取り合えず、“ラルク”とだけ名乗っておこう・・・・・・・・。それで、貴様は何者だ？、突如、頭に声がしたので、ここに来てみたのだが』

ようやく彼女が目を覚ましたので事情を聞こうとした。

「私は・・・“リニス”。プレシア・テストロッサの使い魔・・・
“だったはず”ですが・・・」

ラルク(?)

『・・・“だったはず?”、おかしなことを言うな。』

リニス

「え?」

ラルク(?)

『私が、治療をしている間、軽く調べたが、今でも貴様、いや、リニスであったな。お主とそのプレシアとやらの“契約は切れておらぬ”ぞ。』

リニス

「え?、切れてない?」

ラルク(?)

『・・・ああ、何か、思いとどまっているのかまでは、私は知らぬが。・・・して、いったい何があったのだ?』

それを聞くと、リニスは下に俯いた。

なにやら悩んでいる様子。

そして、

リニス

「“ラルク”、手を貸してくれませんか?」

ラルク(?)

『・・・どつという意味だ?』

ラルク

『“ヒュドラの事件”とやらを“調べた方”がいいかも知れんぞ』

リニス

「それは・・・どういづことですか？」

ラルク

『今の話だと、気になることがあるのでな。ところでお主、これの後どうするのだ？』

リニス

「・・・」

リニス、そのことについて、何も考えていなかった。

そして、ラルク(?)からある提案。

ラルク

『こちらに来るか？、リニスよ。』

リニス

「えっ？、よろしい・・・ですか？」

余りの提案に一瞬思考が停止した。

ラルク(?)

『構わぬ。しかし、山猫の姿でいた方が良い。・・・こちらの世界は魔法の存在が無い世界だからな。ただ、こちらの世界に戻ったら、私は多分、お主のことを忘れていると思つぞ。』

リニス

「どづいっ……」

リニスがい切り切る前にラルク(?)が割って出て。

ラルク(?)

『まあ、多重人格に近い状態だな。余り私は、“出てこない方”だからな。』

リニスは思った。プレシアより大丈夫かと……。

だが、ラルク(?)は、

ラルク(?)

『まあ、気にするでない。“こやつの中”に居ると案外快適だな。

“中から見ているの”も案外悪くない。』

リニス

「……」

先ほどから疑問を抱くリニス。

“出てこない方”とか、“中から見ている”と言っているが……
・どづいっことだ?

ラルク(?)

『まあ、あまり気にしない方が良くぞ。それから、多分こちらには、“お主の知っている者”が居るはずだ。』

リニス

「?」

頭に?マークが浮かぶリニス。

フェイトにアルフのことか……………。

ラルク(?)

『……………で、そうするのだ?』

リニスは迷うが、暫し考え、

リニス

「……………では、お願いします。」

ラルク(?)

『……………では、行くとするか……………』

そうして、ラルク(?)とリニスは、東誠の自宅の方に転送した。帰るなり、何かメモ書きをし、リニスは山猫の姿になり、ラルク(?)は気を失った。

ラルク

「うーん……………で、あれ?、何故うちに?……………。うん?。」

気が付くとうちに戻っていたが、何故うちに居るのか記憶が無いラルク。

そして、足元を見ると……………

ラルク

「……………山猫?。」

「にゃー?。」

ラルク

「……」

何故山猫が居るのか心当たりが無いが、近くにメモ書きがあり、それを見ると、

『……その猫の世話の方を頼む……東誠』

ラルク

「東誠さん……、ここ“1週間見てない”のに何時帰ったんですか？」

少し愚痴るが誰も答えるはずが無かった。

真和

「いやあ、なかなか気になる内容がはじまりましたなあ。」

幸恵

「そつやなあ、まさはん。」

萌子

「……で、これは何なの？」

幸恵

「ん？、いやなあ、強いて言い張りますなら、あとがき？」

川りお

「このコーナーやって大丈夫なの？」

東誠

「いや、……不安なのは確かだな……で、亡くなったあなた方が何故ここに居る？」

真和

「それはなあ、……」

幸恵

「……うちらもつ出ないんちゃうの？」

東・萌・川

『……』

ラルク（？・9話）

「いや、その心配は無いぞお二方」

一同（ラルク以外）

『えっ？』

ラルク（？・9話）

「今後、過去編（いつか不明）があるそうだからな。だが、“俺”の過去は、当分無い話だそうだ。」

東誠

「さて、ラルク、お前口調がおかしくないか？」

ラルク（？・9話）

「……気にするな。それとこのコーナーなんだが、話のまとめと“お披露目”をやるコーナーだそうだ。」

東・萌・川

『お披露目?』

真・幸

『はいなあ』

萌子

「ちよつとまって!“お披露目”って、まさか!」

ラルク(?・9話)

「ああ、安心しろ。“今日”はあなた達ではない。あと、話題変えるようで悪いが、アリサの方、大丈夫なのか?」

川^{りあ}

「確かにねえ。なのはちゃんやすずかちゃんの“お話”、9歳時に発動するとはねえ……………」

幸恵

「そんなアリサちゃんに“良い物”見せてあげますよ」

そして、アルバムの中に……………“全開”に見せられる“写真の数々”。

東誠

「……………おい……………よくあの会社に漬されなかつたなあ。」

真和

「いやなあ〜アリサはんのお母さんがうちの写真に興味心身でした

さかいなあ。それで、彼女和服にも興味ある言いまして、紹介したら、えらい仲よくなりましたなあ。」

幸恵

「それで、今度写真撮ってくれるよう頼まれてましてねまあ。けど、流石に写真集に載せるのはアカンやろうから載せてないんよあ。」

そして、その写真の中にはアリサのお母さんの着物と言った和服や、夏に着る浴衣。また、娘のアリサにも動物がピックアップされた服を着ている（笑顔万遍である）。

他にも、動物の着ぐるみみたいな衣装も“結構”ある（くま、うさぎ、トラなど・・・etc）。

枚数的に、50枚で済む量ではなかった。

一同（真・幸以外）

『・・・・・・・・』

幸恵

「いやあ。懐かしいなあこの写真。」

東誠

「・・・・・・・・ “俺達とまではいかん” かなりの量だなあ。」

萌子

「・・・・・・・・ええ。」

ラルク（？・9話）

「・・・・・・・・となると、あなた方のほうが結構あるようだな。病院のとき気になっていたが・・・・・・・・まあ、それはいいとして、真和さん、幸恵さん、後ろ・・・・・・・・」

真・幸

「ん？」

ふと後ろを振り返ると……

アリサ（9歳児）

「あんた達！！！！」

そこには、顔を真っ赤にし、涙目になるアリサが居た。

東誠

「逃げるか」

ラ・萌・川

「ああ／はい」

4人は姿を消した。

真・幸

「あ！、ちよっ……」

二人も逃げようとしたが

アリサ

「あんた達！、やっちゃんいなさい！」

特殊部隊（アリサ専用）

「イエッサー！！！！」

そして、ミサイルの雨が降り注いだ。

ラルク（?・9話）

「さて、今日はここまでだな……。まあ、他のキャラの写真も
“結構”あるからな。“俺”、いや、“あいつ”も含めてまあ、が
んばれ。」

川^{りお}

「では、また次回。」

真・幸

『フッフフ……。次は誰にしようか……。』

第二部：始動の章 それぞれの悲しき始まり（後書き）

また、ややこしいのを始めてしました。次回も予告通り、あとがき写真を出していこうと思います。

今後ともよろしくお願いします。なにか、ご要望・質問等ありましたら、どうぞ気軽に言ってきてください。では。

第2話 動き出す序章（前書き）

動き出す者、話そうとする者、拒絶する者、それぞれの止まることなき歯車。その先には。

第2話始動します。

第2話 動き出す序章

リススが拾われてから、しばらくたったある日。

リスス

「にゃ〜？」

川

「ん？どうしたの？、リスス？」

廊下の座り、空を見上げている川のひぎのに東誠（？）が拾ってきた山猫^{リスス}がさすつてきた。そんなリススを見つめている川。

そして、よって来たリススに撫でながらふと思う。

（……かわいい……）

しかし、その感情を抱くと同時に、もう一つの“疑問”が川の悩ませていた。
それは、

川

「このところ、“光の反応”が出てるけど……どうなってるの？……ねえ、“アポロ”、どういふことか、あなたにはわかる？」

川は、空を見上げながら、“誰か”と話している。

しかし、そこには“誰も居ない”。

では、いつたい？

『……私にそれを聞いてどうする？……“カルカス”か“ト

ト”の力を使うのが妥当だと思うが・・・」

川

「・・・なんか、冷たくない？」

『・・・気のせいだ。』

なにやら会話をしているが、いったい？

『・・・ときに話は変わるが、あの“ラルク”という者、どうなの
だ？』

川

「どうなのって、どういふこと？」

なにやらいきなり急所を突かれたかのように、少し顔が赤くなっ
ている。

『・・・いや、もう しているからな。少し、気になっただけ
だ。』

川

「！、ちよ、ちよつと、“アポロ”！」

『・・・ではな。余り考え込みすぎるでないぞ・・・。“元
”』

川

「・・・」

それを聴いた瞬間、川は黙り込んだ。

そして、その場に吹く風が、とても冷たかった。

そんな川を眺めながら……

リニス

（……本当に“この家の方たち”って大丈夫なのですか……
“ラルク”）

リニスがそんなことを思っている中、肝心のラルクは、

ラルク

「そうですか……」

萌子

「ええ、この前と同じ、異常なしね。」

海鳴市の病院に検診に行っていた。

ここ最近、記憶のないことが出始めているためである。

しかし、検診の結果は異常のなし。

ならば何故こうなっているのかと、考え込んでしまおうラルク。

ラルク

「……」

下にうつむくラルク。

萌子

「ラルク君、“2年前”に言ってきた“あのこと”、それに関係し

てるの？」

ラルク

「さあ……なんとも、いえませんね。」

萌子の質問に、暗く答えるラルク。

“2年前”に何があったというのか？

萌子

「まあ、とにかく、また何かあったら来てね。時間が空く限り相談に乗るから。」

ラルク

「……はい。」

そして、ラルクは病院を後にした。

そんなラルクを身を来った萌子は、電話をかけた。

それは、

藍川

『……はい、藍川ですが、』

高校時、ラルクの担任であった藍川^{あいかわ} 志津恵^{しずえ}だった。

萌子

「あ、もしもし、志津恵さん。萌子ですが、」

藍川

『……萌子先生？、どうかしたんですか？電話してきて？』

普段、この二人は仲が良い。

しかし、病院で勤務中であるはずの萌子が電話をかけてくることはまず無い。

では、何故？

萌子

「実は、“ラルク”君のことなんだけど・・・」

藍川

『“ラルク”君？、彼がどうかしたの？』

萌子

「うん。“前に話した”ことでちょっとね・・・」

藍川

『・・・あの“記憶のこと”？。まさか、“思い出した”の？』

何か心当たりがある様子で、志津恵は萌子に聞くが、
彼女は首を振りながら、

萌子

「ううん。“今のところ”は見当たらないけど。けど、」

藍川

『けど？』

萌子

「最近、記憶にない行動がどうもあるようなのよ。こっちに“戻ってきて”から。」

藍川

『ねえ、そのこと、“川”ちゃんは知ってるの?』

萌子

「多分・・・まだ気づいてないと思うわ。あの子にとっては、“複雑”といったところね。」

藍川

『あれからもう、“12年”経ってるからね。・・・ラルク君、“あのことを知ったら”どう思うのかしら。』

萌子

「でも、私たちには、“見守ることしか”出来ないわよ。それに、あなたも“茂”君のこともあるし、」

藍川

『・・・分かってるわ。・・・あの子のことも、何とかしなくちゃね。』

萌子

「うん。ごめんね。急に電話して、あのことを言って。」

藍川

『・・・いいのよ。もう“過ぎてしまった”ことだから。じゃあね。』

萌子

「うん。それじゃあ。」

そうして、萌子は電話を切った。

しかし、ラルクのことなにやら知っているようだが、いったい？
一方、病院を出たラルクというと・・・

ラルク

「・・・・・・・・やっぱり、“ロック”されていますか・・・・・・・・」

近くの公園にいた。

しかし、そこで何かを調べている。

そして、彼は、藍色のひし形のペンダントを見ながら、

ラルク

「・・・・・・・・“無限書庫”でも情報規制していますね。隠す必要があるんですかね？」

『・・・・・・・・』

ラルク

「そう、でしょうね。・・・」

ラルクは、ため息つきながら、家に帰ろうとしたが、・・・・・・・・。
その時、

ラルク

「うん？」

急に真後ろを振り返り、

ラルク

「今の“音”？、それに、この“力”の反応は？」

ラルクはそういつているが、後ろには音がしたような形跡が無い。

そして、ラルクが目をやった先は、かなり遠くの方角である。

ラルク

「行ってみますか……」

ラルクはそういつと、全力疾走で、音のした方角にいつた。そして、誰もいないところまで着くや否や。

ラルク

「？」

急に足元がひかると同時にラルクは意識を失つた。

そして、また、

『……すまぬな。“ラルク”。また借りるぞ。』

銀髪 of 青年の姿となつた。

そして、彼は、ラルクが向かおうとしたところに行つた。

海鳴市海岸。

そこでは二つの魔力がぶつかつていつた。

一つは“桜色”のひかり、もう一つは“金色”のひかり。

レイジングハート

『ディバイン・シューター』

なのは

「シュート!!」

なのはは、6個のシューターを思念操作し、追撃をしていた。しかし、

フェイト

「・・・バルディッシュ」

バルディッシュ

『サイズ・ホーム』

フェイトは、バルディッシュを鎌に変え、接近してくるシューターを一つ切り裂いた。

さらに追撃をかけ、高速で急接近。

小回りで旋回しながら、一つ、また一つとシューターを切り裂く。そして、死角に周りなのはに一撃入れようとしたが、

フェイト

「!」

動きが一瞬だが、鈍った。

なのはがこちらに振り向き反応したから。

なのははすうっと、手を上げ。

レイジングハート

「・・・プロテクション」

バルディッシュを受け止める。

そして、

レイジングハート

「・・・レトリックロック」

フェイト

「っ、くう・・・」

フェイトはバインドで拘束された。

一方、その近くでは、

アルフ

「邪魔だよ！とつととウセな！」

ユーノ

「ちょ、ちょっとまって！」

アルフ

「大人しく、あんたらが持っているジュエルシードを渡しな！」

アルフとユーノが戦闘中であった。

しかも、アルフは手に魔力をこめ、バリアブレイクを連発している。それに危機感を抱くユーノは、ひたすら逃げていた。

なのは

「ねえ、フェイトちゃん。何でこんなことするの？」

フェイト

「・・・」

一方、なのはは、バインドで拘束したフェイトと話をしていたが、フェイトは答える様子は無い。

なのは

「フェイトちゃん、闘い合うのは仕方ないかもしれない。……でも、……何も分からないままはいやなの……。だから、教えて。」

なのはは話を求めるが、

フェイト

「……やさしいね……。でも、言葉だけじゃ、何もかわらない。」

そう言つと、フェイトはバリアブレイクを使い拘束から脱出した。

なのは

「!」

なのはは驚愕した。

だが、気づいた時には、

フェイト

「……ごめんね。」

フェイトは、なのはの死角に居た。

そして、なのはに目掛けて、

バルディッシュ

『サンダー・スマッシャー』

雷の砲撃が飛んできた。
しかし、

レイジング・ハート
『ラウン・シールド』

なのはは砲撃の方に手を出し、シールドを展開。
そして、そのまま受け流しながら後退した。
デバイスをシューティングモードに変えながら。

なのは

「っ・・・」

レイジング・ハート

『デイバイン・・・』

なのはは旋回しながら、デバイスをフェイトの方に向けた。
フェイトは回避しようとしたが・・・

レイジング・ハート

『バスター・・・』

フェイト

「！」

・・・回避できない

フェイトはそう悟った。

そう、余りにも“砲撃の範囲”がでかい。

例えるなら壁、壁が押し寄せているような感じである。

フェイト

「バルディッシュ！、防除！」

フェイトは即座にシールドを展開。

しかし、

フェイト

「くう……」

持ちこたえるので背一杯のようだ。

なのはは、拡散して打っているようだが、それでも威力は十分すぎる。

フェイトが苦しそうな表情をしているのは、魔力が極端に削られるからである。

アルフ

「フェ、フェイト！」

フェイトの異変に気づき、急いで駆け寄るアルフだが、急に悪寒が走り、その場から回避。

回避する前の場所にはチェーン・バインドが2、3重展開されていた。

アルフ

「あんた！……」

ユーノ

「……とりあえず、さっきのお返しと……」

アルフ

「この……ねずみが……」

アルフは逆上しながらも、フェイトに近づけないでいた。

ユーノ

「ねえ、どうしても、話してくれない？ジュエルシールドを狙ってるのか？」

ユーノもまた、アルフに目的を聞こうとするが・・・

アルフ

「・・・あなたには！」

アルフは、怒りながら、しかし、その怒りは何故か悲しみながら・・・

アルフ

「話したって！、わからないよ！」

アルフはユーノに向かって、再びバリア・ブレイクを繰り出す。

ユーノ

「！」

ユーノは慌ててシールドを展開するが、そのシールドは、あっさり碎かれ。

アルフ

「吹っ飛ばせ！」

アルフの叫びのごとく、吹き飛ばされた。再び、なのはたちの方では、

フェイト

「くっ！」

フェイトが高速移動で旋回しながら、なのはに接近していた。

レイジング・ハート

『Flash move』

なのはも苦手な高速移動を使い、フェイトに急接近した。そして、二人のデバイスが、ぶつかり合おうとした時、

――ガチ！――

なのは

「ふえ？」

フェイト

「！」

二人のデバイスがぶつかる瞬間に何かがさえぎった。そこに居たのは、

東誠

「あまりここで騒がれると困るんだがなあ。・・・」

ラルク(?)

『・・・お主ら、もう少し、慎んだ行動をしてほしいものだ。境界を張らぬとは・・・』

東誠

「・・・てか、お前誰だ?。“銀髪”野郎。」

ラルク(?)

『……ただの“旅人”だ。……“老いぼれ”』

そこに居たのは、藍錆色の槍を持った東誠と、金と白の盾を右腕に装着している銀髪青年だった。

東誠

「おい……」

ラルク(?)

『……どうかしたか?』

東誠

「“老いぼれ”とは、どういう意味だ?それと、何故“念話”で話してる?」

ラルク(?)

『……老いぼれはそのままの意味だ。理由は聞かずとも、“貴様”が良く“知っている”はずだが。念話については、私はあまり話さないだけだ』

と、割って入った二人だが、何故か口論が発生?

……. どういうことだ?

なのは

「あ、あの?」

東誠

「何だ？、なのは？」

なのはは、このままでは終わらないと判断し、割って出た。しかし、なのはは疑問に思っていた。

そう、この町でよく見る人だったから……

なのは

「あなた……東誠さん？」

東誠

「他に、誰に見えるんだ？」

質問に質問返しを喰らい、逆に答えづらくなるなのは。

ちなみに、なのはを止めたのは、東誠。

フェイトを止めたのは、ラルク(?)である。

一方、フェイトの方では……

ラルク(?)

『……フェイト・テスサロツサだな。』

フェイト

「……あなたは？」

フェイトの攻撃を盾で受け止めているラルク(?)は、涼しい顔で。

ラルク(?)

『……ただの旅人だといったはずだが？』

こちらは物静かな会話が続いているが、その時、

アルフ

「フェイト！」

アルフがラルク（？）に向かってバリアブレイクをぶつけようとするが、

ラルク（？）は無言にアルフを見つめ、

ラルク（？）

『・・・いきあいは良いが、直線過ぎるぞ』

すうっと、左腕を上げ、

ラルク（？）

『・・・“風”よ・・・』

ラルクはその一言だけ言うと、彼の目の前に、突風が発生！。

アルフ

「うわあああ！」

そして、アルフは軽く吹き飛んだ。

フェイト

「ア、アルフ！」

フェイトはそう言うと、バルディッシュを振り上げ、攻撃しようとしたが、その時、

.....キン！.....

なのは、フェイトの片腕に“青いバインド”が付いていた。
東誠と、ラルク(?)はすぐさま反応しその場から離れていた。

クロノ

「ストップだ！」

そこにまた割ってきたのは、

東誠

「.....時空管理局」

ラルク(?)

「.....クロノ・ハラウンか.....」

クロノは言おうとしたセリフが、とられてしまった。
それでも彼は、表情を崩さず、

クロノ

「.....執務官のクロノ・ハラウンだ。第97管理外世界において、ジュエル・シート古代遺跡の反応、並びに高魔力反応が観測されたため、ここに来た。今すぐ、武装を解除し、事情を聞かせてもらおう。」

クロノは淡々と告げる。

そして、最初に言ってきたのは、

東誠

「おれは、この子等の魔力反応を感知して、急いでここに来て、止

めただけだ。」

ラルク(?)

『……こちらも、同じ答えだ。』

東誠、ラルク(?)は淡々と答えるが、

なのは

「え、えええと、」

なのは、この状況に慣れておらず、答えられずにいた。

フェイト

「……」

フェイトは無言。

戦闘態勢で構えている。

クロノ

「……君達を艦内に同行せてもらっ。」

クロノは目つきを悪くし、言った。

しかし、

東誠

「……悪いが、いま忙しくてな。そちらの意見に従うつもりは無い」

ラルク(?)

『……右に同じ。』

東誠、ラルク(?) はあっさり拒否。逃走準備に入っていた。

フェイト

「……………」

フェイトも隙を見計らって、アルフと転移しようとするが、

クロノ

「すまないが、逃がさないよ。」

クロノはスナイプをすでに展開していたが、しかし、東誠は、槍を下にかざし。

東誠

「……………水よ、氷結とかせ、“極寒の檻”」

詠唱を唱えると、クロノ周囲が氷の檻と化した。

クロノ

「っ！、こんなもの！」

クロノはすぐにこの檻を破壊しようとした。しかし、

東誠

「……………言っておくが、その檻は“触れたもの全てを氷付け”にするから、まあ、がんばれよ……………酸素がなくなるいうちにな。あと、凍死すなよ。目覚めが悪くなる。」

クロノ
「！」

クロノは張ったりだと思っただが、バリアジャケットの肩の部分が触れ、その瞬間、

クロノ

「！な、なんだこれは！」

肩のジャケットが凍りついた。

ラルク（？）

『・・・貫け、雷の矢』

続けて、ラルク（？）がそう言うと、盾に付いている12個のクリスタル・ビットが展開。

それと同時にクロノが展開しているスナイプをすべて潰した。

なのは

「す、すい・・・」

ユーノ

「彼らはいったい？」

なのは、ユーノは唾然している。

フェイトたちはこの気を逃さず、すばやく転移しようとしたが、

ラルク（？）

『・・・赤き狼よ、いや、アルフか、』

突如念話がアルフに届き、

アルフ

「なんだい？、礼でも言えつてのかい！」

ラルク（？）

『・・・誰もそうとは言っておらぬ。フェイトを守ってやれよ。

“あとはこちらで何とか”しますから。』

アルフ

「？」

アルフは何を言っているのか分からず、そのまま転移した。

そして、東誠とラルク（？）も別々に転移し、その場に居たのは、なのは、ユーノ・・・

そして、氷の檻に閉じ込められたままのクロノだった。

真和

「いや〜、また、気になる部分勢ぞろいやな。」

幸恵

「まったくや〜。東誠はんもラルクはんもいったい何者なんや？」

萌子

「そういえば、このコーナーが始まったことは、もしかして、」

真和

「では、ご期待通り答えますよ。」

幸恵

「公開コーナー」

真和

「今回は、川ちゃん主体で行ってみようと思います」

藍川

「ちよ、ちよっと待って！。なんで川ちゃんがあるのよ！」

幸恵

「ふ、甘いなあ〜藍川先生。バイレнтаイン前後やその後の写真が無いと思いましたか？」

萌子

「……まさか、」

真和

「今回は、膝枕&告白の映像もありますさかい。」

藍川

「もしかして、今日3人が居ないので……」

幸恵

「流石に見せれなくなりそうですさかいなあ〜。では、膝枕&告白シーンの映像公開やあ〜」

.....

バレンタインの終了する少し前、屋上にて。

川
「う、うん。」

川は目をさすりながら、目が覚めた。

辺りを見渡すと、何故か屋上のドアの横に背をかけながら寝ていた。そして、何故ここで寝ているのか、考えるが、全く思い出せないでいた。

その際、ふと横を見ると、ラルクが先ほどの川と同じように寝ていた。

川
「・・・ラルク君？」

気になって揺さ振ろうとしたが、止まり、急に辺りを見渡した。そこには誰もいない。

ラルクと“二人だけ”。

そして・・・

ラルク
「うーん、」

なにやら、頭の上下に違和感を覚えながら、目が覚めたラルク。そして、目の先には、

川
「あ、起きた？」

川が居た。

しかし、ラルクは思った。

視界がおかしいことに。

頭を動かすのが無理と判断したラルクは、視線を他のところに向けた。

そして、

ラルク

「あの、川さん？」

川

「ん？、なに？」

ラルクはあえて気づいていることを川に聞いた。

ラルク

「何故？、膝枕を？」

そう、視界がおかしい、そして、違和感があると思った原因が“床に寝ていた”ではなく、“川に膝枕をされて寝ていた”ということだった。

ラルクは取りあえず、退こうとした。
退こうとしたが、

川

「ダメ。」

川に抑えられた。

何故？と考え込むラルク。

川が自分のことを気にしている（好意を抱いている）ことは気づいていたが、ここまですることなのか？と疑問を抱くラルク。

ラルク

「あの、川さ……」

川

「ラルク君……」

ラルクは事情を聞こうとしたが川が言ってきたので聞けなかった。

川

「あの時」、ありがとね。」

ラルク

「あの時」？、学食堂のことですか？」

川

「うん。ラルク君、素直になって、言ってくれたから。」

ラルク

「……」

そう、ラルクは確かにあの時、素直になってとは言った。押さえ込みすぎるなど、つまり、

ラルク

「……私から伝えた方がいいですか？」

川

「ううん、私から言わせて。」

ラルク

「……………」

川

「私、ずっと前からラルク君のこと知ってるの。」

ラルク

「……………」

ラルクは内心驚いた。

自分の過去を知っている？

川

「……………」そのときもずっとラルク君にお世話になってたの、とても仲が良かったの。」

ラルク

「……………」川さん

川

「……………」今のままで、この気持ち変わらないの。だから……………」

ラルク

「……………」

川は赤くなりながら、

川

「わ、わたし……………」ラルク君のことが……………」好き。ら、ラルク……………」君は、どうなの?」

ラルクも、少し顔が赤く、微笑みながら、
川の髪を、そっと撫で下ろし、

ラルク

「わたしも、好きですよ。川さん。」

そう言つとラルクは、川のほっぺにキスをした。

.....ボン！.....

いきなりの行為に川は顔を真っ赤にし、

川

「ら、らららら、ラルク、君！、」

川は、戸惑いながら、

川

「こ、これ、」

チョコレートあげた。

そして、ラルクは微笑みながら、

ラルク

「ありがとうございます。」

チョコを受け取り、礼を言った。

.....

真和

「いやあ、青春してはりますな、あの二人。」

幸恵

「ホンマなあ。」

藍川

「・・・ラルク君・・・川ちゃん・・・」

志津恵は、二人を哀れ見るように見ていた。
そして、

萌子

「志津恵、に、逃げるわよ！」

藍川

「は、はい！」

そうして、二人は消えた。

真和

「あれ？、二人は？」

ラルク

「安心してください。“代わり”に来ました。」

そこには絶対零度の眼差しで見つめるラルクと、

川

「あなた達は！！！！！！！！」

まあ、取りあえず。

藍・萌

「また次回。」

第2話 動き出す序章（後書き）

東誠の目的は？。あの青年の目的は？アルフ・なのは・ユーノの
選択は？

次回、さまざまな選択、

番外編：哀れな理由（前書き）

まず一言。

すみません！

次回予告していながら急遽番外編に変更しました。

これはしばらく掛かりそうなので、本編を期待されている方、ほんとうにすみません！

番外編：哀れな理由

ここは自宅……まあ、東誠の自宅であるが……ラルクはそこに下宿している。

そこでは、面倒ごとが起きていた……。

ラルクが入学してからはしばらく経ち、……
ある日のこと……。

何故？、こうなった？……

ラルクは自宅にてひたすらそのことに悩んでいた……。

ただ、“授業に参加していた”だけなのに……

ラルクはひたすら気が重たかった……。

その元凶は……

桃子

「はい。皆さんこんにちわ。高町 桃子といます。」

「フフフ……」

あまりにもおっとりとして笑っている桃子さん。

上村

「さあ〜ラルク君。“今日から”よろしくね？」

ラルクたちの通っている海鳴の付属高校の家庭科の教師こと、かみむら上村
美春みはるさん。

生徒（主に女子）

『よろしくおねがいします』

そして、ラルクのクラスメイトの女子他多数（別のクラスの女子も含む）。

……この集団だった。

そして、ラルクは少し呆れてしていた。

（それを言ってくるのは一向に構いませんが、“背後の炎”と“笑っていない目”は何とかなりませんか？）
そう内思いながらも、

ラルク

「……はい。」

川

「あははは……」

そして、そこに居た川も……。

……苦笑いするしかなかった。

……そもそも、何故こうなったのか？

それは、ラルクが転校してからしばらく経った……

“ある日の授業”のことと、“その後”のことであった……。

上村

「はい皆さん、ちゃんと手洗いの方は済みましたね？」

一同

『はい／はい』

今日は家庭科の料理実習！

メニューは

『クリームシチュー』

『チキンのから揚げ』

『チーズ・サラダ』

『紅茶』

他etc……

ちなみに、グループは5人1組の6グループ。

ラルクの方は、女子4、男子1となっている。

ラルク

(作者さん……初めから男子1人の確定事項にしないでください。)

無理ですね……。

いくら“お約束破り”の私でも、“この場”のお約束は守ります。

ラルク

(……そこまでして何が得たいですか……あなたは？……)

別に……何も……私はただ楽しく、思うが仮に書いてい
るだけですよ。

そしてやはり、ここではもう一つのお約束がいるでしょう……。

上村

「はい、班グループの方は“先週伝えたとおり”座っていますね。」

一同

『はい／はい』

上村先生は“嬉しそうに”、“笑いながら”言っていた。しかし、一部の女子の方では………空氣が重い。というか、視線が冷たい……。そして痛い……。

なんでこうなるのよ………納得いかない………あの狐悪魔校長………

などと、愚痴が小声で飛んでいる………。当然のことながら………

ラルク

「……ハァー………」

ラルクにも聞こえていた………。
まあ、それは当然のことでしょう………。
なんとって、ラルクの班の位置は………

上村

「？、ラルク君？どうかしたの？」

上村は“分かっているながら”ラルクに聞いた。
ラルクはため息をつきながら………

ラルク

「……いえ……別に……」

“あえて”何も答えなかった。

言ったところで“無駄”であると“知っていた”からである。

川

「……ラルク君、大丈夫？」

そんな時、“同じ班”の川が声をかけてきた。

ラルク

「……大丈夫ですよ……“今のところは”」

川の問いに明らかに空元気で答えているのが丸分かりであった。

ちなみに、ラルクが空元気な理由……

まずは、班の配置……

ラルク

(ハア……、作者さん……)

ラルクの班の配置は見事にど真ん中……。

しかも、ラルクの近い所には女子が固まっている。

……
まあ、班の配置を決めたのは、上村先生に“指示した”校長だが……

ラルク

(……無視するのも大概にしていただけませんか……も

う怒り通り越して呆れて仕方がないのですが……)

まあそう言わず……まだ説明中ですよ……

ラルク

(……それ以外のことには方向転換できないのですか……)

無理です！

ラルク

(……はつきり言いますね……あなたは……)

こういうときは“きっぱり”言うことが当たり前でしょう。

そして、潔く諦めることが肝心ですよ。……ラルク……

ラルク

(……もう……いいです……)

ホウ、諦めましたか……では、“続き”といきます。

ラルク

(……こういうときの主人公って……リアルの方で作者を
発殴りたいですね……)

何か言いましたか？

ラルク

(……いえ、……ただ愚痴を言っているだけですよ……)

ホウ……覚悟は出来ていますね？

ラルク

(……………どうぞお好きなように……………もう“慣れて”きましたから……………)

そうですね……………では、その“慣れ”を崩しましょうか……………

次の理由……………班の振り分け……………
それは、先週の授業のこと……………。

上村

「はい、では今日は、来週の“調理実習”のメニューの確認と“班の振り分け”をしますね」

一同

『はい／はい』

“最初”の原因はここから始まった。

“班の振り分け”……………まあ、こういう場合はグループに分けて執り行うのが当然……………。

しかし、ここ(このクラス)の振り分けは少し違う……………。
何故なら……………

上村

「うん！返事がいいわね……………では、メニューの方はプリントに記載してあるとおりのものになっているから。時間が掛かる分、協力してスムーズに行うようにね。」

先生がメニューの説明をしているが、生徒のほとんど（主に女子）は聞いていない。

そう、彼らの頭の中にあるのは……

上村

「では…… “班の振り分け” をしようと思いますが……」

その瞬間…… “大半の生徒” の “目が光った”。
今すぐにも…… 席から飛び出そうとしていた。

そのことに一人はキョトンとしていた……。

何ですか……この空気……

そう、ラルクであった。

彼はまだ知らない……。

この学校の “班の振り分け方法” を……
そしてラルクは、もう一つ気になっていた。

……何故か “かなりの視線” を感じますが……

そう、先ほどから周りが気になって仕方がないラルク。

ラルクは一応ポケットに手を入れ、 “何か” をしている

そして周りを見てみると……

あまりにも “優しすぎる上に、ドス黒い笑顔” が女子から……
“嫉妬のボルテージ全開” の視線の冷たい男子……

その者達が互いに “共通” していることは…… “目”
そう、 “獲物を狩るような目” である。

ある者はラルクを．．．ある者は好意を抱く者を．．．ある者はラルクを．．．
ある者はドサクサに紛れ、殺ろうと．．．ある者はラルクを．．．
ラルクを．．．ラルクを．．．ラル．．．

ラルク

(作者さん．．．いい加減にしてくれませんか．．．)

まあ、そう言わずに．．．

ラルク

(．．．一応聞きますが、“お約束”というのは、これですか?)

．．．フツ．．．

ラルク

(．．．鳩尾してもよろしいですか．．．)

残念だが、私はここには居ませんよ。

故に、私に危害を加えることは出来ません。

それとですね?

ラルク

(．．．まだ何か?)

．．．お約束が“ここまで”と私は言っていないですよ。

ラルク

(．．．もう好きにしてください．．．)

では続きといきましょう！

そう、“恒例”の第2ステージをね。

ラルク

(・・・何をやる気ですか?)

“すぐ”分かりますよ。“すぐ”にね。

上村

「え〜と、では、“班の振り分け”をする上で“決定事項”を説明しますね。」

一同

『・・・ゴクン』

上村

「あつ、その前に・・・」

ズコ！

いきなりの拍子向けるセリフに・・・。

ラルクと川以外ズッコけた。

上村

「あれ?・・・みんなどうしたの?」

いきなり倒れたことに全く理解できない先生である。
そして、その問いに答えるかのように

川

「えええと・・・期待を裏切られた？、と、思います。」

川が代表して答えた。

他に生徒も首を縦に振り、うんうんと答えている。

上村

「?・・・うん。ごめんね。」

かなりの間があつたが、本当に理解しているのか不安の抱く一同であつた。

上村

「・・・じゃあ、言い忘れの方をお伝えしますね。」

・・・それを聞くと、一同沈黙し、話を聞くことにした。

上村

「ええ・・・と、今回の実習で私のほかにもう一人補助者の方がいますので紹介しますね。では、高町さくらん。」

先生がそう言うつと、

教室のドアが開き・・・

桃子

「はーい。皆さんこんにちわ。先ほど紹介がありました、高町桃子です。来週の調理実習は一緒にがんばりましょうね。」

かなりノホホ〜ンとした雰囲気登場してきた。とても若々しく、きれいな人である。

そして……。

上村

「はい、こちらにいらっしやる高町さんは、駅前に喫茶店を営んでいまして、店長です。確か……店名は……」

ラルク

「……喫茶翠屋ですよ……先生。」

一同

『え?』

いきなり意外なところから声がしたため、一同驚いて、声のしたところを振り向いた。

その声の主は……

上村

「ラ、ラルク君?……」

ラルクであつた。

ラルク

「……はい」

上村

「……なんで……知ってるの?」

このことは今まで隠していたことなのに、ラルクは平然と答えている?

何故?

そんな疑問に悟ったラルクは・

ラルク

「2、3日前からそこでバイトしていますが・・・」

一同（川・桃子以外）

『え！？』

ラルク

「・・・そういえば、話していませんでしたね・・・」

ラルクは今更思い出したかのように平然と会話としているが、周りの方はそうは行かない。

そして・・・きっかり30秒後・・・

一同

『ええええええ！！！！！！！！！！』

いきなり驚愕の叫びを上げた。

そしてラルクの中心に生徒が大集合！

a

「ら、ラルク君！何で教えてくれなかったの！」

g

「な、なあ！今度案内してくれよ！」

などと、戯れることこの上なく群がっていた。

そんな中ラルクは秘かに桃子さんとアイコンタクト。

(これでよかったのですか?)

(うん!上出来よ!)

さあ、明日から大仕事ね)

(ハア……)

というふうな会話が一瞬で終わった。

ちなみにラルク……東誠の家に住んでから、世話好きでしつかりしていることが広まってしまい、市内会の方によく手伝いに行っている。

桃子さんの件は病院でたまたま会ったのがきっかけだが……。

上村

「はい、皆さん。そこまでにしてください。班の振り分けが一向に出来ないから」

一同(ラルク・川以外)

『はい/はい』

先生がそういうと生徒は“普段”よりもすばやく席に着いた。そんな中ラルクは、川と離れる前に耳元で何かをささやいた。

上村

「はい、それでは改めて“決定事項”を伝えますね。」

……ゴクリ……

上村

「班の人数は1グループ5人、人数の組み合わせは“自由”ですが、なるべく男子と女子の差が出ないように、以上です。それでは……」

……ガタゴト

先生のその声に反応し、生徒が椅子を“後ろに引いた”。
そして……

上村

「それでは、“5分以内”に“各自”で決めてください」

ゴオオオ!!!!!!

その言葉が引き金となり、生徒は一斉に動いた!……
当然……その“獲物”^{ターゲット}は……

一同（川以外）

『ラルクくう!!!!!!ん!一緒にやろう!!!!!!/ラルク殺す
!!!!!!』

一斉に“ラルク”に向かった。

そして……

ラルク

「……ハア……、やはりそういうことですか……」

ラルクはこの行動に対して呆れてしまうほど冷静であった。

……あのラルク君?、何故そんなに冷静?

(・・・ “お約束” と言ったのはそちらでしよう?)

・・・くっ!

(・・・では、“お約束”の続きを再開します。)

そしてラルクは、先ほどから“ポケット”に入れていたものを取り出すと・・・

川の手を握り・・・

川

「え？」

川は混乱、しかしラルクはそれに構わず・・・
“取り出したもの”を下に投げつけた。

ラルク

「では、失礼。」

そしてそれは“破裂”し、辺りが真っ黒と化した。
そう、煙幕である。

u

「ケホッ、ケホッ、ラ、ラルク君・・・ケホ、ケホ」

L

「あ、あいつ!・・・ケホ!」

K 「と、とにかく、ケホ、ま、窓をあけて・・・ケホ、」

生徒が席を連発する中、窓に近かった生徒がなんとか窓を開け、煙幕がはれた。

そして状況を確認しようとするが、

Y 「あ！、ラルクがおらん！」

S 「河海さんもいない！」

P 「あいつら！！！！、探せ！ぜってええ！！！！見つけるぞ！」

一同 『おお！！！！！！』

桃子 「あらあら」

ラルクと川がないことが判明し、ボルテージ全開となつてしまつた生徒達。

そしてそれを優雅に眺める桃子と上村。

・・・だが、これでは終わらない。
ここで桃子は更なる追い討ちを・・・

桃子

「……………そういえばラルク君……川ちゃんにだけバイトの」と……話してたわね」

ピキー！

その声にほとんどのものが反応した。
さらに……

桃子

「……………確か、川ちゃんと一緒に翠屋に来たわね」

ピキー！っピキー！

J

「ホホオ〜」

O

「これはまた……」

B

「ラルク君……」

R

「河海さん……」

……周囲からものすごくドス黒いオーラが出ている。
そして……

上村

「しょうがないから………20分以内に二人を搜索と捕獲をし

てきてね。その後から“ゆっくり”決めましょう。」

一同

『了解！ノイエツサー！』

．．．．．クラス全員、教室から出て行った。

東誠

「と、いうわけで番外編1話終了な。」

萌子

「ほんと．．．でも、ラルク君たち、大丈夫かしら？」

桃子

「まあ、何とかなるでしょう。」

東誠

「かなり気軽に言うな．．．桃子さん．．．」

桃子

「うん？、そうかしら？」

（．．．絶対楽しんでる．．．）

藍川

「というか、まだ“理由”の部分で終わっているけど大丈夫なの？」

作者

「あつ、その点については、心配なく……ただ……」

一同

「……ただ？」

作者

「予定外に長くなりそうです。」

東誠

「……おい……てめえ、凍らせようか……」

作者

「まあまあ、次回はあなたを出す“予定”です。」

萌子

「予定？」

作者

「ええ、実は……」

一同

『？』

作者

「ご希望の展開、質問関係等を受け付けようと思ひまして……」

「

藍川

「期間は？」

作者

「そうですね……今忙しいので、展開については24日、質問については無期限で……」

東誠

「……大丈夫なのか」

作者

「ええ、何とか。」

萌子

「なら、いいですね。」

作者

「あと、」

桃子

「まだ何かあるの?」

作者

「いえ、この小説のキャラ紹介。東誠さん、ラルクさん以外まだしていませんでしたので……。」

東誠

「そういえば……そうだな。」

作者

「と、言うわけで番外編の間、可能な限り紹介していきます。」

「

萌子

「最初は誰なの？」

作者

「えええとですね・・・ここはやはり川さんから行こうと思います。」

「

藍川

「ということで川ちゃんの紹介」

河海^{かわみ}川^{りお}・・・右利き

年齢

過去・番外（1、2、3話）編：16（？）歳

始動の章：26歳

身長

過去・番外：167cm

始動の章：168cm

体重・B・・・

・・・グハ！

一同

「？」

攻撃が入るため伏せます。

川

「・・・よろしい」

う、では、

髪型：茶髪でセミロング、たまに小さめのポニーテールをするこ
とが多い。

瞳：水色

好きなもの：ケーキ、クッキー

嫌いなもの：G（タブーなため伏せます）、コーヒー

性格：いつも明るくラルクを気にかけている。

しかし、異様に気恥ずかしがりあでもある。

そして、ラルクの過去になにやら関係しているが今は不明。

補足：彼女の両親不明。今は祖母（現校長）が面倒を見ている。並
びに空手5段所持。付け加え、肩が非常によく、投球での命中精度
は極めて高い。現在もラルクたちと“軽く”腕組みをしている。

作者

「まあ、今はここが限界ですが……」

ラルク

「……なるほど……」

東誠

「あれ？、ラルクいたのか？」

ラルク

「ええ、紹介する前に……。」

川

「……で、次は？」

作者

「それは次回に持ち越します。」

ラルク

「では、次は誰なんですか？」

作者

「それも秘密です。」

藍川

「そろそろ時間よ。」

作者

「そうですね……では皆さん。」

一同

「また次回」

番外編：哀れな理由（後書き）

今回は、通知どお希望の方を少し待ってから投稿いたします。
ご要望とありましたらどうぞいつてきてください。質問をお待ちし
ています。
では。

第3話 聞き出すはず?の事情(前編)(前書き)

長らくお待たせしてすみません。

今回は本編の方を進めようと思います。

いじめが問題とされている今、この内容は……

では、始まります。

それから、前話予告の内容は少し後になりますのでご了承ください。
それと、銀髪でのラルクの名前をまた変えますのでこの件もご了承ください。

第3話 聞き出すはず?の事情(前編)

なのは

「ふえー」

辺りを見渡しなら“艦内”に驚いていた。

ユーノはなのはの肩に乗ってジットしている。

なのは

ねえ、ユーノ君、時空管理局って？

ユーノ

うん、管理局は次元世界の法と秩序の守護者って言うんだけど・・・
まあ、警備と裁判所とかがまとまった組織・・・といえはだいたい
いわかる？

なのは

・・・・・・うーん。だいたいかなあ？

などとのんきな会話をしているなのはとユーノ。
しかし、

クロノ

「へっくしゅん！」

一人、とても寒そうに震えている者を除いて・・・・・・。

なのは

「あの？、大丈夫・・・ですか？」

心配そうに見つめているなのは。

ユーノも少し不安そうにクロノを見ている。

クロノ

「ああ、もんだ・・・クシユン！・・・ない。」

顔が少し赤く、震えている。

とても大丈夫そうに見えない。

・・・本当？

というのが、なのはとユーノに浮かんだ。

まあ、無理もない。

“氷の檻に2時間以上”閉じ込められていたのだから。

それでも彼はやせ我慢し、

クロノ

「君も、元の姿に戻ったらどうか？」

クロノはなのはの肩に乗っているユーノに目を向けた。

ユーノもそれに気づき。

ユーノ

「ああ、そういうば、すっかりこの姿に定着していましたね。」

そう言うとユーノはなのはから降り、魔方陣を展開。

元の姿を現した。

流石にユーノ慌てて止めに入ろうとしたのだが、

.....チャキン!.....

ユーノ

「えっ？」

ユーノはいきなりバインドで拘束され、
そのままなのは止めようとした体勢で
止まった。

ちなみ拘束したのは

レイジングハート

「.....まあ、当然でしょう！では、お覚悟を
“元マスタ
ー”

.....レイジングハート
かなり楽しそうだ.....。

.....まずい！、流石にまずい！！

ユーノは頭の中で自分がどんなことになってしまっかを想像して
しまった。

そう、“泣きじゃくる子”が“遠慮なく”“容赦なく”“砲撃をか
ます”のを.....

ユーノ

「な、なのは！正気に戻って！」

まずい！まずい！、
速く止めないと僕の“死亡フラグ”が！

ユーノは慌ててクロノに視線を送るが、クロノは風邪を悪化させ
たか、
その場に倒れていた。

そ、そんな！

最後の希望が潰えたことを知るといやかな悪寒が走り、
その悪寒のする方面、

つまりは、“正面”を向くと……

- - - - -ゴオゴオゴオゴオゴオ！！！！！！！！！！- - - - -

あまりにも見たくないドス黒いオーラを放っているのはがいた。
その顔は“泣きじゃくっており”、
左手にはシューティングモードとなったレイジングハートを持っ
ていた。

なのは

「ユーノ君の……」

まずい！、まずい！

ユーノは慌ててバインドを解こうとするが何故か今日のなのはの
バインドは中々解けない。
それもその筈、

「ぎゃーーーー！！！！！！！！！！」

見事に命中！

打ち合えた後、ユーノはその場に気絶していた。

後余談ではあるが、艦内への影響はほとんど無かった。

これは放たれる直前に、意識が戻ったクロノが慌てて結界を張ったためである。

しかし、当の本人も砲撃を喰らったため、また気を失った。

ここは“資料室”。

“彼”が“ここ以外の資料室”に訪れ(？)6件目。

そして……

銀髪

(……やれやれ……中々“目当てのデータ”がないものだな。)

“……そうは言いますが、簡単に見つかれば意味がないと思いますよ。”

そこには、なのはたちのを止めた後、姿を消した……

銀髪の青年が居た。

彼は資料室で何かを探している。

パネルを操作しているが、“探してるデータ”が見つからない。

銀髪

“それにしても……”

(……どうした?)

彼は少し不機嫌ながら操作している。

そして、その理由を答える。

銀髪

「……………勝手なこと”し過ぎてませんか？“あなたは”」

（……………そう言う出ない。“私”にも事情というものがある……………）

「……………その“勝手な事情”で……………まあ、いいでしょう。どの道“私”も動くつもりでしたし。」

（……………？。珍しいな。）

などと会話（？）をしながらパネルを操作している。

彼が今まで見たのは、“過去の実験記録情報”。

今からおおよそ“2〜4年前のデータ”だ。

しかし、その部分のデータでは……………

いつも“空欄のデータ”がある。

“改ざん”されているか“消された”か、“どこかに転送”されているかのいずれかになるが……………

しかし、

銀髪

「……………少し“やり過ぎ”ましたかね？」

（……………何を今更……………）

彼はそう呟きながら“後ろ”を見た。

そこに居たのは“20人近く”の“警備委員及び研究員”の山であった。

……何故こうなった？

パネル操作しながら考える（？）。
が、……原因はとてもしっくりしかこなかった。

ここの資料室に“直接転移”した際。

P

「な、なんだね君は！」

この研究員達に“鉢合わせ”になってしまい、

銀髪

“「……」”

彼は、研究員達と目をあわせ、
一歩詰め寄った。

I

「け、警備員を呼べ！」

研究員達は慌てた。

あーだ、こーだと言っている。

しかし、銀髪は何も気にすることなく、
また詰め寄り、

(・・・眠れ)

仕方なく“鳩尾”や“手刀”により気絶させた。

しかし、“たまたま”そこに警備委員が来たため“同じように”
気絶させようとしたが、

A

「！」

咄嗟に防御結界し、防いだ。

それを見た彼は、防がれながらも一瞬で背後に回りこみ手刀で気絶させた。

しかし、警備員は彼一人ではなく、まだ居た。

彼らは被害のことは“お構いなし”に砲撃を放った。

銀髪

「……………」

“避けること”は問題なかったが、“後ろの研究員や資料”が消えるのは非常に困る。

仕方なく彼は防御と結界を展開。

それに構わず、

b

「撃てー！撃ち続ける！」

……………本当にこの施設大丈夫ですか？……………
安全基準満たしてない気がします……………

(・・・撃滅思考の者達の考えなんぞ理解せん方がよいぞ)

・・・まあ、確かに

そう思いながら彼は“左腕”から“銃”を出現させ、連射した。

警備員

『!』

そして、全弾命中・・・気絶した。

銀髪

“「・・・・・・・・Aランクなりに砲撃は中々ですが・・・・・・・・隙だらけです
ね・・・・・・・・」”

哀れみもなく、そのままデータの捜査に入った。

・・・・・・・・ん？、これは？

検索して彼は気になる“ファイル”を見つけた。

最深部にある“ロックされている”ファイルである。

(・・・・・・・・あやしいな・・・・・・・・)

ジト目になりながら、そのファイルと睨めっこしていた。

・・・・・・・・とりあえず、

銀髪

“「データごと全部もって行きますか……」”
(……そうだな)

そう言うと彼は、ロックされているファイルを“丸ごとコピー”し、資料室を後にした。

……そして、ふと思い出したことがあった。
後“2箇所”調べていなかったことに……。

ラルク

「はぁー、随分遅くなりましたね……。怒ってますかね……皆さん。」

……山道の階段を上りながらボツボツと呟くラルク。
時間はもう夕方。

ため息が耐えることがなく歩き続けている。

まあ、遅くなったのは自業自得ですが……。
連絡しなかったのは流石にまずいですね。

そう、ラルクが病院行ったのは午前中のこと、明らかに遅すぎである。

……川さんから愚痴られますね。
……ん？……あれは……

玄関口にたどり着いたラルクはそこに居た“二人”に目を向けた。

・・・誰？

“見かけない”二人である。
外見から言つと、“エメラルド色した長い髪の女性”と“黒髪の子
供”・・・。

・・・親子連れですか？
・・・とりあえず・・・。

ラルク

「あの？」

「あら？あなた、ここの家の人？」

ラルクに気づくと優雅に微笑んで答えた。

・・・随分おっとりした人ですね。
・・・隣のお子さん（？）は無愛想のようですが・・・。

ラルク

「はい。そうですが・・・。あなた方は？」

「・・・」

・・・ジャキ・・・

・・・はい？

いきなり“黒い杖(?)”を向けられた。

・・・何を考えているんですか？

ラルクは表情は変えず、内心呆れていた。
彼の目を疑うが、彼の目は真剣そのもの。

・・・ともあれ、このままにするのもいかないので・・・。

ラルク

「・・・あの、何をしていますか？。あなた？」

・・・とりあえず聞くことにした。

クロノ

「・・・時空管理局のクロノ・ハラオウンだ。君を拘束する。」

彼は淡々とトーンの低い声で言ってきた。

・・・時空管理局？。

・・・“何故ここに？”

クロノ

「抵抗しないでくれ。」

いきなり光の輪が表れラルクを拘束しようとするが、

ラルク

「！」

その時ラルクはそこに“居なかった”。

・・・！！、どこに行った？

クロノは慌てて周りを見ようとすが、

ラルク

「・・・いつたい何をしているんですか？、彼は？」

「あら？」

は驚きながら“自分の隣”に居るラルクを見た。
しかも、クロノの杖を“持っていた”のである。

クロノは慌てて手を見たが、杖は持っていないかった。

ラルク

「・・・」

ラルクは彼女にクロノの杖を渡した。

「・・・もう少し冷静な対応は取れないのですか？・・・ハア
！」。

「・・・さて、

ラルクはため息をつきながらも、すぐに切り替え、

クロノ

「き、君は今何をした!？」

あまりのことに混乱してしているクロノ。

・・・しかし、ラルクは淡々と、

ラルク

「ただ、“普通”に動いただけですが・・・なにか？」

クロノ

「ふ、普通に!？」

・・・なにをそんなに驚いているんですか？

内心そう言うが、それでは誰も答えられない。

クロノ

「ふざけないでくれ!、今のが“普通”に動けるわけないだろうが! ippitai “何の魔法”を使用した!」

クロノは、ラルクの周囲にステインガークレードを無数に展開。

ラルクは一瞬視線を右へ向け、隣の彼女を自分の行く反対の方向に肩を押すと、左前に跳んだ。

そして一斉にラルク目掛けて飛んできた。

ラルク

「“魔法?”、何ですか、それは？」

ステインガーが飛んでくるにもかかわらず、平然と答えているラルク。

しかし、何を言っているのか、全く分からない(?)。

ただ、表情を崩さず“最小限の動き”で避け続けているのは常人ではない。

正面に来たのは身体を横に傾き回避し、

左に来たステインガー（8本）を指の間に挟むことで受け止め、

別方向から来たステインガー目掛けて投げ、見事命中！

また、同じように指に挟んで、向かってきたステインガーを“裏拳”や“肘打ち”、“挟んでいるステインガー”で“叩き落している”。

以後それを繰り返しており、

とても、常人であるとはとてもいえない。

クロノもそれを見て流石に驚き！

クロノ

「とぼけないでほしい！今の動きにしても“普通”にできるわけないだろう！」

クロノはかなりイライラしている。

まあ、仕方がないことである。

実際、ありえない速度で避けているのだ。

先ほどの他に、脳天から来たのは半歩後ろに下がりのけるは！

後ろから来たのは後宙して回避するわ！

その状態のラルクを目掛けてさらに飛んでくるが！

・・・チラ・・・

ラルク

「……………」

一瞬周りを見たラルクは、“ものすごい速さで横に回転”！
向かってきたステインガーを“蹴り落とした”！。

クロノ

「……本当にしつこいな！」

クロノは追い討ちをかけるべく

ラルクが着地したと同時にステインガーを放つが、

……イライラし過ぎですよ。

ハアー。

これでは“クライドさん”も哀れですね。

ラルクは呆れながらため息と付くと、低い大勢で“後ろ向きの左足のみ”で着地。

それと同時に、身体を半回転し右足の回し蹴り。

クロノ

「な！」

クロノはラルクの身体能力に啞然！

ラルクは、蹴りが終わるとその低い大勢のまま踏み込んだ！

……なに！！

クロノは慌てて距離をとろうとするが間に合わない！

ラルクはそのままクロノの背後に回り合気道でねじ伏せた。

ラルク

「そこまで……ですね」

クロノ

「くう!!!」

合気道で地べたに這い蹲るクロノは、悔しそうな顔でラルクを見る。

ラルク

「鍛錬を重ねたら“これぐらい”できますよ。もっとも、時間はかなり掛かりますが。」

ラルクはそう言うがクロノは信じる気は全く無く、

クロノ

「いいかげ……」

本気で怒り、問い詰めようとするが、

「クロノ」

彼女の言葉に動きを止めた。

クロノ

「……ですが“艦長”！」

クロノは彼女視線を向けると、念話行った。

・・・それぐらいにしておきなさい。それに、気になって調べたけど、彼、全く“魔力を持っていない”わよ

クロノ

！、そ、そんなこと！

クロノは否定したかった。

あんな動きをする者が魔法を使わないとはありえないのだと。

しかし彼は知らない。

ラルクの普段、“どんな修羅道^{たんれん}”を積んでいるのか・・・。

そして彼女はクロノの意思を知ってか知らずか、

・・・それにいきなりデバイスを向けて魔法の使用、どう考えてもやりすぎよ。帰ったら始末書を提出するように・・・

クロノ

・・・くっ！

クロノはしぶしぶ了承した。

ラルク

「あの、」

「うん？、ああ、ごめんなさいね。あたしたちもこんなことをするために来たわけじゃないの」

ハァー、なら、いいですが・・・。

ラルクはジト目になりながら内心そう思った。
なん理由もなくこんなことになったのだからそれはそれで当然である。

ラルク

「それで、あなた方はここにどのような御用なんですか？」

今までの騒動が“どうでもいい”ような感じで、ラルクは彼女に聞いた。

リンディ

「そうね、あたし達は、ここに住んでいる人に用があつて来たのよ。そういえば、自己紹介がまだだったわね。あたしは『リンディ・ハラウン』、で、あなたが押さえつける子が……」

リンディは哀れみな目で“今も押さえつけられている子”を見ていた。

その視線の先に気づいたラルクは、

ラルク

「あ？、忘れてました。すみません。」

ラルクはそう言うと、押さえ続けていたクロノを開放した。

……？、ハラウン？……親子？、
……“ということ”……

ようやく開放されたクロノは悔しい目でラルクを見ながら

クロノ

「先ほども紹介したが、時空管理局の『クロノ・ハラウン』だ。」

ラルク

「……親子ですか?……」

ラルクはそう言うと、クロノは頷く。

そして、ラルクがクロノに対する印象として、

『日ごろ無愛想、強引性大凶』

と、記録された。

ラルク

「それで、家に御用なら上がってください。その様子ですと、少し長引きそうですし……。」

リンディ

「そうね、それじゃあ、お言葉に甘えましょうかね?」

リンディはそう言うとクロノに視線を送り、クロノは頷く。

「……はてさて、どうなるですかね?」

これから……

第3話 聞き出すはず?の事情(前編)(後書き)

はい、今回はここまでとします。

うーん、戦闘方法の表現というのは中々難しいものです。

次回からどうして行けばいいものか……。

投稿にはまたしばらく掛かると思いますが、これからもよろしくお願ひします。

それでは。

第3話 聞き出すはず?の事情(後篇)(前書き)

どうも、更新が遅れて申し訳ありません。

一部苦しんでいたことPC破損等いろいろと諸事情がありました、さて、あまり期待に越えられるかわかりませんが、中篇、始まります。

第3話 聞き出すはず？の事情（後篇）

「そんなことで納得するわけが無いだろう！」

「そうは言ってもそれが事実だ！。だいたいお前ら、人の言つこと信じるきねえだろう！」

ここは夜空。

なにやら口論が続いている。

一人は少年、一人は成年（？）。

たく！、いい加減にしてくれよな！

そう思いたくなるほどの後者のものはイラついていた。事の起こりは、彼らが来たことが始まりであった。

「……ただいま」

「ん？」

玄関から声が出たので部屋から出てきた川
そして、玄関を見るなり、

「……どこにいったの？」

「……」

その返答に表情は変えず、ただ黙り込むラルク。
川は冷たい視線をやめないまま……

「ねえ、ど・こ・に・行つてたの？」

追求を続ける。

そんな中ラルクは、一言

「こちらが聞きたいくらいなんですが……」

「え？」

突然何を言っているの？

と、川は思った。

しかしラルクは、淡々と……

「いえ、病院を出た後、公園にいたんですが、その後の記憶……

」
続けて言おうとしたが、

「そう……なら、“わかったよ”。“そういふこと”なら……」

「が……、え？」

突然、川が言ってきたので逆に戸惑うラルク、
しかし、その件は今後回しにした。

何故なら……

「そうですか・・・川さん、お客様がみえられてますが、あなたの知り合いですか？」

「え？」

ラルクがそう言うと、川はラルクの後ろに目を向け

「はじめまして」

笑顔でおっとりしたエメラルド色の髪をした女性と、

「・・・」

無愛想に不照れくさそうな少年がいた。

だが、なぜか彼は少しご機嫌斜めみたいだが・・・

そんな風に川は思うと、

「・・・ラルク君、この人たち誰？」

「・・・あなたの知り合いではないようですね・・・」

川の知り合いでもなかった。

そしてラルクはため息するしかなかった。

「え・・・と、リンディさんと、クロノさん？」

「ええ」

玄関の混乱が少々あったが、客間に移動し、とりあえず自己紹介をすることとなった。

まあ、当然のこと……

「あの……時空管理局って、なんですか？」

この質問から始まった。

「うーん、そうねえ、わかりやすく言うなら……」

リンディは非常に困っていた。

……本当に何も知らないのね……この子たち。

“ラルク”もそうだが、川も管理局の存在をまったく知らないのだ。

まあ、“普通”ならそのはず、

地球は“第97管理外世界”、

つまり、管理局の管轄外であり、魔法文化がまったくないのだ。

リンディはそのことに悩んでいた。

……となると、

「まあ、そうね、……一種の司法組織……みたいなもの
ね」

「はあ……」

さすがに誤魔化しが浮かばなかったのか、苦笑いになりながら答え、川は少しポカンとしていた。
隣にいたクロノはため息をついているが・・・川は無視した。

「……………」

ラルクは襖の出入り口に立ち、ただクロノとリンディを見ているだけであった。

今は夕食の支度中のためである。

そして、ラルクはちゃぶ台の近くに近寄りながら、一言

「……………それであなた方、もしかして“東誠さん”のお知り合いですか？」

「ん？」

クロノはその言葉を聴くと、眉を動かせ……

「知っているのか！あいつのこと！」

いきなりちゃぶ台にのしかかり、ラルクに近寄った。

……………躡がなってませんね……………あなたは……………

ラルクは無表情に彼を見つめ、

「うわー！」

「「え？」」

ラルクは近寄ってきたクロノを足払いし、首根っこを掴んで正座させた。

川とリンディは一瞬の出来事に脳の思考が止まっていた。

「……少しは礼儀というものを学んでください。」

ラルクの表情は読み取れないが、とてつもなく冷たい視線を放っていた。

「……はい」

そんなラルクに冷や汗をかきながらクロノは素直（強制的）に従った。

あまりの恐怖で……。

（……ねえ、川さん、彼って……）

リンディも彼が放つ冷たい威圧に寒気を覚え、川に投げかけた。その川も顔を引きつけながら

（……はい、いつものことですが……あの人、ああいった子には容赦がありませんから……）

それを聞くと、彼女たちは無意識に、襖の近くまで後退“していた”。

“していた”が……

「あなた方、どこに行くつもりですか？、特にリンディさん……」

ラルクの声が出た。

リンディと川はその声に足が止まった……。

「……………」

二人は戦慄した……。

聞こえた方向が“正面”ではない……………。

ま、まさ……………か……………。

二人は機械の動作のようにゆっくりと……
ぎこちなく、声のした方向を振り向いた……………。

そう、声が聞こえたのは……………。

「……………」

“自分たちの後ろ”だった。

「……………では、話の続きをしましょうか……………」

そして、地獄さいやくの時間の始まりだった。

……………助けて!!!!!!!!!!

ここに居る者たちはそう願っていた……………。
純粋に……………。

……………“今の彼”から逃げ出したい……………。

切なる願いで一心である。

「さて、リンディンさん、あなたはクロノさんにどのような教育をなさっているのか、“詳しく”聞かせてただきましようか？」

ここに、東誠に用があつてきたはずが、いつの間にか個人面談と化していた。

「えええと・・・それは・・・」

「聞けばクロノさんはまだ14歳と聞きます。その年の子は義務教育中であり、礼儀や常識と言つものを事細かに学んでいるはずですが、どうということなんですか？」

もうこの会話を2時間以上続けている。

ラルクが帰宅したのは夕方の5時、現在は午後7時47分。

そこにいた川も出たくても出れずにいた。

クロノはもう一度バインドを掛け、逃げに出ようとしたが、逆にラルクが背後に回り込まれ、

「・・・今はあなたのことでお話中なのですが・・・」

「・・・・・・・・バキ！バキ！・・・・・・・・」

「グワ！！！！！！！！」

そうしてクロノは、両肩の関節を外され、うずくまった。

しかも止めに、関節を外したにも課かわらずラルクは手を後ろで、足

を正座の状態で“袖に仕込んでいた”ワイヤーで縛りつけた。

「……さて、続きといきましょう」

ことが終わると、再び再開しようとしたが……

「……お前は何をしてるんだ？」

……シュバ！……撃！……

「うっ！」

……ボタン！……

ラルクは気絶し、そこにいた人物は……

「東誠さん？」

「おう、すまん、帰りが遅れて、で、なにがあつたんだ？」

この家の主、東誠であった。

「……なるほどな……」

東誠は、帰宅するなりの異様な光景に目もくれず、真つ先にラルクを気絶させた後、事情を聞いていた。

なお、目を覚ました当の本人たるラルクは、現在、夕食を通り越して、夜食に取り掛かっている。

まあ、自業自得であるが……

「……まあ……あいつは“あの程度”で“手加減”してるからな。“それぐらい”で済んだだけ、まだマシだと思うが、それに、いつもはああ簡単に気絶させれないだがなあ？」

……手加減していた!？」

川とリンディ、そしてクロノは東誠の言っていることを疑った。

「東誠さん、あ、あの程度でって……そ、そんな……」

川はラルクとの付き合いが長いいためか、そんなことは無いと言おうとしたが、

「……そういやあ、まだ“話して”なかったな……」

東誠は今更思い出したかのような口ぶりで言ってきた……。

「な、何をだ?……」

東誠の口ぶりにクロノが反応した。

もつとも、先ほどのラルクへの恐怖が残っているせいか、顔が真っ青である。

「いや、確か……ラルクが高校に入る前だったはずだが、」

「……あの、東誠さん、……それって……」

川は心当たりがあるようで、東誠に聞くが、

「……先に言つとくが、“商店街の件”以外もあるぞ……」

「えー？、と、東誠……さん、ま、まさか……そんな……」

川はラルクとの付き合いが長いせいか、東誠の言っていることに、

信じたくないと……

……顔をさらに真っ青にしながら、首を横に振りながら混乱していた。

クロノとリンディは、川のその反応と同様に、背中に悪寒が走るほどの感覚を覚えた。

今でも、トラウマになってもおかしくないが、さらにやばい過去があるというのか！

二人はそう思った。

「……いや、やっぱやめとく」

『え？』

東誠は説明しようとしたが、なぜか急にやめてしまった。

……何故？

「いやなあ、“今は”まだ話さないほうがいいだろうと思ったただけだ。特に理由らしい理由はねえよ。」

『はあ……』

なんとも、あつけない理由で話すのをやめた……

……そういつことか？……

「まあ、それは“どうでもいい”としてだ……」

『っ！』

急に東誠の目が変わった。

とてつもない威圧だ！。

……こ、今度は何が起きるんだ！？

客間にいる全員がそう考えてしまうほどだった。

「ああ、川、すまんが席をはずしてくれるか？、この二人と話がある。」

「は、はい！」

川はそれを聞くと一目散に客間から出た。

そのときの東誠はとてつもなく万遍な笑みでだった。

とてもではないが、あんな冷たすぎる笑顔な人と、居たくはなかった。

……あまりの恐怖で……。

リンディとクロノは引いていく川に全力で視線を送った。
行かないでくれ！」と

しかし、川が立ち去ると同時に、東誠が襖を閉めた。
退路は立たれた。

……さて、

『！』

いきなり客間の周囲が藍錆色にひかり、結界が展開された。
クロノはデバイスを構え、リンディは東誠を睨んでいる。

東誠はその行動に、ため息をつき、

「安心しろ、ただの防音結界だ。お前らもこの家のこと、わかった
ってんだろ」

「……」

その言葉に二人は肯く。

「なら、本題に入るか……で、何のようなんだ、お前ら？」

クロノとリンディは顔を見合わせ、

「君はいつたい何者なんだ？」

「……まず第一声がそれか？、まあいい。俺の名前は東誠 流寺。
今は高校の非常勤講師で……」

「……バン!!……」
「違う!」

そう言うと、クロノはちやぶ台を叩きつけ怒鳴る。

「……いつたいなんだ？」

「あたしたちが聞きたいことはそんなことではないの」

「……は?じゃあ、なんだ?」

あくまで何のことかと白を切る東誠。

「……普通に考えて、“話すわけ”ないだろう……」

「あなたのことは、なのはさんから大体のことは聞いているの。」

「……ほう……」

「……そういやあ、なのはあの時居たんだったなあ……
なるほど……そのあと、俺のこと話したのか……」

「あのとき、執務官を閉じ込めた魔法、あなたは“ベルカ式”の使い手のようだけど、そこはまず間違いない?」

その問いに東誠は静かに目を閉じ、肯く。

そして、クロノたちに視線を戻すと、

「……“なのはとユーノ”はどうしたんだ?。あの時まだあそこ
にいたと思うが……」

「……………」

クロノはそれを聞くと、なぜか顔が真っ青になり、

……………ガクガク、ガクガク……………

急に震えだした。

それを見た東誠は、少し疑問に抱き、

「？、おい、何かあったのか？」

「い、いや……………き、きみは……………きに……………気にしなくて……………いいんだ……………」

……………明らかに正気じゃねえな。

目の焦点あつてねえ……………。

東誠はクロノの様子を見ながらそう思つと、

……………ボタン！……………

……………倒れた。

「て、お、おい！」

いきなり倒れたクロノを持ち上げ、揺さぶるが反応なし……………。
そして、

……………ボタン……………

「東誠さん、ご飯の支度がすみま……」

エプロンをつけたラルクが襖を開け、見たものは……

「な、なにがあつたんですか？」

場の状況に唾然した。

ラルクはすぐに切り替え、クロノを隣の部屋へ運び寝かせた。そして、その間しばらく付きっ切りで看病していた。

一方の客間では、

「……で、いったい何があつたんだ？ “あの後？”」

クロノの状態に流石に目を疑ったか、リンディに事情を聞いていた。

リンディは苦笑いしながら……

「……そうね。あれは、クロノを檻から出した後のことなんだけどねえ……」

そうしてリンディは語りだした。

白き悪魔が目覚めかけた全容を……

クロノがギリギリで張った結界のおかげで艦内の被害は“一応”
最小限で留まったものの、

・・・・・・・・やり・・・・・・・・すぎた・・・。

正気に戻ったなのはは自分のやった残骸を見ながら冷や汗を流していた。

通路は外壁がはがれており、“四角い通路”が“丸く削られていた”。

さらには、人型に戻ったユーノと風邪が悪化したクロノは、奥の壁に“めり込んで”いた。

と、とりあえず、・・・・・・・・

『・・・・・・・・マスター』

「れ、レイジングハート・・・・ど、どうしよう!!???!?!???!」

なのはは今にもまた、錯乱しようとしていた。

そんな中、“確信犯”たるこれ（“レイジングハート”）は・・・・

『・・・・・・・・とりあえず、二人を引きずり出しましょう・・・・・・・・』

「う、うん」

あたかも冷静になのは指示していた。

なのはも、とりあえず二人を引きずり出すが、・・・・・・・・当然。

「「うーん」」

意識を失ったままうなされている。

「あ、あの・・・く、クロノくん？」

試しになのはクロノを揺さぶるが起きよつとせず、そのまま気絶している。

そんななのはを傍観しながら、“レイジングハート”は、“何かを思いついた”。

『マスター』

「ふえ？」

『私に考えがあります。ですから、マスターはそのまま、“彼を背中から支えて”ください』

そう、人で例えるなら、とても楽しそうな笑みであることに違いない。

しかし、それには誰も気づくことはできない。

「？、う、うん。」

なのははレイジングハートの言うとおりにクロノを支えた。だがそれは、決して“クロノやなのは”のためではなかった。

『ではマスター、そのまましばらく目を瞑っててください。』

「ふえ？、なんで？」

なのはレイジングハートの考えがわからなかった。

しかし、天然なのか、そのまま従ってしまった。

なのははレイジングハートの考えがよくわからない。

そういえば、さっきから音がぜんぜん聞こえないような……

『アハハハ』

- - - - - スドドドドドドド!!! - - - - -

- - -

「た、グハ！けて……なの……は……」

先ほどからレイジングハートがやっている行動……

それは、シューターをクロノの腹と顔面めがけて連射していたのだ！

“艦内に響く”クロノの悲鳴。

しかしそれは、“艦内に響いていない”。

何故なら……

《き、君は何を考えているだ！…… “高町なのは”！》

《アハハハ。さあ、何でしょう？。まあ、どの道、外部に“音は聞こえない”から大丈夫》

《え？……？。防音結界？》

《ハイ。それからきっちり、念話防止もしていますから、安心してください》

な！？

《え、エイミィ！、エイミィ！》

《・・・・・・・・》

《艦長！！》

《・・・・・・・・》

あわてて念話をするも、誰にも通じない。

・・・・・・・・つまり。

・・・・・・・・誰か！！！！！！！！！！

《・・・・・・・・アハハハハ、だから無理だと言ってているのに・・・・・・・・往生際が悪いよ、ク・ロ・ノ・ク・ン》

そう、クロノ周囲には防音結界が張られ、動けないままひたすらシューターの乱れ打ちにあっていた。

しかし、クロノは気づいていない。目の前で打ち続けているのが“なのは”でないことを・・・・・・・・。

それは・・・・・・・・

『楽しいですね。誰もが“思い込みでの滅多打ちを見る光景”は

』

・・・・・・・・レイジングハート。

そう、“なのは”は基本、幻術はできないが！、

それは悪魔で“なのはを限定する”だけであって、“デバイスである彼女”レイジングハートができないと誰も言っていない。

つまり、

『・・・確か、世の中このことを何と云うんでしたっけ？、そう、
っとのターン』

レイジングハート自身が“なのはの魔力”を使い、幻術と結界、
おまけにクロノの五体の拘束を行っていた。
非常にタチが悪い。

・・・尚もその可愛がり（イジメ）が続いてから30分後、たま
たま探しに出ていたリンディによって難を逃れたという・・・。

「・・・なるほどな。」

東誠は一通りの事情を聞くと、少しあきれたのか、ため息をつい
た。

・・・まさかデバイスがそんな性格だったとは・・・なのはは大
丈夫なのか？

（・・・問題ないと思うぞ、東誠。）

（ん？、“スペル”？、どうかしたか？）

（いや、・・・たいしたことではない。あのデバイスは主の前で
本性を出さない性格”でな。）

（やけに詳しいな？）

(フツ、まあ、気にするでない。それより、御主のほうは大丈夫なのか?、 “ やることがまだあるだろう?”)

(まあな。しかし・・・)

「あの?、東誠さん?」

リンディは少しぼーとしているのが気になったのか声をかけるが、

「ん?、ああ、すまない。で、その後は」

それを聞かれると、リンディは苦笑いのまま、

「ええ、しばらくして、ようやくクロノとユーノさんの意識が戻って、事業を聞いたときにあなたのことを聞いたの。その後、なのはさんとユーノさんは家に戻したわ。」

「なら、いいよ。で・・・」

「ええ。」

「・・・俺のこと聞いてどうするんだ?管理局の方?」

東誠は、自身にとって、聞くべき事を聞くことにした。

そう、このままでは居られなくなるから・・・。

「・・・・・・・・単刀直入に言うけど、あなた、管理局に来て・・・・・・・・」

「断る」

「え？」

「聞こえなかったか？、断ると言ってるんだ。」

「ど、どうして？」

リンディとしては、彼が管理局に来てほしいと願っていた。それほどの高い魔力指数に制御がすばらしかったために・・・しかし・・・

「なら聞くが、どうしてそっち側につかないといけないんだ？」

「・・・」

その問いにすぐに答えようとした。しかし、答えられない。

東誠は尚も続けて・・・

「確かに俺は“力”がある。お前らがのどから手が出るほどの力がない。だがなあ、“力を持つ”からといって、それが“管理局につかなければならない”という“義務や義理が”あるのか？。・・・違うだろう。」

「・・・」

確かに、東誠の言っていることは正論だ。それを決めるのは人それぞれだということ。

つまり東誠には管理局には着く気はサラサラ無いということである。

「…………でも…………」

「リンディさん……、そういうことを考える暇があるなら、先に他の事に目を向けたほうがいいぞ。」

「え？」

「…………子を重んじてこそ、親というもの。深く考えすぎると、あんだ、潰れるぞ。」

「……………」

たしかに…………そうね。

自分は今でも、あの子のことあまり見切れていないわね。

「東誠さん？」

「ん？、ラルク？、どうした？」

いきなり襖を開け、顔を出してきたラルク。

「いえ、買出しが必要なものがありませんので、これから言ってきます。“この子の散歩” ついでに」

ラルクは肩に乗せた“山猫”を見ながらそう言った。

「って、お前、もう8時過ぎてるんだぞ……………明日じゃ無理なのか？」

「……明日の朝食、どうなっても知りませんよ。」

「……わかった。気をつけるよ。」

「……流石に朝飯に影響が出るとなると仕方が無いか……」

「では」

ラルクは頭を下げ出かけていった。

「ほんと、さっきとは少し違うわね。彼。」

リンディはラルクの様子を見ながら何気なくつぶやいた。

そして東誠も、

「全くだ……普段からあれなら助かるんだがな……」

そして二人は夕食（夜食）を食べることにした。

ちなみに今日は、

オムライス

ポテトサラダ

などの一般家庭の洋食尽くしであった。

そして、リンディ、クロノ、川、東誠こと、相変わらずの美味すぎるラルクの料理に今日も（東誠・川）泣いていた……。

ラルクは少し走っていた。

肩に乗せた山猫、リニスを背負ったまま。

店に行くだけでも少し距離があるためである。

「……急がない」とまずいですね。「いろいろと」……

しかし、高町家付近に差し掛かったところで、急いでいたラルクに急変が……

「？、空が？、人の気配が無い？」

そう、ラルクは結界の中に閉じ込められてしまった。

第3話 聞き出すはず?の事情(後篇)(後書き)

次回、やや面倒ごとが起こりかねますが、よろしくお願いいたします。

また少し時間がかかりますがこれからも応援よろしくお願いします。

東誠

「次回、いろいろ秘密がでるかもな」

第4話 決意と目的（前篇）（前書き）

．．．．今回の遅れて申し訳ありません．．．。
さて、どこからが、始まりなのか．．．
そして．．．．それぞれの行動は．．
始まります

顎に手を当て考えこむが、わからない。
仕方なく、そのまま歩いた。

「ニヤァ？」

肩の上に乗っている山猫リスは何か頷いているが……

「……………」

気づいているのが気づいていないのか知らないが、ラルクはただ、歩いていた。

しかし、喫茶翠屋に立ち止まったところ。

……………バン！……………

「！」

……………瞬……………

急に狙撃されかけたが、咄嗟の判断で、後ろの後退した。

……………いつたいなんなんですか？
今度は？

ラルクは内心呆れており、射撃された方向に目を向けていた。

《チツ！、外したか！》

《他のところからも連射させろ！》

《了解》

「……………」

ラルクは先ほどの狙撃に構わず、建物の隙間に隠れることなく、平然と道のと真中に立っている。ただ、弾が当たった“筈”の地面を見ていた。

地面のほうは当たっている筈が、痕跡がなく、弾らしいもの削られた跡がない。そして、その着弾点に疑問を抱きつつも、それはすぐに“解決”した。

……………なるほど、あの子と同じ部類ですね……………

「さて、狙撃位置からして……………」

周囲を見渡しながら、スナイパーを探そうとするラルク。

……………しかし、

……………探す手間が省けましたか……………

……………バン！バンバン！！！！……………

またさらに弾の雨が降り注いできた！

しかも、さっきよりも多い！

……………はあ……………

内心ため息をつくラルク……

最初に来た弾を首を少し曲げて回避。

その後も、異常な反応速度で弾を“避けて”いる。

クロノのとき同様に叩き伏せたり、受け流したりもしているが……

それと同時にラルクは狙撃位置を調べていた。

《……シブトイ奴め》

……ドン！……

「ん？」

何か大きな音がしたため、音のした方向に目を向けると……

「……」

今度は砲撃が飛んできた！

しかし、……

……撃！……

……考えが甘いですよ……

ラルクは腰の入ったまわし蹴りを後ろに向けてかまし、砲撃の方向を変えた……。

《な！》

《ば、化け物かあいつは！》

襲撃グループは驚いていた。

彼の異常な行動に……

まさか砲撃を“蹴り”だけで防ぐなど……

「やれやれ……」

……“全方位”からくるとなると、少なからず……7、
8人は居ますね？……

……かわしながら目や音、気配を頼りに相手の位置取りを把握しつつ……

……時間がありませんから急ぎますよ……。

……ラルクは行動を開始した。

……瞬！……

《な、なに！》

突如ラルクがその場から消えた……

どっ、どこに！

狙撃した者たちはあわてて周囲を見るが、見つからず……

《やつはどこに行った！》

《わ、わか・・・ぐわ!》

《!、どっとうした!》

《・・・・・・・・》

混乱する狙撃の集団・・・・・・・・

連絡を取り合うが、ラルクは見つからなかった。

しばらくし、今度は仲間との連絡が途絶えた・・・・・・・・。
そして・・・

「き、貴様!どうやって!?!」

「・・・・・・・・さあ?なぜでしょう?・・・・・・・・とりあえず・・・・・・・・事情を聞かせてもらいましょうか?」

ラルクは、狙撃者の一人の“目の前”に居た・・・・・・・・

すうーすうー

《・・・・・・・・マスター・・・・・・・・》

「・・・・・・・・起きないよ・・・・・・・・こついつときのなのははぐっすりだから」

《・・・・・・・・もう一度あなたを痛めつけねば起きますかね?》

「・・・・・・・・本当に君は・・・・・・・・」

高町家もまた、結界の範囲内に入っていた。
当然、その場に居たなのも気づくはずだった。
しかし……………

「すうーすうー」

……………見事に寝ていた。
とても可愛らしい寝顔で……………

「……………かわいい……………」

なのはの寝顔を見て問題がずれ始めている……………
確かにかわいらしいのだが……………

《本当に痛めつけましょうか？……………“元”マスター？》

「……………君のその性格は……………いつたい何時から……………」

最近のレイジングハートの性格に思い悩んでいるユーノ。
自分と旅していた時は……………こんな性格ではなかった“はず”？。

まあ、それは置いておくでしょう……………

「……………レイジングハート、敵の総数はわかる？」

《……………ざっと15人というところですよ。》

「じゅ、じゅい、…？」

なんでそんなに!?

襲撃の来る人数を聞くと、さすがにユーノは絶句した!
なんでよりにも寄ってこんな人数!?

《……さて、どうしますか?》

「どうしますかって……. どうする?」

ユーノは混乱した。

古代遺跡の探索などをしている彼でも、いきなりの襲撃にこの人数は立ち会ったことがない。

襲撃のことですることも考えていない.
さて. どうする?

どうもこもない!

そしてユーノはある決断をした。

「レイジングハート!、敵は今どの辺りかわかる?」

《……何をやる気ですか?》

「……僕は戦闘は苦手だけど.」

《……この結果は通信妨害されています。転送も当然できません.
……》

「・・・わかってる。」

それでも！、「彼」が気づいてくれるなら・・・

「レイジングハート・・・今だけ、「昔」みたいに協力してくれる？」

《・・・。「今」のマスターは“彼女”です。私は彼女をベースに合わせていますので、「昔」みたいになるとは思わないほうが賢明ですよ・・・》

「わかってるよ・・・それでも・・・」

《・・・はい。あまり気が進みませんが・・・仕方ありませんね。》

「本当に性格が変わってるよね・・・君は・・・」

《何のことでしょうか？・・・私はこつという性格ですよ》

今回の仕方がない・・・

二人は、そのことは明白と言っていいほどわかっていた。

そして、互いに協力(?)を了承すると、ユーノは魔法陣を展開。元の人の姿に戻り、机の上のに開いてあるレイジングハートを手に取った。

さて・・・

「じゅめん・・・なのは」

ユーノは魔法陣を展開し、なのはの部屋に結界を形成。

とても複雑な表情で……
最後に悲しそうな笑顔を見て……
そのまま窓から出て行った。

さて……

高町家を出て少し離れたところに来たユーノ……
そう、なのはたちと初めて出会ったが場所……
そして、自身がジュエルシードと遭遇した場所……。

「ここなら……なのはは安全かな……」

《……ですか、もしマスターがターゲットならこれは仇となります。》

「……確かにね……だけど」

《……》

「可能性としたら……ジュエルシードの可能性のほうが高いと……
……僕は思う」

《……確かにそうですが……》

「……それに……もう……来ているみたいだしね……」

《……》

茂みの奥底から、上空から、何かが集まってくる……
覆面をかぶった集団、ざっと“8”人(?)
ユーノの囲むように転回している。

……つて? …… “8”人? ……
確か人数は ……

「目標……赤いペンダントのデバイスを確認……」

「……もう一人の栗色髪の少女は不明」

「現在デバイスを持っている少年は“削除”……“デバイス”
の確保の方を優先事項とする」

『……了解』

「な!?!」

《……やはりそうになりましたか……》

愕然とするユーノ……レイジンググハートはいたって冷静・

「ま、まずいよね……?」

《……確かに……あと“7人”はマスターの方に向かって
しまったようです……。》

「!」

ユーノはそれを聞くとあわてて飛び出そうとしたが……

……キン！……

「！」

突如にバンドが形成され、拘束されかけたが！

……これぐらいのこと！

ユーノは大きく後ろに跳び、かわした。
しかし、

『……………』

今度は、全周囲からスフィアが連射された。

《プロテクション！》

……くう！

ギリギリで防いだが、かなり苦しそうだ。

……なら！

「レイジングハート！」

ユーノは自身のフィールドを最大限に形成、
そして、

《ダイバイン・シューター・“ゼロ”》

そこには、なのはが使う基本魔法、ダイバイン・シューターを展開。

集団に向けて、錯乱させながら追撃をかけた。

しかし、この攻撃、普段と色や大きさが少し異なっている。色は緑色で、大きさはなのはが使用する大きさよりもやや小さめ……。

レイジングハートは基本、なのはをベースにして合わせている。しかし、“前”マスターであったユーノに関しては、大まかな魔法は使用していなかった模様……。

それにより、ユーノはなのはの魔法をベースに使用している。まあ、当然のことながら……。

「はぁーはぁー」

《……ずいぶんと息を切らしてますが……大丈夫ですか？》

「まあ、なんとか……」

表情が明らかに疲れているのだが、……本当に大丈夫か？

「……説得力がないな……小僧」

「……無様だな」

それを見ていた覆面たちは、馬鹿にしていた。

「……」

ユーノは少しばかりイラつく……
しかし、何も言い返さない……。
いや、返せないというのが正しいのだろう……。

彼自身も知らなかった……。
普段からなのはが、どれほどの魔力を使用していたのかを……。

そう、ユーノからしてみれば、魔力の消費は半端ではない。
現在のなのはの魔力はAAA、それをベースにしているのだから、
当然その消費量を比例してしまう。

……。それでも！

ユーノは飛行魔法を使用し、上空へ、

「……逃がすと思うか？」

当然、覆面たちも全員跳んで追いかけてくる。

「……」

そして、200メートルほど上昇したところで停止し、

「チェーンバインド！」

《ディバイン・シューター・ゼロ》

真下に一直線でチェーンを放ち、円を描くように、迂回しながら
シューターを追撃させた。

『!』

・・・だか、

「え!？」

覆面たちは旋回しながらかたまり、散開。
シューターやチェーンが当たる寸前でギリギリ回避している。

・・・なんて反応してんだ!

《・・・この連携パターン、かなり訓練されている模様です。》

「確かに・・・でも、管理局ってわけでもないようだし、ね!」

《シューター・レイン》

「う!？」

レイジングハートは独断で、シューターを40発を連射させた。
その分、ユーノへの負担はかなりかかるが・・・。

『・・・小癪な・・・』

-----ガチャ!-----

覆面たちはデバイスと取り出した。

「!、マシンガン型のデバイス!」

「わか……ぐわ!!!!!!」

ギリギリまで粘っていたユーノだが、限界が来たのかシールドが砕けた!

「!」

もはや声が出ないのか、そのままシューターの群れをもらに受けてしまった。

「うっ!」

そのまま飛行する力なく下へ墜落して行った……。

《エア―・シールド》

レイジングハートは墜落寸前にフィールドを展開。
ギリギリ直撃を免れた。

しかし……

「う、」

……もう、動けない……

ユーノは意識はあるものの、シューターを受けすぎたの体が動けないでいた。

「……中々だったがここまでのようだな……」

気づけば、覆面たちがユーノを取り囲んでいた。

「せめてもの情けか……ひと思いに殺してくれよう……」

そう言うと、ライフルをユーノの頭の上に向けた……無論、殺傷設定でだ。

「では、削除を開始する……」

銃口に魔力が集まり放たれようとしていた……。

『……ごめん、なのは……』

ユーノはなのはに別れを言うかのかのように謝った……。
そのとき、

「……走り立つ唸る波、波琉のごとく、先々にあるものを粉碎せよ……」

「なんだ！」

何者かの声が響き、一瞬ではあるが、動揺をした……。

「大寒波！……アクア・ボル・ボルテード！」

そして突如、大きな波が覆面たちの目の前に現れ、

「な、なに！」

「そんなバカな！これは！」

「う、うあああ！！！！！！！！！」

波にのまれて、遠くへ飛ばされた！
そして、そこにいたのは……

「なんとか間に合ったか……」

彼はあまり息を切らさず、一呼吸置く。
その彼を見て、ユーノは彼を知っていた……。

海鳴の海上でなのはとフェイトの激突する際に割って出た者……
“灰色髪のポニーテール”……“槍”を手にし……“武士道ぎみた”
彼のことを……

「き、きてくれました……か……」

「お！、“ユーノ”か？……人間の姿になっていたとな……ま
あ、今は休みな。あとは俺がやる。」

槍を回しながら、随分と大雑把ながらも、安心感を抱かせてくれ
る彼、

「はい……」

ユーノはそれを聞くと意識を失った。

《……あなたは……》

「言ったはずだ……話は後だと……」

《マスターの方に7名ほど向かっています。．．．急がないと．．．》

「なに?．．!」

．．．．．斬!．．．．．

いきなり砲撃が来たため、槍で切り裂く．．。

「貴様!、何者だ!」

「は?、俺か?．．．俺は東誠とうせい流寺りゅうじ、まあ、“手間がハブた”．．
．漸く“当たりが出た”ようだな．．．」

「なに?」

「さて．．．友人の知り合いをここまでしたんだ．．．」

．．．!!!

急に場の空気が変わった。

「覚悟はできてるな?」

．．．．．剛!．．．．．

始まった．．．彼の．．．の戦いが．．．

第4話 決意と目的（前篇）（後書き）

またいろいろ長引くと思いますが・・・よろしくお願いいたします。
気になることがありましたら、質問・感想等で待っています。
では。

第4話 決意と目的（後篇）（前書き）

どうも、長らく待たせいたしました。

今回は・・・いえ、なんでもありません。

しかし、忙しさ故のやりくりというのは大変難しいです。
では、つづきを。

第4話 決意と目的（後篇）

「き、きさまぁ……………」

「ふう……………」

ラルクは狙撃者の一人の目の前にいた……
何故か山猫リスは抱えたままで……
普通は建物のそばに隠れさせるはず……

…………私を抱えたまま無傷？…………ラルク、あなたはいつたい？

しかしその疑問に誰も答える者はない……

元々、今の彼女は思っただけであり、言葉を発していないからだ。

だが、問題はそこではない。

それは…………

「いったい何が目的なのですか？、あなた方は？」

「それを答えるとも思っているのか！？、だいたい！？、どうやって“ここ”に来た！」

「…………ただ“ふつう”に動いてきた“だけ”ですよ？」

「なっ！？」

そんなバカな！？というのが彼の頭の中に浮かんだ……
それもそのはず……

「で？、私が“ここ”にいたら、何かおかしいですか？」

なんでそんな反応をするのかいまいち理解できない。

しかし、それはあくまで“ラルク”での視点である。

そう、他の者からすれば……

「どこをどうしたらこの“ビルの屋上”に“一瞬”で来れるのだ！
？、大体！、貴様は何者だ！」

あの時、

……まずはあそこですね……

ラルクは“一番遠くにいた”狙撃者を見つけた後、そいつが居た場所に向かって移動した。

しかし、普通に考えてあり得ないのだ！

ラルクが見つけた襲撃者の場所は少なく見ても、おおよそ“30
0メートル”は離れている。

いったいどうやって移動したのか？

「答える必要はありません」

……ラルクは淡々と告げる一方で、襲撃を見ていた。

「貴様アあ！！！」

……ガチャ！……ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！……

.....瞬！.....

叫びとともにもうひとつ持っていた“サブマシン型デバイス”で
乱射したが、

「な、なに！？」

その時にはラルクは既にいなかった。
だが、

.....シューン！.....シューン！.....シューン！.....シューン！.....

「！」

自分の周りで何か音がする！.....

周りを見る！

しかし！

「ど、どこだ？」

.....誰もいない.....

彼はうろたえる.....

何も見えない.....

先ほどまでいた標的がいなくなったから.....
しかし、音は止まない.....

しかし、先ほどと様子が違う……
目つきが悪く……細めている……
そして何よりも……

“怒っている”……

普段表情すら出さない彼が表情を露わにしている……

「！」

……ガチャ！……

彼は反射的にマシンガンを構える……
しかし、トリガーを引こうとしたが……

……遅えよ……

……撃！……ドオン！……

先にラルクの右ストレートが炸裂した！
そして、それを顔面にもろに食らった彼は“隣のビルの壁まで吹っ
飛びめり込んだ”。

「うわぁーあ」

ラルクは後ろ髪を掻きながらアクビ……

後には静けさが残った……。

ラルクはふと思い出し、

「そういえば、理由は言っていなかったな……」

ただ、壁にめり込んだ彼を見ながら……ため息……
そして、

「……“てめらの存在だよ”」

ラルクは告げ、周りを見た。

「あと……6人が……さてと……」

首の後ろをつかみながら少しばかりめんどくさそうに言った。

そして、いつの間にか肩の上に乗っている山猫^{リス}。

ラルクは山猫^{リス}の方を見ながら……

「あ、リス。もうしばらく隠れれてくれないか？。なるべくすぐ
済みます。」

「にゃー？」

「ああ、それから、“今の俺”のときは普通に話しても問題ないよ。
……概ねのことは“聞いてた”から」

「えっ？」

つい声が出てしまったりリス。

しかし、ラルクはそれに構わずリスを下ろすと、

「さてと……じゃあ、行ってくるか……」

..... シュン！.....

「.....ラルク、あなたはいつたい？.....」

リニスは飛び去るラルクをただ見つめながら言った.....。

「R1はどうした!？」

「.....反応ありません」

「な!」

戸惑う襲撃者。

仲間との連絡が途絶えて“5分”が経過

これは何かと思い、6人のうち4人が一か所に集まっている。

しかし、R1と一向につながる様子はない

そして.....

「標的の反応は？」

「.....それも不明です」

「.....」

さて.....どうする?.....

一番遠く離れたR1の反応なし

なおかつ、標的を見失い……
対処の施しようがない……。

となると……。

「サンプル目標の方はどうなっている？」

「……現在、二班に分かれている……このことです。」

「となると、我々もそちらの方に向かうぞ」

『……了解』

目標となっているのは&レイジングハート（サンプル）の方に
向かおうと移動を開始しようとしたが……
しかし、

「ほう……これはまた、随分と物騒なことを話しているな……
・あなた方」

『……！』

突如響き渡る声……。

これは……。

「……なるほど……“俺が出てきた”のはこれが理由のよう
だな。」

一同は声のする方向を向く……。

そして、

「さてあなた方、詳しい事情を聞かせてもらいましょつか？」

“不適切に笑うラルク”がいた。

- - - - - ガチャ！ - - - - -

ん？・・・。またか・・・

「貴様、何者だ！」

「R1は貴様がやったのか？」

先ほどのR1と同じようにサブマシンが他のデバイスを構える襲撃者達。

・・・芸がないですね・・・

そんな事を思いながらため息をつくラルク。

「・・・それを聞く必要はないと・・・俺としては判断するが・・・

「・

』・・・』

それはつまり、

答えはYesということ。

だが、

「……………どうやって……………」

「それを答える義務はない……………ましてや、」

『……………』

「あなた方のような、“命の尊さ”を考えない連中は特にね……………」

「!?!」

「なんだと!?!」

「待てK2!」

いきなり飛び出て行くこうとする者を止める者。

彼はじっとラルクを見つめながら、

「……………どういふことかお聞かせ願いたい」

「……………言葉通り、としか回答しようがない。それから、」

「?」

「残りの二人はもう“片づけた”からそのつもりで」

『!?!』

いきなりの言葉に混乱する一同。

「おい！T3、S3！」

《…………》

「連絡するだけ無駄だと思うが？」

「連絡を取るがっながらず、ラルクからは馬鹿にされているよう
言…………。」

「貴様あ…………！」

…………ドオン…………

…………意味無いのですがね…………

砲撃をかましたが、

…………撃…………ドオン…………

「グハ！」

「…………！」

ラルクはその砲撃を蹴りだけで打ち返し、打った奴に見事に命中
した。

そしてラルクはため息をつきながら、

「…………同じことを繰り返しても意味がない…………違うか？」

かなり呆れていた。

襲撃者側は焦る。

こっぴなったら！

.....ゴクン！.....

「ん？」

襲撃者たちは何かを飲み込んだ。

ラルクは表情を険しくした。

・・・あれは、確か・・・

「まさか貴様如きになんなものまで使うとはな」

「こっぴなっだからには・・・」

「君には死んでいただく」

「！」

襲撃者の身体がみるみる“変化”していく。

ある者はキメラ型へ、

ある者は獣（？）系

またある者は鳥獣系へ・・・

これはまるで・・・

「合成生物？・・・って、ことは、あなた方“も”！」

「グワアアア!!!!!!!!!!!!!!」

いきなり獣と化したK2は口から巨大な砲撃を放った!

「!」

.....シユン!.....
.....ドオン!.....

ラルクは咄嗟の判断で後ろへ高く飛んだ。
そして先ほどまで自分にいたところを見ると、

「.....」

大きな穴が開いていた.....

おいおい.....完全にイカレテますか?

“自分もそうだが”、こいつらはかなり危ない。
もし意識が飛んでいたとすれば.....

「ググググ.....」

うめき声が聞こえる.....

「完全に意識が飛んでいるか.....あなた方.....」

災厄な事態はさけない.....

ため息をつきながら、彼らを哀れみながら……

「……これもまた“現実”か。……“あいつ”がこれを見たらどんな風に思うだろうな、ほんと。ヘイムダル！」

『……いいのか？、（……………）』

「仕方がない……“あいつ”には後の説明頼む！。多分この後はまた、“戻る”と思うからな！」

何か悔やんでいる。

しかし、それは彼自身にわからない。

ヘイムダルと呼ばれし者はそれを理解してた。

ずっと“彼の中”に居ただから。

『……………いいだろう』

「すまない……………」

「ググググ！！！！！」

……………撃！撃！撃！撃！……………ゴウ！……………

本当に“自分も無くした”か……………“あんなもの”に頼るか
らこうなるんだよ……………

ラルクは瞬時、彼らの攻撃をかわし続ける。

しかし、

今の攻撃で30メートルは吹っ飛んだG2。

「グアアア!!!!!!」

そいつは非常に“苦しんでる”。
よく見ると・・・

「あれはなんですか、ラルク？」

ラルクの拳撃の跡を見ると、“？”の刻印が刻まれている。
これは・・・

「“俺達”の力は“残酷かつ、すべての天敵たる力”なんだよ・・・
だから俺たちは“救う”ことができない・・・それだけですよ。」

・・・あと“3回”か・・・

「だから・・・ヘイルダル！」

『・・・ああ。では、行くぞ』

「たるの」

それを言うとラルクの足元に金色の魔法陣が展開。
“銀髪の青年の姿”と化し、右手に剣を持っていた。

「貴方は？　いったい何を？　貴方の目的はいったい？」

《・・・我のことは今は話せん・・・しかし、》

・・・大寒波のとき被害考えずに使ったからな。

東誠はその者達に目もくれず、槍を下から上へ降ると

「獅龍一閃」

- - - 斬! - - -

巨大な氷河の塊が矢のごとく、一直線に襲ってきた。

しかもその塊、電撃を帯びており、尚かつ

「なに!」

でかい。

「ぐわあああ!!!!!!!」

その一撃はすさまじく、彼らの射撃は一瞬に消滅しそのまま彼らを飲み込んだ。

ある者は、氷の中に閉じ込められている。

またある者は砕けた氷河から落ち、その場に墜落し倒れている。

その後、それを見ながら地上に降りた東誠は一言。

「・・・いくらなんでも、齒ごたえ無さ過ぎだぞ?。ほんとにアラシクかこいつら?」

哀れみではなく、拍子抜けのようなセリフだった。

《・・・あなたの方が危険が気がしますね・・・》

それを見ていたレイジングハートは、人のことが言えるかとはばかり、ツッコミを入れた。

「……うるせえよ。つーかお前の場合、ユーノに合わせた魔力配分にしとけよ。どう考えても負担掛かり過ぎだぞ。あれは？」

それに反応し、東誠も聞き返した。
しかし、そこで疑問が、

《……ということはあなたは、あの戦いを“観ていた”のですね？》

「……否定はしねえな」

そう、実を言うと東誠、ユーノが撃沈されるところからは近くで観ていたのだ。

それを観ていながら参戦なし……つまり、

《……目立ちたがりですか？》

「そこは断じて否定する」

《では何故です？》

「……あいつの“覚悟”が見たかったからな。」

《……》

「誰かのために“何をしたいか、何をすべきか”、そこは人それぞれ

れだが、己自身がそれを背負えるだけの“覚悟”がないと話にならないからな。“中途半端は真つ先に死ぬ”。それが“現実”だ。」

《……それを言うということは、“マスター”の判定は?》

「……期待を込めて60つてとこか?」

《……厳しい方ですね》

「それでもねえよ。己の力量を計り違えては無いと思し、それに、己の新根を貫こうとした行動は見事というものだ。まあ、最後のその別れた感情は以ての外だが……あ?。」

《どうし……》

……ドオン! ……

……斬! ……

いきなりシューターが放たれ、東誠は槍でそれを切り裂いた。

「チツ!、まだ意識あつたんか!」

シューターを放つたのは先ほどの襲撃者の一人。かろうじて意識が何とか持っていたのだろう。

「貴様だけは許さん!」

彼は懐からある珠を取り出すと……

「流石に“それを使われると困るな”……境界断層」

リキッド・サルベージ

「！」

東誠がそう唱えると瞬く間に彼が手にしていた珠が液状となり、東誠のもとへ向かった。

東誠は今度は自分が手を出し、先ほどの液状が今度は先ほどの球に戻り、手の上に……

「き、貴様！、それを……」

……撃！……

「うっ！」

「返すわけねえだろ……お前らには聞きたいことが山ほどあるから……」

東誠は鳩尾をかまし、その場に気絶させた。

そして、彼の頭に手を乗せると……

「……なるほど、これはありがたい“情報”だな。」

《今何を？》

「ん？、ああ、ただ“記憶を覗いた”だけだ。」

《……何故そんなことを……》

「俺にも“事情”があるんでな。今回の件、漸く“ ”と貴

重な“ ”が得られたよ。」

そこまでいってくると流石に疑いたくなる。

《……あなたはいつたい?》

レイジングハートは、疑問の声を東誠に投げた。

「只の、この世界の非常勤教師だ。、もつとも、」

《?》

「今は、“人探し”と“裏をあぶり出す”ことで動いているがな」

真和

「さーで、このコーナも久しぶり復活やー!」

幸恵

「ホンマですなあ〜」

萌子

「できれば遠慮したのに……」

藍川

「本当よ……」

川

「で?、今回は何をするんですか?」

リリース

「確か……東誠の件ですね」

真和

「あれ？、だれやあ？」

東誠

「リリースだ。今はうちで飼っている山猫かつ、」

ヘイムダル（銀髪青年版）

《プレシア・テストアロッサの使い魔だ。》

幸恵

「あら？あんさんも見いひん顔やなあ」

ヘイムダル

《……そこは触れなくていい》

真和

「でもあんさん、いい男前やなあ。一回……」

……ドオン！……

一同

『？』

音のした方向を振り向くと、

一同

『・・・・』

壁に穴が開いていた……。

ヘイムダル

《何か言ったか？よく聞こえなかったのだが……》

東誠

「なんでもない……それで、俺の件とあったがいったい何だ？」

リニス

「あ、そうでしたね！。あなたの使ったあの技はいつたい？」

東誠

「それはどっちの方だ？」

萌子

「とりあえず、後者かな？」

東誠

「境界断層か……平たく言えば、物質変化だ。」

一同

『？』

東誠

「つまりは、固体を液体・液状や気体に変化させたり、戻したりする力だ。まあ、生身の生物にやったら、“コーティング”しないとまず“死ぬ”な。」

一同
『!』

藍川
「間違っても使わないでね？」

東誠
「ああ、まあ、魔力にも有効だからな。魔法のときは使うかもしれんが……」

川
「では最後に……東誠さん、ヘイルダムさん。あなた達の目的は？」

リニス
「よく意味がわからないのですが……」

ヘイルダル
《……言葉通りだ。それ以上は何も言えん》

東誠
「こちらと同じ返答だ」

幸恵
「いや、せやから、」

東誠
「これ以上は何も言わんぞ。それとも、今度は窒息死がいいか？」

一同

『結構です!』

ヘイルダル

《・・・ここで伝心だ。次回は番外編を再開するかもしれん。またしばらく待つといい。》

東誠

「またかよ・・・」

藍川

「また、あの惨劇が?」

川

「多分・・・」

東・藍・川

『はぁーーーーー』

ヘイルダル

《・・・それから、気になること質問してきても構わない。答えられる範囲なら教えよう。》

萌子

「感想の方も待っています。」

ラルク

「では、また次回」

一同

『あ!?!?』

第4話 決意と目的（後篇）（後書き）

今回はラルク・東誠編で通しました。

そして、人格が変わったラルク。彼がいったい何をしでかすのか？

次回、通知通り、番外編に移るかもしれませんがこれからもよろしく願います。

では。

第5話 変貌と集い（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

今回はネタが早く思いついたのさっそく投稿します。

ですが、申し訳ありません。番外編はいましばらく時間がかかりますので。

では、さっそ。

第5話 変貌と集い

「あなたはいつたい・・・」

「君はなんのために動いている!？」

戦闘は空へと移動

「フォトンランサー!、サンダー・スマッシュャー!」

リニスは、自分を取り囲むようにランサーを連射、それを囷にしながら一瞬動きが止まった所に砲撃を放つ。

しかし、

・ドオン!・

「・・・」

G2は翼で風を引き起こし、ランサーを吹き飛ばす。さらに上へ上昇し砲撃を交わす。

そしてその速度を殺すことなく、リニス目掛けて急接近。

・・・!!

リニスは少し表情を拒めながら、ランサーを連射。

「ガアアア！」

だがG2の反応は素早い。
本能的と言えばいいのか、反射的なのか、見事に避けている。

リニスは慌てる様子もなく、不適に笑い、
腕がギリギリ触れるか触れないかの瀬戸際のところで

「・・・かかりましたね？」

・・・パリン！

シールドを展開。

しかし、いくらリニスといえどあの突撃を防ぎきれないはず・・・

だがそのシールドが“受け止める”のが目的でないとしたら、

・・・！

G2のがズルリと滑るかのように左に傾いた。

この気を逃がさず、リニスは、

「サンダー！・レイジ！」

大技を出し、見事に直撃！

G2は一気に地上へ墜落した。

・・・斬！・・・

・・・ザク！・・・

剣で墜落してきたG2と、己が戦闘をしているキメラ化したK8を斬り狩るラルク。

あまりにも、残酷で、哀れみの表情をしながら・・・

「・・・・・・・・」

その視線は外さない。

ただ、見つめるだけ・・・

「剣よ、その身に雷を宿せ・・・」

その瞬間、ラルクの“右腕”に持っていた剣が激しく電撃を帯び、墜落してきたG2は真つ先に翼と両腕を切断。

「グワワ!!!!!!!!!!」

激痛のせいで激しく暴れまわる。

それと同時に、体中煙が上がっている。

電撃も強く浴びたせいで、体中の水分の大半が一気に蒸発！
普通ならそれで即死のはず、

・・・溺れるなっってわかってたはずだ・・・
なんで・・・

さらにラルクは電撃を解除せず、K8に瞬速接近！

- - 閃! - - - -

その腕を左手でつかみ、そのまま、

「バキ！――

腕を握りつぶした。

「！！！！！！」

K8は声が上がらない悲鳴を上げ、

「……………“ここ”ですね……………」

「……………ズド！……………」

剣を手から離し、右手を手刀の勢いで、右の肝臓の箇所を貫いた。

「！！」

そのまま、“何かを掴み取り”、腕を引き戻すと

「……………」

取り出した野球ボールほど珠と一瞬見て、

「……………ごめんな」

「……………バキ！……………」

握り潰した。

そのまま、獣化したK2に接近し、同じように貫き、珠を握り潰した。
変貌を遂げた二人は元の姿に戻ったが、傷や怪我の状態はそのままだった。

そして、周りには静けさがおとづれた……。

「ラルク」……」

「……」

リニスはラルクの背後に現れ、只一言を告げた。
ラルクは只、振り向かず背中を受けたまま、

「あなたは本当に何者なんですか？」

《……リニスよ、》

突如、ヘイムダルが割り込んできた。

「……ヘイムダルですね、でも、今私が話しているのは“今日の前にいるラルク”です。用件は後に……」

《……そうではない》

急に空気が重くなってきた。

何か、大きな威圧が場を制圧しているかのように……

《……あ奴のことは……》

「いいよ、別に。」

さらにラルクが止めに入ってきた。

「……確かに、俺は“あいつ”とは雰囲気も、性格も違つ」とはわかるよ。だが、」

「……」

「俺も、“あいつ”であることは変わりないですよ。」

「でも、それでは、」

「今は知らなくていいよ。この件があらかた片付いたら、“あなたには”大方のことは話しましょう。ただし、誰にも話さないという条件でね。」

「……わかりました。」

まだ納得がいかないが、今のラルクを見て深追いしても何もならない。

そう判断したりニスはその提案を了承した。

「ではせめて、“あなた”と“ラルク”が一緒の名だと私は困ります。違う名前を考えてもらえますか？」

「……面倒事を増やしますね、あなたは」

ラルクは左手で後ろ髪をかきながら、めんどくさそうに言った。

「しかしまあ、確かに一理ありますか……」

少し考え、言おうとしたが、

「グウー！」

……ドオン！……

『？』

何かが飛んでくる音がしたため、音のした方向を見るラルクとリニス。

「やっぱり、“あのまま”だところなですか……」

そこに居たのは、先ほど墜落し、ラルクに腕を切り裂かれたG2だった。

G2は切り裂かれ、腕が残っている部分を伸ばすと、

……ズバ！……

「！」

「……“やっぱり”か……」

切り裂いた腕が再生した。

ラルクは平然としているが、リニスは驚きを隠せない。

しかも、

「前よりも腕の形が“変わって”いますね」

「……ああ」

「グググ!!!」

そう、腕は以前の鳥獣の手に加え、

「爪や腕の刃伸びてますね……」

リリスの言うとおり、爪や刃が伸びている。

しかし、伸びているだけでなく腕の刃の数も増えている。

これはいつたい？

「ごめんなさい川さん、夕食までいただいて、」

「いえ、作ったのはラルク君ですし、」

東誠の家の方では、川とリンディが談話していた。本当はすぐに帰るはずだったのが、“予定外”のことが多く起こったためである。
ちなみに……

「クロノさんは？」

「うん、またあの子、寝てるわ。」

「いろいろありましたからね・・・」

互いに苦笑いとなりながら、あの記憶が蘇ってくる。彼女たちは何か別の話題へと模索していると、

「あら？」

客間の庵の中に埋もれている雑誌を発見。気になってその雑誌を取り出すと・・・

リンディは優雅に微笑み、

「ねえ、川さん、この人って？」

「？」

気になってリンディにつられて雑誌に目を向ける川。川も少し微笑みながら、

「確かに、ラルク君ですね」

そう、そこに載っていたのは、間違いなくラルク。ただし、問題は、

「彼の服装、結構豊富ね」

「・・・はい。」

リンディの言うとおり、確かにその雑誌には、様々な種類の服装をしているラルクの姿が。

って、これは確か・・・

「これって、あの雑誌？・・・」

川はふと思い出しように言い出し

「あの雑誌？」

「はい、昔の、ファッション雑誌です。」

そう、その雑誌はまだラルクが“ここ”に来たばかりに撮った物。当時はよく撮られ、よくネタにされ、よくその相手を全治数カ月状態にして・・・

「この写真を見る限りだと、彼も“昔”はよく笑っていたのかしら？」

この写真にはラルクはよく笑っている。しかし、

「ううん、その写真のラルク君は“作り笑顔”で素直に笑ったことは一度もないんです。」

「そうなの？」

確かに、彼と会ったときはそのような素振りさえ見せなかった。もっとも、自分らがそうさせなかったかもしれないが、

「ラルク君・・・」

川はそんなこと考えながらも、写真に写っているラルクが気になつて仕方がない。

その写真には、パーカーにシャツだったり、ジーンズや、革ジャンを決めている姿や、犬と戯れている姿、そして何故か、オールバックして燕尾服……

「これ、とても似合ってるわね」

「はい。」

これは素直に同意。

あまりにも似合いすぎる。

翠屋の服装もしている（店名表示）が、これは宣伝か？

「この雑誌、どうしてここに？」

リンディはふと疑問をあげ、川に聞いた。

しかし、川は首を振り、わからないと答える。

そんな中、

『艦長……』

『ん？エイミィ？、どうしたの？』

『いえ、先ほどから張ってある結界についてなんですけど、』

そう、彼らも、結界のことには気づいていた。

しかし、東誠が行くと言い出し、そのまま保留していたのだ。

まさか、何かあったのか？

『何かあった？』

『結界内の建物が大半にわたり崩壊！、それに、』

『それに？』

『Sランク相当の魔導師が確認されただけで4、いや5人確認されています！』

『！』

『艦長！、僕が行きます！』

『クロノ？大丈夫なの？』

『はい、何とか』

『わかったわ、エイミー！、私と執務官が向かいます。あとは現宙域で待機のまま警戒を続けて！』

『了解！』

さて、

「川さん」

「はい？」

一瞬空気が重くなった気がしたが川だが、すぐに戻ったので気のせいだと思い、そのまま聞くことにした。そんな川にリンディは優雅に微笑み、

「そろそろ、失礼させていただきますね。」

「あ、でも、クロノ君は？」

- パタ! -

「僕はもう大丈夫です。」

そこには、まだ少しぐったりしているクロノがいた。とても大丈夫そうに見えないが、さっきの行動からして根を曲げないだろうと判断し

「わかりました。あまり無理なさらないでくださいね」

苦笑いをしながら答えた。

二人は丁寧に挨拶を済まし、東誠の家を後にすると、結界の場所に向かい、

『エイミィ、今の向こうの状況は?』

『今のところ・・・あ!』

『ど、どうした!』

『なのはちゃんのところなさっきのSランク並の魔導師が一名、他にも複数の魔導師が向かっています。』

『なんですって!?!、エイミィ、すぐに転送して!』

『了解!』

「ラルク、これはいつたい?」

「ヘイムダル……」

リニスの疑問を無視して、戦闘へ切り替えたラルク。

《ああ……》

「《……来てれ、守護たる盾》」

詠唱を唱えると、“左腕”から金の盾が出現。

12のビットが装備され、盾のはずなのに、実体剣がついている。

それを見たリニスは……

「ラルク、あなたは“ガンオタ”ですか?」

リニスはとても視線が冷たいを向けていた。

せつかくの雰囲気を台無しにしたからである。

その視線は痛々しく、サッサと吐けと言っている。

ラルクはその視線を外し、ため息をついた。

「スファイア一発」でこの威力か……」

あの時、盾で防いだのは“自分たちの背丈以上の大きさの砲撃”。
意識せずに防いだため、スファイアサイズを一発ほど流れ出てしまっ
た。

だが、それだけでこの被害……

「どうすればいいのですか？」

「それは……」

――――コクツ――――

突如ラルクが意識を失ったかのように、少し倒れかけた。

「あの？、ラルク？」

「あれ？、ここは？」

「は？」

《……“時間切れ”か》

「え？、“時間切れ”ってどういう……」

「あの、なんで“私”は空に浮いていて、それに、これはいつたい
？」

ラルクの様子が先ほどと変わっていた。
“感情”を出さず、“無表情”……

これではまるで……

「あのラルク、あなたいつたどこまで覚えて……」

……ゴォ！……

「！」

背後にG2が現れて、

《貫け、雷の矢……》

ヘムダルがラルクの意味関係なく、ビットを展開。

《雷激の矢を放て……》

そのビットから射撃が連射された！
しかも、

「グアア！！！！」

命中した箇所の手足が消飛び、消滅した。

「ええと……？」

いまいち状況が飲み込めていないラルクは亜然している。
リニスもまた違う意味で同様に

「ヘイムダル？」

《何だ？》

「今のは？」

リニスはビットからの“射撃の威力”に疑問を抱いた。それに今は“殺傷設定”……

《気にするでない……今でも、“貴様らの言つところ”の多寡が“Bランクの砲撃”とあまり大差がないのでな……》

「な！」

リニスは亜然した。

多寡がBランクの砲撃って！、その威力を射撃で放てる、あなたの方が異常ですよ！

しかしヘイムダルはお構いなしに、

《しかし、“本来”の威力ならば、まだ“上がる”のだから……》

「……」

リニスはもう、頭を手に抑えながらうずくまった。

話の内容が飛びすぎたか、言っていることが理解できないのか……

「……」

ラルクは、そんなリニスを一瞬見た後、すぐさまG2の方に目を向け、

「守護する盾、撃ち抜く閃光を知らしめよ・・・」

盾の先端が銃口へと変化させ、砲撃を放った。

G2は上昇し、難なく“かわした”。

ラルクはG2の動きに目もくれず、

「・・・遅いですよ。」

「ガアア！！！！」

“かわした”はずの砲撃がG2の背中に命中！
「いったい？」

「砲撃というのは、集束・出力をコントロールして“直線に放つ”
だけと誰か言いましたか？」

その問いに誰も答えない。

答えられる者は今ここにいないから。

「・・・つまりは、砲撃を“コントロール”して、“追尾型”にした、それだけですよ。」

《・・・ラルク、お前、》

「どついうことか事情を話してもらえますか？、スナイパーとはち合わせた所までは覚えていますが、その後のことは全くなので・・・」

《……いや、今はあまり時間が、》

「それに、また“勝手”に“身体使う”のはやめてくれませんか？
“あなた”や“リニスさん”の件は、“その後”聞きましたが、勝
手にやっていますとまた“気づかれますよ”。」

《……わかっている》

それでも、こ奴は自分を……

「とりあえず、この姿になっている間は、“声”の方お願いします
よ。気づかれたくはないので。」

「あの？」

「ん？、なんですか？リニス“さん”？」

「……」

やはり、さきほどと違っている。

いや、元に戻ったというべきか……

「いえ、それより、これをどうするか……」

「ですね……。あ、後はお願いしますね。」

《構わぬ。》

「？」

《気にするな。こちらのことだ。さて、盾よ、》

今度は盾の先端から、一緒に装備されていた実体剣が出現。

「ガウウウ!!!」

《……お主には酷すぎる……》

- - 斬! - -

- - スパ! - -

一太刀を受け、上から真つ二つにされたG2。

そして、その中から珠が現れ、

- - ガシ! - -

珠を奪い取る。

それでもG2は“再生”し、いや、“再生し終えるのを”待ち、砕いた。

「グワワワ!!!」

そして、瞬く間にG2も元に姿に戻り、その場に倒れた。

『……』

《わかつている》

ヘイルダルが表に出ている状態で、そのままG2の頭に手を置く
と、

《……これは……》

『研究所よりも危ない情報ですね……』

二人(?)は何かを話してしているが、リニスには聞こえない。

「あの?、ヘイルダル?……ですよ? いったい何か……」

《……後で話す。行くぞ……》

「?、何処にです?」

突然言い出すヘイルダルに話がついていけないリニス。
しかし、そんなリニスにお構いなく、

《一人逃がしたのでな……確か、なのはという者に向かった
はずだ……》

『!、あの、いや、ヘイルダルさん、何故それを先に言わない
のですか?』

《……あの者、リニスには荷が重いと判断したのでな……》

「……それはどういうことですか?。」

背後にドス黒いオーラを放ち、引きつった笑いを見せるリニス。
ヘイルダルはそれを見ながら簡潔に、

《あの者たちは、“あの状態で”SS並の力を備えていた。もつとも、“我を失っていた”が、それでもお主には荷が重すぎる。まだやるべきことがあるのだろうか?》

「……………」

それを聞くと、リニスは沈黙し、何も言い返せなかった。

《…………我か、こ奴ことを気にかけているのなら、当面の問題は無い。己の進む先を進めばいい。》

そう言くと、ヘイムダルは飛び、高町家の方角へ向かった。

そんな中リニスは涙を流しながら、

「ええ、わかってます。わかっていますよ…………あなたに言われなくても、時間がないことぐらい。」

そして、涙を拭きとり、“ラルク”の後を追った。

第5話 変貌と集い（後書き）

次回の件についてはまだ不明で、また少し時間がかかるかと思いますが、楽しみにしてください。
では。

第6話 疑問と偽問（前書き）

どうも、……イクス・スタンスです。

すみませんでした！投稿がひと月近く経過してしまっ。……考
えること、鬱気味になり開けていたので中々ネタが思いつきませ
ん
でした。

では、あまり期待が持てませんが、続きをどうぞ。

第6話 疑問と偽問

ここは高町家、なのはの部屋。

そこに熟睡中のなのはは、外の騒ぎに気づかないまま眠っている。

「う・・・ん」

偶に寝返りを打ち、

「う・・・ん、このたいやきおいしいよねえ・・・」

寝ごとを言っている。

そんな中、

「ほんとに可愛いわ〜」

そんな彼女に、“二人組”がそこに居た。

一人は女、水色の制服をている。

もう一人は男、こちらは薄い緑色のようだが、ともに外見は10代中ごろのようだ。

女は、なのはが眠っているのをいいことに手を出そうして・・・

「ほんと、プニプニ〜」

・・・いや、もう手を出している。

先ほどから頬を突ついたり、髪を弄っていたりしている。

そして、その行動に呆れているもう一つの影。

「……確かにそうだが、“契約・任務以外”のことをしないで下さいよ。僕までとばっちりを受けるの嫌ですよ。」

いくらなんでも、彼の“説教”だけはごめんですから。

「もう分かってるわよ！」

……絶対に分かってないですね……
ましてや連帯責任扱いで……
さん。

「何か言った？」

とてもいい笑顔で振り向く。

“純粹”で、“邪心”なく、しかし、

「……いえ、なにも……」

ドス黒いオーラを除けばの話だが……。

なんでこういう時は感が鋭いんですかね？

「ハア……」

彼はため息するしかなかった。

哀れな……。

「おや？」

「ん？、どうしたのよ？」

急に何かに反応したのに疑問を抱く。

その答えは簡潔に

「来たようですよ」

「ええー！ー、もう？、せつかくの時間たのしみがあゝ・・・」

その答えにすくねるが、しかし、どうしようもない。
来てしまったものは来てしまったのだから・・・。

「うー！」

それでも、熟睡しているのはにじやれつく。
見事までに改心する気は無い様子・・・。

彼はそんな行動をする彼女にあきれ、

「・・・そろそろ“真面目に仕事”してください。彼以外の、“あの人”の“説教”まで受けたいんですか!？」

「うっ、分かったわよ・・・」

渋々したがう。

どうやら、相当その“説教”が答えるらしい。

それにしても、あの子はあれだけのことをされてよく起きません
ね？

寝つきがいいのか・・・

彼は、なのはを見ながらそのことを考える。
しかし、そんなことをしている場合ではない。

「数は、7人？」

「はあ!？」

何やってるんのよ!!!!!!!!!!!!

その頃、東誠たちは……

「……君たち」

「お!、クロノにリンディか？」

なのはの家に移動中に東誠はクロノのリンディに遭遇。

「なんでお前らここに居るんだ？」

「あれだけの騒ぎにこちらが気付かないはずがないでしょう?、て、
いつよりも、それ?……」

「あ?、ああ、こいつのことか？」

遭遇早々、互いに事情を聞くが、リンディは東誠の背負っている
者に注目。

それに指をさすと東誠は首を振りながら、

「襲撃したやつらがこいつを狙い撃ちにしているな。とりあえずそいつらは片づけたまでは良かったんだが、こいつは氣一失ったまままだし、デバイスに聞いたら、なのはから遠ざけるために動いたよ。うだが、敵さんは分断してなのはの方に向かっていているって聞いてな。とりあえず今は向かっている最中というところだ。」

「そう、」

「……一言で片づけたな。御気楽過ぎねえか？」

「何か言いましたか？東誠さん？」

とてもいい笑顔で聞いてくるリンディ。

背後にダークオーラが漂っているが、

「……なんでもない。」

「……たく、感がいいのか悪いのかよくわからないな、あんたは。」

だが、「そういうあんただから」提督やれてんだろうな？。全く。

少し苦笑い(?)をしながら答えると、その反応に少し疑問を抱くリンディ。

しかし東誠は、

「とにかく急ぐぞ。なのは、今デバイス持ってねえからな。“連れて行かれたら”探しようがねえぞ。」

そう言つと、いきなり猛スピードでなのはの方へ向かっていく。

「え？」

「ちよ、ちよっと待て！」

クロノとリンディは慌てて東誠を追いかけるが速い！
とても“追いつける速度”ではなく、引き離される。

「いったい何なんだ彼は！
すごい人ね。彼。」

《・・・一つ尋ねてもよろしいですか？・・・》

「どうした？」

《先ほどの襲撃者共はどうされるのですか？。あのまま放置していると・・・》

「問題ねえよ。“あそこ”に連絡しておいたからな。回収するだろ？」

東誠は楽観的に言い、レイジングハートは東誠の言っていることに疑問。

“あそこ”？いったいそれは・・・

・・・なんで俺は、項も面倒事に首突っ込むのか・・・ハァー、情けく思うな。

“あいつら”もこのこと知ったら、複雑だな・・・それが だとしても・・・

「急ぐぞ・・・」

《はい》

「連絡は無いか・・・捕まったか、バガ共が。」

再び高町家、周りに、また新たに現れる黒尽くめの集団。それぞれに怪しげな珠を持っている。

「それはさっき奴らよりも抑えつけている物だ。飲み込められずに済む。」

「しかし、」

「案ずるな。さっきの 共の“データは取れた”。“良い贄”となってくれてこちらは助かる。」

『・・・』

話を聞く限り、とてもいい奴らとは思えない。
危険な匂いがぶんぶんと・・・

「へ〜。その話、聞かせてくれる?」

・・・キン!・・・

『!!--』

いきなりバインドが展開され、拘束!

さらに周りは大気が疼いている。

「“彼”が逃がしたのはそのためですか……。でも、それでは仕方がないですね。」

「仕方がないわけじゃない!“あたしの楽しみ”を潰してくれんたんだから！」

・・・ドン！ドン！ドン！ドン！・・・

「いや、ですから・・・」

漫才をしながらも、砲撃をかます女とそれを避けながら、いや、敵に方向を変えながら呆れて返す男。

それと同時に砲撃を食らい続ける黒尽くめ。

できれば避けたい、しかしできない。

理由は簡単、彼女の張ったバインドが強力で外れないのだ！

「あの、攻撃をする相手が違っていきますよ！僕に当たっても何にもならないでしょ！」

「つつさいわよ！誰かに当たらないと治まらないのよ！」

「だから！、なんでそれが僕なんですか！」

あまりの理不尽の理由に逃げ続けながら“圧縮した風の絡まり”を放ち続ける。

彼女はそれを避け、再び黒尽くめに直撃！

『グハ！』

「て、あぶな！、あんたあ！やっつけてくれたわね！」

その攻撃にキレ、さらに射撃を連射するも、彼はその攻撃を難なく黒尽くめ共に方向を変え、避け続ける。

そして、その黒尽くめたちは、

何故こんなに硬い！そして彼の真空空間のせいで息ができん！

尚且つ、貴様らこの真空でなぜそれだけ動ける！

彼らは必死にもがくが動こうにも動けず、ひたすら砲撃を浴び続け、それを食らうごとに息が苦しくなる。

段々意識が遠のいてきた、その時。

『・・・目標を確保した』

「え？」

「あー！」

念話の声に二人は反応し、慌てて後ろを振り向いた。

しかし、そいつらは既に転送準備に入っており、

「させないわよー！」

その行動に一目散に彼女は斬りかかるが“一直線すぎ”た。何故なら、

「……………貴様らの相手は我々だ」

…轟!…

「!、　　さん!」

「貴様もだ」

…撃!…

「ぐう!」

…ボタン!…

諸に鳩尾に入ったため、その場に倒れこんでしまった。
だが、

「ぐううう!!!、切れぬ!。」

拘束された奴らのバインドは彼らが気を失っているにもかかわらず、いまだ健在しており、苦戦していた。

普通であれば切れているはず、なのに何故?

「こ奴ら、“固定魔法”のようだな?」

「何?、これは“貴重だな”?」

固定魔法、普通の魔法とは異なり、術者が死んでも機能し続け、
未来永劫その術者以外解くことができない魔法。

あまりにも危険なため、使う者はそうそういない。
彼らはいっただい?

「まあいい……。こ奴らも“連れて行く”ぞ。いい　になりそ
うだ。」

そう言うと、彼らにもバインドをかけ連れて行くことすると、

『……貫け、雷の矢』

「サンダー・スマツシャー！」

……ズドドドド！！！！！！……

突如彼らの足元に落ちてきた複数のビットと、ランサー。

それと同時に、掴んでいた彼らがいなくなっており、

『……気を失っているようだな』

声が後ろから聞こえた。

黒尽くめは後ろを向くと、それを放った張本人であろう者達が、

『……こ奴らに何をしようとしたのだ？』

「……見た目的に10代半ばですが、いい年して何をしている
のですか？」

言っていることがズレているかもしれないが、銀髪の青年と、リ
ニスであった。

……あいつら、不意打ちであったのか？。元々はかなりの兵だっ
たと記憶しているが……。

まあ、確かにそうですね。こちらは無理言って頼んだのですからね。

「貴様等何者だ？」

空気は重くなるまま、彼はヘイムダム達に聞く。
もつとも、

『・・・』

- - 瞬！ - 閃！ -

「グハ！、グハ！」

『・・・貴様等とは対立する者・・・ただそれだけだ。』

聞いてきた者以外、拘束されている者、本人以外の二人を打ちのめした。

「！」

ば、馬鹿な！

彼は焦っていた。今の一瞬で気絶させたのだから。

リニスもその動きに亜然していて、

・・・ヘイムダル、あなたはいつたい、と考えてはいるものの、
・・・フェイトにこのことを教えて指導しようかしら？・・・

とも考えている。今の戦闘（？）でそっちの考えに行くのが逆に
すげいが・・・

「あら、」

「確かにすげえが、“まだまだ”だな？」

「……!……」

「いや、尋常な動きではないと思うが、」

「確かにねえ？管理局についてくれないかしら？」

何やら不穏な声、彼からしてみたら非常に聞いたくない声。
機械の音を鳴らすかのように後ろを振り向くと、

「よう！、銀髪さん？ここで何してんだ？」

「あと、その使い魔さん？あなたにも聞きたいことがあるから」

『……まず第一声がそこから来るのか、“今の時代の者共”は
『?』

「さあ？、私も、そのことに関しては全く」

『まあ、いい。それよりも、“こ奴ら”を転送するぞ』

「ああ。そうだな」

ヘイムダルの提案に了承する東誠。
しかし、

「さて、彼らにも聞きたいことが、」

「『却下』」

クロノが割り込むが二人は問答無用で却下。
ヘイムダルはそれと同時に二人を、いや、意識のある黒尽くめの連中を含め転送した。

「ちよ、ちよっと君!?!」

『・・・管理局では“役に立たない”』

「まあ、そういうことだ。代わりにそいつをくれてやるから我慢してくれ。」

あまりにも自分ルール過ぎて怒り出すクロノ。
同じ局員であるリンディは、

「まあ、“事業が聞き出せる”ならいでしょう?」

「か、艦長!?!」

あっさり了承し、その言葉に慌てだすクロノ。
何というか、おおらかな人ですね、本当に。

「貴様ら・・・」

『?』

その時、転送されずに残っている者は、切れていた。
勝手に話が進んでいて、理不尽極まりないことに。

そして、

「ここでくたばれ！！！！！！！！！！」

『リニス・・・』

『ええ、分かってます。』

リニス時は急いでなのはを抱え上空へ避難。
東誠、ヘイムダルは“何かの用意をしている”。

黒尽くめは、珠を飲み込もうとするが、

「同じ手が何度も通用するわけがないだろう？、
境界断層^{リキッド・サルベージ}」

「なに？」

前にもやった奴同様に、珠が液状となり東誠へ向かう。
そして、元の珠に戻った。

『次元の扉よ。基となるものを滅殺せよ。・・・断絶^{ロスト・テクノロジー}』

「ぐあああ！！！！」

突如黒尽くめの者が苦しみ出す。これは、

「き、きさま、なにを・・・」

・・・キン！！！！

「君を逮捕する」

「いや、そこは違つたらう？」

「違つてない！」

『……少し眠れ』

- - 撃! - -

「グハ！」

ヘイムダルはクロノに鳩尾し、黙らせた（刈り取つた）。

話が挫折する、聞きわけがない奴ほど面倒事を生み出し、迷惑この世の上無い。

いえ、流石にそれは分かりますが、黙らせるのであれば他にもありませんか？

『……リンディだったか？、こ奴を頼む』

「え、ええ。」

今の行動に若干引きながら、クロノを受け取り、とりあえず屋根の下におろした。

『先ほどの件だが、貴様の“リンカーコアを破壊した”。それだけだ。』

「な！」

『聞かれたことは答えた。・・・眠れ』

・・・撃！・・・

『・・・リニス、行くぞ』

「はい」

なのはを下ろし、その場を去ろうとするヘイムダルとリニス。
しかし、

「ストップだ！」

後ろを振り向かず、そのまま停止したヘイムダム。

「・・・ヘイムダル」

リニスは警戒の声を上げながら言ってきた。
いくらなんでも、あなたも消耗しているはず！

「君には聞きたいことが山ほどある。今度は逃がさないぞ！」

背後にデバイスを構え、スティングガーを展開しているクロノと、

「あなたの名前と目的、教えてもらいますよ。」

魔法陣を展開したリンデイが居た。
今度ばかりは逃がすわけにはいかない。

知っていることは聞き出しておかいといけない！

さらじ、

『貴様もか……』

「まあ、気になることは事実だからな？」

東誠が槍を構え、正面に居た。

「……」

『……待て、リニス』

リニスは前に出て戦闘態勢に入ろうとするが、ヘイムダルが停止させた。

「しかし！」

『……気にするでない。奴は“別の理由のようだ”』

「え？」

彼女はそれでもやろうとするが、ヘイムダルはそれを拒否。
そして、一歩前出るなり、

『……老いぼれよ、貴様は管理局の者なのか？』

・ピキ！・

「・・・“管理局とは無関係”だ。だが、その「老いぼれ」、いい加減やめてくれねえか？」

あまりに“禁句”的なこと言ってくるヘイムダムに東誠はいい加減、切れかかっていた。

その証拠に、先ほどから膨大な殺気があふれ出ている。

ヘイムダルさん・・・あなた東誠さんになんてこと・・・

普通に考えて死にますよ・・・

ラルクは心の中でそう思い、

ヘイムダルはその様子を見ても表情を崩さず、

『・・・では何と呼べは良いのだ？。我は貴様の名を知らぬ・・・

』

ほう？・・・知らないかあ？・・・。

何処の口がそういうだろうなあ？

「・・・海の中の割りこみで聞いたはずなんだがな？。」

『・・・』

そう言っても無反応を続ける。

・・・こいつ・・・わざとか？・・・

東誠はそんなことを考えるがどうしようもなく、

「まあいい、東誠だ。・・・東誠 流寺・・・・・・獅龍一閃！」

- ドオン! -

いきなり大技を出し、ヘイムダル達に襲いかかる東誠!

当然、その“後ろに居るもの達”も巻き込まれるが・・・

「!?!」

な!。う、嘘でしょう!?

いったい何を考えてその技を出しているの!?!?!!

皆それぞれ、心の中で絶叫した。

だが、

『・・・・・・』

ヘイムダルはその攻撃に対して全く興味なしのように

- スウ - - -

と、ごく自然に右手に装備している盾をかざし、

- ドオン!、パリン! -

その攻撃を受け止め、相殺した。

『!?!?!』

後ろで見ていたクロノとリンディは“その光景”に亜然していた。しかし、ヘイムダル達にとっては“周り”を、クロノ達にとって“正面”をよく見ると、

『……“これ”を見越していたのか？』

「まあな、俺としては話がしたいだけだからな。」

“辺り”を見ると、

「これは……」

3人を囲むようにして壁となっている。

「それとだ、」

『……結界も張ったか……』

中々気がきいているな……。さすがわ……

「……ああ」

辺りが氷の壁となり、外からの者は何も見えない。結界も張られ、音も漏れることは無い。

……確かにこれでは、外部に漏れることはありませんね。

リニスは内心そう思いながら、東誠を見ている。つまり、その行動をとるといふことは、

「誰にも聞かせるつもりはない」からな……」

このことに関しては、俺も知られたくないからな……。
“特に管理局”は……関わると“ロクなことにならんから”な。

『……ほう……』

「……そういうことですか？」

今のやりとりで大体の見当がついた二人。

『それに比べ、クロノというやつ、目覚めが早いな。“電撃も加えていた”はずなのだが、』

「まあ、目覚めさせたんだろう。あいつ、ここに来る前から顔が悪かったからな」

「逆行療法ですか？」

「多分な？」

『そのことはどうでもよい。聞きたいことがあると言っていたが、それはなんだ？』

「……ああ」

急に空気が重くなり、リニスは怪訝顔、ヘイムダルは無表情のまま。

東誠は二人を見ながら、

「お前ら、 の を知っているか？」

「――！！！！」

『誰のことだ？』

「とぼけるな！アルフとの会話、聞いていないとでも思ってたんか？」

かなり焦っている。

「いったいなぜ、彼がそこまでこだわるのか？、いったい“過去”に何があつた？」

ヘイムダルは東誠の様子をうかがいながら、

『本当に知らん。我は、ただ頼まれたただけだ。リニスにな。』

「リニス？」

東誠はヘイムダルの隣に居る彼女を見ながら

「なるほど。」

ただ、ため息をついた。
そして、

「ブレイク・インパルス！」

『？』

急に氷の壁が崩壊。クロノとリンディが出てきた。

『もう現れてきたか？』

「……振動波か、確かにそれだと突破されるな。たく、「クライド」譲りか……」

- - - ! ! - - -

いきなりの言葉にクロノとリンディは驚く。
何故、父の名を!?

「?、どうした?」

「どづして?」

「何故父さんのことを知っている!?!」

『?、父親。』

「そついや、よく見たらクライドに似てるな?。そついや、って、お前もクロノのこと知ってたな?どづいうことだ?」

視線が急にヘイムダルのことに向く。

そのヘイムダルはというと、

『……知っていたところで何か問題か?』

素で返した。

いきなり周囲の天候が急変し、雷鳴・嵐・吹雪・豪雨が同時には発生！。
東誠たちに襲いかかる。

あの野郎！

ヘイムダルはリニスを掴み一気に後退。

「ヘイムダル！、あなた！」

「いいですよ。リニス“さん”」

「え？」

「“当てるつもり”はありませんから」

『まずいな。“スペル！”』

『仕方あるまい』

「ぐわー！」

「クロノ！」

それぞれに起こる気象現象が彼らを襲い、クロノは強行突破しようとして嵐に飛ばされた。

「……海淵に伝わりし我が力よ、その“刃”ですべてを断絶せよ

しっかりと結界が貼ってあった。

「……………」

その光景を見てますます苛立ちが経つが、すぐに冷静になり、

『……………無事か？』

ヘイムダルから通信。

「てめえ……………」

『一つ言い忘れだ。』

「なんです？、言い忘れて？、」

リンディは笑顔にその答えを待った。

青筋を立てているが、

『名前、聞いていたな？』

……………ズコ！……………

予想外のことには彼らは墜落しかけるが何のかと保ち、

「確認するが、言い忘れはそれか？」

『ああ。』

……………ズーン……………

拍子抜け無さに落ち込む3人。
そんな様子を見ながら彼は、

『他にもあるが、今回の件、“あまりかかわるな”。』

「どづいうこと？」

いきなり気になりだすことを言ってきたので慌てて耳をから向ける。

『言葉通りだ。ではな。』

だが、そのことには応えず、一方的に切ろうとしたが、

「まて、名前を聞いていねえぞ」

東誠が割り込み、思い出しかのように、

『・・・ヘイムダル・・・』

「？」

クロノはその言葉にチンプンカンプン。

『“ヘイムダル・クリエイト”だ。』

・・・ブチ！・・・

それだけ言うと彼は通信を切った。

「て、おい！勝手に切んじゃねえよ！」

慌てて呼びかけるが応答なし。

仕方なく、3人はなのはとユーノを部屋へ運び寝かせた。

そして、

「ねえ、東誠さん？。あなた、さっきの“魔法”や“魔法陣”は何？」

「君も何かこの件知っているようだし、聞かせてもらおうか？」

「断る。じゃあな。」

――瞬！――

「え？」

「しまった！」

しかし気づくのは遅れ、東誠は何処かへ行ってしまった。いったい何が起きているのか？

そして、なのはを護衛していた二人は？
いったい………

第6話 疑問と偽問（後書き）

東

「おい作者！、いくらなんでもかかり過ぎだろ！」

ラ

「まあ、東誠さん、そう言わずに。」

「うなわけいかないでしょ！こっちは登場したと思っただら名前なしよ！何を考えて書いているのよ作者！」

「まあ、落ち着いてくださいよ。僕たちはまだ出るのはほんとはもう少し作だったんですよ。出ただけでもいいところでしょう？」

「あんたは黙ってなさい！」

まあ、二人ともその辺で・・・

東・

「お前／あんたのせいだろう！」

はあ、收拾がつきません。
すみませんがお願いします。

ラルク

「はい、では、読者の皆さま、投稿遅れて申し訳ありません。ほんとに作者トリップ状態で忙しいことが増えて中々こちらの方に回せなかったようでして、」

川

「次回はなるべく早く進めるそうなのでよろしくお願いいたします。」

「

誠に申し訳ありません。

最近、あまり他の作者さんと連絡取っていないので少々不安ですが、頑張っていると思いますすみません。」

東

「まあ、がんばれ」

「期待しているわ」

「容赦がないですね」

ラ・川

「はい／ええ」

リニス

「まあ、自分の状態にあわせて頑張ってください」

はい、次回はなるべく早く投稿しようと思いますので次回もよろし

くお願いします。

一同

「では。」

番外編：経緯と……（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

……ええと、もう明けてしまっておりませんね。

今回は番外編の続編ということで投稿します。

では、続きを……

番外編：経緯と……

リニス

「さて、今回の番外編ですが、作者曰く“恒例”なことが起こったということ色々とまとめてい込めていこうと思います。」

上村

「はい。では班分けを始めたいと思います。5分にいないにみんなが平等になるように班を作ってね」

一同

『はい』

ラルクくううん!!!!!!!!!!

ラルクころおおす!!!!!!!!!!

ラルク

「川さん行きますよ……」

川

「え、え？」

……ドオン！……

「ゴホ、ゴホ……煙幕使い寄って……」

「ラルクがおらん！」

「河海さんも」

「どこやああ……！！！」

桃子

「そう言えばラルク君、川ちゃんにだけバイトこと話してたっけ？」

上村

「じゃあ、二十分以内に探し出してきてね」

ヘイムダム

『……よくこのようにことを繰り返すことができるな……』

東誠

「……確かに……当時の教師としては、もう少し叱っておくべきだったな……」

いや、それは無理でしょう。

人いうのは欲望のまま行動します。

藍川

「あなたがこの原因を作ったんでしょー！」

は、は、は、何のことでしょう？

私はただ、“書いていた”だけですよ？

東誠

「・・・ホウ、その“書いただけ”でこれだけの惨事を招いたと？」

・・・フツ

藍川

「「フツ」じゃありませんよ！。授業が滅茶苦茶でしょう！上村先生までこんな性格にして！」

いや、書いていたらこうなりましたから・・・

東誠

「てめえ・・・凍らすぞ！」

私は会話をしているだけであってここにはいません。
故に、危害を加えることはできませんよ？

ヘイムダム

『・・・仕方あるまい。今回は、“あ奴が出てくる”から、後は任せよう。』

東誠

「ああ、そうだな。殺戮者ジエノ・サイダーが降臨する前に何とかしなければ、」

リニス

「とにかく、番外編第2話」

藍川

「始まります」

桃子

「さあ〜て、みんな青春してるわね〜」

上村

「ええ、でも、校長の言っていた通り、随分派手ね〜。」

ここは教室。

現在、その場に居るのは高町桃子と、家庭科の担任こと、上村のみ。

では、こここの生徒たちは？

e

「居たか!？」

L

「いや、見つからん」

廊下、体育館、そのほか空いている教室内にいた。

P

「ラルクと河海は、何処に行ったんや!」

I

「探せえ!何が何でも、事情を聞き出す!」

あまりに殺気立っているが、……いったいに何が?

p

「何も話さない・・・そんなこと、許せるわけないでしょ!!!!!!」

そんなことですか・・・

しかし、探している当の本人の姿はない、いったい何処へ？

- 撃！バキ！撃！バキ！撃！バキ！撃！バキ！バキ！バキ！
- - -

ラルク

「・・・」

とりあえずは・・・“これでいいですか”。

ここはラルク達の教室の隣にある多目的室。
つまりは生徒を分けて行う授業や個別的な自習関連で使われること
が多い教室である。

しかし、いつもと空気が違う様子？。
いったい何が？

ラルクはただ、視線を“床の下”に向けている。

川は、そんなラルクに顔を引き攣らせながら引いてる。

「・・・」

また、見てしまった。

あのラルク君を……

顔色が悪くなりながらも、川はラルクを、
いや、“ラルクの足元”を見る。

「……………」

……………できれば見たくなかった。

多分、今のラルク傍にいた者が川以外におれば、同じことを言っ
たであろう……………。

ラルクの足元にいたには自分らを追跡に来た生徒たち7人。

しかし、ラルクがそんなことで微動だにしない。
寧ろ、呆れるという部類だ。

しかも、その生徒たちは“ただ気絶している”……………だけで
はない。

両足の関節は外され、手首をワイヤーで縛りつけられている。

ラルクは無表情に……………

ラルク

「……………別にあなた方の行動について言っているではありません。
何故その行動を“起こすのか”を聞きたいですね？」

淡々と理由を聞くが、相手はなかなか“答えない”。
いや、“答えられない”が正しいか。

先ほどから痛みに耐えかねて喚いており、理由を聞くこうにも切れ

ない状況。

「……もういいです。“聞ける人”に聞きます。」

- - 撃！撃！撃！撃！撃！撃！- - -

そう言うと、鳩尾をかまし、“一人を除いて”意識を刈り取った。

彼は、付き合いの長いものには“優しい”。

しかし、それと同時にそれが“凶器”でもある。

“彼にとって優しさ”というのは、“裏方的な仕事メイン”であり、“接し方についての優しさは持ち合わせていない”。

故に、向かってくる者には“容赦は無い”。

しかも、本人曰く、

「関節外しだけでしたら“まだ良い方”ですよ……骨を砕くは“別”ですが、」

とのこと。

それを聞いた商店街の人たちは“絶対に怒らせてはならない”と肝に銘じている。

生徒たちには知られていないようだが……

そしてラルクは、ただ一人、刈り取っていない生徒を見ていた。

当然、その生徒はガクガク震えており、

G

- - ガラガラ - パタン! -

桃子

「あら?」

上村

「二人とも戻ってきたの?」

ドアの開いたのでその方向を見ると、ラルクと川がおり、二人は聞いてくる。

様子を見ると、ラルクはそうでもないが、川は結構疲れている。

ラルク

「ええ、上村先生……」

いつもの無表情ながら、声のトーンがあまりに低い声を出すラルクが言ってきた。

上村

「ん、なにかな?。ラルク君?」

若干、その声に後ずさりしながらもラルクの方を向く。

ラルク

「班の振り分け表を貸してください」

桃子・上村

『はい?』

突然のことで頭の中がチンプンカンプンになる二人。
しかしラルクは淡々と、

ラルク

「これ以上迷惑は避けたいのでこちらで決めます。」

そう言うと、ラルクは上村の持っている班の振り分け表をとり、勝手に記入。

川とは相談したが、他の意見は無視。

しばらくしてはんの振り分けが終了すると、それを提出。

その後クラスの子を連行してきた東誠と、何故か黒の浴衣を着た（旅館で言うとな将）人が現れ、

東誠

「こいつらの“個人面談”の時間割よろしく」

「あかんなあ、こっちはゆっくり休めへん、もうちいとしっかり教育してくださいなあ。」

上村

「は、はい。」

桃子

「すみません。迷惑をおかけして」

二人は素直に謝罪し、事なきを得た。

東誠はふとラルクを見て、

とですか？」

すぐに出てくる当たり前の疑問を投げかけてきた。すると東誠はため息をつくや否や、

東誠

「・・・話すとき長くなるがいいか？」

いきなり言った来たことに対し少し戸惑ったが了承し、話を始める東誠。

そう、ラルクが関節技やらを決める少し間のこと・・・

ここは3階の教室、東誠は今3年の授業をしている最中。それ故、クラス内のヒソヒソ話以外、静かなはずだった。

東誠

「はい、もう試験が始まっているところがいくつがある。今の間違ったところはきちんと復習しておくこと、いいな？」

一同

『はい。』

授業が開始してから10分が経過。

このとき、東誠は“軽い”小テストを実施しており、その問題に生徒たちは悪戦苦闘しながらも、なんと終え、答え合わせを行った。

しかし、

……どこいった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

東誠

「……………」

その断末魔に反応するかのように、その教室にいる者は一斉に廊下の方に視線を向けた。

……今は授業中のはず。なんだ？

東誠はそのことを考えながらも、授業を継続しようしていた……

……受験控えている生徒がいるだ。時間を割くわけにはいかなからな。

……河海！、ラルク！いい加減出でこんかい！……

……あたしたちに内緒でバイトなんでいい度胸よ！。しっかり詫びを入れさせていただくわよ！……

……バン！……

一同

『……………』

今の声に東誠は思いっきり手を机に叩きつけ、生徒たちは、その反応にギョーとした。

そう、東誠“も”怒らせたなら、ただでは済まない。

彼の個人面談じこく行きになった者は大抵、助けの視線を全力で他の生徒たちに送るが、その場にいる東誠の威圧により黙らされ、視線はむなしく意味をなさないほどに至る。

ちなみに、それを食らった生徒たちは2時間はその面談に強制送還状態でその生徒について、東誠はその生徒の保護者にもしっかりと伝え、今後このことがないように協力を仰いでいる。

当然のこと、保護者は全面的に協力しているが、一部は東誠に対する恐怖で複雑の心境のようだが、。。。。。

さて、机をたたいた東誠は、

東誠

「おまえら、プリントを配るから、それをやっつけ。少ししたら戻るから、その間は自習な。」

一同

『は、はいー!』

……あれはキレてる……

生徒一同は心の中からそう判断し、東誠は教室を後にした。

……さて……

東誠は声のする方で歩行で、いや、歩行言う名の走りで音を立てずに生徒に接近!

東誠

「さて、何処に行った？」

東誠は辺りをを見渡しながら、探すと、

東誠

「あそこか……」

そう言うと東誠は音を立てずに忍び寄った。

H

「いったい何処におるんだよあいつは！」

R

「ホントよ！」

クラスの二人組はイラついていたが、そこに忍び寄る影のことに気づけなかった。

そう、学校内で最凶の非常勤講師に……

東誠

「何があったのか聞かせてもらおうか、お前ら？」

『！！！』

二人は背後に声がした方向を振り向くと、無表情にこちらを睨んでいる東誠がいた。

何故か殺気全開で……

- - ガクガクガクガクガクガク - -

二人は震えた。

しかし、いまさら震えだしても遅い。

……後からその後悔は嫌というほど出てくるからな。

東誠

「とりあえず理由を言え、なんでこんなことになっているのか？」

G / H

『…………』

二人は無いも答えない。

それを見ると東誠は、

東誠

「俺は今、3年の受験対策の授業を行っている最中なんだ……わかるよな？……教師の立場や先輩たちのことを考えるなら？……分かるよな？廊下で騒いでいるお前をたちを指導しなければならぬという教師の衝動も……俺の今の気持ちわかるよな？……」

淡々と告げるが、いつの間にかやたらにっこり笑顔……しかし、目が笑っていない……。

すると、二人は

G / H

『じ、じつは…………』

結果、洗いざらい話した。

それを聞く東誠は、一応は納得したようだが、

東誠

「なるほど、群がって、ラルクと川は逃走。そうして搜索するのでこうなった……」

- - コクコク - -

東誠

「しかしなあ、騒ぎを起こしたことはない。首謀者共は“全員”、“後日”、“個人面談”な。」

G / H

『!』

それを告げると二人がつくしとなり、東誠は、

東誠

「とりあえず……寝る……」

- - ドン！ドン！ - バタン！ -

二人は意識を刈り取られ、気を失う。

東誠はその二人を担ぐと、

東誠

「聞いた話だと、後30人余り……時間がねえし、どうしたもんか？……」

東誠は時間の関係上、困っていた。

早くしないと、3年の授業が、貴重な試験対策が……

そんなことを模索していると、

「お困りのようですね？」

東誠

「ん？」

何やら、京都弁の混じった女の声が後ろからしたので後ろを振り向くと、

「あんさん、こないなところでどないしたん？」

髪の色は銀色。黒の着物を羽織っており、年齢は、代々30代に行っているがどうか……

見た目からおっとりしており、旅館で言う、女将見たいな人である。

外見も細くそれなりにいいスタイルのもち主だ。

まあ、それはともかくとして、

東誠

「いや、ただ授業中に騒ぎ廊下に出ている生徒をバカどもどうしようかとなで、そういうあんたは誰だ？。この学校の関係者に見えないが？」

東誠はあらかた事情を話したが、目の前にいる彼女に対して、心当たりがない。

誰だこの女？

「いやなあ、うちはただの通りすがり者や」この近く通つたら、なんやえらい賑やかなようやったんで着てみたら……」

東誠

「もついい……こつちのせいが迷惑をかけた。済まない。」

今の流れで大体的見当はついた。

つまりは、学校の近くを通っていて、外にまで声が漏れていたので、救済に入った……

そついうことか？……。

東誠は申し訳なく彼女に頭を下げると彼女の“足元”をみて……

東誠

「一応聞くが、その奴らって、もしかして……」

「？、ああそうですえ。」

東誠が足元に視線を向けていることに気づいて彼女は、

「ここの生徒はんや。」

それを聞くと東誠は彼女に何があつたのかを事情を聞いた。

なんでも、たまたま玄関口に騒いでいる生徒がいて、注意したらし
いが言うことを聞こうともせず、そこにいた事務の人もお手上げ……

それを聞くと、東誠はさらに頭をさげ、詫びを入れた。

「ええよ、それにうちは“あんにんに用があつたさかい”……。」

東誠

「?、どういふことだ」

「なんや、“まだわからへん”の?、うちやで?……。」

そして、ふたりでこの生徒共(二十数人ほど)を抱えて?、引きずって、ラルク達の教室向かった。

東誠

「まあ、そういつわけなんだが、……。」

一同

『……』

流石にそこまでのことを話すと皆沈黙した。

まあ、当然だろう……。

ラルク

「あ……。」

「ん？」

上村

「どうしたの？ラルク君？」

ラルク

「よろしければ、今度うちに来ませんか？」

一同

『はい？』

東誠

「まあ、今回はこちらに非があるからな。俺は構わなねえぞ」

「ええの？」

ラルク

「構いません……。それに何かお礼がしたいので。」

東誠

「こいつの腕は保障するぞ。俺や商店街の奴らよりも上だからな。」

桃子さん

「そうそう、あたしたちもいいわよね？」

東誠

「おい、何便乗しようとしてんだ？」

「うちは、に賑やかなほうがええなあ。」

東誠

「はあ!？」

桃子

「なら、問題は無いわね？」

ラルク

「……東誠さん諦めましょう……もう何を言っても氣いませんよ。特に桃子さんは。」

東誠はそれを聞くを魔されながら考える。

確かに、あいつら何を言っても聞かないのはわかる。

だが、このままではあいつらの試験対策が……

教師としては難しいようで四苦八苦。

しかし……

東誠

「分かったよ……」

しびしび了承した。

だが、そんなころ合いに、

ラルク

「それと東誠さん、家が何部屋開いているかわかりますか？」

突然何かというばかりに聞いてくるラルク……

東誠

「おい、どういうことだ？」

流石にこれはまずいのではないかと東誠は判断。

ラルクは淡々と、

ラルク

「いえ、“今まで”ことを考えると……調理実習で……」

何かしら歯ぎしりのすることを言ってくるが、東誠はその灰用を把握し、

東誠

「つまり、(……)か？」

確認するとラルクは肯き、東誠はため息をつきながら

東誠

「わかったよ……たく、しょうがねえなあ、ただし、日付はこち
らで決める文句ねえな？」

ラルクは肯定し、それを了承。

東誠

「さて、じゃあ俺は戻るぞ……」

上村

「あ、はい。」

桃子

「じゃ東誠さん、また今度ね」

・・・それを聞くと東誠は後ろを向いたまま、ため息をつき、手を振りながら出た。

「それでは、うちもこの辺で・・・」

そう言うと彼女も頭を下げ、教室から出て行った。そして、しばらくの間教室は静かだった。

上村

「えっと・・・じゃあ、次回の調理実習」

桃子

「よろしくね」

ラルク・川

『・・・はい・・・』

そういうと一同その場に倒れ込み眠った。

このあと、班振り分け結果でまた騒ぎが起きたが、ラルクが黙れたのは秘密である。

東誠

「たく、面倒ごと増やしやがって・・・」

幸恵

「まあまあ、東誠はん、そう言わずに……」

真和

「そつや！、今日は“この子”と楽しみましょつや！」

ラルク

「えええと、……あの二人がノリノリなのは、この後わかりますのでご了承ください。」

藍川

「では、今回許可がいただけましたのでゲストを紹介していこうと思います。」

川

「テストメントさん作、魔法少女リリカルなのはS t S・EXから、……あれ？」

萌子

「？、川ちゃんどうしたの？」

川

「いえ、……なんでも、では改めまして、EXの“アリサ道場”より、主人公、“神庭シオン”こと、“しいーちゃん”です。」

しい

「チヨイ待てコラー！」

東誠

「まあ、そう叫ぶな……」

しいー

「いくらなんでも叫びますよ！、なんでゲスト登場でしいーちゃんのままなんすか！おかしいでしょ！」

いやあ、すみません。良いネタが思いついたまでは良いのですが、“本編の”あなたではできないことなので……

ラルク

「あの、作者さん？“まさか”と思いますが、」

ええ、その“まさか”です。

萌子

「……頑張ってねシオン君、あ、しいーちゃん。」

しい

「いや、そこは訂正しないでほしいっすよ！」

しかし、シオンの周りには八神家夫婦以外道場に視線が飛び交う……

しい

「あの？……なんすかその道場というか、哀れみな視線は……」

……トン、……

すると東誠はしいーちゃんの方に手を置き、

・・・パチン！・・・

しいー

「え？」

しいーちゃんは辺りを見渡すが、いきなりバインドで拘束され、動けなくなっている。

ちなみに犯人はヘイムダム・・・今回は捕確の役割が下ったため、せめて姿は見せないようにしている。

幸恵

「さあーしいちゃん 始めまひよか？」

すると目の前には、はやての母こと、幸恵が万弁の笑みで接近、父である真和も、じゃれ合っている二人を撮影している。

しいーちゃんはジタバタ暴れるがバインドが解かれることは無く、動けない。

しいー

「な、なにするんすか！？」

アリサ

「ただの“着替え”よ」

幸恵

「そつや、着替えや」

しいー

アリサ

「ふふふ、まずはなにから着させましょつか？」

幸恵

「うちはまず、これからいこつか？」

アリサ

「ああ、いいわねそれ」

そう言つと彼らはしいーちゃんに見せながら言った。ウサ耳、ウサ尻尾付きのメイド服。しかも、ミニスカである。

しいー

「いやだー！！はなせ！！！！」

アリサ・幸恵

『覚悟！！！』

…ギヤーーーー！！！！！！！！

東誠

「さて、バンドが解かれ脱がされているやつはほっとくとして、」

川

「でもいいですか？、「手助けできないって嘘」について」

藍川

「テストメントさんから『フルボッコにしなければOK』といつこ」

とでしたし、」

ラルク

「今写真撮影されてますよ……。」

一同

『…………』

真和

「さあ、そのほづきで掃くそのポーズ、そのまま笑ってえ」

――カシャ！カシャ！カシャ！――

しいー

「う、うー」

アリサ

「あ、その表情もいいわね……。」

幸恵

「それやったら、これを持たせて……かわえええ！！！！！」

ちなみに、今しいーちゃんがしているのは、お盆で顔を半分隠してる状態である。

当然激写され……

しいー

「もう……いやっす」

涙ながらにうなずいていた。

しかし、それとはお構いなしに

アリサ

「何やってるのしいーちゃん？、次、着替えるわよ」

幸恵

「次はこれやで！」

二人が見せびらかすもの……水着ある。
しかも、水色。(ピンクでないだけましか……)

しいー

「い・や・だー！」

……ダッ！……

アリサ

「ふふふ、逃がすわけないでしょう……」

……カチン！……

しいー

「え？」

またしてもバインドで拘束された。

ヘイムダム

『……今回はそういう役割なのだ。諦めてくれ……』

しいー

「
で
は
」
ラ
ル
ク

番外編：経緯と・・・・・・・・（後書き）

どうも、次回は本編の方なるべく急いで行おうと思っておりますので、よろしく願います。
では。

第7話 …… 出会い (前書き)

疑問の連なることが続く日々、使い魔は、ある少女と再会した。
第7話、始まります。

第7話 …… 出会い

少女は夢を見ていた。

そこは庭園、そこに居るのは母と“私”。

“私”はここで母さんとピクニックに来ていた。
優しかった母さん、笑ってくれる母さん。

“私”が喜ぶと、母さんも喜んで……
花飾りを作ってくれて……

その時はとてもうれしかった……

「ねえ、とても綺麗ね。“アリシア”」

え？、「アリシア」？。ちがうよ母さん、
“私はフェイト”だよ……

「さあいらっしやい、「アリシア”」

そういって、私は母さんに近づいて……

「ほら、可愛いわ、“アリシア”」

……でも……いいのかな……。

……今の母さんは……

あの時のような優しい姿は“2年前”から見せなくなった……。

どうして？・・・

私のことを拒んでる・・・嫌ってるの？

どうして？・・・

どうして・・・母さん。

「ごめんください」

川はリニスを連れて、ある屋敷に来ていた。

「いらっしやい。川さん」

「いらっしやいませ。川様。」

「うん、お久しぶりです。すずかちゃん、ファリンちゃん。」

迎え入れたのはこの屋敷、月村家の末っ子、すずかとメイドのファリンである。

実というと、川は月村邸の者、主に忍だが、10年前からの知り合い。

きっかけはラルクのバイト先である翠屋で出会ったことからである。

当初は川もバイトでやっていたのだが、彼女の性格の恥ずかしがりや明るさが気に入ったためか、後日月村邸に招待。

何故かあの時、藍川が付き添っていったが、その場ですっかり気

が合い、今に至っている。

この話については、またいずれ。

「今日は呼んでくれありがとう」

川は少し頬を赤くしながら、応える。

その反応がおもしろそうに、

「うっん、こちらが無理を言いましたし、・・・それに・・・」

ちらちらと、すずかは川の胸元に抱きかかえている山猫リニスを見てい
る。

本当に嬉しそうに。

その視線に気づいた川は、

「言ってた・・・とおり、可愛いでしょ？」

「うん」

ここ最近、すずかにリニスことを紹介したら、『一度会ってみた
い』と言ってきたので今日はここに遊びに来たのである。

「リニスちゃんもこんにちは」

「ニャー？」

頭をなでられながら応えるリニス。

・・・この子が、すずかさんですね。

ラルクはこの子は何も知らないと言っていました、

リニスは少し様子をうかがっているようだ。

少し距離を置いているようで、

「もう、どうしたのリニス？、この子はすごくいい子だよ」

川はそう言いながら、リニスの顎をくすぐる。

それに反応し、少し甘えた顔になるリニス。

「にゃ〜^^」

り、川、そこはー

どうやら、満更でもなさそうだ。

その反応にすずかは、

「本当に仲が良いんですね」

とても羨ましそうに見ていた。

「うん！、あ、良かったらすずかちゃんも、ほら」

「う、うん、あ、ホントだ」

実際にやってみるとすごく可愛い〜。

すずかは自分やってみて、のリニスの反応がとても気に入ったよう
だ。

「あの、お嬢様、そろそろ中に入られては？」

『あつ、』

流石にこれ以上、外での話はどうかと判断したファリンはさすがに提案。

「うん、そうだね。それじゃあ、川さん、リニスちゃん、どうぞ。」

「はい、御邪魔します。」

「じゃ〜」

そして3人と一匹は月村邸へ、

「あ、そういえば忍さんは？」

「忍お嬢様は、今日は恭也様と出かけています。」

「そうですか。」

「おねえちゃんも恭也さんも本当に仲がいいから」

「そういえば、そろそろ考えるのかな？」

「うーん、どうだろう？。あ、そいえばねえ〜」

などと、談話が続きながら、屋敷を歩いて行った……。

――バチン！バチン！――

「くう！」

「まだよ！」

・・・バチン！・・・

飛び交う鞭。

それに耐えるフェイト・・・・・・・・。

しかし、それが収まる気配は無い。

彼女は、あまりの“あの子の”不甲斐なさにひたすら鞭を打ち続ける。

「まだジュエルシールドが足りないことぐらいはあなたにもわかって
いるでしょ？」

・・・バチン！・・・

「うっ！」

フェイトは首を縦に振るが、彼女は、プレシアはやめる気配を見
せない。

時の庭園・・・・・・・・

フェイトとアルフはここに戻ってきた矢先、自分らが撮ってきた
ジュエルシールドを母、プレシアに“渡した”。

“渡した”が・・・・しかし、

「そう、「4つ」……アルフ！、しばらく外に出でいなさい！」

「はあ！？なんでさ！」

いきなりの言ってくるプレシアにアルフはもう抗議。

……訳がわかんない！

そう思うとアルフは、今にも驚掴みしようとしていた……

「アルフ、」

「！、フェ、フェイト、だけど！」

しかし、フェイトがそれを止め、アルフはその行動に驚く！。
それでもアルフはプレシアにかぶりつこうとするが、

……カシャ！……

「フェ、フェイ……ト。」

フェイトはバルディシュを起動してアルフを静止させた。

「アルフ、お願い……」

「……………」

その行動にアルフは折れ、渋々部屋から出て行く。

- バシッ！バシッ！バシッ！ -

- くう！、あ！、あああ！！！！ -

- - - まだ終わりじゃないわよ！ - - -

- バシッ！バシッ！バシッ！バシ！バシ！ - - -

扉が閉まると、聞きたくない悲鳴が飛び交う……。
アルフはその場に座り込み、残っていた。

耳を塞いで……悔しがって……

「何なんだいあの女は！……なんで……フェイトは……あんな……」

ただ、主であるフェイトのことを想って……。

そして、扉の向こうでは……

「今日はありがとう」

「いえ、おかげさまですずかお嬢様も喜ばれてました。こちらこそ」

時間は夕方、川は少し恥ずかしながら、リニスで顔の下を隠しながら一礼した。

そろそろ帰らなければと、川は帰宅準備をして、月村邸を後にした。

車で送ろうとノエルが言ってきたが、丁寧に断った。
なんでも、リニスと散歩をして帰ろうとのこと。

本当に楽しかった」

川はとても楽しんでいたようだ。

実際、月村家でファリンとすずかと猫とじゃれ合っていた。

「ホントに楽しかった」

「あははは、それは何よりです。」

・・・私は疲れましたよ、川・・・

当然、山猫のリニスもまた、その対象・・・。

他の猫達からも気に居られたようで、川たちのところに行く（逃れるため）に苦労したようだ。

・・・この世界の猫って・・・私、好かれた？・・・

他の猫たちに顔をさすられたり、顔をなめられたり、この時ほど、野生の本能というのを痛感せずにはいられなかった。

追いかけてまわされたりもした。

すずかと川は猫同士、じゃれ合っているかのように眺めていた。

「でね、最近はアリサちゃんがあ」

「そう、でもアリサちゃんらしいと言えばらしいね。」

「そうだね。あ、そういうええね、ラルクさんの働いてるの方でさあ、」

「ええ！？、それ本当！」

『ニヤー！！！！！』

「？」

川とすずかは鳴き声のする方向を見るが、・・・

「ホント仲良しさんだね」

「良かったねリニス。お友達が増えて」

しかし、リニスとしては助けてほしかった。

追ってくる猫たちの数は自分一人（？）に対し、10匹・・・追われる側としては早く見つけほしかっただろう・・・

・・・談話してないで助けてください！！！！

リニスは心の底からそう願った。

しかし、それは届かない。

この世界では魔法は使えない・・・ヘイムダムにそのことを告げられてこと・・・

故に、気づいてくれることを願うしかなかった。

しかし、その時に考えただろうか？・・・

“気づいてくれる”のではなく、“向かって行けば”まだ“速く助かった”であろうに。

結局、川が帰ると言うまでは気づいてもらえなかった。リニスは川に抱きかかえられ、グッタリしている。

「うーん、やっぱり疲れちゃった？」

川は抱えたりリニスを見ながら、つぶやく。しかしリニスに反応は無い。

ただ、ぐったりしている。しかし、寝てはいなかった。

リニスは、あることを考えていた。

……時空管理局、そして、ヘイムダム達が言っていたあの組織。

“ラルク”に、いや、“ヘイムダム”に助けられてからしばらく経つが、フェイトにアルフ・・・プレシアのこと、そして、……”。

東誠は“そのこと”で動いている。

何故？、彼は“この世界（97）”の出身で、管理局に接点はあまりないはず……。

そして、あの黒尽くめの集団。

狙いはジュエルシード？……しかし、“あの子”を狙っていた。先週助けた、栗色髪の少女。

そして彼らは「こう言った・・・『サンプル』と、
ヘイムダムは、そのことを知っていた・・・。

何故知っていた？

自分たちが知らないことを知っていた。

いつたい・・・

「ねえ、」

・・・彼はいつたい・・・

「ねえ、リニス？」

・・・！！

ふと顔を上げると、川が心配しそうにこつちを見ていた。
作り笑顔がバレバレなほどに・・・

「リニス、どうしたの？随分重く“考えていた”ようだけど」

・・・！！、見透かされてる。

もしかしてこの子、私のことに気づいてるの！？

「うーん、やっぱりあの猫ちゃんたちの群れはきつかった？」

・・・それもありますね・・・

どうやら、違う意味で見えていたらしい。

それはそうだろう・・・川は“魔法の世界”については、“何も知らないはず”。

知っていたら・・・

「あれ？」

ふと家の付近に差し掛かった辺りに、目をやった。見れば、そこに女の子が立っている。

“金髪”で、小学低か中学年くらいの子。

黒のワンピースを着ていた・・・

・・・あれは？

「っ、あ！、り、リニス！？」

突然飛びだしたりリニスに川は慌てて追いかける。

リニスはその“少女”の正面に立つと、

疲れきって、今にも倒れそうなのこの“彼女”がいた。そして、

「もう、リニス何やってるの？」

「・・・リニス？」

川の声に反応して、“彼女”は振り返る。

目の色は“真紅”、自分を押し殺していそうな、そんな顔立ち。

そして彼女はリニスの方を振り返ると、

「……………りに……………」

…ボタン！…

「あ、ちょ、ちょっと!?!、」

いきなり倒れ、川は慌て、リニスは彼女の頬をなめている。

「……………りに……………」

しかし彼女は反応せず、そのまま気を失った……………。

……………“フェイト”。あなた……………

そこに倒れた少女、“フェイト・テストロッサ”。

リニスを川は、その少女と出会った。

東誠

「さて、随分ややこしい展開にしてくれるなあ！。こっちの作者は「

……………まあ、そう言わずに……………」

ラルク

「フェイトさんのことですか?」

川

「うん。あの時いきなり倒れて、私、慌てたよ。でも、どうしたの？」

東誠

「今の立場上、俺の方も“面倒ごと”になってるんだな。」

リニス

「それって？」

「……あ、そういえば……」

ラルク

「？」

ヘイムダル

『……貴様の魔法や他のことだな』

東誠

「ああ……そう、そうだよな……クロノやリンディがしつこくてなあ！……！」

川

「あの、東誠さん！？、いったい何があったんですか？」

まあ、次回わかりますから。

ラルク

「はあ……、また“ワイヤーを用意”しておきますね。」

川

「ら、ラルク君!？」

ヘイムダル

『また説教の開始か?・・・』

リニス

「はあ、あれ、今回シオンは?」

いえ、今ちよつと忙しくてそこまでネタが回らなっただですよ。
それでこの字数ですし、

東誠

「まあ、なんだ。」

「次回がどう転がるか、たのしみにしときゃあ〜」

一同（へ・東以外）

『誰?』

では次回。

第7話 出会い（後書き）

今回はいつもより短めでしたが、悩みます。それからここで報告が、しばらく、実習が入るので、投稿や観覧がしばらく間と止まりますことをご了承ください。

シオンさんの件もありますし、番外編もそして、再会した二人も 色々時間がかかりますが今後とも、よろしくお願ひします。

第8話 思いと……（前篇）（前書き）

川が過ごしていた同時刻、

対立する者同士、それは、ぶつかり合う、戸惑う者、果たして何に染まるか？

第8話、始動

第8話 思いと……（前篇）

「言ったはずだ！、協力する気も就く気も無いとな」

「だけど……」

「それは“お前らの都合”だ。……いちいち管理外世界にミッドの法ら管理局の理念やらぶつけてくるな！お前らの行動すべてが“次元世界の相互意思”じゃねえんだからな！」

「……」

ここはアーストラ。

対立する二人。協力を拒むもの、協力を要請しようとする者。

二人は平行線のまま、話を続ける。

“信用を持たぬ者”、その発端は？

“東誠流寺”……彼は、

「くわあーあ。もう、朝か。」

椅子に腰掛けたまま、背伸びをする東誠。

時間は午前6時、朝日が上ろうとしていた矢先だ。

「……やべ、生徒のプリント、まだ終わって無かったな……。」

普段なら、ラルクと一緒に鍛錬に出ている時間帯のはずなのだが、今回は、違っていた。

なんでも、3年、2年のテストや課題などの制作で手間取っているとのこと。

『「10年以上」も教師をやっているというのに、いったい何をやってんです？「流寺」？』

「……うつせえーな。“スペル”」

『はいはい、それよりも、何故この時間まで？』

「……昨日の襲撃共の騒ぎのおかげでな。その上、生徒のプリント仕上げよと思っただが、徹夜しかけて睡眠2時間……。折角の休みなんだが……これじゃ休めねえな。」

『身から出た錆だな……』

「……余計な御世話だ。それより、“連絡は……”」

「……コン、コン、コン……」

ドアの方からノックする音が聞こえた。

この時間なら、ラルクか？。稽古は今日は無理だって言ったはずだが？……

「あの、東誠さん？、起きてますか？」

「？、ああ。川か？」

そう反応すると、俺は、ドアを開けた。

目があった川は、何か不安そうに俺を見ていた……。

「なんだ？」

「いえ、随分疲れているよう……でしたから……。」

「……まあ、色々とな。」

そう言いながら、頭をかく東誠。

川は、そんな俺の様子を見ながら不思議に思っていた。

“昨日”も、リンディさん達が来てから様子がおかしいし、帰ってきたのは深夜時間帯みたいだし、……何があつたのかな？

川は、そう思うと、同時に東誠も、

実際のところ、ここ“数日”ロクに寝てねえのもあるんだが……

……

“無関係”なこいつには、関わってほしくねえからな。

「で、どうしたんだ？こんな時間帯に？」

そう、いつもならまだ寝ているはずだが、今日は川が当番だったか？

『……当番表の確認ぐらいしたらどうです？……』

『……今日はやけに噛みつくなあ……“スペル”？』

“スペル”の言っていることに何故か過剰反応する東誠、しかし、

何処から会話をしているのやら？
実を言うと、東誠の家では食事おいては当番制になっている。

普段はラルクがやるのだが、「ここままでは！」という対抗意識的なのは不明だが、東誠・川が「俺／わたしもやる！」と言いだしたためらしい。

ちなみに、ラルク曰く、「……そこまで意識することなんですか？」とのこと。

しかし、ラルクは分かっている。

そう、その特技を有する者、上がれば、それを超えたいということが……。

……いらん説明ありがとう、作者。
さて、

確か、ラルクがいたはずなんだが？……あいつは一人稽古か？
東誠がそう考えると、川はそれを見越したかのように、

「……ラルク君は、“多分、朝食の下ごしらえのしている最中”
だと思えます……、そのあと翠屋のバイトに行くそうです。“それと”……」

何故か、前半の内容を言っている最中に段々ベクトルが暗くなっ
ていく川。

……理由は分かるが、その空気はやめてくれ。そして俺まで巻
き込むな……。

東誠はそう言っているが、これが川に聞こえているいないにしても、薄情者のな行動である。

情けない。

うっせーよ。情け無さはラルクの方だろ？。料理に関しては問答無用でズタズタにするからな。
まあ、それはどうでもいいか、

「？、「それと」？、どうした？、」

「あの、ですね・・・」

それだけ言うと、川は視線を遠ざけている。あれはごまかしの笑みか？

普段のあいつからして、「誰か来た」ってこと表してるよな。

そんでもって、どうにもギクシャクしてんな？。

“それと”・・・、何かあったんか？

「ごめんください、」

「いや、おつ邪魔してまゝす」

東誠はそんな疑問を抱くが、その“答え”はすぐに帰ってきた。

「ん？」

川の後ろから、“声が聞こえた”。

それも二人、しかも、そのうちの一人の“声”は・・・・・・

東誠は川と離れるよう手振りをするとうちを出て、“彼女たち”を見た。

そして、それを見て嘆息した。

「“また”か、“リンディさん”？」

「ええ。」

東誠はそれを確認すると、もう一度嘆息した。
リンディも苦笑いしており、申し訳なさそうだ……。

そして東誠は、もう一人の方に……彼女を向いた。

「それと、“エイミィ・リミエッタ”だな。オペレーターまでわざわざ来るのか？“管理局は相変わらずの人手不足”のようだな。」

「えーと……なんで私のことまで知っているのは気になるけど……随分きつい言い方ですね……」

「おいしいー！」

「そんなに慌てないでください。まだありますから。」

話は変わり、台所へ、東誠の部屋の前で4人のうち、“1人”が睨み合っており、あまりも空気が重たく、居づらかった。
では、何故台所に？、答えは単純。

――時間程前……

「何なさってるんですか？、皆さん？」

『？』

その声に一同にが反応、声のする方向に視線が行く。

そこで若干、顔を青ざめかけた・・・（主にリンディと川が・・・）

「何と申されればいいでしょうか・・・そう、殺気と申されればいいんですかね？、突然リニスが武者震いし出してこちらに来ましたし、川さんはキッチンには居ませんし、仕方なく、代わりに下ごしらえをしていたら、ここ周辺からとてつもない威圧がキッチンにまで来ましたから、・・・。」

『・・・』

あまりにも淡々と述べているラルク、一同、怒っているのではないのかと思うほどに。

しかし、無表情で顔色を変えずにいるため、真意が読めない。

ラルクはそのまま、彼らを見ながら、

「・・・まあ、立ち話もなんですから、台所に来られますか？そろそろ朝食の支度も整いますので、」

『・・・はい。』

一同ラルクの提案に“賛成”、・・・いや、“従った”。

奥底から、何やら恐怖たる根源が・・・湧き出できたため・・・。

.....

と、いう風な状況が出て為、今に至っている。

「あらまあ、エイミイったら、そこまで声を上げなくても」

「でも、か、リンディさん、これ本当においしいんですよ。」

「どれどれ？、あらおいしい　ラルクさんってホントお料理上手なんですね。」

「そうですか？、いつもに比べらそうでもないのですが？」

『……………』

随分と家庭的な雰囲気全開にしている……………。
ちなみに今日の朝食は、

トースト・スコーン、カニ玉オムレツ、野菜サラダ、クリームコロッケ、リンゴ他etc……………。
ごく普通の家庭的メニューであるが……………、一部は空気が重く食べていた。

『……………』

- - スーン……………

「あの…ラルク君？、あの二人どうしたの？」

あまりにもあの二人、東誠と川の周辺空気が重かったので、エイミイはラルクに来てみた。

「……………まあ、いつものこと”ですから、あまり気になさらない

漸く二人が喋り出したと思ったら、いきなり愚痴を言い始めた。
この二人……ラルク君は“いつものこと”と言ってたけど、
こんなことが毎日起こってるの？しかも、ベクトルが低くてドス黒
いオーラが背中から全開だし、もしかしてあたしたちタイミング悪
過ぎてきちゃった!?

「あの、二人とも？」

何とかこの場を打開しようとして声をかけてみることにしたエイ
ミー。

そのとき、

「ニャー」

『?』

猫の鳴き声がして、リンディとエイミーは足元を見ると、山猫こ
と、リニスがいた。

「?、どうしたの？」

リンディはその猫を抱え出すと首を曲げ尋ねる？

しかし、はたして通じるかどうか……

「そういえば……言い忘れがありました。」

『!?!』

いきなりの声、しかも、“さっき出て行ったはずの声”、若干恐

怖を覚えながら二人は振り向くと、

「川さん、今日はさすがさんの家に行かれるのでしょうか？支度の方は良いですか？」

「あつ、」

その言葉を聞くと川はいきなり正気に戻り、時間を確認した。

「あ、わ、私支度してくる！」

慌てて支度をしに川も出ていった。残るは・・・

「・・・東誠さん、このお二方、東誠さんに用があるようですよ、後はお願いしますね。では、」

・・・パタン・・・

『・・・』

いったいどうやって戻ったの？

二人の思考はそこで一致していた。音をたてず、気配を消し、気づけば背後に・・・
いったい？

「・・・まあ、確かにそうだな・・・。」

『！！！』

声がした。今の一言で正気に戻ったのか？・・・

「まあ、そんなところだ。」

「……」

尚且つ、こちらの考えを読んだ。悟りで持っているのか？

「余計な考えは持つな。それより、こんな朝早くから何の用だ？あの時“断る”と言ったはずだが？」

「……そうね。本題に入りましょうか……」

「そうですね。」

「……その前に確認だが、“ここで会話して大丈夫な内容”何か？」

『……』

それを聞くと、二人は只、黙り込んだ。

それを見ると東誠は、ため息をし、

「はあー、片付けが終わるまで待つてくれるよな？」

「ええ。いいわよ。」

それを聞くとリンディは了承し、東誠は片づけをした。そして、

「川！、俺も出かけてくるから、閉じまりの方頼むぞ。」

「はあ い」

東誠、リンディ、エイミイは玄関を出て、裏口に回った。

「……で、アースラに行けばいいのか？」

「ええ。」

「……わかった……」

東誠は確認すると、藍錆色の古代^{エンジン}ベルカ式を展開。
そのまま、3人転送した。

「あれ？、ここって？……」

“無事に転送を終えた”3人、だが、……“転送した場所”が……

「ここは、“訓練室”？」

そう、ここは戦艦内でも配備されている武装隊がよく使用している訓練室。

では、何故ここに転移した？

「……俺が協力も就く気もないこと百も承知のはずだ……そう
うだろ？、クロノ執務官。」

『え？』

東誠は真正面を見ている。二人も東誠の視線を追って行くと、自分らのよく知る、この戦艦の、チームの執務官がそこに居た。

「ああ、君もそう思うかと思ったからね。」

クロノはそう言った。それはつまり、俺が訓練室こいに来ることが分かってたということ。

まあ、俺もお前がここに居ることを踏んでいたが、

「で？、その上で聞くが、お前は・・・“どうするんだ”？」

「・・・・・・・・」

「俺がお前らに協力する気も就く気もないことは分かってるんだろう？その上でお前は、俺に何をするんだ？」

「・・・まずは君のその減らず口を黙らせる・・・・・・・・その上で、嫌顔でも協力してもらおう」

「ほう・・・・・・・・」

クロノ・・・バリアジャケットを装着済みつつうことはやっぱりそのうということか・・・・・・・・。

まあ、その前にだ・・・・・・・・

「・・・・・・・・リンディ、エイミィ、悪いが訓練室こいから出てくれ。なるべく派手な戦いは避けるからよ・・・・・・・・。」

「……………」

「…分かったわ。」

リンディとエイミィはそのことに了承、訓練室を後にした。

…あの子も頑固だからね…………。

でも、クロノくん、なんであそこまで…………

リンディとエイミィはそんなことを考えながら、ブリッチに向かい、訓練室をモニターしに向かった。

「さて…………で、俺が勝ったら、お前はどつするんだ？」

「…………君のことは身をひくよ…………だが、僕が勝ったら…………」

「…………まあ、考えといてやるよ…………最も、“情報を提供”する気はねえぞ…………。しなくてもお前らは知っている“はず？”だからな。」

「…………どういう意味だ！」

知っているはず？…………まるで今回の事件に関して“全部僕たちが知っている”言い方…………。それが君の目的なのか？

いずれにしても…………

「言葉通りだよ…………“管理局が知らない”なんて言えわせる気は“あり得ない”んだからな。」

東誠はそれを言うと構えた。いつもの槍を出さず、素手で…………当然、それを見たクロノは…………

「君は相当僕をなめているようだな？」

「クロノもS2Uを構えた。」

「見くびる気は無い……だが……」

「……」

「……羨のなつてねえガキには説教しねえとな。“事件の解決しか考えていねえ”奴は特にな！」

「!!、君は！」

クロノは感じた。背中にくる寒気を……東誠かれの威圧を……正直意識を持って行かれそうだ……。だけど。

「東誠流寺……推して参る！」

『……ほんとに君も変わらないものだ……』

……瞬……

「!!」

東誠は間髪いれずに瞬間的な移動で急接近!

真正面に現れ、クロノ“は”その動きに反応しきれず、

……瞬!……

一撃をくらはらずが、東誠はまた瞬速な動きで“後退”した。

そして二人は互いの距離を保ったまま構えを崩さない。

「……そう言えば忘れたな」

「……何をだ？」

東誠はジリジリと前進し始め、

「お前の魔法、“蜘蛛の糸”みたいなトラップを使っているってことだよ。」

「“蜘蛛の糸”……それは訂正してほしいな。」

『ステインガー・スナイプ、ステインガーブレード・エクスキューションシフト』

「……否定したくても、“クライドと同じ戦術”使っている時点で否定要素がない。」

- 瞬！ - 撃！ -

「ぐは！」

- ドオオン！！！！ -

……体何が……

クロノはわけが分からなかった……いきなり“横”に飛ばされたのだから……東誠は今の一瞬、ステインガーの群れに捕まっただけなのに……

「まず“そこ”だな？」

『・・・なに？』

一撃をくらい、壁にめり込んでしまったクロノだが、どうにか這い出てきた。

“そこ”とはどういうことだ？

「単純的に、全方位攻撃で来るのは“悪い選択”ではない。しかしだな？、その全方位が“バカ正直すぎ”る。」

「どういうことだ！」

言っていることが分からなかった。“バカ正直すぎる”だと！自分の攻撃を“あっさりかわして”そんな・・・

かわした？・・・

「気づいたか？」

「！」

まるでクロノ疑問を悟ったかのように・・・
『・・・あなたは面倒ごとによく首を突っ込んでいましたからね。昔から”、相手にヒントを出し過ぎてません？』

『うるせーよ・・・てか“スペル”・・・お前も話し方が変わったな・・・』

まあ、いいか、そんなことは・・・。

そして、東誠はクロノに視線を向け、

「なんで今のが“かわされた”のか分かるか？」

「……………」

「執務官なら、“リーゼ姉妹にしごかれた”お前なら分かると踏んでんだが、」

「……………」

うるさい！…………それがなんだ！

「お前の攻撃は直線すぎるかつ、時間差攻撃は無く、無駄が多すぎる。気づいているよな？まあ、軌道を変えたがらの攻撃は良しとしてだ、」

「……………」

「…………だがなあ？、“横からの攻撃に対してガラ空き”？、大抵は死角にその“畏は仕掛ける”のが妥当だ。尚且つ、“魔法を使っていない状態”の俺に出し抜かれる、そして、俺の戦闘スタイルを“見誤っている”ようじゃ、この先やっていけるか？」

「そんな……………」

「はっきり言う、無理だ。」

東誠は、クロノの欠点を並べる。情け容赦なく。

しかし、それはあくまで東性の身体能力故の結果にすぎない。

“大抵の相手”なら……

「今の俺以外の相手を想像したか？」

「な、」

「……甘いんだよ……そんな考え方は、そいつは“素人”の考え方だ。」

――轟！――

「ぐう！」

あからさまに動揺しているクロノに東誠は容赦なく鳩尾目掛けてひざ蹴りをかまし、見事なばかり直撃！。20メートルは吹っ飛んだ！

「いつまでパワーとしてんだ？」

――撃！撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃！！！！――

さらに追い打ちをかけるように、東誠はクロノをひたすら蹴りをかまし続ける。

真上に吹き飛ばされたと思ったら、今度はその斜め右から、そのまま落下して行ったと思えば今度は落下地点から真横に飛ばされ、以後その繰り返しだ。

「そうやって言葉に揺さぶられ、動きは鈍り、棒きれみたいにつっ

たどる・・・そんな“生半可な覚悟”で俺に勝てるつもりなのか？」

- -轟！ -ドオオオオン！！！！ -

止めの一撃と言つべきものが炸裂！

クロノは真上から一直線に垂直に落とされた。

煙が上がり、東誠は難なく着地し、ジイっと、クロノの方を見ていた。

「・・・こんなもんか？おまえ？・・・」

東誠はそう問いかけるが、クロノの反応は無い・・・

「・・・“力”ってのは魔力がモノを言うのでは無い。それは努力して来たお前が一番分かってたと踏んだんだが、期待はずれか？」

「・・・」

「たとえなあ、強大な力を有していたとしてもだ、それに勝るほどの精神・心の無いものが使えば、それは悲劇と絶望しか生まねえんだ。お前の場合は、その精神が勝っている側だと思つてたんだが？、そんなんだと、お前は管理局に居ても何にも“守れはしない”。」

『・・・づるわいよ・・・』

「ん？」

念話が聞こえ、やっと起きたかと、東誠は反応した。

『……勝手に人のことを言ってくれてんじゃないぞ!』

そうすると、瓦礫のから伴出てきたようにクロノが出てきた。最も、S2Uを杖にしないと立てないようだが、

「……だったらどうする？少しは冷静に戻ったか？」

「……」

その問いかけに無反応のクロノ、しかし、魔力が高まっているのが分かる。

「……やれやれ、仕方ない。」

「ブレイズキャノン!!」

……ドオン!……

「もう少し相手するか、第二ラウンド突入……」

そして東誠はクロノのブレイズキャノンを正面から叩き伏せて……

「……その頭冷やしてやるよ……」
ランサー・ドール・プラット・リード
「氷劉血餓」

第8話 思いと……（前篇）（後書き）

どうも、今回は色々投稿が遅れまして申しわけありませんでした。

ラルク

「しかもそこで、……東誠さん……」

川

「それはちょっと……」

東誠

「文句言つな！、あれはあれで仕方ねえんだよ。あそこまでガタ落ちとは思わなっただんでな」

後半はどうでしょうか？

ラルク

「まさか、私の編まで有りませんよね？」

……どうでしょう？

川

「今の間は何？」

色々同時進行で行くと難しいので、今の間は候補にしています。もう一人の主人公も出さないといいけませんし。

東誠

「ま、頑張れよ。」

はい、では皆さん。

一同

「また次回」

次はなるべく急ぎます。

第8話 思いと………（後篇）（前書き）

思いのぶつかり合い？

信念か、判断か、それはその者にしか分からない。

東誠流寺、はいつたい？

後編始まります。

第8話 思いと……（後篇）

「……ランサ・ドール・ブラット・リード氷劉血餓……“初極”」

周囲が変わる……天井が、地平が、壁が、瞬く間に変わっていく……。

天井からは“雲が蔽い吹雪となり、雷がうねる”……地平はその吹雪が積りながら“瞬く間に凍っていき”、壁もまた“凍っていく”……。

「……」

クロノはそれを見て無反応している。

いや、“脳が正常な判断をしていない”と言った方が正しいか、“あまりの怒り”で。

「……相当……頭が煮えたぎってるようだな」

俺はあいつの様子を見て、嘆息した……。まあ、少し言い過ぎたか？

「……ですね。僕でもあそこまで言うことはまずありませんよ。あなたは本当に“垂直投下型”ですね。」

しかし、殺気だっている空間で平然と話をするというのは、この2人（？）も尋常ではない。

“能天気”と“大雑把”、以外と相性がいいのか？

「……いちいち絡んでくるな。だが、“過去の出来事”だけじゃ

ねえな。あいつの様子は？」

『多分？、あなたがした“数々の件”が含まれていますよ。』

「……確か、“極寒の檻”だったな？。そういや、出るのに2時間かかったって聞いたな。」

『それは流石にやり過ぎでは？』

「……まあ、もうやつちまったことだ。それより、」

『……ですね。』

……クロノ様がおかしい。

いつものあいつならまだ冷静さが保っていられたはず……俺の言ったことだけか？、“それとも”……

「君は本当に苛立たせるよ……」

「……」

「なんで君が“僕の過去”を知っているのか……なんで“父さん”のことを知っているのか……なんで君にそこまで言われなければならぬのか！―！」

「……」

殺気全開……今までのことが詰まりに詰まっていたようだ。表情が険しく、恨みがましい目でこちらを見ている。

「ぶちのめす!!」

怒り・・・それしか表現のしようがない。

S2Uを上げ、俺に向けてきた・・・。

当然、砲撃の構えているが、だが、“俺に通用しない”ことはさっきので分かったはずだが、今度は何する気だ？

「・・・ブレイク・・・」

- - パリン! - -

「!!」

突然、魔力が“凍った”・・・砲撃のために先端に集束させた魔力がだ。

吹雪が止まない中、亜然としているクロノ。

そして、S2Uを構えていた右腕も凍った!!

デバイスごとである。これは!

「君の魔法の仕業か!？」

「・・・ああ。お前は“一度経験してる”と思うが？」

しかし、それでも飛行魔法を使い、東誠に追撃をかけようと“した”。

だが、

「!!」

体が“上がらない”！、よく見ると、“足が凍っていた”。
いや、正確には“床と一緒に凍っていた”が正しいか、・・・ど
ちらにせよ、“足と床が固定されている”ことには変わりないが。

「今更気づいたのか？」

東誠はゆっくりとクロノ方へ歩み寄ってくる。
一歩、さらに一歩と・・・

「ちっ！、君は！」

東誠は表情を変えず、ただジツとクロノを見ながら言った。
クロノはそんな東誠を睨んでいた。

しかし、“そんなこと”を気にしている場合はなかった。

- - ガクガクガクガク - -

「.....」

“寒い”！.....東誠の魔法で正気に戻ったまでは良いが、気が付いたら“とてつもなく寒い！！”。な何故こんなに寒いのか？
「言い忘れたが、この訓練室内な、“氷点下200度”ってとこだ。お前の場合はフィールドを張っているかどうかは知らんが、早めに降参した方が賢明だぞ？.....このまま死にたくは無いだろ？」

東誠はクロノの目の前まで来ると“平然と”クロノに告げた。他人事のように.....いや、氣遣っているのか？。

しかし、クロノは“東誠の服装”に疑問を抱いていた。

東誠の服は“普段着”、つまり“ジャケットや甲冑”を“着いない”。

しかも今の季節は“春”、海鳴の海上の時ならいざ知らず、普通に考えたら東誠の方が持たないはず、では何故、彼は耐えられ、平然としてられる？。

その一方でクロノは焦りを隠せなかった。

自分の周囲を見る・・・考えても見よう、訓練室は“それ相応の広さ”がある。

当然、“結界”や“障壁”も展開している。

だが東誠の魔法は、“それらを丸ごと”氷付かせた。

「もう一度言う・・・降参しろ・・・でないと、死ぬぞ。」

一方、その戦闘(?)をブリッチチで見ていた一同は・・・

『・・・』

言葉が出てこなかった。

それもそのはず、クロノがあそこまで押されるとは予想しなかったからだ。

ましてや、東誠の実力も異常過ぎる。

「艦長・・・」

「・・・ええ。」

流石に“それ”を見ていたエイミィとリンディは顔色が悪い・・・
血が行き届いていないほど・・・真っ青だった。
このままでは、クロノが！

「急いで訓練室に通信をつないで！」

「は、はい！・・・え？」

エイミィが訓練室に通信を告げようとしたが・・・何故か“焦り出した”。
必死にパネルを操作している。

「どうしたの！？」

「つ、通信がつながりません・・・」

「ええ！！！？？」

「おそらく、東誠・・・の魔法が原因で、機器が壊れたかと・・・」
「・・・」

それを聞くと、リンディたちの焦りは急上昇！。このままでは本当に手遅れになってしまう・・・。
しかし、“今の訓練室”に入れるかどうか・・・だが、時間の猶予は無い・・・。

東誠の魔法・・・実際のところ、彼は訓練室内全域を凍らせている。おそらく広域魔法の部類だと思われるが、それでも強力すぎる・・・

「・・・私が行きます。医療班は準備を！」

そう言うとリンディは急いで走り出した。

途中、ブリッチにいるメンバーが止めようと叫ぶが、

「・・・クロノ」

そこに走っていたのは、戦艦の艦長ではなく、子を想う母親であった。

「で、結論は？」

「クッ！」

再び訓練室へ、

そこでは、もう膝まで凍っているクロノと何処も凍ってもおらず、平然としている東誠がいた。

訓練室内ははまだ吹雪は止まず雷はうねる。

両者は互いの睨み合っている。

しかし、体力・精神面では、クロノの方が限界か？

「速く結論を言ってくれねえか？・・・顔真っ青で、息が荒々しい。」

どう見てもお前限界だろ？」

「……うるさい。」

弱々しい声で答えるが、正直かなり限界だ。
少し目もかすんできた。

東誠はクロノの様子を見るが、まだ諦めていないを言うのが目を
見てすぐにわかり嘆息していた。

（……いいかげん諦めてくれ。お前の“命”持たんぞ……）

「……くっ！」

「……」

クロノは足に魔力を込め、無理やり破ろうとするが、

- - パリンパリン!! - -

「!?!」

魔力を込めた足の部分がさらに凍った。

そして腰の部分まで凍り始めた。

東誠はそれを見るや否や

「…… “一度体験してる” と言ったはずだぞ？」

「何？」

一度体験していると言葉に眉をひそめながらクロノは東誠を見た。

「それは“極寒の檻”の桁違いの奴でな？。当然、“魔力も凍らせる”。」

「!?!」

「後お前、気づいてるのか？氷漬けになっている“足の色”？」

「足の色？」

クロノは東誠に言われるがままに自分の足を“見た”。
そして、驚愕した！

「な・・・に・・・？」

そう、クロノを氷漬けにしている足が・・・「赤く染まっていた」。

「な、何なんだこれは!？」

「・・・それは“お前の血”だよ」

「なに!？」

東誠が唱えた魔法で既に下半身までが氷漬けにされているクロノ。そして、その氷からは“自分の血”で赤く染まっているとのこと、いったい何がどうなっている!？

「簡潔的に言うとな、俺が唱えた魔法、ランサ・ドール・ブラッド・リード氷劉血餓はな、その字の「

とく、“血を喰らう魔法”だ。」

「!?!」

「さらに付け加えると、吹雪に振ってる“雪”があるよな?“本来”なら、“その雪に触れた部分も凍る”。まあ、お前の場合は前もってフィールド系の魔法を張っていたようだから大事に至ってねえが、“本来”なら“2、3秒かからずその場で氷の虚像(血を吸い上げ染まった真紅バージョン)が出来たぞ?”」

「き、君はそんな魔法を僕に使ったのか!?!」

「お前の頭冷やすのに他に思いつかなかったのな。とはいえ、この魔法は魔力も凍らせる。そして、凍らせたところから生き血をすする。とはいえ、・・・まだ“初極”なのだがな。・・・解除。」

- - - パリン! - - - パリン! - - - パリン! - - -

「よつと、」

「???」

いきなり東誠が魔法を解除した。

そして、気が付いたら僕の肩を支えていた。

・・・訳が分からない。

そして、床に寝かされた。

「・・・君は、」

「黙ってる。治療ができません。」

そう言うと東誠は保温用の結界と治療用の結界を合わせて展開した。

そして右手をかざしながらさらに治療魔法をかける。

「……たく、“半身麻痺程度”で済むと思ったんだが、やっぱり“左腕折れてた”か。」

「それをやった君が言うセリフか？」

「……さっきの技使った時、お前腕がぶら下がってたからな……。
“一応”加減したぞ？」

「“加減”？あれでか？」

あれで手加減……見えない動きで、僕をタコ殴りにして……
……あれで手加減した？
信じられない。とてもあれ手加減したと……

僕は悲願まがしい目で彼を見た。

その視線に気づいたかのように東誠は、

「……事実俺は魔法を“一回”しかつかってねえぞ。」

「なに？」

それを聞くとクロノはふと先ほどの戦闘（？、一歩的なイジメ？）を思い出す。

……確かに、自分の血を吸う魔法以外使っていない？。

だが、“その魔法を使う前までの攻撃”は……

「それじゃあ、最初にしてきた攻撃は？」

「あれは“普通に動いただけ”だ。……さてと、治療も終わったぞ。」

「そんなバカなこと……ぐあ！」

治療を終えたことを告げられ動くこうをしたが、体が筋肉痛のよう
で体中に響き渡った。

「て……御前なあ、傷や骨折の手当はしたが、あれだけの寒さ
で体中の筋肉が強張ってんだぞ？体温めねえとどうしようもならん。」

「君は……」

「クロノ！」

『？』

突然の来訪者に声のする方向に顔を向けた東誠とクロノ、そこに
居たのは、

「来たのか？、リンディ？」

「東誠さん！、あなたいったい何をしてるの！」

「……すまない。それより、医務室はどこだ？治療は終わったんだが、低温状態だと一向に筋肉の方が回復しないのでな。おまけにこのままだと凍死するぞ？」

「話を逸らさないで！」

「逸らしてねえ。こいつの安否を優先するならの話だがな。」

激しく睨むリンディとそのことに対して全く気に掛けない東誠、ただ一人、取り残されたクロノにとって非常に居心地が悪い空間である。

まあ、東誠が保温結界を解いていないことがせめてもの救いか。

「あの、艦長……僕の方を……」

クロノ一声でリンディはクロノ方を見て、その次に東誠の方を見た。

一瞬睨みつけていたようだが、

「……そうね、分かったわ。東誠さん、クロノを運んでくださる？」

しぶしぶ了承した。

東誠に向けた笑顔は引きつっていたほどだ。

「……やれやれか、」

場所が変わり、医務室。

そこに居たのは、ベットで寝ているクロノ、隣に部屋に居る、東誠、リンディ、エイミィの3人である。

「ドクターの診察では命に別条は無いとのことです。」

「そう……」

クロノの診察の結果、とりあえずは一命を取り留めたとのこと。しかし、問題も残っていた。

「ただ、貧血がひどく、筋組織が強張っているため当分間は安静だそうです。」

「……」

エイミィの報告を受けると、リンディは暗い表情を隠せないまま、下にうつろくまっていた。

その報告をしたエイミィもまた元気がいつもの元気がない。

かわって、東誠は医務室に来てから壁に背を掛けたまま立っている。物静かで、行き場のない空気の重さが漂っていた。

「……すまなかった。」

『……』

「あいつ……あそこまでいっていたとは思わなかった……」

「……いいのよ。“そんなこと”は……」

「……………」

“そんなこと”？…………あくまで任務を優先するのか？、“こいつも”。

「でも、なんであんなことをしたのか、聞かせてくれる？」

「……………」

東誠はリンディを見ると、そこには、悲しげな笑顔をしてくる……母親の顔、決して、提督の顔ではなかった。

『…………誰しもが本心を、今の答えを聞きたいことは良くあること。…………流寺？』

…………分かってるよ。言われなくてもな。

気づけば、エイミイも俺の方を見ていた。

その答えが…………聞きたくて。

「…………その前に聞きたいことがあるんだが？」

「ちよっ、いくらなんで……………」

「エイミイ……………」

エイミイが反対しようとしたが、リンディが割って出た。

その眼は黙っててと告げていた…………エイミイは渋々それを了承。

彼女のは見ていた、リンディもまた“抑えていること”。

「それで、何を聞きたいのかしら？」

「……俺が“極寒の檻を使った後”と、最初に“俺の家に来た後”、クロノ様子はどうだったんだ？」

「……どうして、そんなことを？」

「……モニターしてたんなら“分かっているはず”だが？」

「……」

「あいつの戦術は本来、“力任せにやる戦術”じゃない。状況判断、バインド、ステインガーによる指示かつ後方・前線型のはずだ。その戦術を成し得るには、冷静さが必要だ。つまりそれは、“戦術は魔力の差でない”こと示していることなる。だがさっきの戦闘はどう考えても“正反対”だ。冷静さは無く、攻撃にキレがなかった。俺の活を入れたにしては、あそこまでなるとは考えにくい。他にも鬱憤が溜まってたんじゃないのか？」

「…… “よく知ってる”のね？、あの子のこと？」

「まあ、“色々とな”。で、どうなんだ？、実際のところは？」

「……」

それを聞くをリンディは苦笑い……エイミィは視線を泳がせていた。

「……おい、それだと話が進まねえぞ？」

逃がす気なく、東誠は告げてくる。

まあ、“本人が気が付かないこと”だからこそ、仕方のないことなのだが……。

「……常識が通用しない”ってことかしらね？」

「……はあ？。俺があいつをタコ殴りにしたときの動きか？」

そんなことを聞くと、リンディは首を振る。

「あなたのこともそうだけど、ラルクさんのことね。」

「ラルク？……まさかあいつに何かしたのか？」

「そうね、あの時クロノがいきなり魔法を仕掛けてきたってことぐらいかしらね？」

思い出しかのように苦笑い気味に答えるリンディ。

しかし、東誠の反応はよろしくない……。

「何で疑問形で答えるんだ？、しかもなんでラルク魔法を使った？」

それを聞くと、東誠から威圧が……殺気が押し寄せてきた……。

リンディとエイミィは若干、距離を取り始めたが……

「速く理由を答える……でないと俺の方が答えられないだが？」

「……そ、その何と言えればいいかなあ……」

エイミイは笑いでごまかそうとしているが、・・・

「・・・答えは？」

東誠もさることながら、逃がす気は無かった・・・というよりもその策は無謀である。

「理由は多分“あなた”ね。」

代わりにリンデイが答えた。

その答えに東誠はチンプンカンプンのようだが？

「どついう意味だ？」

「“あなたがあれだけの魔法を使った”から、“ラルクさんもそれ相応の魔法が使える”と思ったのよ。でもその結果は、あなたがクロノを“最初に叩きのめしたあの動き”で終わったわ。」

それを聞くと東誠は呆れた・・・深くため息をつくくらいに。

「・・・お前らなあ・・・リンデイ、あの後話したが、“ラルク”も“川”も“魔法のことは全く知らない”んだ・・・無論“俺が力を持っている”こともだ。頼むからあいつら巻き込まんでくれよ・・・で、理由はつまり、“魔法抜きであれだけの動きをした”ってことか・・・傍迷惑な理由だな。」

「・・・ええ。それで？」

「？」

「あなたの答えをまだ聞いてないのよ？」

そう、東誠が質問した内容は答えた。

次は東誠が答える番である、ただ、タイミングが場違いな気がするが、

「……“試した”」

『え？』

今、答えとしては聞いてはならないことを聞いた気が……

「あの……いまなんて？」

「だから“試した”って言ったんだよ」

『……』

“試した”……何を？……そんな理由で“あそこまで”のことをしたの！？

「あいつがあそこまで過剰になるってことはそれなりの理由があるってことだ。まあ、あいつが“何のため”にあそこまで意地を張るかまでは分からないままだが……たく、“ユーノ”とは大違いだな。」

「えっ……と、つまりはそれが理由？」

「……まあ、流石に氷劉血ヒヤウチケツ餓ウツまで使ツつ気は無ムかったさ。」

「じゃあ！どうして！」

その答えにエイミーはもう抗議！。リンディもまた、攻めの目を向けていた。

まあ、それは当然であろう・・・血を吸う魔法を使ったのだから、しかし東誠はそのことをあまり気にせず、

「・・・話は“最後まで聞け”・・・、あいつをタコ殴りにしてたときに“気づいた”んだが、あいつの“バリアジャケット”の中に“これ”があつたんだが、どういうことだ？」

そう言うのと東誠はポケットから“珠”を取り出した。

そう、あの時襲撃者が持っていた“珠”である。

『・・・』

それを見てリンディ、エイミーは茫然・・・これは何なのかと分からない表情をしていた。

その二人の顔を見て、東誠は二人の状態が分かったようで・・・

「・・・これを何処で手に入れたか後は“あいつから直接来てくれ”・・・最も、“覚えてれば”のはなしだが。」

東誠はそう告げると、医務室から出ようと出入り口へ行った・・・

「え？」

「ちょ、ちょっと待って！、それって、どういう・・・」

二人は慌てて東誠を追おうと動く、彼は振り向かず立ち止まり、

「それとだ、俺はお前らに協力する気も就く気も無いとからな」

「ちょっと待って！それは、」

彼女たちにとって、今の東誠は必要と以前から判断している。元々、そのためにここに呼んだのだが、

「それは“お前らの都合”だ。．．．いちいち管理外世界にミッドの法ら管理局の理念やらぶつけてくるな！お前らの行動すべてが“次元世界の相互意思”じゃねえんだからな！」

『．．．．．』

確かに東誠の言ってきたことは正しい。

しかし、今地球で起きていることは彼にとっても見過ごせるものではない。

それならいつぞ！

「管理局に就く＝守るじゃないんだ。俺を当てにする時点で誤りだ．．．それと一つ忠告だ」

「え？」

「リンディ、“ヘイムダム”の奴から聞いたと思うが、アースラ（おまえら）、“今回の件に関わるな”．．．どうにも“怪しい行動”が多々あるようだな」

「ちょっと待って！、それってどういふこと？」

「“言葉通り”だ・・・世の中、“すべてがさらけ出されている”わけじゃねえんだ。特に“不都合なこと”はな。」

・・・シュー、ボタン！・・・

「え？、と、東誠さん！」

エイミィは慌てて医務室から出るが、そこにはもう、“東誠は居なかった”。

そして、自宅へ、

東誠は転移し、自宅の裏口の方に居た。・・・少し嘆息していたが、

「たく、またとんでもないことになったな。」

『しかし、どうするんです？彼等（ア・スラ）は？』

ゆっくりと玄関先に向かいながら、話をする“二人（？）”

「・・・まず間違いなく“動くな”。なのはにフェイト・・・そしてジュエルシードに“あの組織”・・・みんな動いちゃってるからな。」

『・・・どうするんです？』

「……まあ、騙し騙しやっていくしかないだろ？……それに、“時間もねえ”からな。」

『流寺……』

「……“スペル”、“あいつら”から連絡は来たか？」

『……あなたがタコ殴りにしている時に来ましたよ。“あちら側も動く”そうです』

「……そうか。こっちも（……）」

「東誠さん！」

「ん？」

玄関先の階段から聞こえる声、しかも、あの“声”は、

「川、帰ったのか？……て、おい、その背負っている“金髪少女”はなんだ？」

東誠は川ではなく、川の背負っている“少女”を見ながら言った。明らかに知っている人物である。

「え、と……下の方でリニスを見るなり倒れて……それで、」

説明があやふやになってきている……実を言うと川は、短めの説明は問題ないが、長くなりそうな説明は苦手なのだ。

しかし東誠はその内容だけで理解したようで、

「それでここまで運んだ？、……………一応聞くがそいつの名前は？」

「さあ？」

呆気カランと答えが返ってきて、東誠は頭を押さえた。

「……………何も知らないでここに連れてくるか、普通？」

「え、でも……………」

川は背負っている少女の方を向きながら言うと、東誠は嘆息し、

「……………分かった。ただし、そいつの親に連絡が付くか、回復するまでだぞ？」

「は、はい」

何故が喜びながら、川は急いで“少女”を運んだ。
リニスは一瞬、東誠の方を見たようだが……………

そして、川が中に入ったのを確認すると……………

『本当に、面倒事によく当たりますね。流寺』

「うるせえ、言ってる俺が悲しいわ。」

『ですが、必要な情報は手に入るのでは？』

「川になんて言えばいいんだ……おまけに“ラルク”ももう直
き帰ってくるからな……」

そう、東誠は悩む……川が“魔法”のこと、“あの子”のこと
を知らないのがここにきて仇になった。“金髪の少女”、“フェイ
ト・テストロツサ”を連れてきたことによつて……

『そう言えば流寺？、プリントの方は？』

「ああ……」

第8話 思いと……（後篇）（後書き）

どうも、イクス・スタンスです。またいろいろとややこしいこととなりましたが、どうかそこは穏便にお願いいたします。

東誠

「穏便ってな！、益々ややこしいことしてくれてんじゃねえぞ！作者！」

まあ、だからそこは抑えて。

東誠

「大体なあ、あの技ださせる時点で相手に死亡フラグ立たせるようなことするな！」

ラルク

「でも見事な活入れしましたよね？」

東誠

「ぬっ！」

川

「しかも、何か良い人のようで悪いような、自己中心的というか……」

まあ、もともとこの設定で行こうともいましたから。

東誠

「……で、どうすんだ？この先。」

そこなんですよ

一同

『？』

いえ、折角のところ水を差すかもしれませんが、次回はラルク方面で行こうと思います。

川・東誠

「ええ！？／な！」

ラルク

「どういづことですか？」

いえ、自宅編であたのこと書こうと思いましたが、少し無理があつたので同時刻進行とさせていただきます。

東誠

「いい加減にしろよ！、おいー！」

まあ、そこは穩便に、また少し時間がかかると思いますがよろしくねお願いします。

ラルク

「仕方ありませんね。」

川

「うーん、少し残念な気がするけど、」

一同

『また次回』

東誠

「作者アアアア……!!……!!」

第9話 対話（前篇）（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

すみません、最近いろいろ考え事をし過ぎて投稿が遅れました。

あまりご期待に添えられるか分かりませんが、どうぞ。

第9話 対話（前篇）

「……最近なのはさんのことですか？」

「私は……大丈夫……」

『恐らくこの者は……』

「……あたしは……あの子のこと……」

「あなたには分からないわ!……」

皆、己の本心を押し殺し、その答えを見つけ出せないでいる。ならばそれは、どう見つけ出せばいいのか……

その答えは……

『始まりは……皆同じかもしれぬぞ……』

第9話……始動

「最近なのは疲れてるみたいなのよ。」

当然、桃子さんが言ってきた……私はその一言にどう反応したらいいのか……分からず、

「はあ?……」

とりあえず、曖昧な返事を返した。

しかし、その中というのは、“そんな返し方”を許す者は然う然ういない……。

故に、

「いや、“はあ? ……”ではないんだよラルク君?。君も何か心当たりというのは無いのかね?」

なのはの父こと、士郎も追撃、いや、カマをかけてくる。

いえ、本当に“知らない”のですが……そんな私にあなた夫妻は何を答えると?」

「……いえ、こちらの知る限りでは全く。」

とりあえず、この現状を打破しなくてはどうしようもありません。

この“説明”で納得していただければ助かりますが……

「もうー!、父さん!母さん!、仕事して!ただでさえ今日は恭ちゃんがいらないんだから!」

……美由紀さん、助かります。

何故“親バカ”というのは、こつも喰らいついていくのですかね?

……何故こうなった……

時間は昼過ぎ、いつものことながら、翠屋はこの時間は特に忙しい……。

ラルクがここでバイトを“始めた時”なども目が回るほどに……

・

「・・・まあ、美由紀さん。“あの2人”なのでこちらの方で仕事しましょう。ケーキ、シュークリームできたので配ってきます。」

「あ、ごめんねえ。いつも。」

「いえいえ、流石にもう慣れましたよ。伊達に“10年”もやっていませんから、では失礼・・・お待たせしましたー！」

「ほんと、今日は彼が居てくれて助かったよ・・・」

美由紀はラルクが今日いてくれたことに大助かりの様子、そして一息を入れ、

「やっぱりなのは、何かあったのかしら？」

「うむ、なのはのことだから、・・・まさか！」

「あれ？、父さんはもうそんなこと考えてるの？、いくらなんでも速すぎよ〜。」

「もうー！、父さん！母さん！仕事して！注文詰まってるんだから！」

父と母の親バカ行動に悩み続けていた・・・。

だが、そこにはもう一人、頭を悩ませていたものが居た。

「・・・いつちまで聞こえているのは気づいてるんですかね？」

「この子持って帰りたいねえ」

「でもあの子のなんだって言うし、また来た時に貸してもらおうよ」

レジ（なのは）の方を見ながら、お構いなしとユーノを弄っている客人たちであった。

「あ！、良いねえ、それ」

「……ユーノ……不幸かつ、幸運な奴……」

（どこがあああ！！！！！！！！！！納得する暇があるなら、そんなこと言っていないで助けてよー！！！！！！）

何やら声が聞こえましたが、この声の主は無視します。
それが人気者の運命さだめであるから……

「あははは、本当にユーノ、人気者（？）だね」

美由紀は配膳をしながらユーノを見ていた。

本当に楽しそうで、自分がやりたいと、その目は語っていた。

「……」

ラルクはそんな美由紀をチラチラ見ながら、どうでもいいことだと判断し、無視した。……

再び配膳を再開、

- - 瞬！瞬！ - -

あれ？、はてさて、そんな中、“ラルクの姿が見えない”……

「お待たせしました」

おや？、いましたね？

何処に行つて……

「あ、ラルク君 ありがとう ……でも、“相変わらず素早いね”」

「は、は、は……そうでしょうか？」

そう言いながら、注文されたシュークリームセットとコーヒーを配膳している。

本人は平然と答える、おい！、営業スマイルはどうした！？、いつもの無表情になつてゐるぞ！！

(……何を今更、あれだけのことで呆れて、簡単に営業スマイルに戻れませんよ……)

「“当たり前”だよ、だって、“姿見えずに移動する”って、ラルク君くらいだよ」

お客は、今のラルクの行動に対して、“平然と、笑いながら答えている”。

て……

「……」

もしもし、何故にその反応に無反応？

しかも君？、いったい喫茶店で何をやってるの？……
(……余計なお世話です。翠屋の人気についてはあなたも理解しているでしょう？)

それに今日でもう“何十回”、“何時間”続けていると思っ
ているのですか？)

「……さて、こちらのお盆、お下げしますね。」

「あ？、は、はい！」

……ダツ！……

「あ、また居なくなつた！」

客はあちこちの目をやるがラルクの姿が一向に見えない。

いくらなんでもそんなことをしたら、こぼれたり、形が崩れるので
は？

……瞬！……

「はい、お待たせしました。コーヒーと、紅茶、チーズケーキです。」

いきなり間髪入れずに窓際のテーブルに配膳をしに現れた。

「……！」

「あ、ありがとうございます。」

その行動で、一部引いている客が居ますよ。
その移動は流石にまずいのでは……

(……問題ありませんよ。一応、これが“私の売りの一つ”です
から。)

……ラルク、店の中で“瞬速”を使うのはいくらなんでも問題では？

しかも、今日で何時間もやっている時点でかなり引きますよ……

「ねえラルク君？、ラルク君っていつからそんな移動をしてるの？」

「ここにバイトを始めてから……6、7年ですが……」

「6、7年って、いったいどんなことをしたら、そんなことができるの？」

「……」

――瞬！――

「あ、逃げた！」

今の質問は流石に無理ですかね？……しかし、なんで瞬速を使
いだしたのか？

まあ、良いでしょう。

「桃子さん、注文していたケーキとコーヒーの方はできましたか？」

今度は厨房へ移動、

「え？、ラルク君だったら、そんなに急がなくてもデザートはどこにも逃げないのに、早くとちりさんね」

「・・・はあ・・・お客様方が満員ってことをお忘れなく」

「はあ、いい、でも、そろそろ店が空いてきたんじゃないのかな」

「？」

それを聞くと、ラルクはカウンターへ向かう・・・

「・・・」

確かに、だいぶ空いてきている・・・

時刻は昼の時間が終わりを告げようとしてきた。

流石に、空く時間ができて行くというもの。

「外で宣伝してきます。」

哀れなラルク、実を言うと、ラルクは口喧嘩にしても、話の主導権を握るにしても、桃子相手に勝ったことがほとんどない。

何とな逃げ言つと策を日々練っているのだが、中々思い通りに行かないのが現状である。

そして逃げましたね？

（・・・それ以上言いますと、番外編の惨事をあなたに送りますよ。

）

・・・うーん、それは困った・・・
では、こう行きますか、

・・・カランカラン・・・

「あ、いらっしやいます」

「ん？」

なのはの声にラルクは反応し、言おうとしたが、

・・・キョロキョロ・・・

店に訪れた“彼女”は、なのはの声を無視、いや、聞こえていなかったようで、店内をキョロキョロを見ている。“誰か”を探しているのか？

「あの？、どうかされましたか？」

「・・・」

なのはの声に反応し、彼女の方を一応振り向くと、急に目つきが悪くなった。

「ひっ!？」

流石にそんな目つきをされると怯え若干後退する。
そんな中ラルクは彼女を見て、

(・・・ “ヘイムダル”、まさかと思いますが、“彼女”?)
『・・・まず間違いはない。“あの使い魔”だ。』

(・・・といっても、私のことはなのはさんも彼女も気づいていませんから、どうします?一応、彼女、変身魔法を使っていますし、)
『・・・ここは我に任せてもらおう。』

(え?・・・まあ、構いませんが、気づかれるようなことはしないでくださいよ。まあ、とりあえず、)

「すみませんが、なのはさんがどうかされました?」

「・・・別に」

「・・・では、翠屋のケーキ、シュークリームでもいかがですか?」

急に“笑顔”となり、勧め始めるラルク。

しかし、彼女は首を振り、

「人を捜してるんで、今日は遠慮します。」

断ろうとした、しかし、“ヘイムダル”は・・・

「・・・ここに居た方がその“探し人”というのは、来るのではないか?」

「え?」

その言葉に彼女は少し違和感を抱いた。

目の前に居るのは、先ほどとは何処か雰囲気の違い、“不適切に笑

う”ラルクの“姿”。

「“どうするのだ？”」

その表情は変わらぬまま、彼は何故か“あたし”に言ってくる。
“あたし”が“だれ”を探しているのか、なんで知ってたんだ？
だけど、

「・・・」

ラルクは“彼女”を見ながらため息した。

そう、外見日本人で黒髪で腰のあたりまで伸びているの女性、“変身魔法を使っているアルフ”を、

ここは時の庭園。

プレシア、フェイト、アルフが居る拠点の場所だ。

しかし、その様子は“いつも”と違っていた。

「フェイト・・・」

アルフは落ち込んでいた。

そう、いつもはフェイトとアルフは“一緒”にいる。

だが、

「ふん、あの子ったら、何処に行ったのかしらね？」

気障つたらしく言ってくるものが居た。

そう、この時の庭園の主、プレシア・テストロッサ・・・

「・・・・・・・・」

それを聞くと、アルフは怒り出しながら、彼女を睨む！

それもそのはず、・・・・・・・・元凶が彼女だから・・・。

「ふん、何か言いたそうね？」

「・・・・・・・・くっ！」

プレシアは高みに立ちながらアルフに言った来た。

そんなプレシアの反応に、アルフは彼女を睨み続けるしかなかった。

そして、

「あんたは！、フェイトの母親だろ！なんで平然と“あんなこと”ができるんだい！！！」

そう、プレシアの仕打ちを受けた後、フェイトは“プレシアによって何処かに転移された”のだ。

アルフが気付いた時には既に遅く、フェイトその場から居なくなっていた。

「“あんなこと”？、ふん、散々待たせたのに、“あれだけ”なんて、“あの程度”で済むだけまだ良い方よ。」

「！！、あんた！！！」

そう言つとアルフはプレシアの胸ぐらを掴み、喚いた。

「あなたは!!、あの子のことを考えたことがあるんかい!!、あんたのために思って!!、どんだけ無理をしているかぐらいよ!!」

「・・・だから?」

「・・・」

プレシアはアルフの手を離させると、

「だから、“それ”が何よ!」

今度はプレシアが怒声を挙げると、杖を天井に翳し、

「あなたに何が分かるって言つのよ!!」

「・・・ド!ド!ド!ド!ド!ド!・・・」

「う!」

アルフ目掛けてサンダー・を“ぶつけた”。

すると煙が全域に行き渡り、視界が悪くなった。

そして煙が晴れると、

「・・・ふん。」

そこにはアルフは居なく、マントだけが残っていた。

「逃げたようね……。まあ、いいわ。」

プレシアはそのまま、大広間の席に座ろうとすると、

「!!!、ゴホお！ゴホお！」

口を抑えながら血が出るほどの咳をした。

そして、アルフの言ってきたことが頭に浮かんできた。

(……あんたは！、フェイトの母親だろ！……あんたのためを
思って！、どんだけ無理をしているかぐらいよ！……)

「どうでもいいの……“今の私”には……」

(……あの子のことを考えたことがあるんかい!!)

「あなたたちは分からないわ！……“私の気持ち”なんか
！」

.....

そして、アルフの方は、

「はあ、はあ……あの女……」

海鳴り、フェイトアルフが拠点としているビルに転移していた。

しかし、あの攻撃はかなりのダメージを与えていたはずなのに、アルフは自分の体を見ると、

「あの女、もしかして……」

わざと？・・・いや、そんなはずがない。

フェイトにあんなことをしたあいつがそんなことをするはずが、

外傷はそれほどなかった・・・有るとしても、服が黒こげてたり、軽いやけど程度である。

何故？・・・

いくら考えてもアルフはそんな答えが分からない。

だが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「フェイトを、探さないと・・・」

そうするとアルフは、自分の治療を終えた後、とりあえず部屋を
搜索。

しかし、フェイトは見当たらず、あの子が行きそうな場所を当たる
ことにした。

「つつても、何処に・・・」

念話をするも繋がらず、精神リンクをしているからといって、
あの子の居場所が分かるわけではない。

では、何処を探せばいいのか？

「あつ、「あそこなら」・・・」

アルフはふと最近人たちが寄った“店”を思い出した。

プレシアにお土産にと立ち寄った“店”、もしかしたら・・・

そうなるとアルフは変身魔法をかけ、“あの店”に向かった・・・

。　　・・・・“喫茶翠屋”に・・・。

・・・だけど、

「・・・わかった」

あたしは、あいつの誘いに乗ってみることにした。

(・・・何とかうまく行きましたか?)

『ああ、流石・・・“主”のことを思っているだけのことはあるな。』

(・・・弱みに付け込むのもどうかと思いますが、)

「どうされましたか？」

「・・・べつに、なんでもないよ」

それから時間がたち、彼女は先ほどの客たちが帰った窓際の席に座った。

別に周りを気にすることは無く、ただ、ずっと窓から空を眺めていた。

そんな彼女をなのはとラルクは物陰に隠れながら見ていた。

「ねえ、ラルクさん、あの人、なんで私を睨んだりしたんですか？」

「さあ?・・・そのようですと、なのはさんは彼女に面識は無いよ」

うですね。」

「うん。でも、」

「？、どうかしました？」

「うーん……雰囲気って言えばいいのかな？、あの人、前に会った気がするんです。」

「……」

腕組みをしながら考えているなのはに、ラルクはただ、無表情に見ていた。

(……その勘、当たってますよ、なのはさん。しかし……)

ラルクは、厨房へ行き、

「……土郎さん」

「ん？、どうかしたかい？」

「いえ、大したことではありませんが、なのはさんとはしばらく話でもしてみたらいかがですか？」

「？、何故また？」

いきなりの提案と云えばいいのか、ラルクの言ってきたことに戸惑う、いや、疑問を抱く土郎。

先ほどまで、自分らの行動に呆れていたはずなのに、

「本当に大したことはありませんよ。でも、なのはさん、確かに疲れているようですし、話し相手ぐらいしてもよろしいのではないですか？」

「……ふむ」

それを聞くと、士郎は腕を組みながら悩みこむ。

確かになのはの様子は最近変だが、この場で聞くというのも、いやしかし……

「なんでしたら、桃子さんの方に相談しますか？」

さらなる提案、今度は士郎ではなく、桃子の方に任せるといふこと、……士郎はそれを聞くをしばらくまた考え込み、そして、

「わかった。私が相談に乗るよ、なのはー、ちょっといいか？」

「あ、はい！」

ラルクの提案に士は了承し、なのはを呼んだ。

なのはは、カウンターから厨房の方へ移動し、ラルクは、

「では、カウンターのの方は私の方でやっておきますで、何かあったら言います、では。」

そのことだけ告げると、厨房を後にし、彼女の方に向かう。

(……とりあえずは、排除完了といったところですかね?)

「……窓の方を見られていますが、何かありましたか？」

そしてラルクは、ふと、彼女に声をかけてみた。
現在の時間帯、ちょうど時間が空いたためである。

「別に、そんなんじゃないよ。」

しかし、彼女はラルクから声に応じようとせず、距離をとる。
だが、ラルクがそんなことで引く側ではない。

「いえ、慌ててらした上に、元気が無さそうでしたから。」

「……あなたには関係ない……。」

「……そうですか？。ですが、“寂しさを感じている”ではありませんか？あなたは？」

「！、そ、そんなこと！」

「“主”を助けたくて仕方がないではありませんか？」

「！！！」

こいつ、なんで知ってやがる！？

『それが……“使い魔の宿命”ですか？』

「！！！」

突然念話がかかってきた。

彼女は慌てて“彼”に視線を向ける……

そう、

「積もる話もあると思いますから、仕事が終わるまでしばらくお待ち下さい……」
「アルフ」さん？」

……あたしの名前を知らない“はず”の……魔法を知らない“はず”の“ラルク”を……。

第9話 対話（前篇）（後書き）

東誠

「・・・おい、何空気を重くしてんだ？」

ラルク

「・・・」

東誠

「しかも翠屋で瞬速・・・お前、何を考えてバイトしてんだ？」

まあまあ、そんなに熱くならずに・・・

東誠

「これのどこが熱いんだ？真逆の寒くてたまらなくしてんだがな？」

ですが、あなたもクロノさんの時にかなり危ないことしてしましたね？

ラルク

「確かに・・・」

東誠

「うるせえ・・・で、どうすんだ、今後の展開は？」

そこは・・・

一同

「？」

・・・もう少しラルク篇が続きます。

東誠

「おい！？、フェイトの方はどうすんだよ！！」

先に片づけておくことがあるのでもうしばらくお待ちを・・・

ラルク

「まあ、仕方ありませんね。」

ヘイムダル

『最も、我の方だな・・・』

東誠

「は？」

ではすみませんが、多少時間がかかるかと思いますが、また次回。

東誠

「お、おい！」

第9話 対話（後篇）（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。．．．すみません。1カ月近くも更新が遅れて．．．何なんでしょうか．．．感想は早くても執筆は遅い自分．．．

とりあえず、後編、始まります。

第9話 対話（後篇）

「“ここ”なら、いいですかね？」

「・・・」

“ここは公園”、夕方で日が暮れそうな時間帯。そこに居たのは、ラルクと変身魔法を使用中のアルフ。

ラルクのバイトの時間が終わり、彼女はラルクについて行った。それがここ、

そこに着くと、アルフは、彼を睨みつけている。

いや、ここに来る前からずっと・・・

「どうかされましたか？」

ラルクはふと、その視線に“随分前に気づいていた”にも関わらず、今頃気づいたように振り向いた。

しかし、アルフはその冷たい視線を変えないまま、

「いつから・・・」

「？」

「“いつから”、気づいてたんだい？」

今の今まで気になっていたことに突っ込む。自分の正体を知っていること。

だが、その返答は、予想外に・・・

「何のこと」ですか？」

・・・ムカ！・・・ダツ！・・・

「トボケンじゃないよ！！」

・・・撃！・・・

「・・・」

怒声と同時に勢いに任せ殴りかかってきた！
だがラルクは平然と、

・・・ガシ！・・・

それを“右手”で受けとめた。

しかしアルフは、その行動にさらに苛ついたようぞで・・・

「あんだ“知ってて連れてきたんだろ”！！」

その勢いのまま、左足で回し蹴り・・・

その方向は、ラルクの横腹・・・

・・・くらいな！！

ラルクは今も“右手”でアルフの攻撃を防いでいる。
つまりは“ガラ空き”・・・

・・・狙いは良いですが、“まだまだ”ですね。

- - 飛 - -

の、はずだった。

ラルクはその勢いに合わせながら“掴んでいた右手を軸”に空中に一回転！

こいつ!!

難なく着地したラルクは後ろ向きのまま気にせず、アルフは空振りした左足を軸にまた殴りかかる。

・・・話が進まないのですが・・・

内心呆れながら、“振り向かず”そのまま下に屈みこんだ。

そして“後ろから来た腕を掴み”、

「え？」

- - ドオン! - -

「ぐは!」

一本投げのように下に“叩きつけた”。

しかも、“受け身を取らせせない”直進投下・・・

・・・ラルク君?、君?、いくらなんでもやり過ぎでしょっ?
・・・ほっといってください。

ラルクはそのまま、彼女を見降ろし、

「・・・少しは落ち着かれましたか？」

「くう！」

その問いに、アルフは顔をそむける。

ラルクは、やれやれ、とばかりにため息。

「先ほども言いましたが、あなたの言っていることに関しては“知りません”。」

「・・・」

それを聞くと、苛つきが収まらないまま立ち上がり、そのままラルクを睨む。

「ふざけてじゃないよ！」

そして、再び叫んだ。

・・・そう、あの時ラルクは彼女に念話をしてきた。

そして、自分のことを知っていた。

それなのに“何のこと”ととぼけている。

いくらなんでも、それでは納得のいくはずがない。

ラルクも彼女の考えは分かっている。

しかし、“あくまで知らないふり”を演じている。

「ですから、それは“私”ではないのですか」

そのまま、彼女を見ながら、表情一つ崩さず、無表情のまま見ている。

無表情で言っているのだから、返って考えが読みとれない。

当然、アルフはそのことにさらに苛立ち、

「だからトボケンな！つて……え？」

その一言に一瞬思考が止まった。

今、あいつは“何て言った”？

“私”ではない？……まるで、“誰かに頼まれたような言い返し”……。

“あいつ”じゃないなら、いったい“誰”だい？

あるの表情が少し和らいだようなので、少しため息。

「あんだ……いったい？……」

「その疑問につきましては、“彼”に聞いた方が賢明だと思いますよ。……当然、あなたも“変身魔法は解いた方”が、これもまた賢明だと思います。」

「はあ？、あんだ、言っていることがよく分かんないよ？」

訳が分からず、追求をかけようとするが、ラルクはそのことに答えらるつもりは毛頭ない。

つまり、それに対する答えは、

「・・・まあ、とりあえず結果は張りましたから・・・では、失礼。」

—瞬!—

「あ!、ちよつと!」

気づけば、ラルクは一瞬のうちに姿を消し、アルフ一人になる。とりあえず、変身を解いてみるが、何も起きず、静寂が訪れる・・・。

「・・・」

あまりにも“静か過ぎて”が居心地が悪い。アルフは周囲を見渡すが、“誰もいない。”

「たあく、ここまで呼び出しておいて、これは無いだろ?」

いや、“誰かが居そうな感じはしない”・・・。そんな不安感を抱きながら、アルフは、ここから離れようと、移動しようとした。

その時、

『・・・何処に行くつもりだ?・・・』

「え?・・・あ、あんた!」

後ろから声が出たため、アルフは振り向く。

するとそこに居たのは、前に一度、“自分らを助けたもの”……

『……貴様に会うのは、これで2度目だな……赤き狼』

「……なんかムカつく言い方ね。しかもあんた、どっから来たんだい？」

そこに居たのは、何故かこの時季に薄い茶色のコートを羽織ッている、白い服を基調とした銀髪青年こと、“ヘイムダル”だった。

「……」

『……どうした？』

気づけば、ヘイムダルが現れ、アルフはそのまま、ずっと睨んでいる。

まあ、仕方ないことだ。

ここについてきた拳句、張本人がこいつなのだから……。
ということとは、ラルクは“こいつ”のことを“知っている”ことになる。

なんか腹立つ……

苛つかせた上に、一本投げは食らうは——！！

「あんたさあ？」

『……』

「いくら呼び出すにしても、やり方ってもんがあるんじゃないかい？」

『・・・』

そう、最初は“ラルクが話がある”というような雰囲気であったはずなのに、気が付けば“彼”に変わっている。それは、“あいつ”がさっきの奴に頼んだということ。

「あんた、いったい何者？って、いうか、さっきのあいつは、あんたはどういう・・・。」

- - スウー・・・カチャ！ - -

『・・・ “アダト”・・・ “アイギス”』

「え？」

アルフは亜然した。

目の前にいるあいつは、突然、右手に“銃”^{アダト}を、左腕に“盾”^{アイギス}が現れた。

しかも、銃をこっちに向けて・・・ヤバ！

『放て・・・』

- - ドー！ドー！ドー！ - -

ヘイムダルは銃を連射！！

・・・アルフは慌ててその場から離れ、難を逃れる。

「あ、あんた！、あたいを殺す気がい！？」

そう、先ほどの弾の着弾点は、“すべて窪んでいた”。
つまりは・・・物理破壊・・・殺傷設定。

それを食らえば、ただでは済まない。
“非”殺傷設定は“痛みがあるだけ”。

だが“殺傷設定”は、物理的・・・つまりは平然と貫通・破壊・
切断が可能ということ。
当たれば、かなり危険なことにつながりかねない。

だが、奴は・・・

『・・・“これぐらい”は・・・“簡単”ではないのか？』

「!?!」

今、なんだった？

「あ、あんた？、今・・・」

『“貴様等の時代”が今はどうなっているのか知らぬが・・・ぬ
るま湯に浸った考え”が通るほど、“この世は甘くは無いぞ”。』

「なっ！」

ま、本気だ！、こいつ!!

そう、先ほどよりも弾の速さが段違いだ！
しかも、

「ドオオン！！」

「・・・」

アルフの足元に着弾した弾は確かに“傷跡を残した”。
いや、・・・

「な、なんだいありやあ・・・」

アルフはあの“弾の威力”にドン引きした。
そう、“公園そのものが無くなっている”。

捕捉を加えると、“更地”・・・いや、確かに公園の遊具しろ、
ベンチしろ、跡形もなく、破片一つなくなっている。
しかし、“重点すべき”はそれではない。

優先されているのは・・・

『・・・“軽く”打ち過ぎたか・・・』

ヘムダルも空中に上がっているが本人は“軽く”と言っている。
しかし、どう考えても“軽く”ではない。

それを物語っているもの・・・

「あ、あんた！？、“こんだけの威力”で軽めなのかい！？どう考
えても、こんな“深いクレータ”が出来るわけないだろ！」

そう、“クレーター”である。
ヘイムダルは軽くと言った。

まあ、誰もが“スファイアサイズ”で放たれたものを見れば、シールド、もしくは回避程度で済むであろう。

だが、彼の場合は、“そのサイズ”での限度を超えていた。

たかが“スファイア一発”程度で“20メートル近く”いや、もっと深いだろう。の威力”を生むのだろうか？

どう考えても危険である。

しかも、あいつが放っているのは全部“殺傷設定”……。
一発でもくらいりゃあ……

『余所見をしている余裕はあるようだな？』

「え？、っ！」

いきなり正面に弾丸が接近し、アルフは慌てて横に回避！
だが、今度は、真下から……

「が！」

顎にもろ直撃した！

意識を失いかけたが、なんとか踏ん張り、距離をとるアルフ。

……マ、マズイ！

アルフは内心焦り出す。

唇、頬が切れ、血が流れ出ているが構っている暇がない。

しかし、地上から見ていたヘイムダムは淡々と・・・

『・・・“多寡がデコピンがかすれた程度”で何をしているのだ？
・・・あの者は？』

おい・・・何さらりと自分からしての意見言ってるのかな？
しかも、今のが“かする程度”って・・・

『・・・さて、“次”は“その程度”と思わぬようにな』

ヘイムダルは銃口をアルフに向け、さらに放つ！

アルフはその弾に何とか反応に、正面にシールドを展開する。

しかし、

・・・パリン！・・・

「なっ！」

シールドはその意味がなく、紙切れを破くのが等しい程に、あっさり砕けた。

それでも何とか体を逸らし、避けるが・・・

ヘイムダルからしてみれば、考えが浅はか過ぎる行動だった。
さらに追撃で、射撃を連射！

しかも、先ほど飛び散っていた弾も同時に操作している。

「!?!」

- ドオン!バン!ドン!ドン!ドン!バキ!グチャ!バキ! -

もはや悲鳴が上がらないほどアルフは喰らった。

避けたそばから、位置を予測していたように・・・

肩へ・・・そして、その衝撃で逸れた体制に合わせたように腹に・・・膝に・・・腕に・・・背中にと・・・やむことなく続いた・・・。

そう・・・ヘイムダルの攻撃は“受けてからの射撃方向が正確すぎる”。

そして、全てを喰らったアルフはそのまま墜落・・・。

- ガシ! -

「・・・え?」

意識が遠のく寸前、誰かに掴まれた。

そいつは、“ヘイムダル”であった。

アルフを抱きかかえ、着地したヘイムダル。

とりあえず、彼女を下ろし、“治療魔法を始めた”。

しかしそれは、“ヘイムダルの意思”で行われていない。
それは・・・

『……どづいつつもりだ？……“ラルク？”』

“別に……大したことではありませんよ。ですが……”

『……どづした？』

“……“2年前のこと”を思い出しただけです。”

『……』

“「あなたが決めたこと」に口をはさむつもりはありません。ですが……“やり方”が”

ラルクは墜落するアルフを見て、“体の制御を自分に戻した”。そして今も、だが、何かに悩んでいるかに思える。

しかし、そこは誰もおらず、顔も無表情のため、読みとれるものも読みとれない。

『……そこは我も分かっている。だが、“時が”はこうなるであろう。』

「……皮肉ですね……“知らされない現実というのは”」

『……』

「、っしっ」

「……後は頼みます。」

『・・・ああ』

「あ、あたいたい・・・」

『・・・“漸く気が付いたか？”』

その声に反応し、まだ目がぼやけるが、段々意識がはっきりしてくる。

その方向には、ヘイムダルが居た。

「あなた・・・なんで？・・・」

立ち上がろうとするが、まだ手足のしびれ残っているためか、うまく起き上がれず、何とか上半身だけ起こした。

『・・・“予定が変わった”が、まあ、良いか・・・』

「え・・・何のことだい？」

『気にするな・・・それよりも、体は問題ないのか？』

「ああ・・・なんとかな・・・」

流星にそれを聞くと正直つらいようだ。

まあ、容赦なく放った者が者なのだからな。

『まあ、そのことは良い・・・』

「よくない・・・」

『……』

「よくないだろ!!」

『……』

「あんた!、あたいを殺す気で撃ってきただろ!、いったい何の理由がこんなことしたんだ!」

『……確かに我は、“殺す気で撃った”が、“殺さないように当たった”が?』

「そんなんちつとも答えに……え?」

今、なんつった?

『殺す気で撃った』が『殺さないように当たった』?

どういう意味だ?

アルフにはその意味が分からなかった。

その言葉の意味が……

するとヘイムダルは、

『……簡潔に述べるなら、“当たる直前に爆散させた”。ただし、零距离だな。』

「……」

それを聞くとようやく理解したのか、多少ながら嘆息。

悲願まがしい目をしていた。

当然ヘイムダルはそのことを無視する。
するとアルフは回復したのか立ち上がり、

「あんた！！！、バリアアアアア・ブレイイイク！！！！！」

渾身の一撃を込め、零距离でバリアブレイクを顔面に喰らわせようとした。

だが、ヘイムダルはその行動に、盾をかざし防いだ。

「くうう！！堅！」

『少しは落ち着いてもらいたいものだ。理由を話す。』

「・・・」

それを聞くと、話は聞くとということという体制で、警戒は解いていない。

ヘイムダルはそれを見て嘆息するが、

『店に来た時に聞かれたのではないのか？・・・主のことで悩んでいることを・・・』

「・・・」

それを言われると、熱くなっていたのが、段々冷たくなっていくのを感じた。

そんな・・・

『・・・貴様の主は、誰かのために行動している。そして貴様はその主の行動に懸念を抱いているのではないか？・・・心配ではないのか？』

「・・・」

「・・・どうしようもない自分に・・・」

『・・・では、アルフよ、貴様は、“このまま”で良いのか？』

「・・・」

『“使い魔”という者に関しては我も知っておる・・・だが、それで済みます”つもりか？』

「な、何を言つて・・・」

『“貴様”が“主”をどう思っておるかは知らぬが、“主を守りたい”のだから？』

そんなことは言われなくなって、分かつてる・・・

「・・・確かにそうさ・・・でも・・・」

その続きを言おうとしたが、黙り込んでしまう。

それが、自分の・・・

『・・・でも？・・・何だ？、何故“迷う”必要がある？、貴様はその娘のことを気にかけていたはずである？』

「……………あたいは……………」

それを聞くと、アルフは顔を歪め、ヘイムダムから顔をそむける。ヘイムダムはそれを気にせぬまま

『……………どう考えているかは貴様の勝手だが、そのままでは主人救えぬぞ……………』

「……………」

……………あの子のこと……………
フエイト

涙が出てくる……………

頭では理解してる。

フエイト 主を“助きたい”、“守りたい”って……………

けど、“あたいの勝手”で“そんなことできない”。

それが“使い魔の宿命”ということ。

今の自分は……………、

『……………』

いつまでも黙り込む様子をヘイムダムはただ静かに見ている。

……………“己の言いたいこと”を“後回し”にし、

そして、アルフが漸く、口を開いた……………

「……………助きたい……………」

『・・・何か言ったか？、“小さくて聞きとれん”が？』

「・・・あたいは、フェイトのことを助けたい！」

それを聞くと、ヘムダムはフツ、と笑った。

『・・・ならば、それを貫いて行けばよい。』

「え？」

いきなりのことに戸惑いを隠せないアルフ。

いまあいつは何と言った？

「あんだ、いったい何を？」

『・・・何度言わせるでない。“貴様自身の意志”を貫けと言って
いるだけだ。主のことを思っているのならば・・・』

「!?!」

こいつは、初めからそれが目的だったのか？
だとしたらこいつ・・・

「あんだ？、いったい何者なんだ？」

『・・・“誰でもよい”であろう・・・ん？』

『・・・ディバイイイン!!!!・バスター!!!!!!・・・』

・・・ドオオン!!!!!!

『…………』

二人は、音のした方向を見る。
結界に向かって放たれる“砲撃”。

しかも、今の声は……

『…………“近頃の魔導師”は、結界外で砲撃を使うのか？』

「……………さあ？」

二人は苦笑いし、ため息をつくしかなかった。
折角の空気も台無しとなった…………

しかし、結界外では…………
むこうがわ

「う……………堅い!!」

砲撃を放つが、全く傷一つびくともしない!
それだけ結界が強力だということもあるけど…………

「ユーノ君、この中に入れそう？」

なのは、肩越しに載せているユーノ（フェレット状態）を見ながらつぶやいた。
それに反応して、ユーノは首を横に振る。

「転送の準備は出来てるんだけど、この結界、ものすごく堅くて……

「・

「ううう……」

『……貴様ら……』

「「え？」」

思った以上に結界が堅いことにどうやって破壊するのか、四苦八苦しているのは。そして突然の念話が入ってきた。

『……“結界を張らず”に“結界を壊す”とはどういう思考をしているのだ？』

「え、えーと……」

「それは、その……」

その念話の主から、以前、海鳴の海岸から止めた人、そう判断したなのはたちであつたが、今の一言に思考が停止してしまつた。

しかし、ヘイムダムは結界の中から彼らを見ると、

『……アルフよ、貴様は帰れ。』

「はあ！？、あんた、ここまであたいを散々やってそれは無いだろ！」

『あの白き魔導師と今は避けたいだろうか？』

「うう！」

確かにそうだ。

アルフもあまりあの娘なのはの戦いはあの時しか見ていないが、かなりの魔力を持った砲撃魔導師。

正直、アルフとの相性はあまりいいとはいえない。しかも、あのネズミ使いユリ魔もいるようだし・・・。

そう考えると、流石に折れたのか素直に

「分かったよ・・・でも、あたいは・・・」

・・・フェイトが・・・

『貴様の主のことなら、問題は無い。』

「え？」

まるで見透かされたかのように答えてきたヘイムダム。なんでこいつがそんなこと知ってたんだ！？

「あんなんで知って・・・」

『問題ないと告げた。今から“伝える場所”に行くといい・・・“手掛かり”があるはずだ。』

「“手掛かり”？」

そういうと、ヘイムダムはアルフに行き先を“脳に直接送った”。
それを見たアルフは、

「はあ！？、ちよいと待ってくれ、あたいが“行けるとこじゃない”よ。ニジニジ…」

『気にするでない。向こうには伝えている。』

「で、でも」

『ならばここで“散りと帰るか”』

ヘイムダムは先ほどの“アダト”を構えている。
しかも、何やら、チャージしている。

これはまずい。

そう判断したアルフは、

「わ、分かったよ・・・あんたも、次は何者が教えてくれよ。」

『・・・早く行け。』

「・・・あいよ」

そういうとアルフは転移した。

ほんと素直じゃないな、ぶっきら棒で・・・

・・・ちて、

残るは・・・

――スウー――

「え？」

「わ！？」

『……これで良いか？』

「え、え？」

いきなりの展開に読めないのは。
まあ、仕方ない。

先ほど砲撃で破れないのでどうしようと考え、
そのまま砲撃を再開しようとしたのだが、いきなり転送されたのだ。

しかも、今、目の前に居る彼に。

当然、何が何なのか、チンプンカンプンだ。

だが、それはヘイムダルには関係ない……
つまり……

『……何故ここに来た……』

さらに面倒ごとが始まった。

第9話 対話（後篇）（後書き）

今回はかなり面倒なことをさらに追加してしまいました。

さて・・・どうしたものか・・・フエイトさん方面もありますし・・・
・・・あああああああ！！！！！！・・・何とかしてみます。

では、次回にまた。

第10話 “思い”返すと“重い” (前書き)

どうも、イクス・スタンスです。

今回、少し無理をしましたが、何とぞよろしくお願いします。

では、始まります。

第10話 “思い”返すと“重い”

双方は悩む。

何故こうなったか？

思い返すと、何故か……重くなる。

第10話、始動

「……何故ここに来た？……白き魔導師、そして、スクライア
―一族の者よ」

「え？」

何か、引つかかる言い回し……。
しかも、

「なんで、僕のこと知ってるの？」

ユーノはそのことは気になった。

何故自分の一族のことを知っているのか？

『貴様の一族には、“過去に借りがあった”。ただそれだけの
こと。……こちらのごことは話した。貴様等の返答を聞かせてもら
おうか？』

「「え？」」

『・・・』

- - カチャ! - -

なんことだが分からないのは達は、彼の言ってきたことに、ポカソツ?とじていた。

だが、その反応が気に入らなかつたのか、ヘイムダルは迷うことなく銃を突きつけた!

そして、

- - ドオン! - - - - ドオオオオン!!! - -

『!-!』

何か音がした・・・

いや、自分たちの横を何かが通り過ぎた・・・。

背筋に冷や汗が流れながら、機械のようにギツギツギツ、と後ろを振り向く。

『・・・』

なるべくなら・・・いや、出来ることなら振り向かない方がよかつただろう。

何故なら・・・

「な、なのはなら、あ、あ、 “あれぐらい” のことできる?」

さて、視点を戻しましょうか・・・
その後ヘイムダルは

『・・・こちらの問いに答えてもらおうか？』

「え！、ええ！！？」

「ちよっ、ちよっと待って！！」

流石にいきなり突きつけられてはなのは達も焦りを隠せない。
しかもさり気なく、さらにまたチャージしている・・・（汗）

流石にあれを見られるにしても、喰らうにしても嫌であろう・・・
。彼等は見えていないが、アルフのシールドは紙切れ同然に一瞬で砕かれたのだから。

だが、ヘイムダルは構わず、

『我が聞いているのは“何故ここに来た”のかということ。・・・
これ以上はぐらかすのであれば、手足の1、2本を消飛ばすまで・・・』

など物騒なこと言いつつ、さらに集束を加速している。
なのはとユーノには、冷や汗が流れる。

ここは答えるしか・・・

「わ、わ、分かった！、分かったから、ちよっと待って！！」

『…………』

何とか彼を落ち着かせようとしているのは。

しかし、それを聞いても、内容を話さない限り構えを解くつもりのないヘイムダム。

仕方ない……

「じ、実は……………」

肩に乗っていたユーノは事情を……経緯を話し始めた。

あえて通知すると……

“ヘイムダル”、いや、“内心で聞いていたラルク”が頭を抱える内容だった。

575

少女は夢を見ていた……。

そう、あれは……

“彼女”と別れた時の記憶……

「フェイト……お見送りはここでいいですよ……」

「……………」

「……大丈夫です。あなたには、私が教えたこと、アルフヤプレシアが居ます。」

その時はとても寒かった。

その日は吹雪で・・・私は“彼女”に“お見送り”・・・いや・・・
“止めようとして”いた。・・・

「リニス・・・」

私は彼女の名を呼んだ。

今まで私とアルフを育ててくれた・・・

・・・私たちに魔法のこと、勉強を教えてくれた・・・
大切な・・・だから・・・

そんな彼女も笑顔で返した。

でもその笑顔は・・・

とてもつらく、自分も耐えていること・・・
自分を責めている・・・

そんな風に見られた。

だから私はこれ以上何も言えなかった。

そして“彼女”の方は・・・

「・・・」

ごめんなさい・・・フエイト・・・。

私もあなたたちと一緒にいてあげたい・・・

でも・・・“今の私”には・・・“もう”・・・

彼女は自分を悔やんでいた……。

“自分の存在”がどうしようもなく……

“助けたい”……でも、“助けられない方は……”

彼女の苦しみは……そんな“苦渋の選択”が……渦巻いていた。

“全てを知った”彼女はどうすることもできない。

ただ出来たのは……“願うこと”。

“彼女”……“リニス”はそんな罪悪感……の中、目の前に居る子を、フェイトを見つことしかできなかった。

「では、いつてきます。フェイト……」

そうして、リニスは暗く、吹雪の中、一人行ってしまった。

私はそんな彼女に（リニス）に手を伸ばした。

それが届かなくても……一緒に……“ずっと居てほしい”と……

でも、何も言えなかった……私はどうして……

「あの……」

「……わたし……わたしは……」

「あのっ!」

「！」

大きな声がして、跳ね起きる。

誰かの声が聞こえたようだけど、幻聴だろうか？

今ここに居ることが現実かどうか分からない。

身体全身が、汗で湿っている。

そのまま自分の手を見るが、手の方も汗が浮き出ていることが明白と言えるほどだった。

なんでまた……あの夢を……

自分がどうしようもなく、無力で……

……母さんのためにやっているのに、気づいてくれない。

アルフは母さんのことを避けてるけど私は……

あの時アルフが言ってきて、私を避けさせるように言ってくる。

でも私はいつも……

……母さんは不器用なだけだよ……

“あの時”の……

小さかった頃…… “あの時母さん”は笑ってた。

とても優しく……

でも…… “今の母さん”は……

そのことを考えると私はどうしたらいいの？
気づいたら“手遅れ”で…… “リニスのとぎと同じ”になっ
たら”……

私は……

そのことを考えだしたら震えが止まらなくなった。

「だいじょうぶ？」

「ええ？」

その震えが止んだ。

誰かが背中から抱きついてきた。

とても暖かみのある何か……

振り向くと、茶色の髪で、水色の瞳をしていた川と、フェイトの寝
ていた枕元に山猫形態のリニスが居た。

『……その事情とやらを聞かせてもらおうか？』

「……ああ、実は……」

ユーノは経緯を話し始めた。

あれは、ラルクが店を出て行く前のこと。

-
-
-
-
-

「では、お疲れ様でした。」

「うん、ラルク君、今日もお疲れ。」

「いや、ホントすまないね。仕事のこともあるのに。」

「ははは、また剣の相手、お願いするぞ。」

「って、恭ちゃくん、二人がやったら、また大変なことになるよ。」

「……あははは。」

「……恭也さん、それは東誠さんをお願いします。」

翠屋のバイトの終了時間。ラルクは奥で普段着に着替えた後、翠屋を“後”にした。

ちなみに今の会話順番は、ラルク 桃子 士郎 恭也 美由紀 なのはラルクのとおり。

しかしラルク、翠屋とはバイト以外にも何やら気にいられている模様。

なにかしら、彼は距離を置いているようだが……

そして、“もう一人”。

「あら？、あの子？」

ドアの出入り口に誰か居たのか、桃子が反応した。その言葉に反応するかのようには、

「どうしたの、母さん？」

「うん、”さっきまで居たお客さん”、なんだか、今ラルク君と一緒に居た”ような？”」

「え？」

「さっきまでのお客さんって・・・」

「ほらあ、”窓際に座っていた”あのお客さん」

『・・・あ！』

“窓際に座っていたお客さん”？・・・その言葉を聞くを何かを思い出してみたんだ。

そう、ラルクが対応し、なのはは何故か威嚇され、苦手な人。

そして、土郎もまた、なのはの相談を受けていたため、彼女のことが少し気になった。

確か、ラルクが対応に当たり、少し大人しくなっていたが、しばらくして店を出た。

そのお客さんが何故ラルクと？

気になって、高町一家一同、ドアからこっそりと、ラルクの行く方向を覗いた。

「ねっ？言ったとおりでしょっ？」

『・・・』

確かに……

桃子以外の一同はその人で一致した。

ラルクが彼女と“一緒”に歩いている!?

そんな光景を見ていささか疑惑や様々な考えが浮き出てきた。

一体に何故二人が一緒に歩いているのか?

とりあえず、一度店の中に戻ると、

「ま、まさかラルク君、“あれ”ってやつ?」

「いや、それは無いだろ?、彼は川さんと結婚しているわけだし、」

「第一、あの“無表情で、本心が読ませない”、相手のことはかなり鋭いが、それに反映し“彼が浮き出す感情と言えば人という喜怒哀楽の中の哀の感情のみ”で、言葉おいては容赦がない。ましてや彼が口説くという手口が一切皆無……まず無理だろ?」

「……恭ちゃん、それは言い過ぎだと思つよ?」

「うん、お兄ちゃん、私もそう思う。……それより、“あれ”ってなに?」

「いや、なのは知らなくていいことだから……それに、たまたま同じ方向だったってこともあるでしょう?、ラルク君の家の方向と同じだし」

「うん……でも、ラルク君も“男”よ。以外ってこともあるかもしれないじゃない」

「いや母さん（汗）、それは流石にないから」

「そう言ってもねえ。あっそうだ！こういう時は徹底的に調べていかないかね」

そういつと桃子はどこに隠していたのか、何故かデジカメとビデオカメラを取り出した。

それを見ると、息子・娘の兄妹は冷や汗が流れた。

あの笑顔はまずい！！！！

なにやら怪しげな考えを企てている桃子。

そして、店の様子と時間を見ると、人混みが出また出始めていた。そこで桃子は、

「それじゃあ“なのは”、はい“これ”、“お願いね”」

「え？」

まるでそれが当たり前ように、桃子はなのはにデジカメを首に掛けさせ、ビデオカメラを手渡した。

当然、それを手渡され、首に掛けられたなのはは亜然・・・あまりの出来事に思考が止まった。

しかし、桃子は自分のマイペースを維持したまま、

「あのねなのは、私やお父さん、恭也も美由紀も今からまた忙しくなるし、そろそろなのは家に帰ってもいい時間だし、宿題は終わらせているから、これから暇でしょう？、それに、あなたも今のラ

ルク君のこと気になるでしょう？」

などと、顔を度アップでなのは近づけたまま、今の現状を伝え

た。いや、それは前半部分が確かにこれから忙しくあるのは分かりますが、後付けはいらないでしょう！！

しかし、桃子はそのことは通用しない。

故に、それ言っている中、土郎・恭也・美由紀は何も言わないままだ。

桃子は楽しいことは最優先で実行してしまう性格。まさに特定の人物たちにおいて、天敵な性格である。

そして、漸く思考が戻ったなのは、当然反論した。

ラルクがキレたらどうなるか、なのは“も”そのことはよくわかっているのだ。

伊達に商店街での二つの通り名ははまだ健在なのである。

しかし、桃子はそんなことを知ってか知らずか、

「じゃあ〜頑張ってね〜」

すべてをなのはに投げ渡した。

なのはは他のみんなに視線を送るが、全員そろって同情と、

“強く生きてくれ！”

・・・その視線が語られていた・・・。

渋々、重い足をたどりながら、なのはユーノを連れてラルクの後を追った。

「まあ、つまりはこういうわけで、追いついたと思ったら、今度は結界が貼られてあるし、何か起きたんじゃないかって・・・それで・・・」

『・・・結界破壊行動に移った・・・』

「「「・・・」」」

経緯を聞いたヘイムダルはその最終行動の確認をとるが、二人は首を縦に振った。
・・・正解のようだ。

『・・・』

それを聞くと、ヘイルダムは嘆息した。
だが、“中に居るラルクは”、

(迂闊でした・・・桃子さんの性格のこと、すっかり忘れていましたよ・・・)

もし本人が今ここに出てきたら、頭に手を当て、うずくまっていたらどう・・・。

高校時代、桃子の性格は、校長、八神家夫婦ともに、ラルク“達”を悩ませた根源である。

(・・・貴様、これはどう蹴りをつけるつもりなのだ?)

(・・・私が聞きたいぐらいです。とりあえず・・・)

・・・次のバイト日は覚悟しておかないと・・・
とても足取りが重くなりそうだ。

と、言うより・・・

(・・・川さんにそのこと話されたら、少々面倒ごとが・・・)

さらに災厄な事態が起ころうとしている模様だが、いったい何が？
まあ、そんなことは後に回すとして・・・

『・・・ではもう一つ問うが、“ここに来た上で、貴様等は最終的に何をしに来たのだ”？』

「・・・どうして、“こんなことになっているのかな”？」

ここは風呂場(?)。

フェイトは今湯につかっていた。

何故こうなったか、彼女は今の現状に行くまでの経緯を思い返した。

目が覚めた時、震えてた私を背中から抱いてきたのは、この家の人の、川っていう人。

そして、枕の傍に彼女が飼っている山猫リニスが居たこと。

そして、汗をかいてしまったため、彼女から、お風呂を勧められた。

最初は断ったが、川は何故かムキになってそれを無視。
なんでも、

「また倒れても困るし、そのままじゃ、私としても嫌なの！」

と、言っ、そのままお風呂場に強制連行となった……。しかし、その言動と裏腹に、かなり顔が赤くなっていたのは気のせい
いか？

フェイトは経緯を思い出したあと、そのまま、顔が半分隠れるま
で、さらに湯船につきりながら、周りを見る。

……というか、かなり“広い”……“広すぎる”。

と、言うよりも、今フェイトが居るのは“巨大な露天風呂”。

ここに案内（いや、連行）されるまでに気になった点がいくつがあ
った。

一つは出入り口が男女別々になっていること。

そして、中に入ると、本格的に、何処かの“銭湯と同じ光景”……

当然、男女の入り口が別々なので、当然、壁がある。

何故たかが“一般家庭”にこんな本格的なことになっているのか？

外に出ると、自然が一望できるようになっている。

だが、入口から、前方・右側は竹の仕切りと、岩とコンクリートの
仕切りが出来ている。

なにやら、意図的とも思える隙間のない防御的な作りである。竹でごまかしているが、上のはみ出ている岩を見る限り、とても風流に合わせた（ごく一部の）作りには見えない。

まあ、とにかく、景色はとてもきれいだ。それは事実だ。

フェイトはしばらくその景色を堪能しようと思った。しかし、

「うちのお風呂場の景色は気に入った？」

「え？」

声が出たので後ろを振り向くと、

「気に入ったみたいだね」

先ほど自分を強制連行した川が居た。バスタオルを巻いて、今から入ろうとしているかのようで。

東誠

「さて、みんなは久しぶりといったところだが……」

萌子

「ええ、かなりまずい展開になって言ってるわね」

……私が言うのもなんですが、かなり無茶をしました。

東誠

「無茶?・・・じゃねえだろ!!」

・・・

東誠

「何してくれてんだよ!ラルクはともかく、終盤はまずいだろ・・・あれ」

藍川

「そうよね。しかも作者さん?」

な、なんです?

藍川

「自分の不得意分野、いえ、苦手分野を導入するのはどういことです?」

東誠

「だいたいてめえ、EX、LVみたいな内容かけねえだろ?、お前は“推測・分析”は得意分野だが、こう言った内容は苦手だろ?、次回どうするんだ?」

・・・出来ればアドバイスをいただきたいですね。確かにこの分野は苦手ですから・・・。

一同

『・・・』

東誠

「投稿長引きそうだな・・・番外編書くか？」

・・・まあ、考えておきます。

出来ればどなたかアドバイスをお願いします。

東誠

「かと言って、ジル・トウヤ・フェニックス・涼の意見は参考にするなよ。真に受けたら、こっちの身が持たん。」

・・・善処します。もっとも、その意見がいただければの話ですが、

萌子

「と、言っわけで、」

藍川

「次回の参考な意見、感想お待ちしています。」

一同

『では』

第10話 “思い”返すと“重い”（後書き）

本当にどうしたもののか、どなたかアドバイスを頂けると助かります。

次回、何とか頑張ってみます。

では。

番外編：結論と付け（前書き）

どうも、今回はあまり期待できませんが、番外編をお送りします。
はあ、自分の難しさがあらわに出てきますが……

では、始まります。

番外編：結論と付け

東誠

「……気が滅入るな……」

ラルク

「……東誠さん、時には諦めというのにも必要だと思います。」

「まあ、今回もまた、仕方のないこととどす。あんさんもここは辛抱なされや」

東誠

「で？、今回は“何処の話”なんだ？」

「確かなあ、調理篇、らしいとどすえ。」

東誠

「……まあ、俺は関係ねえから……まあ……いいか……」

藍川

「東誠さん……それは……“どうかしら”？」

東誠

「おい……どついう意味だ？」

ラルク

「それ答えはこれを読めば分かります……では、始まり……」

東誠

「・・・説明をしろ！」

始めます

前回の騒動・・・と言っても、何故か私と川さんのことで過剰反応してしまう皆さんの傍迷惑な行動・・・が“無事終了・・・強制鎮圧・・・”した後、漸く、この日となってしまうた。

そう、“今日”は・・・

上村

「はい、皆さん、前回説明したとおり、今日は調理実習を行いたいと思います」

一同

『はい！』

・・・調理実習・・・

これを聞くと頭が段々重くなっていくのを感じました。

初めは特に関わらなければ問題がないとばかり持っていた。だが、世の中というのは、それほど甘くは無い。

それが先日の騒動で、嫌というほど浮き彫りとなってしまうし
た。

初めは問題は無かった・・・。

ここに入学した当初、質問がいくつかありました。しかし、それは何故が皆さん、恐怖に・・・いや、ドン引き・・・染まった。

その答えはすぐに分かりました。

1つは東誠さん、彼はこの学校でかなり畏れられていること。

2つ、私のやっているトレーニング・・・まあ、それは当然と言えば当然のことでしょう。

あの時に、“本当にいいんですか？”ときちんと確認をとったのだから。

しかし、“今の事態”はそのこととはどうでもいいのこと。

“問題”は、あの時の“班の振り分け”・・・。

まさか“あのような振り分け方”になっていたとは流石に予想外でした。

最終的には、独断で振り分けましたが

そして、その結果がこうなっている。

ラルクの班の配置は見事にど真ん中・・・。

しかも、ラルクの近い所には女子が固まっている。

確かに班の振分けは私と川さんで行いました。ええ、行いました。

しかし、“配置”がこうなっているのか・・・校長の差し金ですかえね・・・

この後どうしましょうか・・・

川
「ラルク……君？」

……ここはやはり……

川
「ラルク君？……あの……」

……話で済むのですかね？……

川
「ラルク君！」

ラルク
「ん？……川さん？」

耳元で声が出たので振り向くラルク。
そしたら、川が近くにいた。

見る限り、何故か冷や汗を流しているのが見える。
ふと周りを見ると……

ラルク
「……皆さんどうかされましたか？」

一同
『……』

一同、そのことに沈黙。

いや、黙秘している……。

何故？

ラルクの頭の中にはそれが浮かび上がってどうしようもない。そして、この授業の担任こと、上村が近くに来て、

上村

「ラルク君、君……」

ラルク

「？」

上村

「口に出てたわよ」……「色々」と……恨みがたまっていることが……」

ラルク

「……」

ラルクは周りを見る。

そこに居た生徒は全員、頷き、首を縦に振る。

それを見たラルクは、深い溜息をした。

いや、……高校生がそんなにため息をつかないでくださいよ。

……誰にだって……繰り返されることに限度というものがあります。

それは皆さん同じことですよ……

上村

「では、改めて、調理実習始めるわよ」

家庭科の料理実習

メニューは

『クリームシチュー』

『チキンのから揚げ』

『チーズ・サラダ』

『紅茶』

他 e t c ……

まあ、冬の定番と定番のものがいくつつかある。

はてさて、大抵お約束的なことがここではよく起こるもの。

当然、

j

「あ、ラルク君、それあたしが！」

P

「いえ、皮むきぐらいらなら、わたしも一緒に……あなたは、他の物でも煮込んでなさい！」

ラルク

「……」

…シユ、シユ、シユ、シユ、…シユー、シユー、シユー、…

あたしが！、わたしが！、と自分から率先して行っている。
しかし、ラルクはそのことは気にせず淡々と皮むきをしている。

川

「す、すごい！！」

川をその作業をしているラルクに驚いている。
皮むき・・・それは料理の上で必須、当然のことだが、ラルクのや
っているのはそれを超えており、

ラルク

「えっと・・・次は人参、急がないとシチュウウーの煮込みは時間が
かかりますから・・・」

先ほどジャガイモの皮むきをしていた。
だが、重点すべきはそのことではなく、“皮の薄さ”、早さである。

川ともう一人、一緒になっている子はラルクが切った皮を見て、

H

「川さん、普通、こんなに薄く、しかもこんなに長く切れる？」

その生徒は、皮を手に取り、ぶら下げてみる。

そしたら、その長さに驚きを隠せない。

その皮の長さが、ジャガイモ一個分、途切れることなく、しかも
厚さは薄すぎて無駄がない。

しかも開始早々、手洗いを済ませるや矢先、野菜を洗い、真っ先に
始めた。

誰も相談せず、独断で……
しかもやっている彼の目は真剣そのもの。

とても声がかかれそうにない。
そう考えていると、

ラルク

「あの、Hさん、サラダの野菜の方は終わりましたか？」

H

「え？、あ！」

ラルクの問いかけに、自分のやっていたことをすっかり忘れていた。

ちなみに、川は空揚げの方を担当しており、筋切りを済まし、揚げのしたく取り掛かっている。

その反応でラルクは察したようで、

ラルク

「ふー、まあ、気になるのは仕方のないことですから、再開しましょうか？」

H

「はい……。」

ラルクは普通に声をかけたようだが、彼女にとっては少し手厳しいようだ。

と、いうか、皮むき済まして、いつの間にか、肉と玉ねぎの方も炒

めて、ホワイトソースと同時進行!?

煮込みの準備で鍋の用意ツて・・・手早やさすぎない!?!?
皮もその行動も見て疑問視した。

ラルクはほとんど同時進行で行っている。

いや、いくら時間がかかるといっても・・・

ラルク

「さてと・・・牛乳も加えましたから、後はダメにならないようにして・・・肉も固くなり過ぎないように・・・」

片手でフライパン、とろみが出るように調整・・・片手でやるのは危ないのに、それを平然とこなしているって・・・

その行動を、ラルクの班だけでなく、周りが、教師を含め、全員が見ていた。

桃子

「あらあら、いつもながら流石ね」

桃子はそんなラルクの行動を微笑ましく見ている。
その素振りに上村は疑問を抱き、

上村

「あの、高町さん?、ラルク君、いつもあれなの?」

上村はラルクに指を指しながら言った。

そして、桃子は、

桃子

「ええ、そうよ。彼が商店街の人たちを連れてきて、ホントおおだすかりだし、あの生地の食感と言い、クリームの甘さと言い、とても最高よ。くなんであるの子は、あんなに得意なのは私も知らないけど」

桃子は本当に楽しそうに話していた。

それを聞いた上村は、ジイー、とラルクを見ていた。

その顔には、嫉妬と企みの念が備わっていた……。

ラルク

「さて、いい具合になりましたから、あとは具材を入れて煮込むだけ」

そしてラルクは最終調整に入った。

その頃、職員室では……

東誠

「えつと……この問題は……いや、こっちの方がいいか、でも、それだとここがなあ……」

東誠は一人、生徒たちのかだプリントの作成に没頭していた。

まあ、それも仕方のないこと。

彼は3年の科目を受け持っている。

当然、今後のこと、特に試験関連上、彼にもあまり余裕が持てない。

他の教師もそのことで慌ただしい。提出書類、受験日の確認、何処かに漏れや誤りがないのかも徹底している。

そんな中、東誠も、履歴書の確認やらでも忙しい。そんな彼が、最近ふと考えること、

東誠

「ラルクの野郎、・・・大丈夫か？・・・川とはすっかり仲がよいようだ？」

そう、ラルクのことである。

元々、彼を引き取ったのは東誠本人。

そして、この高校に転入してくることは知っていたが、後からの調整やらしたのは彼である。

そんな彼が、最近のラルクの様子で気になっていることがある。

感情を見せないあいつが、“怒”の感情を開花させるとは・・・まあ、本人はあまり気にしていないことだが、東誠はそのことに疑問を抱いていた。

何故、怒の感情を？

そう、元々ラルクは、無表情、無愛想で、見透かすことは多々・・・傍迷惑なほど・・・あるが、そのことはどうでもいい。

重点すべきは、あいつが今までそんな素振りすら見せなかったこと。まあ、最初や班決めの原因が原因なのだから、あの件に関してはどうでもいい。

しかし、怒に移ったあいつは人格そのものが変わっているが気のせいかな？

東誠はなどと考えていると、

藍川

「東誠君？」

東誠

「ん？、志津恵か？」

ラルク達のクラスを受け持っている藍川が居た。
何か用かと思つたと東誠は思い、

東誠

「どうかしたのか？」

藍川

「い、いえ。なんだか、難しそうな顔をしてたから」

東誠

「そらあ、そうだろう？、受験控えてる奴らがいるし、この科目受け持つてるせいで履歴書の確認もあるからなあ。たく、正式教員じゃねえのにやる事が多くてかなわん。」

藍川

「“そつちの話”じゃないわよ。」

東誠

「はあ？、じゃあなんだ？」

藍川

「ラルク君と川さんのこと。」

東誠

「……」

その話を持ち出されると、静まり返る東誠。

藍川はその意味に気づいているが、話を続ける。

藍川

「ホント最近中がいいようだけど、“大丈夫”なの？、あの子たち？」

東誠

「俺が口をはさむことじゃねえだろ？」

藍川

「確かにそうだけど、」

藍川は何かに悩んでいる様子。

そしてまた、東誠もそのことに気づいている。

だが、

東誠

「ハア……志津恵、確かにラルクのこととはこのところ気になっちゃいるが、どうすることもできないことは分かってるだろ？」

藍川

「……」

東誠

「それにだ、川も自分からやっていることだ。あいつの記憶喪失は相変わらずだが、時が経つのを待つしかねえ」

藍川

「そうね・・・そういえば、クラスの子たちが“泊まりに行くこと”を話しているけどホント？」

東誠

「・・・おい？、なんで“クラスの連中”がそのこと知ってた？」

藍川

「え？、勉強会とかで東誠君の家に行くって言ってたわよ？」

東誠

「・・・」

それを聞くと東誠は怒っているのか、呆れているのか、とにかく頭を悩ませた・・・。

てか、勉強会って・・・

何故そんなことになっているのか藍川に聞いてみたが、

なんでも、休み明けに会ったテストが余り芳しくなかったということ。

加えて転入早々、しかも、記憶喪失状態のラルクが満点を取っていたこと。

尚且つ、商店街などで世話好きという噂が立っていることから、生徒たちがラルクに持ちかけたという。

東誠

「・・・おい、それで“ラルクの返答”は？」

藍川

「うーん、“始め”は断ったわよ」

東誠

「そうか、そうか、断ってくれたかって・・・“始め”？」

藍川

「ええ、まあ、授業の休み時間とか昼休みに聞く生徒はかなり居たようだけど、それでも時間が足りないとか、やり方が分からん！とか叫んだ生徒が居たらしいわよ？」

東誠

「その結果が泊まり込みで“あいつが了承した”と？」

藍川

「まさか、それは“無い”わよ、ただ休みの日とかに図書館とかに行つて教えに言ったこととか、プリント作成して渡したとかは本人から聞いたけど、泊まりのこととかは全く」

東誠

「すまんが、それ言ってきた生徒名前を教えろ・・・」

その瞬間、東誠からは殺気にも近いものが溢れ始めた。全身のダークオーラをまとうているかのようで・・・

藍川

「い、いいけど、やり過ぎないようにね・・・」

東誠

「いや、骨の芯まで叩き込むー!」

東誠はそれ以降あまり話を聞かなかった。

怒りと、今後のことで頭がいっぱいであったため。

“あいつ”が家に来る予定も組まなきゃならねえって時に・・・
余計な予定を増まやさせんじゃねえぞ!!ラルクウウ!!!

さて、時間が立ち、漸く調理が完成!

盛り付け・配膳を済まし、“食事”へ・・・

一同(ラルクの班)

『おいしいー!』

その食事で叫び声上がる。

ラルクの班である。

食事の開始早々、シチューをひと口食べてみたがその味わいに驚愕!

肉しても野菜にしても食感^は固くは無く柔らかすぎる^{こと}のない絶妙で自分等に会う。

シチューのルー事態も煮込み過ぎているわけではなく、旨みが引き出せるであろう煮込めるギリギリのところをキープしている。

味にしても食感にしても良すぎて自分たちではかなわない。

食べてとてもおいしいのに、何故だが敗北感がにじみ出てくる・
・。
確かにシチュー全般を担当したラルクだが、他の、自分たちの作
ったのと比較すと・・・・

一同

『・・・・』

敗北感が募った。

ちなみにラルク、このシチューを“何故が多めに作っている”。

理由は不明とか言いようがないように“思える”が・・・
当の本人は気にせず、黙々と食べている。

そして何かをメモっている。

そんな中、

桃子

「あらおいしい　〜ラルク君“相変わらず”流石ね」

ラルク

「いえ、そうでもないですよ。家に置いてきた調味料を持ってきた
らまだ良い味になると思います。」

料理の話に開花し始めている桃子とラルク。

そして一同は桃子のある一言を聞き逃さなかった。

“相変わらず”・・・そう、“相変わらず”。

つまりは、ラルクの腕前はいつものこと。

桃子が認めているほどということである。
そして気になり、

〇

「なあ、ラルク、お前のところのシチュー貰っていいか？」

ラルク

「ええ、構いませんよ。」

生徒が一人、シチューを貰いにやってきた。

ラルクはそれを了承し、気づけば他の班も欲しがりよってきた。

まあ、多めに作ったのだからよいであろうと思いい、これもまた了承。
しかし、それは避けるべきだった。

結論を言つと、他の班（主に女子）はラルクの班に居た女子に同情的視線と敗北感を募らせた。
当然その後、

『レシピを教えて!!』

の一言が殺到した。

念のため、ラルクは他の班の料理を一口ずつもらい試食すると、それぞれの作り方、煮込みについて確認。

その時の応用や、注意点を一通り伝えた。

その結果、自宅作ってみると、“少しばかり”改善された。

その結果が納得いかなかったんか、後日さらに追及の嵐が来たことをここに記載しておく。

まあ、ラルク本人曰く、

「タイミングと勘ですね」

とのこと。

こればかりはどうしようもないと、“川と、川と一緒に居た生徒”は納得したようだが、他の生徒は納得しなかった。要は、体が覚えるまで身にしみていること。

その結果、

一同（主に女性陣）

『今度泊まり掛けで教えて！』

ラルク

「・・・お断りさせていただきます」

何故こうなる？

ラルクはそのことが頭の上に押し掛かってきた。

そして断ると、一目散に片づけ、調理室を後にした。

途中先生から呼び止められるがそれを無視。

恐らくレポートのことだが、それは先ほど済ませ、後は職員室に直接行けば済むこと。
直行で離脱し、職員室へ、

ラルク

「・・・東誠さん」

東誠

「？、ラルク？まだ授業中だろ？それとも早く終わったのか？」

ラルク

「いえ、それより相談が・・・」

東誠

「・・・“泊まり込み”か？」

ラルク

「・・・」

何故そのことを？

東誠

「あのなあ、ラルク、俺は教師だ。しかも今年3年を受け持っている。そんな時に泊まりやらやされてみる。書類にしる、課題にしる、テストにしる、暴露されちまう。それは流石にごめんだ！“勉強会”は別のところで・・・」

ラルク

「あの、すみませんが、そのこととは違うことなのですが・・・」

東誠

「だから別のところって・・・何？」

今なんつった？・・・ちがうこと？

ラルク

「ですから……」

ラルクは言いづらそうに経緯を話した。

それ聞くと東誠は悲願まがしい目でラルクを睨んだ。

東誠

「つまり何か？、お前の料理のせいで、女子共がプライドがズタズタにされ、勉強会ならぬ料理会のために泊まり込みを頼んできた？」

――コクコク――

その問いにラルクは頷き、東誠は頭痛が増してきた。

勉強会ならぬ料理会？……なんじゃそりゃ？

東誠

「ラルク、はつきり言う、断れ！！！」

当然、東誠はそのことに納得がいくはずがない。

勘が当たった言えばいいのか、余計な手間が増えてしまう。

それは何としてでも避けたい。

それはラルクも同じことだろう。

しかし、彼の返答は慰めにもならず、さらに重圧をかけた。

ラルク

「でも東誠さん。今日は桃子さんと上村先生の授業でしたよ」

「・・・はい」

こうして、ラルクは川と藍川に事情を話し、何とか選抜。異を唱える者は後に鬱憤がたまりまくった東誠が個人面談したとのこと。

東誠

「おい！こらアあ！！何面倒ごとさせてんだ！！」

「まあまあ、落ち着きなされや。騒いだところでもう手をくれどすえ。」

東誠

「うるせえ・・・お前の件は仕方ねえよ。こっちに非があるからよ。だがなあ、あれはわたり船で俺が追い打ちくらうのはねえだろ！」

いえ、久々に番外編書いたらこうなりましたから

ラルク

「しかし、いったいどうするのですか？、次回の方は1話の方が漸くつながりましたが。」

どうでしょうか？

川

「大変なことは避けられないね」

ちなみに、泊まり込みなので期間をどうしたものかと・・・

東誠

「仕事を増やすなよ」

藍川

「とりあえず、止め役の方を何とか決めないと」

まあ、そこは次回までに何とかしましょう。
では。

東誠

「家での面談Ver・・・」

番外編：結論と付け（後書き）

はあ、次回はどちらを進めるべきか・・・
頑張っていることと思いますのでよろしく願います。
では

第11話 語られる・・・廃墟と言つ名の荒野（前書き）

今回はネタが浮かばず、短いですが、よろしくお願いします。
かなり原作いじっています・・・

では、どしどし。

第11話 語られる・・・廃墟と言ひ名の荒野

『・・・何故こうなるのだ？』

「・・・さあ？」

「あはははは・・・」

Do t h o u g h i t i s t h o u g h t t h e u
s u a l f o r u s ? : 私達にとってはいつものだと思いま
す
が？

.....ドオン!!、ドオン!!.....ドオン!!.....

『・・・“あ奴の言葉”であるが・・・“黄泉へ誘ってやるう”・・・』

619

『・・・最終的に貴様等は何をしに来たのだ？』

ヘイムダルは只々、なのはとユーノにそのことを問う。
いや、それしかないのだろう・・・。

まあ・・・これ以上の面倒事は避けたいですかね。

“ヘイムダルにとって”は・・・

「・・・」

なのは沈黙、ユーノは人間形態（本来）に戻り苦笑いしながら、若干距離をとっている。

流石に先ほどの射撃を見れば嫌がるだろう……。

だからと言って何を答えるよいのが逆に困っており、何をしに来たのか本当に見失った。

しかし……“気になることあった”。

僕はそのことを聞くことにした。

「“あなたのこと”、聞かせてくれますか？」

『……何？……どういうことだ？』

ヘイムダルはアダトをしまつと、両手をポケットに入れながら、ユーノに問う。

何故そのようなこと聞いてくるのか、我には理解できなかった。しかし、内心の中で“ラルク”は納得していた。

……今までの行動に、管理局・スクライアー一族を知っていること、さらにはここで結界を張っていましたから、そこまで来ると流石に気にならない人はいないと思いますよ。

そう、ラルクはヘイムダルに解説した。

『……そこまで気にすることなのか』

だが、納得が言っていないようだ。

「・・・それが“普通”ですよ？・・・一応確認しますが、あなたは“何を基準”に考えているのですか？」

『・・・貴様が気にすることではない。』 の 『』

「・・・分かりました。では後は任せます。・・・ただし、度が過ぎるようでしたら“身体の制御権”は戻します」

『ああ』

「あの？」

『・・・なんだ？』

「なのは気がなくなって声をかけてきた。」

「どうやら、少し黙り止まっていたのが気になったらしい。」

「それは我にはどうでもいいことなのだが・・・」

「あの、その・・・」

「だが、なのはは怯えていることには変わりは無かった。」

「外見は銀髪青年で良さそうなのに、直球で短気なので、ヘイムダムのイメージが崩れて行くのではないか？」

「とはいえ、ヘイムダルは“普段から”そのことは気にしないため、無視している。」

「そして、なのはは何を言っても無駄度と判断したようで、視線をコーナーに向けて、」

『・・・少し“待て”』

「え？」

当然のその言葉に戸惑うユーノ、
しかし、ヘイムダルは無視し、

・・・シュバ！・・・

《Master!》

「え？」

・・・ズド！・・・

「うっ！」

・・・ボタン！・・・

気が付いた時には、“なのは”が倒れていた。
それを見たユーノは、

「な、なのは！」

無数の方向からチェーンバインドをヘイムダルにかけ拘束しよう
とした！

ヘイムダルは微動だにせず、

・・・エアの剣・・・

ドオオオン！！――

「な！」

チエーンバインドが跡形もなく砕かれた……。

ユーノは捕らえたと思った……しかし、拘束される直前に、ヘイムダルは両手から青銅の刀を出現させ、切り裂いた……しかも……。

……み、見えなかった……

今の瞬間で太刀筋はおろか、斬り始めの瞬間すら見えなかった……

もし、あのまま接近していたら……

『……そこで終焉であったな』

――瞬！――

「しまっ！」

――撃！――ドオオン！――

「グハア！」

ユーノの思考を呼んだような口ぶり、一瞬固まってしまった。しかし、それは誤りであった。

そのままヘイムダルは正面へ瞬足で移動し、そのまま回し蹴りでユーノを電灯の柱に蹴りとした！

ユーノは諸に背中を強打し、そのままうずくまる。

それでも、何とか正面を見るが、彼は居なかった。
そして悪寒が走り、後ろを振り向くと……

そこには無表情に僕を睨みつける、

『……初手の判断は悪くは無いが、終わっていたことには変わり
無い……。』

ヘイムダルが居た。

しかも、さり気なく剣を僕の首筋につきつけている……

……う、動いたら殺される！……

ユーノの頭の中にはそれが告げられていた……。

いまでも、呼吸するだけでもつらい……少しでも首を動かしたら・
・

『……』

ユーノは恐怖の故に固まって動けずにいたが、ヘイムダルは彼を
見下ろしながら剣を下ろした。

「……」

だが、ユーノはまだ固まったままで動こうとしない……恐らく、
思考がまとまっていけないのだろう……しかし、ヘイムダルがそれ
を待つはずもなく。

「ドオン!」

「!・・・いったくく」

峰打ちでユーノ頭部を“軽く”叩いた。

ユーノは正気に戻り、頭を押さえながらうつづくまる。

そして痛みに堪えながらも彼を見ると、

『・・・往くぞ・・・』

「え?、いきなり何を、って、え!」

そうすると、ヘムダルはユーノとなのはを連れて(強制的に連れて)転移した。

625

「なのはたち遅いわね?」

「ああ、何処か寄り道してるのか?」

時刻は夕方。

翠屋の方では、なのはがラルクを追って(追わされて)2、3時間が経っている。

店内の混雑も落ち着いたようで、家族一同、なのはの帰りを待っていた。

だが・・・

「元はと言えば母さんのせいだからね……」

「確かにな……」

「くす、恭也、美由紀・ひどい」

さりげない一言（？）ハンカチで涙ぐむ桃子。

しかし、土郎はその行動に何も突っ込まない……。

元凶が彼女である以上仕方ないことだが……

「そもそも、母さんのその癖に振り回されるこっちの身にもなつてよ〜」

今までの出来事を思い出すかのように、悲願が増しい目で見つめる美由紀。

桃子はそんな視線を知ってか知らずか、

「だってえ、あんな楽しいことは他では滅多にないし〜」

「……いや母さん、だからってなのは巻き込むのはどうかと思うが？」

「ええー！、恭也ったら、“自分がしたい” からかってそんな……」

「ちがうー!」

桃子は手を口に当てながら、恭也の方を指差しながら言った。

それには流石に猛抗議をする恭也だが、他の視線からも・・・

「恭也・・・お前・・・」

「恭ちゃん、それはちょっと・・・」

父と義妹から若干距離を取られ始める。

「・・・ちがうから・・・だからそんなに距離を取らないでくれ」

そんな行動にガツクリとしながら、抵抗の声を弱々しく上げるのだった・・・。

「もう、恭也ったら、素直じゃないんだから・・・」

桃子はすっぴかりのこの空気にノリノリだった。

ご丁寧に、優雅に微笑みながら両手を合わせている。

「母さん・・・いい加減にしてくれ・・・」

すっぴかり、自分が標的めぞうめいであることを再認識しながらもつなされる恭也であった。

「それにしても、本当になのは遅いねえ」

美由紀は桃子のノリに便乗しながらも、帰りの遅いなのはが気がかりだった。

時刻は、午後6時を経過していた。

そして、

「母さん、あたし、ちょっとその辺見てくるね。」

「ああ、気をつけるよ」

士郎が了承し、美由紀はエプロンをとると、なのはを探しに翠屋を後にした。

・・・ラルク君に説教されていなかったらいいけど・・・

『・・・ここでなら、問題はあるまい・・・』

「1111は？」

ヘイムダルは場所を変え、別のところに転送した。

気が付いた時は、ユーノはなのはと一緒に背中 of 壁に凭れ掛つていた。

なのははまだ気を失っている。

少し崖の上に居たようだが、ユーノは少し先にヘイムダルが居ることを確認しながら辺りを見渡す。

そこは、“崩壊し、朽ち果てた廃墟と遺跡が残っていた世界”だった。

ここは？

『第47管理外世界・・・アパレシアだ』

「管理外世界・・・アパレシア？」

『・・・ああ』

ユーノが目を覚ましたのを機は居で感じ取ったようで、ヘイムダムはここが何処か告げた。

それを聞くとユーノはもう一度辺りを見渡す。

だが、さっき見たときと変わらず、廃墟の町と遺跡らしいものしかない・・・というより、

「誰も居ない」？

『・・・』

ユーノはなのはが倒れないようにしながら、立ち上がり、少し前に行き、空も見始めた。
すると、

「うっ！」

いきなり吐き気を覚え、口を押さえうずくまる。

辺りには、酸の臭いが充満していて、呼吸するだけで少しつらい。

ユーノは急いで、なのはと自分に結界を張り、ヘイムダルを見ながら、

「この世界は・・・」

彼に聞いてみた。

すると、ヘイムダルはすこし辛そうな顔をし、ユーノに振り向こうとせずじ、

『“2年前”に崩壊した世界・・・それがアパレシアだ』

「・・・」

「“2年前に崩壊した世界”？」

He said certainly so・・・確かに彼はそう
言いましたね？

「なのは？・・・気が付いたの？」

「うん、ついさっき・・・」

『・・・』

なのはが気が付いたようで、ユーノのところに歩み寄ってくる。
“首を押さえている”ようだが・・・

そしてなのはは少し悲願が増しい目でヘイムダムを見つめている。
まあ、仕方のないことだが・・・

しかし、ヘイムダムは詫びる気は全くなく

『・・・そのデバイス』

What is?..なにか？

『・・・“何処まで話した”？』

What does it indicate?…それは“何を指している”のでしょうか？

レイジングハートに確認をとっていた。
しかし、肝心の彼女はとぼけている。

彼はデバイスの方に視線を向けると、

『・・・東誠とやらから何も聞いていないのか?・・・“今回のこと”を・・・』

At all:全く

『・・・』

それを聞くと再びヘイムダムは視線を廃墟の町の方へ戻した。
なにか重々しい雰囲気なのだが、状況が読みとれないのはとユーノは、

「あの、二人とも何のことを言っているのか説明してくれない？」

「わたしたち、なんのことなのか分からないんだけど？」

が
I do not know either...私も知りません

『・・・』

しかし、レイジングハートは無いも知らないとのこと。
当然、視線はヘイムダムの方へ行く。

そして、振り向かないまま、

『……ここは……“ジュエルシードで崩壊した”世界だ』

「「え？」」

いま、彼は何と言った？

なのはとユーノはそのことでチンプンカンプンだ。

ヘイムダムはそんな彼女たちの気にかけることもなく、

『……2年前……ユーノ、貴様が発掘する前に、“ジュエルシードがこの遺跡にあった”……そして……』

「……“2年前”にこの世界に……」

ユーノはその言葉に固まった。

2年前？……なんで2年前に“ジュエルシードが管理外世界にあるんだ？”

あのロストログアは確かに、僕は遺跡で発見したものだ。
しかも、“管理内世界”で……なのになんで！！

「そんなことがあるわけ！！」

『……では問う、暴走し、爆発したものが“別次元に移動した”
というのはいり得ないことなのか？』

「!?!」

『ジュエルシードが“次元そのものにも影響を与える”というのは発掘した貴様が一番知っているであろう?』

「・・・」

それを言うと、ヘイムダムは振り向き、なのはを見た。

『“この世界”は、白き魔導師、貴様の世界同様、魔法知らぬ緑の世界であった。』

その言葉には嘘偽りでない・・・それが感じ取れるほど、ヘイムダムには、悲しみの感情が渦巻いていた。

なのははそんな風に思いながら彼を見つめると、

「それで・・・」

・・・この世界に何があったの?・・・

なのははそう言おうとした・・・。

だが、ヘイムダムはそれを割り込み

『・・・スクライアー一族と会ったのもこの世界だ・・・崩壊の序章が始まった所以のな・・・』

「さて、今回はあいつが関連している趣旨のところ悪いが、」

ヘイムダル

『なんだ？』

藍川

「これ・・・かなり重い話に成りかねるないんじゃない？」

ヘイムダル

『他に・・・別のところが浮かばないものでな』

東誠

「おい？、それで、酸が充満している廃墟世界？・・・ゴーストタウンか？いきなりの展開が？」

ヘイムダル

『・・・』

藍川

「しかも、そこでバトル開始をしようとしてるのか、それとも他のことをしようとしているのか、どういう神経してるの！？」

ラルク

「まあ、ここに関しては次回どうなっていくことやら・・・」

・・・どうにかします。

もしくはフェイトさん方面に行くかもしれませんが・・・。

川

「え？」

東誠

「おい……」

まあ、前文がややこしいことになることは確定ですのでどうかが
了承ください。

ラルク

「では」

東誠

「おい！、何が起きるか説明を！」

川

「しかもなんでラルク君が参戦してるの!？」

ラルク

「では次回!!」

東誠・川

『説明しろノして!!』

第11話 語られる・・・廃墟と言つ名の荒野（後書き）

次回の方、何とか粘って頑張ってみますのでよろしく願いします。
では。

第12話 意外なこと・・・意外な人物（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

・・・投稿が遅れて申し訳ありません。

誰しも、目の前の敵がリアルというのがしみじみ感じます。
では、続きを・・・

第12話 意外なこと・・・意外な人物

「なんでお前がここに居るんだ？」

「・・・わたし・・・そろそろ・・・」

「仕方ないどすなあ・・・ほんなら・・・」

「え？、みんな何してるの？」

「ふふふ、フェイトちゃんって言うんだ？・・・いいなあ、お肌すべすべで」

「え、いや、その・・・」

フェイトは、ただ今、風呂？にいる。
尚且つ、川が何故か入っている？

さて・・・二人そろって入浴中であるが・・・フェイトは困惑気味である。
何故？

「あの、そろそろ・・・」

「最近の子って、本当にかわいいなあ、なんでこんなにすべすべで、抱きごっこもいいのかなあ」

フェイトはすぐにも逃げようと試みているが、川は先ほどから抱きついたまま離してくれそうにない。

さらに、太ももや腕やら、胸やらさすっている。

尚且つ、頬をすりすりしている。

結果、湯船につかったまま、1時間近く経とうしていた……。

さて、

それはそれとして

何故？

問題ないと思うが、

こうなったのか？

……1時間ほど前……

本当にすごいなあ

川に風呂を勧められ（強制連行され）、風呂場の様子を見て絶句。尚且つ戸を開けるとそこは露天風呂と化していた。

そこまですることなのだろうか、フェイトは内心想った。

だがフェイトよ……以前アルトセイムでリンスと居た時はどうだったか……

まあ、それはさておき、とりあえず、身体を流し……いや……壮大に“頭からお湯をかぶり”、湯船につか……

- - ドボオオオン!!! - -

- - プク、プク、プク、プク - - - - パア!!! -

「ケホ、ケホ、ケホ・・・」

・・・浸かろうとしたが目が見えていないためか、段差につまずき転落・・・。

溺れかけたが、なんとか這い上がり、石段に腰掛けた。

「ああ、」

そのとき、フェイトに何かが過ぎった。

リニスと一緒に入った記憶・・・

自分が溺れかけて、アルフに助けてもらったとき・・・

「・・・なんで・・・“今になって”・・・」

今では考えていない・・・記憶の隅にとどめていた記憶が・・・

なんで・・・

フェイとは暗く落ち込みながら、湯船につかる。

ふと考えだす、

ここに来たこと・・・

川さんは、なんだかとても明るくて元気で・・・

近くに居た“山猫”・・・“あの猫”・・・どこかで・・・

湯船につかりながら空を見だす。

しかし、夜空になりかけた空を見ても、いつもと変わらない。

そんな風に思えた。

・・・ジュエルシード・・・

そうだ・・・早く探さなきゃ・・・

・・・母さんが、アルフが・・・

フェイトはそう思うと、すぐに上がろうとした。

だが、誰かが背後からそっと抱きついてきた。

「まだ入ってすぐだよ？、しっかり温もって、嫌なこと、全部外に出そう？」

いつの間にやら入って来ていた川だった。

.....

結局、今の状況を打破できないフェイト。

魔法を使おうにも、この世界の人は魔法のことを知らない。

それに私の魔法だと・・・

そう、フェイトの方は電気資質の魔法・・・。

今ここで使ってみよう・・・ここは風呂、そして水は電気をよく

通す。

さて、感電死に繋がりがねないこの状況……。

フェイトの魔法と相性はよろしくない。

仕方なく、今のまま言いように弄ばれている。

あ、また！

「あ。あの、くすぐつ、うっ！」

「もう、女の子なんだから、でも、子供だもんねえ。」

川はマイペースながら、フェイトの体をいのように触れまくっている……。

フェイトは何とか逃れようと体をよじるが、湯船の中自由がうまく利かない。

しかも川はフェイトの動きに合わせて、力を外に流している。

つまりは受け流し……どんなに力を入れようにも流され、かけられている方が消耗するだけ。

加えて、体格差も考えてフェイトには不利である。

小学生の体格では、大人の川には不利ということ……。

ただ、必要以上の接触でフェイトとしては当たっているところが気になってしなないようだが……。

「ほらほら、そんなに暴れなくても、きちんときれいにしましょうね。」

そうすると、川はフェイトを抱きかかえ、移動……。
あからさまに“身体を洗うよう”だが……

「あの、自分で動けますから……降ろしてください……」

「え？、何か言った？」

抱きかかえられたまま移動され、抵抗しようにもできない。
自分やるうというが聞いてくれない。

……逃げ場がない。

川はそれが分かっているか知らずか、

「もう、そんなに“焦らないで”それに髪がそんなに長いよう
だし、洗うのも大変でしょう？」

「いえ……大丈夫だから……降ろしてください!!」

……回答、フェイトのことを分かっている……。
後者はともかく、“前者は特に”!!

フェイトは必死にもがくが、先ほどから4、50分され続けたの
で、あまり体力が残ってない。

「はいはい、よい子は素直に聞きましょう……隅々まで
洗ってあげるから」

「……」

「たく、川の奴、着替えぐらい用意しとけ……」

俺は愚痴をこぼしながら廊下を歩いてた。

フェイトがここに来て（？）から、30以上経過している。

東誠は先ほど返ってきた。

そして、フェイト達の件を伝えた後、部屋に戻って、課題やらプリントやらを再開した。

今までの鬱憤を晴らすような感じで、一気に容量が超加速!!。ものの20分で片づけたのだ。

だが、その課題がグレードアップしていることは何も知らない。

……さらには、その柄項目がまだ制作中である。……

……哀れな生徒たちは後日涙するだろう……。……。

さらに付け加えられるなら……

さっき告げたとおり、川の奴、風呂場に行ってしまったのだ。

本人はノリノリで、

「わたしも行ってこよ〜」

「……」

などとハイテンションである。

東誠はただ無言のまま、自分の部屋を通り過ぎていく川の部屋の戸から見届けただけであった。

「・・・いいですか？、流寺？」

「問題ないだろ？、あいつも自分のこと話すほバカじゃねえ・・・」
いえ・・・そうではなく

「・・・なんだ？」

忘れ物してますよ？、彼女（川）？

「は？・・・いくら川でもそんなわけ・・・」

「・・・スペルが言った、東誠は否定したが・・・問題が起きていた。簡潔に言うなら、据えるの指摘通り、川は風呂場に行ったまではいいが、着替えを忘れて行ったのだ。」

東誠はそのことに気づいて、

「・・・おいおい・・・」

絶句以前にその行動に呆れてしまった・・・。
おまけにあの娘も着替えがねえようだし・・・

「たく・・・」

東誠は仕方なく、課題を一通り済ませて行くことにした。

「・・・なんで面倒ごとが何故、毎回毎回俺に降りかかってくるんだ！・・・おまけに、課題の問題がまだ完成してねえ・・・」

考えるだけ、無駄では？

「うるさい、言ってる自分がばかばかしくなる」

若干、目から滴が落ち始める東誠。

まあ、仕方ありません、面倒事が襲いかかるのは“あなたの生涯の信条”ですから

「うるせえよ、“スペル”」

スペルはこうで、俺をからかう傾向が見え始めているからな。

“最初に会ったときは”……

時に流寺？、着替えは“どこから”取ってくるつもりですか？

「……今、頭を抱えていたところだ」

そう、着替えをとってくるというのは、つまりは……

「……川の部屋あいつに入らんならないうてことだからな……はあ

」

頭をかきむしり、ため息が絶えない東誠。
そんなとき、

「なんやあ？……えらいお困りのようどすなあ？」

「……？」

……何か聞き覚えのある声……
東誠はその声に疑問があがる。

妙だ、“あいつ”が此処にいるはずがない。

“あいつ”は“今”……

その疑問が頭の中に飛び交う中、俺は後ろを、声のした方角を振り向く。

見間違いだ！幻聴だと信じて！

- -バ！ - -

「……」

だが、その答えは変わらず、“彼女”が居た。

そう、髪の色は銀色。黒の着物を羽織っており、年齢は、代々30代に行っているがどうか……

見た目からおっとりしており、旅館で言う、女将見たいな人である。

外見も細くそれなりにいいスタイルのもち主……彼女に会うのはかなり“久しぶりになるが……”

そして“彼女”を睨みつけ、

「何故、お前がここにいる？」

「嫌やなあ、その言い方。あんさん、まるでうちが“ここに居るところがおかしい”みたいに……」

「そこは“当然”のことだからな？……“天宮”？」

東誠はじつと睨み続け、天宮と呼ばれている者は、ただ優雅に頬
笑みながら沈黙が訪れる。

「……しばらくお待ちください……」

「……話が進まん。いったい何をしに来たのか結論を言え？」

「まあまあ、あんさん、相変わらず気が短か過ぎまへん？」

「……結果5分、東誠の敗北であった……」

まあ、本人はあまり気にしていないことでしょうし……

「とつとと用件を言え？、“わざわざ出てきた”ってことは何かあ
ったんだろ？」

東誠は、天宮が懐に持っている物に気づきながら言った。

当然、天草もそのことに気づいていながら、

「……気が短いなあ、牛乳飲んではいります？」

「……何をしに来た？」

うまく流す天宮に対し、東誠は逃がす気は無く追求を続ける。

しかし、この先に問題が増えていくことを“東誠以外”、知る由は無かった。

「ええと、確かここやったな？」

天宮はうる覚えのような感じで風呂場に到着。
久々に“生で見ると”、

「相変わらずの作りやなあ、ここも？」

何か懐かしそうに見ていた。

そして戸を開けようとしたが・・・

「ん？」

・・ガチャ、ガチャ、ガチャ、ガチャ・・

・・・戸が開かない？

もう一度やってみるか結果が同じ・・・開かない？

「もう、あちらはんはいつたい何してはるん？」

ため息をつくとき天宮はそのまま“戸をすり抜けて行った”。

「なにしてはるん？・・・あんさん方？」

・・・そして、風呂場が寒く感じた・・・。

ラルク

「さて、……色々と聞きたいことがあるのですが……」

藍川

「そうね……これはどう責任を取るつもりなのかしら？……川さん？、作者さん？」

いえ、どうするといわれましても……

川

「っ、つい……」

――バキ！バキ！――ボキ！ボキ！――

いや、ラルク？、何指や腕を鳴らしてんるんですか？

ラルク

「私としてはこればかりはどうとも思いますので……関節技行きま
すか……」

や、ヤバー！

川

「逃げー！」

――ダッ！――

東誠

「・・・骨身に刻まれ、二度としない服従心？」

・・・ネタが危なすぎますよ・・・

東誠

「俺は教師だ。当然、こういう問題に対する説教をしなければなるまい？」

『・・・』

ラルク

「さて、意識が戻ったようですし・・・」

・・・ガシ！ガシ！・・・

川

「ら、ラルク君離して！！」

・・・ご、後生ですから！！

ラルク

「有効的なジワジワ攻める方から・・・指関節から・・・」

・・・バキ！バキ！バキ！バキ！バキ！・・・

『ギャアーーーーー』

ラルク

「悲鳴を挙げるのはまだ早いですよ？・・・何時間もかけていきま
すから・・・」

・・・た、助け・・・

東誠

「ちなみに気を失ったら・・・浸透劉・・・」

『グハ！！』

東誠

「こうなる・・・さて、再開だ」

藍川

「まあ、あの四人はしばらく続きそうだから・・・」

ヘイムダル

『・・・次回の件の通達だ・・・』

リニス

『もしかしたら、次回の方で、技の詳細の一覧でも出しましょうか・
・・・と、言うことらしいです。ヘイムダルの件もありますし・・・。
ここは難しいのですが・・・』

ラルク

「そうですね・・・今のところ少ないですが・・・多分前倒しの技
も出ます。では」

川・作

『た・・・助け・・・』

東誠

ランサ・ドール・ブレイク・ド・ド・ド

「氷劉血餓」

- - パリン!!! - - -

天宮

「ほんなら、皆はんも気いつけて・・・特にLVの作者はん、いやあ、祐樹奈はんでしたなあ?・・・一撃終わらすと、その時つきりするやもしれへんけど、」

リニス

「時間をかけて攻める方が、より相手に効率の良い刺激を与えられます。」

では・・・

ヘイムダル

アラクト・アルセウス

『光帝審雷』

ドオオオン!!!

グハ!!!

第12話 意外なこと・・・意外な人物（後書き）

大変迷惑がかかりますが、次回とも、何とぞよろしくお願いします。

クロスリレー・・・次回の行方も気にかかります。

では。

第13話 ならば問おう・・・ (前書き)

どうも、イクス・スタンスです。

さて、今回またややこしい事になっていくことだと思いますがよろしく願います。

では、ごきげん

第13話 ならば問おう・・・

『・・・これが我の形だ・・・の』

「これは！、それに、その魔法陣!？」

「・・・私の信念？」

『ここは、“ジュエルシードで崩壊した世界”だ』

「・・・」

そのことを聞くとなのはとユーノはその・・・“彼が言って言っていること”が理解できなかつた。

“ジュエルシードで崩壊した世界”？

確かに彼はさっき言っていた。

“2年前に崩壊した”と、暴走して。

ヘイムダルはそのまま淡々と語り始める。

『2年前・・・我はこの世界に訪れた。その時の我はただの放浪者だつた・・・』

・・・放浪者？、旅人ってこと？でも、その事がどう関係が合あるというの？

なのはとユーノはそのことが頭によぎるが、そのままヘイムダムの話を聞く。

『この世界に来たのは“偶然”であった。．．．その時はこの世界は緑の草原で満ち溢れ、空はとても綺麗な景色であった。そしてこの世界の者達もまた、互いに協力し、恩恵が保っていた。だがある時．．．』

そこまで言うとヘイムダルは目をつむった。

ここから先は．．．彼にとって辛いことのように．．．

『．．．』

なのはユーノもそれを察したのであるう．．．途切れる際のヘイムダルの言葉が重く押し掛かった錯覚を覚えたからだ。しかし、そのまま止まるわけにもいかない。

ユーノはそう思い、彼の続き聞いてみる。

「．．．僕の一族、みんなが来たってこと?」

『．．．』

「そう、なんだよね．．．」

『．．．』

その問いに答えは返ってこない。

ユーノはヘイムダルが語っている間、あることを考えていた。

ジュエルシードを“暴走させたのは自分の一族”ではないかと・・・

それなら、今のヘイムダルの行動にも納得がいく。

わざわざこの世界に転移したこと、僕たちを話したこと・・・

僕はそう思った。

だが、

「ちがうよ・・・」

「なのは？」

なのはが割って出てきた。

「ちがう、ちがうよ!!」

激しく首を振る。

そう、

「私はユーノ君と知り合ってたまたユーノ君のことよく知らない。だけど!、私に魔法ことを教えてくれたユーノ君や、一族の人たちがそんなことするはずがないよ!」

「・・・」

「それに、あなたが言っていることが本当のことなのかも、これじやあ、わからないよ!」

そこまで言ってくると僕は何も言えなかった。

なのはが言ってくれるのうれしい。

でも、今の話に限っては、ヘイムダルの行動が合点が合った。確かにそれが本当かどうか分からないけど、この世界にまで連れてきてこんな話を仕出すとしたら……

『……話を勝手に進めるでない』

「え？」

そこまで言ってくるヘイムダルは言ってきた。気が付いて彼の方を振り向くと、ヘイムダルは僕たちの方を見ていた。

そして彼は淡々と言ってきた、

『我はスクライアー一族に“会った”とは言った……しかし、スクライアー一族が“起こした”とは、一言も言っておらぬぞ。』

「あ、」

『答えを先走ってしまっただけでは、見えるものも見えなくなる。それが“争いの火種”となる。分からぬか？』

「ええ、と……」

「確かにそうだけど、」

『……ならば勝手な解釈などするでない』

それ以上言おうとヘイムダルは嘆息し、話を続ける。

『スクライアー一族の者達とは、我がアパレシアに来る前からあの世界に居た。そこで遺跡の発掘をしてはいたが、この世界の者達の関係は悪くなかった。・・・寧ろあの者たちと仲が良すぎていた。』

「すごくいい人たちだったんですね。」

「ああ、僕たちの一族は互いに協力し合っている中だから。」

『・・・そこに関しては同感だ。』(・・・“確かに”)

ヘイムダルも“ラルク”もそのことに関してはなのはたち同様に賛同している。

だが、その暖かみがそう長くが続くはずはなく、

「でも、僕たちの一族が起こしたことじゃないとしたら、いったい何が？」

そう、ヘイムダルの話からして、起こしたのは自分のたちの一族とは無縁らしい。

とすれば、この世界の者たちがこれを引き起こしたのか？

それとも、他の誰かがこの世界に来て起こしたのか？

または何かの表紙で突然暴走したのか？

ユーノの頭の中はそここのことで駆け巡り、思考の世界に入り始める。

一方なのはは、無関係だということがわかるとホッとしていた。

ヘイムダルは、その中、なのはとユーノに“あること”を聞く。

そう、今回の件の“重要なカギの一つ”を、

『……そもそも貴様等は、“ジュエルシードのことをどこまで理解してる”？』

「え？」

「ジュエルシードのこと？」

『……ああ。』

その問いに少しばかり思考が止まった。
何故そのことを？

二人にはそのことが気がかりでならない。
“どこまで理解している”……それは言った何を指しているというのか？

全く分らない。

とはいえ、黙っておくわけにもいかない。

ユーノは話し始め、

「ロストロギアの一種で、碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石全部で21個存在して、それぞれシその一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望（自覚の有る無しにかかわらず）を叶える特性を持っている。……ってところだね。」

「それで発掘したユーノ君が、事故で私の住んでいる世界に散らばったのを探しに来た・・・で、ところ？」

『経緯までは聞いておらぬ。だが、・・・“概ね間違いではないか”・・・』

概ね？・・・その言葉にユーノは眉をひそめる。

概ね、それはすなわち、大体合っているということ。

しかしそれは全部合っているというわけではない。
そしてヘイムダムはそれを言うと目をつむっている。

と、いうことは・・・まだ、

「まだ、何かあるということ？」

『・・・話すことは“ここまで”・・・今から貴様等の信念を・・・
試す』

「試す？・・・何を？」

『・・・』

「！！！！」

その瞬間！、二人に威圧が襲いかかる！！

まるで殺気に近い！！

『貴様等が“手にしたもの”、“宿したもの”、“それらを扱うまでの貴様等の信念”・・・“見極めさせてもらう”。』

「見極めるって？、なんであなたがそんなことを！？」

なのはそのこと聞いた。

そう、自分の持った力、貰った力を、彼がどう言うのか気になったから。

そもそも、何故彼がそんなことをしてくるのが分からなかった。

『それが“私の役割”でもあるのだ。そう・・・“原点”において・・・“我が存在し続ける代償”としてな。』

「“役割”？、“原点”？、“代償”？それっていったい！？」

『話し過ぎてしまった・・・“アイギス”』

ヘイムダルは盾を左腕に装着した。

そして形態を変え、盾の先から実体剣が飛び出す。

なのはとユーノは構え、いつでも距離が取れるようしている。距離はミドルレンジのギリギリ一歩外、なのはの得意とする距離である。

もつとも、この距離すらも意味を成さないであろうが・・・さて・・・そして雲行きが変わり始める・・・。

・・・風よ集へ・・・その斬空のごどく、刃となれ・・・
・・・雨よ・・・その舞い散る戦乱を・・・槍のごどく示せ・・・

- - 瞬! - -

ヘイムダルは、頭の中でそう唱えると、瞬地にてなのはの目の前に瞬時に移動！

「！」

プロテクション！！

- - 突！ - - パリン！！

レイジングハートは瞬時に防壁を展開、しかし、それは一瞬で碎かれる。

ヘイムダルはそのまま威力を殺すことなく突きをかました！

なのはは、ギリギリでレイジングハートを前に出すが、ヘイムダルの剣そのものが風が嵐のように渦巻いていた。

- - ドオオン！！ - -

「きゃあー！」

そしてぶつかり合い、なのはは後ろの遺跡まで飛ばされた。

「なのは！？、くう！」

ユーノは今ので亜然するがヘイムダルにチェーンバインドを仕掛ける。

しかし、

「え！？」

チェーンバインドがヘイムダルに絡みつく瞬間、絡みつく前に軌道が逸れた・・・

…ダッ！…

その気を逃さず、ユーノに接近！

そのまま右手で打撃を仕掛けてきた！！

速い！！

ユーノはかわすことが無理だと判断し、反射的に自分の目の前に防壁を3重に展開！！

ヘイムダルはそれに構わず、盾を前に出しながら打撃を仕掛ける！

…ドオン！…

「くう！！」

一撃で2枚が一瞬で割れました。

ユーノは何とか最後に1枚に魔力を込め、耐えている、そして、同時に、

…キン！キン！！…

チェーンバインドを全方位から絡め、動きと止めた。

同時に、なのはのレトリックロックを発動！

さらにヘイムダルの動きを封じ、後ろから、

「デイバイイン・バスター！！」

『…』

・・・ドオオン！・・・

なのはは上空に上がり、様子を見る。

「なのは、どう？」

「何とか、手ごたえはあったと思うけど・・・」

ユーノもなのはに合流、互いに状況の確認をする。
だが、何か違和感が隠せない。

「あの人、あんなに簡単に捕まえられたのは・・・」

「うん。」

あの時の動き、ワザと捕まってくれたような・・・そんな錯覚を
覚えるなのは達。

ここに来る前は、一撃で自分達をノックアウトしたのだから、当然
と言えばそうなるだろう・・・。

では、何故こちらの攻撃を受けたのか？

『・・・この程度か？』

「！！！！」

なのはとユーノはその声に反応！！
慌てて下を見る。

下は煙が薄れ始め、誰かが歩いて来ているのが薄らだが見える。

『・・・落胆した・・・試しに受けてみたら“この程度”か・・・』

煙から出てきたはヘムダルは全くの無傷。

元々非殺傷設定で放ったにしても、ダメージを受けた痕跡が全くない・・・。

どうして？

「どういこと？」

二人はヘムダルが全くダメージ受けていないことに一瞬疑問があがるが、直にそこを後回しにした。

ヘムダルはなのは達の方を見上げると、

『・・・その程度のこと、我が傷を負うと思ったか？・・・このバカども』

「な！」

「ば、バカはないでしょ！バカって!!！」

今の一言でなのはもう抗議、ユーノは絶句した。

・・・だが二人とも、戦闘中にほかのことを考えるのは・・・

・・・キン！キン！・・・

「しまっ、」

「バインド!？」

ヘムダルの一言に過剰反応したため、警戒が緩んでしまい、あっさり捕まってしまった。
さらに……

……ズドドド!……!……

「ぐわ!」

「あう!」

頭上から、大粒つの雨が襲いかかった。

いや、ちがう!!

大粒の雨にしては威力が強すぎる!!

下の方に目がいくと、雨粒が落ちるたびに、地面が削られて行く。

これは!!

『水といえど、加速をつければその威力は大きく跳ね上がる。ましてや、“豪雨の時の雨を加速させれば”尚更のこと』

ヘムダルはそう告げ、全てを撃ち尽くすと、バインドを解除。
なのは達はそのまま地面に激突した。

『……貴様等はこの程度、今起きていることを打破しようとしたのか?……浅はかにもほどがあるぞ』

「うつ・・・」

ヘイムダムは墜落したなのはたちのところまで歩み寄ると、冷徹と、淡々と告げる。

なのは達は攻撃を受けすぎたせいか、声が出せない。

『先ほど威力を殺し、時間差で拘束し、そこから間髪いれずに砲撃・・・確かにその選択は間違っではない。だが、根本的に貴様等、焦り過ぎていないか？』

「ど、どういう・・・こと・・・」

『・・・魔力の制御、バインドしろ砲撃にしろ、無駄がある。受けてみただが見かけだけであって、圧縮し切れておらぬ。・・・それはすなわち、イメージが出来ておらぬということ・・・それはすなわち感情の、心の乱れを表す・・・では問うが、何故そうなった？』

「・・・」

それを聞かれるとなのは達は黙まりだ。

それ聞かれたとしても答えようがない。

ヘイムダムはそんなこと知って知らずか、全く無視で、

『答えは簡単だ、貴様等が無駄なことを考え過ぎているためだ・・・どういふつもりかは知らぬが、そんな生半可な状態で我に攻撃を仕掛けた・・・その結果がこれだ。』

「そんなこと!!」

『・・・』

なのははそこまで言われると立ち上がり、レイジングハート構える。

「わたしは、ユーノ君の手助けをしたくて、誰かの役立ちたくて！、だから！」

『「だから」なんだ？、白き魔導師・・・それは“己本心の意思”か？、ならばその力、ユーノとやらの目的が終わった後はどうするつもりなのだ？・・・その先には何かあるのか？・・・己は力を宿してその力をどう使いのか？、何のために使いのか？・・・貴様の信念は“誰かがいなければ何もできないのか？”・・・では問うが、使える力を宿していたとしても、使えない状況に陥った場合、それはどうやって打破するつもりだ？・・・今の貴様のように、心乱れ、使えるものが制御できない、不安定・・・それ状態でどうやって打破をする？』

「私は迷わない！、だから“今”も“これから”も必死に自分のできることとしていくつもりなんです！自分の答えを必ず見つけ出します！だから私は迷わずに行きます！！！」

「僕もそうだよ・・・なのはを巻き込んでしまったこともある。僕には補助とかしかできないけど、なのははそんな僕に手を貸してくれた。だから僕も、自分の追った責任を真つ当していく！なのはみたいに強い魔法はないけど、それだけがすべてじゃない！」

互いに見つめ合い、己の信念を伝えた。

ヘイムダルはその答えを聞くと少し嘆息した。

・・・迷わず行くか・・・だが、それはすなわち、自分に押しつけた善意ではないか？
己にしかできないことか？・・・自分のそれ言った覚悟は・・・それは本気か・・・

何故ならその目がそう語っている。

・・・自分で決めたことと・・・

(・・・流石は土郎さんの娘さんですね。そしてユーノさんも一族の者というところですね)

『ああ、そうだな・・・』

(どうしますか？・・・あの二人の考えは、折り紙つきで頑固ですよ?)

『・・・ならばあの目、確かめるまで・・・』

(わかりました。)

ヘイムダルも、ラルクという言葉で納得し、あの二人に少し興味がわいたようだ。

ヘイムダルは二人を見て、

『ならば・・・仕方あるまい』

ヘイムダルは魔法陣を展開した。

その動きになのはとユーノは構える。

しかし、ヘイムダルはそのまま何もせず目をつむった。

そして・・・ユーノは“ヘイムダルの魔法陣”を見て違和感を覚え

る。

この“魔法陣”、何か“おかしい”。
僕らの“ミッド式でも東誠の“ベルカ式”でもない。

だつたらこの魔法陣？

Es ist . . . alle von Person pro
duzieren Sachen . . . , da? da
s Licht leuchtet .

(. . . 光射す者 . . . から生み出されし万物よ . . .)

Wird dem K?rper geantwortet . . .
; es zu machen, ist . . . in
er Hand in einer Tasse vom Him
mel .

(その身 . . . 受け答えられしは、天よりの杯を手 . . .)

. . . Eine Sache des Herzens . . .
Wahrheit ist Form . . . ,
(. . . その魂^{ソウル} . . . 誠のものなら形となりて . . .)

. . . Zeigen Sie die St?rke und
ird produzieren . . . ; das Machen
davon ihm Projekt; K?rper . . .
(. . . その強さを示せ . . . 生み出されしは己の映し身 . . .)

. . . Sich selbst eigen . . . Ich . . .
. . . Form . . .

(. . . 己自身 . . . 我が魂^{ソウル}こそがその形 . . .)

. . . Dann wird gebildet; die Welt
des Herzens . . . mein Geist
st-Aufenthaltsgegenstand.
(. . . ならば成されよ . . . 我が依り代たる魂の世界)

『 . . . アルカディアオリンピア創生の聖域』

「うっ！」

その瞬間辺り一帯が光に包まれた。

『貴様等の覚悟 . . . 確かめさせてもらおう』

東誠

「おい、ここまでやる必要があるのか？」

ヘイムダル

『どういう意味だ？』

ラルク

「まあ、流石にあそこまでやるの私としては予想外でしたから」

東誠

「 . . . 普段よく喧嘩にならないよな？」

ラルク

「互いにそこまではあまり干渉しませんから」

川
「でも、これからどうなるの?」

ラルク
「“固有結界”を使いましたから・・・危なくことが増えていく」とは確定ですね」

東誠
「スペックが高いからなあ・・・この作者は無駄に高くしゃがる
それは今も考えてますよ。
しかしそれだとあなた方も困るでしょう?」

東誠
「まあ、俺の場合はクロノをタコ殴りだったからな・・・。」

ラルク
「・・・止めは氷劉血ラシシサ・下・下・下・下・下・下・下・下・下・下・下餓で血を吸い上げる氷結魔法」

川
「・・・流石に引くよ・・・」

それより、今回のキャラの魔力値やら能力等の掲載はどうしますか?

一同
「また今度」

・・・そうですか・・・では、次回辺り何とかしてみましよう・・・

早く進めないといけないのに現実はいつでも大変なことばかりです。

東誠

「ヘイムタルの野郎・・・余計に面倒ごと増やすなよ・・・なのは家の件やら、また管理局が動かなければいいが、」

ラルク

「それはまた、クロノさんをボコツたのが東誠さんから、ヘイムタルの変わるだけでは？」

一同

「・・・はあ・・・」

まあ、何とかしましょう・・・。最近に忙しさ増していきますが、

一同

『では次回!』

第13話 ならば問おう・・・ (後書き)

中々難しいところですが、何とかしていこうと思います。

また時間がかかっていますかもしねませんがよろしくお願いします。

では

第14話 天界の都・・・ヘイムダル（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

さて、かなり無理をしましたが、続きをどうぞ・・・

いろいろ大変なことになりましたが・・・

第14話 天界の都・・・ヘイムダル

・・・ここは“別次元”・・・
この世界は、“存在しない世界”

光り隔てて取り込まれたもの達・・・
そこで目にしたのは“古代の遺跡”・・・いや、天界に存在されし
“空の都”

そして自分たちが立っていたのは、戦闘、“決戦されし約束の場”

「くっ！」

『・・・まだだ』

- - 斬! - -

そしてここでは、ひたすら小刀をもって受け、避け続けるユーノ。
それに対し、アイギスで接近戦を仕掛け続けるヘイムダル。

ユーノはヘイムダルの攻撃を何とか斬撃を受けながらも、必死で
こらえる。

何とか距離を取ろうとしているが、ヘイムダルはユーノの動きを把握
しているようで、距離を開けさないでいる。

- - キン! - -

再び剣がぶつかり、二人とも動きが止まる。

・・・今だ!!

…キーン！キーン！キーン！…

ユーノはこの気を逃さず、すかさずバインドでヘイムダルを拘束、動きを封じる。

そのまま距離を取り、威力が弱いが、砲撃に入る。

それを見たヘイムダルは、

『雷の矢』

すぐさまビットを展開、そのうちの8機をユーノ目掛けて射撃と追撃をかけた。

ビット本体による追撃と、ビットから放たれる射撃の時間差、交差法の攻撃でうまくチャージができないユーノ。

元々、ユーノの専門的な魔法は補助系、すなわち、バインドや結界、回復といったものが主な主体。

射撃やそれよりも多く魔力を使う砲撃には元々向いていない。

しかし、ヘイムダルはその間にバインドを解除。

アイギスの剣を収め、先端を銃器に変え、ユーノ目掛けて砲撃を放つ。

「……」

ユーノは何とかその砲撃に反応。

ビットの攻撃を受けながらも無理やり、上空に回避！

…スウウ……

「しまっ！」

ヘイムダルはその動きに合わせて、上空に上がっていた。ユーノは、自分の正面にヘイムダルがアイギスを突き付けているのを見て、反射的に自分の出せる最大の防壁を展開。

ヘイムダルはそのまま砲撃を放つ。

・・・ドオオン！！・・・

「ぐは！」

ユーノは直撃は避けたものの、衝撃で地面に衝突した。

「ユーノ君・・・」

『貴様・・・余所見とは余裕だな』

・・・ズドドドド！！！！・・・

「きゃあー！」

そしてヘイムダルはそのまま上空から、なのはに目掛けて、魔力によって圧縮され、具象化した剣の群れは放つ・・・それは文字通り、剣が雨のごとく降り注いでいる。

なのはは何とかその群れを大きく左に飛び、避わす。

『甘すぎる・・・』

今度は、なのはの着地した位置に合わせ再び、剣の群れが襲ってくる。

「!」

なのはそれに反応、ブレーキし、寸前のところで何とか衝突を避けた。

しかしその上からも剣が降り注ぐ!

なのはは、また大きく飛んで回避しようとしたが、今度は真上にくる剣以外に、既に周りが辺りが剣で突き刺さっていた。

なのはは回避が不可能と判断し、すかさずデバイスを剣の群れに向け、

「デバイン・バスター!」

なのはの砲撃とヘムダルの剣の群れが衝突!

何とかすべて破壊したと思っただ、

・・・ズドドド! ! ! ! !

「! ! !、レイジング・ハート!」

<プロテクション!>

破壊しきれなかった剣がなのはに襲いかかる。
反射的に防壁を張るが、

「くっ!、いた!」

防ぎ切れず、ジャケットが少しずつ、掠れながら切れ口が目立っていく。

そして、腕や肩、足の方にも徐々に傷がつき始める。

「ぐう、なのは」

ユーノは先ほどの衝突から起き上がると、すぐさまヘイムダルがアイギスを振りかざし、攻撃を仕掛ける。

そして剣がぶつかり合う中、ユーノはなのは気がかりで、視線が一瞬だけ、なのはの方に向いてしまう。

それは相手に隙を生むこと。

それをヘイムダルはそれを見逃すはずもなく、いったん力を抜き、少し姿勢を下げる。

「うわー!!」

――バァン!!――

ユーノはその力の流れに体勢がずれ、身体少し前に崩れる。

ヘイムダルはその勢いのまま、腰を回転させるように大きく横からアダトを振り下ろす!!

ユーノはその斬劇に耐えきれず、一気に吹き飛ばされる。

ヘイムダルはそのまま、アダトの剣を収め、先端をユーノに向け砲撃を放った!

「ぐはー!!」

砲撃が直撃し、さらに吹き飛ばされた壁にぶつかった模様。

煙が晴れた時は、ユーノは壁にめり込んでいた。

『・・・雷の矢』

ヘイムダルはアイギスのビットを展開。

そのままなのは周囲の剣の群れに目掛けて射撃を連射。

剣は崩れ、その中から、なのはが出てきた。

体はボロボロ、傷だらけで・・・

「はあ、はあ・・・」

かなりふらついている。

デバイスで支えていて、立っているのがやっとのようだ。

ヘイムダルはその様子に構わず、ビッドをなのはの周囲に展開している。

<ヘイムダル、これ以上は・・・>

『・・・黙っておれ。』

<しかし・・・>

ラルクはヘイムダルのやりようを見て、流石にまずいのでは判断。直に身体の制御権を戻そうとするが、ヘイムダルが拒む。

故に、説得するしかない。

しかし、ヘイムダルは、

『我にも譲れないものがある。本当にこの者が“宿した力で何をす
るのか”、知る必要があるのだ』

くそれでも限度というものが>

『例え貴様の頼みでも、譲れぬものは譲らん』

二人が言い争う中、なのは、ユーノはどうやって彼に“一撃を与
える”か模索している。

そう、彼女たちの真意を確かめる“条件”で……

それは、あの世界に取り込まれる前、
全ての光が集わされる……

Es ist . . . alle von Person pro
duzieren Sachen . . . , da? da
s Licht leuchtet .
(. . . 光射す者 . . . から生み出されし万物よ . . .)

Wird dem K?rper geantwortet . . .
; es zu machen, ist . . . in
er Hand in einer Tasse vom Him
mel .

(その身 . . . 受け答えられしは、天よりの杯を手に . . .)

「な、何々!？」

「この光は—!」

あたり一面が光に包まれる。

なのはとユーノは彼のやろうとしていることに驚愕！

慌ててここから離れようとするが既に遅く、出口らしきところがなかった。

．．．Eine Sache des Herzens
Wahrheit ist Form
（．．．その魂^{ソウル}．．．誠のものなら形となりて．．．）

．．．Zeigen Sie die St?rke und w
ird produzieren . . . ; das Machen
davon ihm Projekt; K?rper . . .
（．．．その強さを示せ．．．生み出されしは己の映し身．．．）

．．．Sich selbst eigen . . . Ich . . .
．．．Form . . .
（．．．己自身．．．我が魂^{ソウル}こそがその形．．．）

なんと狭いと、二人はヘイムダルに接近、攻撃を仕掛けようとする、

．．．Dann wird gebildet; die Welt
des Herzens . . . mein Geist
st-Aufenthaltsgegenstand .
（．．．ならば成されよ．．．我が依り代たる魂^{ソウル}の世界）

詠唱が完了し、あたり一面、先ほどとは違う世界に二人は佇んでいた。

この世界は!?

『詠唱の一説に合ったはずだ・・・』

「!?!」

二人は後ろからする声に反応し、振り返る。

そこにいたのはヘイムダル。

そして周りを見ると、そこは自分たちの居た世界とは別次元の世界だった。

空は青く、中に浮かぶ空からは、いくつか岩が、小さい山みたいなのが下の大地と一緒に浮かんでいる。

決して、先ほど居たような世界ではなかった。

そして自分たちが立ち立っていたのは・・・

「ここ、古代の闘技場?」

そう、確かにここは、世界で見る闘技場に似ている。

そこから見える建物・・・いや、遺跡や神殿も神秘的に、堂々としている。

そしてこの世界そのものが、

「もしかしてこの世界、空に浮いてるの?」

『その通りだ・・・そしてここは、“存在しない世界”でもある』

「存在しない世界」？」

ユーノとなのははその言葉に疑問を抱く。

“存在しない世界”・・・それってどういうこと？

まるでそれは・・・“消滅した世界”か、“誰かが作った世界”で・・・

「え？、ま、まさか・・・」

『察しがいいな。それは何よりだ。』

「ねえ、ユーノ君？、どういうこと？」

ただ一人、なのはは話についていけずどうしようもないみたいだが、

ユーノは、自分の理解した内容をなのはに伝えようと、

「ここはね、多分なんだけど、“彼が作った世界”だと思う」

“作った”って、この世界を？」

なのはは、ユーノ見て、そしてヘイムダルに視線を向けると、

『その通りだ。そしてこれは“大禁呪の一つ”でもある』

「大禁呪？」

それを聞くとユーノはもう一度辺りを見渡しながら、確認をする。

ヘイムダルはユーノを見ながら、

『……この術名は“固有結界”、今までいた世界、つまりは現実世界を浸食し、あたり一面を己が映し身となる世界に具象化し、一時的にだが、その具象化した世界に変える結界術の一つだ。』

「己の映し身なる世界？」

『つまりは己の内に秘める魂の世界^{ソウル}。いわば己の心を表す世界だ。もっとも、この魔法は、結界と変わりないが、ここで発生した被害は、現実世界には一切影響を受けることはない』

「つまり、被害は何も起きらず、壊れるものがないってこと？」

『ああ、そしてこの世界が我の内にひそめる世界だ。……“我特有の形”付きではあるが……』

特有の形？それって……

『ここでの試すというのは、我に“一撃を与えれば”よい、ただそれだけだ』

「え？」

「あの、今何て？」

『聞こえなかったのか？……我に一撃を与えればよい。その時に“貴様等がどう思うかでその力を使う”か、“何をしたい”かが分かる。』

「それだけのためにこんな手の込んだことを？」

それを聞くと流石に呆れてくるユーノ。
いくらなんでも、一撃を加えることぐらい。

などと、甘い考えを持っていると、

『言っておくが、この世界、アルカディアオリンピア創生の聖域は、ソウル我の魂の世界、そして
我の形は……』

ヘムダルが話しかけていると、当たり周囲から、剣の群れがあふれ出てくる。

その剣は、魔力で圧縮され、“本物の剣”と化している。

さらにそこに浮かぶのは剣だけでなく、槍、銃器、斧まで出てきている。

しかもそこにはある物の数は無数……。

さらに驚いたのは、

「れ、レイジングハート!?!」

なのははそれを見て驚愕!!

周囲の剣や槍の中に、今自分が手にしているデバイス、レイジングハートがそこにあった。

そう、先ほどの剣や槍、銃器や斧同様に無数にある。

これは……それに彼の形って……

『ここにあるデバイスは、貴様の持つデバイスと計り違いぬ瓜二つ

の物だ。性能、形状は折り紙つきだから安心するがよい』

「!?!」

そしてその無数の武器の群れはなのは達を襲いかかろうとした。

そう、彼の持つ能力・・・いや、形は・・・

「あなたはいつたい!?!、何なんですか、魔力エネルギーでエネルギー体での武器の形をしてるならともかく、あなたのは“武器そのものを本物”のようにに作りだすって!?!」

『“本物ように”ではなく、“本物”だ。全てを生み出せし・・・創造主たる存在なのだからな。我は。』

「え!?!」

いま、なんて言った?

全てを“生み出せし”・・・

それって・・・

そう、それは、決して持つてはならない能力。

手にしてはならない力。

その言葉が心に意味しているのなら、その形とは・・・

『つまり私の持つ能力は、“創生”だ』

「・・・で、そっちはどう動いているんだ?、“ミゼット”?」

『あらあら、“久しぶり”に話すと思ったら、第一声がそこから？、
“相変わらずね、流”』

「その呼び方はやめろって・・・“10年以上前”から言ったはず
だが？」

『あら、そつ？、でも、あたし“達”としては“流は流”、昔のま
までしょうっ？』

東誠はぶつきら棒に、自宅から通信を取っている。
どうやら・・・“管理局”のようだ。

しかも、通信をしている相手は・・・三大提督のミゼット・・・
東誠はそのことを言われると、ひどくため息をついているが、

「はぁ・・・、確かにそつだ。“昔”のことにしろ、“役割”にし
る、忘れてねえよ。元々、俺が“属さない”ことを選択したのはお
前からも知ってのことだからな。だが、今回はそつも行きそつにない
が・・・」

東誠が険しい顔を見ると、ミゼットは、何かを察したようだ。

『かなり荒れてるようね。その様子だと？』

「“時間がない”ことぐらいは分かっているはずだ。今回の件、“ジ
ユエルシード”に“テストロツサ”、そして、“それ以外に何か
動いてる”。察するに、おまえたち管理局にも関係があることだと思うが・・・
・“現”に」

『クロノ執務官が誰かと接触した？、そして民間人の魔導師が誘拐されそうになつた？』

「察しがいいな？・・・リンディイから連絡が・・・って、ちよつと待て、まさかリンディイたちが俺の家に来たのは、お前の差し金か？」

ある疑問を抱き、その件をミゼットに確認すると、ミゼットは笑いながら、

『ええ。でも、クロノ室務官は何も覚えていないそうよ。そのことも含めて、かなり極秘裏に私に連絡したわ。しかし、あなたが出てきたことに少々驚いたわ。あなたは“本来”なら、わたしたち管理局に接触する気はなかつたはずよね？。“2、3年前”からのことで忙しそうですし、それに“物”はあなたが持っているってことも聞いたわ。なんでまた？』

「たく、面倒を俺に振りかけてくるな。それとさっきのことだが、簡単なことだ」

『簡単なこと？』

「はあ、・・・“臭いものには蓋”つつうどろ？、その中綺麗事だげじゃない。それは“12年前”のことで分かっているはずだ？」

「・・・」

「まあ、リンディイの件で本音を言うなら、クロノをタコ殴りにしたことを隠したかったのではないか？軽く“拳骨程度”で済ませたつもりだつたんだが・・・」

「拳骨程度”って……あなたは本当に相変わらずね」

本当はかなり危ない状態だったのに……

そう、実際のところはタコ殴りで骨が折れ、拳句の果て、ランサ・ドール・ブラッド・リード氷劉血餓
で彼の身体は、今も身体が強張っていて療養中。

付け加えると、血が吸われていて、貧血状態。

危ない状態全開である。

それでは、流石に度が過ぎるであろう。

しかし、その全容を知っている、真意を知る者、“彼の身近にいるもの”は……

<まあ、そうですね、そうでなくては、この人は……東誠 流寺
ではないですからね？>

『ほんとうにねえ、あなたも大変そうですね、スペル？』

<いえいえ、僕は僕で楽しんでますよ>

『<はぁ……>』

東誠のその一言に戸惑うどころか、呆れてしまつミゼット。

かく言う、スペルもまた、ミゼットに同情。

いったい彼等の関係って？

しかも、“昔”から、いったい東誠はいつから……

まあ、それはそれで仕方ないであろう。

“何故なら彼”は……

そんな中、東誠は二人のため息の様子を見ながら、

「余計な御世話だ……で、クロノの件については？」

『残念だけど……』

それを聞くと、東誠は頭を書きながらイラつき、軽く舌打ち、

「チツ、 “うまく身分を利用するか”。それともう一つ朗報だ……
今回の件、“方舟”も動くそうだ。」

「あら？、“あそこ”が？」

それを聞くとミゼットは少しばかり戸惑っているようだ。
その“方舟”、それだけ何かあるということか……

「それだけ“関係がある”……いや、“因縁”ってことだ。それと
いくつか頼みたいことがあるんだが？」

「元々それが本命で“わざわざ”通信してきたのでしょ？」

「……」

読まれていたか……まあ、あいつ等の世話は……お互い様で
わけか……
つまらない話だが……

……それはそれ、これはこれ、昔は昔、それがあなたの心道で

しよう？、あなたは昔から世話を焼いてくれる人であり、関係ないのに無駄に突っ込んできますからね。余計なことしなかったらもつと効率がいいのに」

「いちいち人の思考を覗くな」

『相変わらずいいコンビのようですね』

「ええ、それは」

「年期が入っているからな。“年数”は伊達じゃねえ、それでだ、」

『ええ、用件を聞きましょう』

本題に入る。

通信を返しても、その場から空気の層が重く感じ取られる。

「今回の事件、アースラに“提供した資料”を全部見せてくれ。あと、ここ“3年から5年の間で急激に昇格した局員”並びに“何処かに転属となった者”、失踪した局員のリスト、それとアースラの乗員のリストと今あげた局員すべての経歴を全部だ。大至急な。」

『え？、ど、どうしたの？・・・そんなに急に？』

流石にそれを聞くと驚くであろう・・・提供資料ならともかく、“局員のリストに経歴”・・・いくらなんでも、急に用意できるはずがない。

しかし、東誠は焦りも見せず淡々と、

「今回の件、“クロノと接触した”、そして“あいつは覚えていない”って言ったんだろ？」

『ええ』

「となると、記憶操作が使える者に限定される。あれは扱いが難しい魔法だ。何かの拍子で発動するように細工されていただろうが、それでも、その魔法は強力だ。尚且つ、クロノと接触できる人物。今回の事件でクロノは目が回るように動くはずだ、その上で接触できる人間に限りがある。最終的に今回の事件でそれらを手を引いている奴らが居たとしたら・・・」

『・・・災厄なことに繋がるわね』

「ああ、大至急頼む」

・・・プチ・・・

そして通信が終わると、東誠は椅子に凭れかかり、

「・・・欲に染まるか・・・」

と、独り言をつぶやく・・・

今後になんか起こりそうなことを語るかのよう・・・

「ん？、」

すると、モニターにまた通信が入ってくる。

その相手は・・・

「おまえか？・・・どうしたんだ？」

『いえ、例の件、少しわかりました。東誠さん。』

「ああ、すまなかつたな。急に頼んで」

『・・・いいですよ、“僕等”にも関係があることですし、』

「・・・相変わらずのぶつきら棒だな？・・・偶には“志津恵”に会いに行け。“過去のこと”、悔やんでるからな、あいつも・・・」

東誠は通信している彼と親しげに話している。
しかも、志津恵と言った。

そして通信の相手は、

『・・・ええ、分かってはいるんです。分かっては・・・』

その通信の相手も、複雑そうな表情で顔を伏せている。

東誠はそんな彼の心境を理解しながらも、いと息を入れ、会話を続ける。

「・・・それで、何が分かったんだ？、“茂”？」

第14話 天界の都・・・ヘイムダル（後書き）

中々難しいことで、大変さが募っていく一方です。
戦闘シーン・・・一番難題ですね。

川の展開も何とかしなければ。
では。

第15話 難題(前書き)

どうも、イクス・スタンスです。

最近は忙しいことばかり・・・投稿遅れてすみません。

今回の話、出来は良くないと思いますが、続きをどうぞ。

第15話 難題

「・・・おいおい」

東誠はこの現状をみて、どう対応すればいいのか分からず、ただ、呆れていた。

そしてその他の者は、

「・・・いやなあ、川さんやあ？あんさん、いったいどこをどうすればそないな行動に移りん張るん？」

客間にて・・・万弁な笑みで、正座で川に問いかける天宮。

しかし、その笑顔は目が笑っていない・・・。

女将の格好ながら、天宮のその存在が、飛んでもなく重い威圧を放っている。

そして・・・完璧に、明らかに怒っている。

「ええ・・・と、その・・・」

かく言う川は天宮に威圧に押され、正座のまま、縮んでいる。

浴衣のままです・・・

そして、最大の被害者かというと・・・

「うう・・・」

頬どころか、顔を真っ赤にしながら、何故か“東誠”にしがみついている。

涙目で・・・

そしてリニスは、そんなフェイトにすり寄っていた。
はて、何故このようなことが起きているのか、

.....

それは、まあ、仕方ないことである。

天宮は、浴室に入ろうとしたが、何故か戸が開かなかったため、戸を“すり抜けて”入った矢先、

「まだ湯に浸かっているようどうすなあ」

脱衣所のカゴに、二人の服が置かれてあったのを確認すると、

「ほんま、どないして服を忘れはるんやろ？、あの時はそないな子やないと思っただのになあ・・・」

天宮は、昔を思い返すように川とフェイトの着替えを移し替え、取り合えず、洗濯をしようと洗濯機を操作、替えようとした矢先、

「・・・だか・・・もう・・・きゃ！・・・」

「・・・もう～そんなに暴れないの、隅々まで洗ってあげるっていつてるんだから・・・」

「・・・じ、自分で・・・や、やる・・・うっ!!・・・」

「本当に可愛い!!、ここを触ると・・・」

「きゃ!」

「ほらあく、まだ頭洗い終わってないよ」

「・・・まさかな」

脱衣所の扉の向こう・・・

つまりは浴場に聞いてはならないことが聞こえてきた・・・

天宮は気のせいだと思い、作業を再開しようとした。
しかし、

「・・・もういいです!!、もう!!」

「はいはい、でも、ここで頭からかけると・・・はい、今度は拭
かなきゃね」

「いやああ!!、そこは・・・」

「・・・」

天宮は着物の腕側と足をまくり、膝の上まで上げ、スタスタと浴
場に向かった。

そして・・・

「・・・ボタン!!」

突如、大きな音がしたにもかかわらず、川は全く気にせず・・・

いや、全く気づかず、

「じゃあ、頭は洗ったからつぎは、身体ね」

「はあ、はあ、だ・・だから・・じぶんで・・」

「そんなに疲れて動けないんだから、任せて 任せて」

明らかに疲れきっているフェイトにさらに手を伸ばしている川。さり気なく足を押さえ、肩腕でフェイトの腹や胸に通しているため、フェイトとは逃げたくれも逃げられない状況である。

「・・・」

天宮はその光景を見て、何も言わず、ゆらりゆらりと気配を消し、川に近づく・・
そして・・・

「何してはるん？・・・川さんやあ？」

「え？」

・・・轟！・・・

「きゃああー！！」

・・・ドボオオン！・・・

いきなり、フェイトは気がついたら、天宮の隣に居て・・・

川は、気がついたら湯船に水柱ならぬ湯柱を挙げ、顔面から諸に墜

落した。

「けほ、けほ、いったい何……ですか……」

湯船から這い上がり、正面を見ると、とても万弁な笑みで、久しぶりに会う人を見た……。

でも、その笑顔は爽やかすぎるほど、恐怖を物語るものだった。

フェイトは、天宮にしがみつき、川から隠れている。

一方、天宮は川の方を見つめ、

「随分久しぶりやなあ、川はん。……で、こらどないな状況どすか？」

「……天宮さん……」

川は固まった。

川の視線は、天宮全体を見ていたが、彼女の手を持っている物に注目した。

デカイ扇子だ。

「メートルはあろうともいえる扇子。」

「いったいどこから出したのだろう？……」

「その子も、今日はよう、あがりな。さいぜんの部屋におり、東誠はんが居てるはずやさかい」

「あ、はい。」

天宮がフェイトにそう言うよ、フェイトは一目散に浴室を出て、脱衣所へ行った。

そして、天宮が用意した白の浴衣をに着替えて出たようだ。

「さて……」

浴室を出たのを音で確認すると天宮は再び川を見る。

川は遠回りし、逃げ出そうと出口に就こうとした矢先、天宮に腕を掴まれ、

「正座しなはれ、お話や」

万弁の笑み、尚且つ、川は空手をしているが、天宮に“力押しができない”……

いや、通用しないことが“分かっている以上”……抵抗の余地もなく……

「……はい……」

川はその場に正座した。

余談だが、このお話が2時間近く続いたことだけ記載しておく。

以上、原因の解説終了

「まあ、原因は分かったが……こっちはどうするきだ？」

東誠は大方の事情を把握したが、問題が残っていることを自分の足元を指しながら言うてくる。

そう、東誠の足元にしがみついているフェイトである。

「そのこはあんさんがどないにかして、今うちの手が離せへん」

「ううー」

フェイトは東誠にしがみついたまま離す様子はなく、川は今も正座でのお話中……

つか、浴室で2時間近くやったのに、さらにここでも開始するか……

まあ、こう言う時の天宮に何言っても聞くはずはねえか……

“あいつ等のまとめ役”だしな……

東誠は誰にも気づかれずそう思うと、フェイトの方を見る。

「とりあえず……晩飯作ったが、食うか？」

東誠の提案にフェイトは顔を隠しながら頷く。

東誠はそれを確認すると、

「それじゃあ……俺らは退散するから、終わったら台所に来い。人数分用意してるからな。」

「おおき」

その一言を最後に、東誠とフェイトは客間を後にした。

「あの、私も・・・」

「あんさんは、まだ続きがありますよ」

川はこの気に乗じて一緒に行こうとしたが止められ、そのまま継続された。

追記で、客間を出た東誠達は、後から悲鳴が聞こえたただけ追記しておく。

さらに追記

「あ、そうだ、後で俺に部屋に来い。話がある。」

「・・・?・・・あ、そういえば、あなたは・・・」

「って、今頃気がついたのか?」

「はい」

その返答に、少し嘆息する東誠であった。

ちなみに、川と天宮が台所に来たのは、さらに2時間後だった・・・つまりは9時を過ぎていた・・・。

フェイトは辺りを見渡す。

ここは和室で、東誠の部屋。

食事の前に、東誠に『ついて込い』と案内されたのだから、当然ここに来ることだろう・・・。

広さは客間よりも広く、壁際に柵や本柵（横の壁一面）、机にパソコンなどが置かれている。

東誠はフェイトが部屋に入るの見計らい、入ったと同時にドアを閉める。

そして・・・カチャ・・・と、何故かカギを閉める。

「?・・・」

フェイトはその音に気付きに振り返る。

「安心しろ、ただ話があるだけだ」

「・・・」

東誠はそう言うがそう簡単に安心できるはずがない。

東誠と“フェイト”が会うのは2度目。

しかも、海鳴でなのはと戦っている最中の割り込みである。

正直言つて、何を考えているのかよく分からない相手だ。

「まあ、そう警戒されても仕方ない・・・か。はあ・・・川の奴、相当何かしたようだな?」

「うっ・・・」

それを言われるとフェイトは頬どころか、顔全体が真っ赤になり鬱むせる。

何やらぶつぶつ言っているようだが・・・

「……すまない、今は忘れてくれ……」

流石にその反応から、余程まずかったのだろう……。
フェイトとは鬱むせのまま頷くと、東誠はその話から切り上げ、

「苦労するのは……。お互いさまのようだな……。フェイト」

東誠は一息入れながらフェイトに告げる。

その声には、焦りはなく、重くもなく……

ただ、素で言っている。

だがその声はなんだか、とても落ち着く……

“昔どこかで聞いたような”……

フェイトはそんな錯覚を覚える。

しかし、彼に会ったのはあの子とぶつかり合っていたあの時……

それを思い出すと、すぐに頭から払いのける。

だけど……

東誠はフェイトの方を近づいてくる。

そして東誠はこう言ってきた。

「どうやら……“拠点”で何かあったようだな？」

「……」

「別に驚くことはないだろう？、「誰がその傷の担当でした」と思
ってる？」

「え？」

それを指摘されるとフェイトとは自分の手や腕、足などを見ると、確かに傷が消えていた。

傷どころか、痣さえも……。

これって……

「……風呂に行った時に気づかなかったのか？」

「……」

フェイトはコクリと肯く。

その行動を見ると、東誠は嘆息。

「どうやら、全く気づかなかったようだ。」

それはどうでもいいと、東誠は直に切り替えると、

「おまえ、……きょろろ……いや、プレシアのことで何か悩んでないか？」

「え？、母さんのこと、知ってるの？」

東誠の今の一言で、警戒心が再び出てきて、少し距離をと選り始めるフェイト。

しかし、東誠はその行動に、特に何も疑問を抱かなく、

「安心しろ、俺は管理局の人間じゃない……と言っても、プレシ

アのことを知っている以上は警戒されても仕方ないか・・・」

東性は苦笑いしながら応える。

その行動にフェイトは少し戸惑いを覚えるが、それでも警戒と解こうとはしない。

だが、ふと気付いた。

辺りを、袖や懐を探すがなかった。

その行動を意味に東誠は気づいたのようで

「探し物はこれか？」

東誠は懐から金色の三角の物を・・・バルディシュを取りだした。

フェイトはそれを見ると一目散に東誠のところに向かおうと、

「焦るな、何もしてねえよ・・・まあ、大方の事情は聞かせてもらったがな。ほらよ、」

東誠はそう言うのと、フェイトに歩み寄り、バルディシュを手渡した。

そして、

「おまえ、これからどうするつもりだ？」

「え？、どつするって・・・」

母さんのところに帰る・・・そう言おうとしたが、

「はっきり言うが、今のお前の状態から見て、プレシアのところに帰っても意味がねえと思うが？」

「……」

「まあ、川の件は置いとくとしてだ。川がお前をここ連れて（運んで）きたときにしろ、お前の治療をしたときにしろ、外傷よりも内傷の方がひどかったようだが？……気づいているか知らないが、治療中うなされてたぞ？」

「……」

それを言われると東誠から目を逸らすフェイト。

東誠はそれに構わず、

「お前は どう思ってるかは知らねえが、今のプレシアは“お前から見て” どうだったんだ？」

「……」

フェイトはそれ聞かれつと黙り込んだ。

東誠はそれ以上は言わず、ただ、フェイトの答えを待った。

「……でも、母さんが不器用なだけで……」

「……」

<……相当複雑で、でも、母に溺愛しているのですね……>

（……もつとも、その行為が何を指しているのかは知っているよ
うだが、）

フェイトの言っていることを意味を知らながら、東誠とスペルh
念話をしながら、聞く。

(・・・バルディシユには、2年前のことは記録されていたが、
プレシアと　　の状態”の記録はなかった。)

くでも、自分の答えは見つかっていないのですね。彼女は、>
フェイト

(ああ、・・・仕方ねえな。)

「おい、ちょっといいか？」

東誠はフェイトがうつむいて考え込んでいるがそれに構わず、フ
ェイトに投げかける

フェイトはその声に反応のして、

「？」

東誠はスタスタと右奥の本棚のところに行き、その隣を軽く押す。
そうすると、壁の一部が窪み、そこから、認証装置とボタンが出て
きた。

「あの？」

フェイトはその行動の系が読めず、東誠に投げかけるが本人は無
視。

そのまま、ボタンをパチパチ操作。

するど、

・・・ズーン・・・

すぐそばの本棚が動きだした。

しかも、その本があった場所には、“地下に続く階段”が・・・

そして東誠は、こう言った・・・

「ついて来い・・・相手してやる」

「そう、クロノは、あれからずっと？」

「ええ、あれつきりずっとですね」

ここはアースラ、艦長室にてこのアースラ艦長こと、リンディとオペレーターことエイミィが深刻な話をしていた。

執務官こと、クロノの件である。

東誠に戦闘でやられてから療養中だが、まだ少し麻痺が残っていると医師に診断されたのだ。

さらに付け加えると、

「クロノの精神面の様子は落ち着いたようですが、問題は・・・」

「東誠さんの件ね・・・」

「・・・はい」

そう、今回の騒動にもう一件、東誠とヘイムダルのことが管理局に上がっていたのだ。
事実、彼らの実力は計りしれぬものであり、東誠に至ってはクロノを叩きのめすほどであったため、その実力はS以上と認定されたためである。

管理局としては、正直言って、東誠及びヘイムダルを管理局に就かせる気満々である。
しかし、

「ミゼット議長他、三大提督に、グラム提督はこの件に反対……
ですか」

「ええ」

そう、管理局の三大提督、そして、現在保護観察官としてのギム・グラム提督はこの件に反対を示したのである。
なんでも、『管理局のことを彼は昔から知っており、彼はその上で、彼本人から反対があったこと、また、その上で、民間人である彼にこれ以上を深入りするのはどうか』という意見が上がったためである。

事実からすれば、三大提督並びにグラム提督以外の者は、彼らが欲しいということ。
しかし、彼等はそれを拒んでいる。

尚且つ、無理やりやろうとすれば、クロノのような帰り打ちが明白である。
それに……

「今回の件に関わるな」・・・彼はそう言ってたけど・・・」

「はい、局の方には、一応今回の事件に関する資料を頼んではい
ます。」

「大体どれくらいで？」

「一週間ほどで来るそうです。それから・・・」

「それから？」

エイミイは言いづらそうな顔をしている。

リンディは気になり、聞いてみると、

「なのはちゃんとフェイトちゃんの件です。あの時データを集めま
したが、二人とも魔力値からいってAAAランクは確定。それから、
なのはちゃんがジュエルドを回収しているのはユーノ君の手伝い
ということですが、」

「問題はフェイトさんの件ね。」

「はい」

ここまでの言つと、二人とも少し苦笑いしながら、顔を合わせる。

「あの子の場合、なんでジュエルシートを集めるのか、それが問題
よね。なのはさんの場合は、ユーノさんの責任感を感じての手伝い
だけ。フェイトさん、あんな子供が古代遺産を集めるだなんて、
普通なら考えずらいことだから」

「ええ、その件もあって、彼女のデータを本局送って確認しているのですが、その結果が出るのも時間がかかるそうです。」

問題が山積み、どうするべきか悩み続けるリンディとエイミー。
さらに問題は、

「艦長達が見た、あの組織ですよね？」

「ええ、でも、その件で、本局側は別の部隊がやるから、アースラはジュエルシールドの方を追いやって通達が来たのよね・・・」

「そういえば、どこの部隊が？」

「それが“分からない”の、とにかく専念しろってことだけで」

「なんだか、何か隠しているような感じですね」

エイミーがそう言うと二人はあることを思い出す。

『どうにも“怪しい行動”が多々あるようだな・・・世の中、“すべてがさらけ出されている”わけじゃねえんだ。特に“不都合なところ”はな』

東誠が言ったこと、あれがいったい何をさしているのか、二人は考え込むだけだった。

「とにかく、なのはちゃん達も協力してくれるそうだから、対策の方、考えておかなければね。」

「はい」

東誠

「原作の流れに戻るはずが、脱線してねえか？」

ラルク

「いえ、それは東誠さんも同じことでは？」

ヘイムダル

「我もか？」

天宮

「当たり前のこと聞き返さへんの」

まあ、努力はしているのですが・・・もうじき、海の方面に入っ
た方がいいですよね・・・

東誠

「とはいえ、バトル中のがまだ残ってるしな・・・どうするんだ？」

藍川

「それに・・・管理局方面もかなり問題じゃあ？」

そこの締めは考えているのですが、もんだはそこつなげていくま
での内容ですね。
つまりは道のり・・・

東誠

「・・・どうなることやら」

近々、あなたのこともお話しなくては・・・

東誠

「？、おい、それはどういっう・・・」

一同

「では・・・」

東誠

「おい！—！」

第15話 難題（後書き）

中々難しいところです。原作の方に進めないと・・・
次回の方も何とか頑張っていこうと思います。
では、

第16話 魔と降（前書き）

どうも、イクス・スタンスです。

さて、時間が掛かってしまいましたが、

続きをどうぞ。・・・かなりややこしくなっています。

第16話 魔と降

「それじゃあ、その手筈で」

「うん」

『話はまとまったか・・・』

・・・瞬！・・・

ヘムダルは、即座になのはとユーノの目の前に接近。
そのまま、アイギスで正面から斬りかかる。

ユーノは、すかさずシールドを張り、受け留める。

ビリ、ビリ・・・パキ・・・パキ

しかし、ヘムダルの斬激に耐えられるはずがなく、すぐに砕ける。

そのまま剣先をユーノ目掛けて、迫りくる！！

・・・キーン！！・・・

その剣は、ユーノに直撃する寸前で止まる。
だが、剣は止まれど、威力は残る。

・・・ドオオン！・・・

ユーノはそのまま、斬劇の衝撃波により、壁まで噴き飛ばされる

！！

ヘイムダルは、飛ばされたユーノの方を見て、

『芸がないというのはこのことをいうのだな……』

自分に巻き付いたバインドに構わず、言い捨てる。

先ほどの刹那の際に、チエーンバインドで身体を拘束されたのだ。

だが、威力のまま消すことはないが……

「デイバイイン・バスター！！」

なのはは、背後に回り、少し距離をとったところから砲撃をヘイムダムに放つ！

ヘイムダルは、“左腕のみ”のバインドを引き散りる！！

そのまま、振り向こうとせず、盾を砲撃に方角に向けたただけだ。

……ドオオン！……

衝撃により煙が起こり、視界が遮られる。

『……雷の矢』

その瞬間、なのはに向かって、6つのビットが、超加速して襲ってくる！！

「レイジングハート！」

<プロテクション！！>

なのはは反射的にプロテクションを展開、正面から受け止めることができないことを気付いていたなのはは、角度を少しずらし、受け流しに入る。

一つ目

速度が速い！

なのはは、顔尾を歪めながら、中心に衝突しながらも何とかずらす。

「くっ！」

今度は二つ同時、左右に広がり正面から・・・
なのはは少し下に屈みながら、シールドを上を傾かせ、受け流す。

「きゃ！」

しかし、威力が強かったためか、手からデバイスを離しかけた。おまけに体勢が崩れ、後ろに転倒。

そのまま、残りの3つのビットが高さ、距離をずらし、三方向から迫りくる！

「！」

(Flash move)

今度は受け流すのが無理と判断したなのはは、そのまま上空に回避！

しかし、“下を向いたまま”は誤算である。

・・・シユン！・・・

(master!)

「え？、」

気づいた時にはヘイムダルが“目に前にいた”。

「うそ！」

そしてあろうことに、“ヘイムダルが手にしていた物”に気をとられ、そのまま無防備になってしまった。

ヘイムダルは、そのまま、“手にしていた物”をなのはに向け、

・・・貴様は確か・・・こう言っていたな・・・

『・・・“デイバイン・バスター”・・・』

・・・ドオオオン！！！！！・・・

「！！！」

桃色ではなく、金色の砲撃がなのはに直撃した！

なのはは声にならない悲鳴を上げ、闘技場の壁際寸前のところまで飛ばされた。

<マスター？、大丈夫ですか？>

「はあ、はあ、な、なんとか・・・」

何とか体勢を立て直すのは。

しかし、息が切れ切れである。

彼女が先ほど戸惑うの仕方ない。

先ほど見たとはいえ、自分のデバイスで自分の砲撃を使ってきたのだから・・・

それに・・・

「でも、今のって、私よりも速いよね？」

<はい、マスターの砲撃による集束速度よりも対差が歴然です>

そう、今の一瞬の砲撃で、ヘイムダルはなのはと“目が合った瞬間”に魔力を集束、放ったのだ。
スフィア程度なら造作はないものだが、砲撃となれば、ごく僅かでも動きがおろそかになってしまう。

しかし、ヘイムダルはそんなことお構いなし、
問答無用で砲撃を放った。

しかも、

「うー、ボロボロだね。」

<はい、自己修復かけておきます>

砲撃を強力圧縮していたため、ジャケットが破けて、いくつか吹き飛んでいた。

主に、右の袖、左肩、スカートに至っては、膝よりも上まで短くなっていた。

そんな中、ヘイムダルはなのを見下ろす……

『ウェザー・セレクト
天候選抜……雷剛昇天弾』

アサルト・ジャケット

……ドオオン!!!……バコオオオン!!!……

……はずもなく、情け容赦なく“なのはとは逆方向”に“アダトを突きつけ”攻撃を放つ！
て、まさか、そこは!!!

「ユーノ君!!!」

なのはが叫んだ時は遅く、ユーノが埋もれていた瓦礫の山、いや……

闘技場の半分……その先の遺跡を含め、“2キロ近くは吹き飛んだ”……。

「……」

なのははどう反応すればいいのか分からず、茫然と立ちつくす。
今の砲撃、明らかに物理破壊、非殺傷設定。

つまりは・・・

ヘイムダルは無言のまま、なのはを振り返ろうとはしない。その表情からは、何を考えているのか、全く読みとれない。

「・・・んで」

『・・・』

「なんで!!!」

なのはは泣きながら、怒声を上げ！
ヘイムダルに言い放つ！

「なんでこんなことをするの!!!、あなたはいったい何が！・・・
なにが・・・なにが・・・」

なのはは泣き始める。
大切な人を失ったから・・・

ヘイムダルはそのことに全く関心を持つとしない。
何故なら、“それに意味は無いから”・・・

『・・・言いたいことはそれだけか？、小娘』

「・・・」

『これ以上“下らんこと”を述べるでない。・・・来ないのであれば我から行くぞ?』

「・・・」

それを聞くと、なのははもう何も言わなかった。言葉を言わない代わりに、身体から、威圧が、ダークオーラ全開である。

そしてただ一言。

「・・・頭・・・冷やそうか・・・」

<・・・ヘイムダル、戻しますよ>

『・・・正気か?』

<ここまで行くのは流石に予想外です。しかもあなたは“不器用”過ぎます。>

『あれを貴様は“不器用”というか?、円滑に行ったつもりだが?』

さらりと問題発言をするヘイムダル。

一般的にも、管理局から見ても、問題そのものである。

・・・ああ、あースラに知られることがないようお願いしますね。

<・・・いえ、あれはどう見ても火種を植えるしか見えません。とにかく、後はこちらでやります。・・・少々荒料理ではあります
が・・・>

『・・・“気づかれるな”よ』

<加害者に言われたくありません>

ヘイムダルは目を閉じ、人格がラルクに戻る。
姿は銀髪青年のままだが、

なのはの方は、ダークオーラ全開。
そして、

(Flash move!)

<・・・速度が上がりましたか・・・>

なのはは、怒りのせいか、直線ではあるが速度が飛躍的に上がっていた。

そのままレイジングハートを振りかぶって

「てええええい!!!」

叩きつけた!

ラルクは難なく杖ではなく、なのはの腕を掴んで、受け止めた。

なのはは表情を変えないまま、右手でラルクの腕を掴むと、

<デイベイン・シューター>

自分を含め、周囲にシューターを無数に展開。
そして、

「デイバイン・シューター・・・フルバースト・シュート!!」

「な!?!」

・・・犠牲覚悟ですか

ラルクはそう内心するが、焦りを見せていない。
むしろ・・・

ズドオドオオオ!!

それシューターを全弾、全て喰らったのである。
煙が起こる。

だが、煙が晴れるとなのは腕を掴んだまま、レイジングハートを
ラルクに向け、

「デイバイン・バスター!!!!!!」

今度は砲撃を放とうとするのは!
しかしラルクは、その行動から、

・・・ガシ!・・・ボオオオン!!・・・

「くっ!!」

爆発が発生し、なのはは一時距離をとる。

何が起きたか?、なのは今起きたことが分からないでいた。

今の刹那、ラルクは、なのはの集束された魔力に素手で掴み、握りつぶしたのだ。

当然、集束中の魔力のそんな事をすればどうなるかは明白。

今のように爆発が起き、吹き飛んでしまう。

ウエザー・セレクトヴォルテック・ジャケット
『天候選抜 蓮水昇天』

「!?!」

(プロテクション!!)

今度は、圧縮されたものが、無数に迫ってきた。

なのははすぐさまシールドをはり、受け止めようとするが、

「ああ!?!」

-.ドオオン!?!-.

シールドで受け止めきれずそのまま、降下、墜落した。

<...仕方ないですね。...光よ集え、一点に咲き放つ閃光となれ>

ラルクは、創生されたレイジングハートを2つ持つと、さらにアイギスの12のビットも展開。一斉になのはに目掛けている。

さらに、それぞれに集束魔法を加速している。

これは・・・

スターダスト・リザードシフト
流星群の閃歌

・・・ズドオ！ドオ！ドオ！ドオ！ドオ！・・・

集束砲が14撃、連続で放たれた。

当然、ラルクの場合は非殺傷設定で放った。

しかし、破壊力は、アサルト・ジャッチ雷剛昇天弾より強力であった。

4、5倍近く威力が増している。

さて、なのはは？

「・・・」

・・・ガチャ、ガチャ、・・・

しばらく経過し、瓦礫からはい出てくるなのは。レイジングハートを杖にないと立てないようだ。

なのはは息が荒く、立っているのがやっとのようだ。それでも、レイジングハートは構えようと・・・

「なのは、待って！！！」

「ユーノ君？」

今の一声で、動きを止めるのは。
声のした方向を見ると、ボロボロではあるが、そこはユーノがそこに居た。

なのは今の戦闘を忘れたかのように、ユーノに向かい壮大に抱きつく。

悲しいか、うれしいか、それは分からない。

ただ、そこに居たということ。
それだけで十分だった。

「・・・なのは、だいじょうぶだから、ね。」

ユーノはそのまま、なのはの頭をながら言った。
そしてヘイムダルの方を見ると、

「本当に君の考えていることは分からないよ」

「え？」

なのはは今ユーノ言っていることの意味が分からなかったので彼女もまた、ヘイムダルの方を見る。
ヘイムダルは無愛想で、

『・・・貴様には関係のないことだ』

「ねえ、ユーノ君？」

「？、ああ、今話すよ」

置いてけぼりをくらっているのはは、訳が分からず、とりあえず、ユーノが何故無事で会ったのか確認することをした。

「実はね、彼は、最初から僕を殺るつもりはなかったってことだよ。」

「？」

「え、と、助けたのは彼の盾だね。」

「……盾？」

なのははヘムダルの方を見ると、確かに彼は盾をつけていないいや、普段から、隠しているのだから、出していないのではないかなのはそう思っているが……

「あの時の砲撃が当たる直前に、急に盾が出てきたんだよ。全面的に展開したおかげで、見た目はボロボロだけど、僕は大丈夫。」

ユーノは笑いながら言っている。
恐らく嘘ではないのだろう。

『話は終わったか？』

気がつけば、いつの間にかヘムダルが目の前に居た。
そして、固有結界も解除されていた。

「結局、あなたは何がしたかったんですか？」

そう、訳が分からないまま、最終的に結界解除、そして終了。
そう思った矢先。

「・・・対象を確認、捕縛と排除を開始する」

『・・・招かれざる客が来たか』

今の声に反応して、ヘイムダルは声のした方向を振り向く。

そこに居たのは、いつぞや、なのはとユーノ、そして自分を襲撃し
にきた黒尽くめの集団であった。

数はざっと40・・・前より増えてるな。

まあ、前回は前回ですし・・・

「目標を捕獲する」

今度は量産型と思える、銃剣のデバイスを手にし、例の珠を飲み
込み、いきなり変化した。

「「「「「殲滅する・・・殲滅する・・・殲滅する」」」」」
「

今回は自我が保たれているようだ。
さて、

状況の確認、動けるのは自分だけ、なのはとユーノは今の状態か
ら考えて動くのもやっとなのはず、
となると・・・

<・・・構いませんよね？>

『ああ、好きにするがよい』

<では>

ヘイムダルは剣をとりだすと、こう告げた。

『<“初極開放”・・・“エクスカリバー”・“カラドボルグ”>』

ヘイムダルに忒刀の剣が握られた。

そして、

『貴様等に構うほど暇ではない。・・・“約束と責務の誓い”』

その光に包まれ、黒尽くめの集団は、一気に数キロにわたって吹き飛ばされた。

最後に見たのは、“金と銀の交差が生み出す無限”であった。

『・・・貴様等はそこにいろ』

ヘイムダルは、なのはとユーノを遺跡の奥まで運ぶと、ただ、その一言だけを告げる。

かく言う、なのはとユーノは、今までの戦闘(?)で体力・魔力ともに、動ける状態ではない。

「でも、あなたは？」

先ほどの戦闘で、ヘイムダルも魔力を相当使ったはず、しかしヘイムダルはそれに構わず、

『 “5分で戻る” 』

そう言い残して転送した。

ヘイムダルは・・・いや、ラルクはさっきまでいた場所に戻った。そしたら、やや疑問が起こっていた。

「・・・」

ただ茫然と見つめるその先には、人間の姿がかけ離れた者達とその場に全員倒れ、元に戻っていた。

いや、よく見たら、出血が多量であるが、止血されていた。さらには、手足の1、2本が消飛んでいる。

確かに、“約束と責務の誓い”を使ったのだから、気絶しているのは想定していたが、ここまでなっているのはよ予想外である。

そしてそこには、

「・・・あなたが、これを？」

ラルクは目の前にいる“老人”を見ながら告げる。

白髪で髭・髪が長く、髭・髪とも、おおよそ胸のところまで伸びている。

そして疑問に思うことがさらに起る。
彼の恰好、

何故か黒の神父服で、場違いな煙管を吸っている。

そして、注目すべきは、右手に持っている“赤い槍”である。

……ラルクは彼をお見ながら悩む。

神父服で、煙管で、槍？……しかもあのご老人が？

「……あなたは何者ですか？……少なくとも、SSクラスはあったと思いますが、彼等」

その声に反応に、そこに居たのか！と気がついたように、

「なんじゃあ？、年寄りを待たせるとは、頼りがいの無い者よう・
・これが“今の者”とは、“あの時”とは大違いじゃなあ？、若造
「？」

「？、あの？、何を言って……それに、あなたは私のことをご存じ
のようですが？」

「ほ、ほ、ほ、それは爽快じゃなあ、“わし”のことを知らぬとは、
悲しいのう」

「え？、どついついことですか？」

何のことなのかさっぱり分からないラルクは問いたただそうとする
が、相手もさることながら、

「もう、よい、いずれまた“出てくること”には変わらぬからのう・
・ではな、若造、しっかり励むのじゃぞ」

「あ、はい」

そんな呆気にとられているうちにM彼はどこかに消えていった。
いったい彼は……

『あの少女達を連れて帰るか？』

「ええ、そうですね。」

とりあえず、問題は解決したため(?)ラルクはなのはとユーノ
(フェレット状態)をつれて公園に転送した。
当然、変身を解いたのは余談である。

P.S.:

「もう、心配したんだからね。」

「あははは、」

「なのは、笑い事じゃないぞ・・・まあ、今回は母さんが原因だからあまり文句は言わないが」

「もう、恭也ったら・・・自分がしたいからって・・・」

「ちがうー!」

「恭也・・・お前・・・」

「お兄ちゃん、それなら変わってほしかったよ」

涙目になるのは、事実、時刻は夜の9時をまわろうとするところ。

普段のなのはなら、もう寝ているであろう・・・

「もう用がないので失礼します。」

「あ、ラルクくん、ちょっといいかな?」

「なんです?」

「いや、事付けを預かっていてね」

「事付け?」

「ああ、・・・家のパンドラが目覚めたから早く帰って来い!!」
「・・・と、」

「・・・(川さん・・・まさか・・・)」

「？、どうしたのかね？、不機嫌のオーラが全開だが？」

「いえ、別に・・・では、」

「・・・カラカラン、カラン・・・」

『・・・怒ってる／ね／な／たわね』

第16話 魔と降（後書き）

無理閉めたような感じですが、すみません。
次回、どういきましようか……

では、次回もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1225k/>

リリカルなのは ～信頼と真実、その行く末～

2011年10月6日21時23分発行